鳥取県教育文化財団調査報告書26

一般国道９号（羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県東伯郡羽合町

MINAMIDANI
南谷ヒジリ遺跡
MINAMIDANI MEOTO DUKA
南谷夫婦塚遺跡
MINAMIDANI
南谷19～23号墳
UBAGATANI
乳母ヶ谷第2遺跡
UNO
宇野3～9号墳

1991

財団法人　鳥取県教育文化財団
建設省　倉吉工事事務所

正　誤　表

一般国道９号（羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

ページ	行	誤	正
挿図目次	5	挿図５１・・・７２	挿図５１・・・７２・７３**
挿図目次	15	挿図６１・・・８０**・８３	挿図６１・・・８２**・８３
１０	１３	甑*	甑*
〃	〃	壷*	壺*
５０	6	褐灰色**	灰褐色**
６９	2	建てた*	立てた*
〃	３８	こちら*	これら*
７４	１２	（５６）*	（５７）*
〃	１５	築造計画**	築造時期**
８５ 挿表　７	南谷19号墳出土遺物欄	脚付碗*	脚付椀*
１１５	２３	基盤層自体から**	基盤層自体が*
１５６ 挿表１７	キャプション	出土時観察表⑦*	出土土器観察表⑦**
１５９ 挿表２０	キャプション	出土時観察表②*	出土土器観察表②**
１６０ 挿表２１	キャプション	出土時観察表③*	出土土器観察表③**

序

東郷池周辺は、古くから遺跡の宝庫として知られています。東郷池の北東に位置する羽合町にも国史跡の橋津古墳群や砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡など全国に知られる遺跡があります。

このたび、建設省の委託を受け、一般国道９号（羽合道路）改築工事に伴なう発掘調査が当財団によって羽合町で行われました。

この調査で、集落跡３か所と古墳12基が調査され、砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡の空白期間を埋める時期の集落跡が丘陵地で調査されたことや特異な埋葬形態をもつ前方後円墳が調査されたことは、郷土の歴史を解き明かしていくうえで貴重な資料を与えてくれました。

この貴重な調査結果を後世に伝えていくことが我々の責務だと思っております。また、これらの資料を歴史の解明に役立てていただくことが、われわれ調査したもの一同の切なる願いであります。

最後に、交通の不便な所にもかかわらず調査に参加していただきました地元の方々をはじめ、ご協力いただいた方々、その他関係各位に対して心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成３年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団

理事長　西　尾　邑　次

序　　文

建設省が管理する一般国道９号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609㎞の路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで約80㎞を管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに東伯郡羽合町及び泊村地内において、将来の国土開発幹線道路として当面、活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である羽合道路の整備を進めています。

羽合道路は、泊村原地内でインターチェンジより現道９号及び㊥倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬でインターチェンジによって北条道路一般部とアクセスしますが、途中東郷湖が見渡せる位置にサービスエリアが予定されている延長６㎞の県中部地方ではじめての高規格道路で、昭和61年度に国道９号のバイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすよう構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。今年度からは、羽合町橋津地内において橋梁下部工事にも着手し、本格的な工事にはいりました。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うことになりました。

このうち今年度は、工事の予定工程等を考慮し調整した結果、「乳母ケ谷所在遺跡群」（報告書乳母ケ谷第２遺跡・宇野３～９号墳）「南谷古墳群」（報告書南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳）「南谷所在遺跡群」（報告書南谷とジリ遺跡）の３か所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。残りの７か所についても工事工程等と調整を行い、３年度４年度で引き続き発掘委託契約を締結し、発掘調査を進めてもらう予定です。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持っていることにご理解をいただければ幸に存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成　３年　３月

建設省　倉吉工事事務所長

福　井　　良

例　　言

1．本報告書は、1990年度一般国道９号（羽合道路）改築工事に伴う羽合町大字南谷字ヒジリ地区（南谷ヒジリ遺跡）、南谷字夫婦塚地区（南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳）、宇野字乳母ケ谷地区（乳母ケ谷第２遺跡・宇野３～９号墳）の埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．本報告書に収載した南谷ヒジリ遺跡、南谷夫婦塚遺跡は周知の南谷遺跡と区別するために大字と小字名を並べ、南谷19～23号墳、宇野３～９号墳は周知の南谷古墳群、宇野古墳群の一連として、乳母ケ谷第２遺跡は周知の乳母ケ谷遺跡と区別するために小字名に第２を追加し命名したものである。

3．本報告書に収載した遺跡の所在地は、南谷ヒジリ遺跡が羽合町大字南谷字ヒジリ325・327、南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳が南谷字夫婦塚173-1ほか４筆、乳母ケ谷第２遺跡・宇野３～９号墳が宇野字乳母ケ谷2332ほか12筆、字馬隠1199-8ほか５筆である。

4．本報告書で示す標高は建設省センター杭を使用し、南谷ヒジリ遺跡は№92（Ｘ：－55992.801　Ｙ：－40724.449）の21.761m、南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳は№88＋20（Ｘ：－56068.809　Ｙ：－40352.764）の68.780m、乳母ケ谷第２遺跡・宇野３～９号墳は№83＋80（Ｘ：－56175.772　Ｙ：－39926.331）の86.919mを起点とした標高値で方位は磁北である。Ｘ：、Ｙ：は国土座標第５系である。

5．本報告書に記載の地形図は国土地理院発行の１／50000地形図「青谷・倉吉」、調査区位置図は羽合町の１／2500地形図「都市計画計画図５」を使用した。

6．本報告書の作成は調査員の討議に基づくものである。
　本報告書本文については調査員が分担して執筆し、執筆担当者名は目次に記載した。
　挿図のうち、遺構実測は調査員、補助員の分担、及び業者委託して行なった。
　遺構の浄写、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行なった。
　遺構写真は発掘担当調査員が、遺物写真は山枡・近藤・小谷が撮影した。
　本書の編集は米田が行なった。

7．出土遺物、図面、スライド等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。ただし、出土遺物は将来的に羽合町教育委員会に移管する予定である。

8．南谷19号墳盛土下で検出した土壙内埋土の脂肪酸分析を、ズコーシャ総合科学研究所（帯広市）に委託した。

9．南谷ヒジリ遺跡の焼失住居内炭化物を学習院大学理学部年代測定室の木越邦彦教授に^{14}Cの測定をお願いした。

10．本年度調査区出土の石器、石棺材を鳥取大学教育学部の赤木三郎教授に材質鑑定していただいた。

11．岡山大学文学部の稲田孝司教授に石器についての助言と現地にて土層・調査方法の指導助言をいただいた。

12．現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に指導・助言・協力していただいた。
　伊藤和彦、加藤隆昭、絹見安明、木村良男、国田修二郎、久保穣二朗、
　小原貴樹、真田廣幸、清水真一、杉谷愛象、杉本寿一、土井珠美、
　中野知照、西尾克己、根鈴輝雄、根鈴智津子、平　川　誠、町田勝則、
　松下利秀、宮本正保、森下哲哉
（五十音順、敬称略）

凡　　例

1．本報告書における方位は、すべて磁北を示す。

2．本報告書における遺構記号は次のように表す。なお、掘立柱建物跡の柱穴のピット番号は、建物毎の番号とピット群の番号がある。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＫ：土壙・土坑　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝状遺構　ＳＸ：埋葬施設

ＳＳ：段状遺構　　Ｐ：柱穴・ピット

3．本報告書における遺物記号は次のように表す。

Ｐｏ：土器・土製品　Ｓ：石器・管玉　Ｆ：鉄製品

4．本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

遺構図－竪穴住居跡：1/60、土壙・土坑：1/20・1/30、埋葬施設：1/20・1/40

掘立柱建物跡：1/60、溝状遺構：1/40・1/100・1/200、段状遺構：1/80・1/100（断面1/80）、古墳：1/100（断面1/60）・1/200（断面1/60・1/80）、土塁：1/400（断面1/40）

ピット群：1/200・1/300

遺物図－土器：1/3・1/2・1/4、土玉：1/2、鉄製品：1/2、管玉：1/1

石器：1/2・1/4

5．土器実測図の内、縄文土器・弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗りで表現した。遺物実測図中における記号は以下の通りとする。

→：ケズリの方向（砂粒の動きで判断した）、├┈┤：擦り範囲、├─┤：敲打範囲

：敲打面、●Ｐｏ：床面出土土器

6．発掘調査時における遺構番号と報告書の遺構番号は基本的に一致する。ただし、検出段階で遺構と認定して掘り下げた結果、現代の耕作に伴う肥料穴等と分かったものは撹乱として遺構から外した。その結果遺構番号に欠番が生じた。欠番となった遺構は、南谷夫婦塚遺跡ＳＫ01、ＳＫ02である。また、南谷19号墳ＳＸ01を報告時には、「南谷19号墳盛土下埋葬施設」と改名した。

7．遺物には、遺跡名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に記載した。遺跡名は次の略号を用いた。南谷ヒジリ遺跡＝ＭＨ、南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群＝ＭＭ、乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群＝ＵＢ２。実測した遺物については、実測者の名前の頭文字を使った実測者番号（Ｆ－１、Ｙ－３等）を２㎜×５㎜程度のシールに記し、それを個体毎に貼り付け、実測図原図にもその番号を記した。

8．ピットの規模は（長径×短径－深さ）㎝で表した。竪穴住居の規模は壁溝を除いた床面の規模である。墳丘の規模は、墳端（裾）までの計測値を用いた。

9．遺構図における表示は以下の通りである。

：焼　土、　：炭化物、　：貼　床、

：赤色顔料、　：粘　土、

10．遺物観察表については以下の通りとする。

(1)遺構番号の前にアルファベットを付して出土した遺跡を表した。Ｈは南谷ヒジリ遺跡、Ｍは南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群、Ｕは乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群のことである。

(2)法量の欄の番号は次の通りとする。

①口径②器高③胴部最大径④底部径⑤復合口縁たちあがり長⑥須恵器坏蓋稜径⑦須恵器坏蓋口縁高⑧須恵器坏身基部径⑨須恵器坏身たちあがり高である。その他の計測値については、その都度、計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には数値の後に※印、残存値は同様に△印を付した。

(3)手法の欄に記載されている成形・調整・施文の方向は、実測図で表された方向であり、左方向は土器を真上からみた際の反時計回り方向、右は時計回り方向である。

(4)備考欄に記載してあるＦ－１等の番号は実測者番号である。

11．本文中に「水土」と記載してあるものは、「大山・倉吉パミス（ＤＫＰ）」のことである。

目　　次

序
序　文
例　言
凡　例
目　次
第1章　調査の経緯
　第1節　調査に至る経緯 ……（米田）　1
　第2節　調査の経過と方法 ……（米田）　1
　第3節　調査体制 ……（米田）　4
第2章　位置と環境
　第1節　地理的環境 ……（山枡）　5
　第2節　歴史的環境 ……（近藤）　6
第3章　南谷ヒジリ遺跡の調査
　第1節　南谷ヒジリ遺跡の概要 ……（米田）　10
　第2節　南谷ヒジリ遺跡の調査 ……（米田・山枡・近藤・小谷）　13
第4章　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の調査
　第1節　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の概要 ……（米田）　36
　第2節　南谷夫婦塚遺跡の調査 ……（米田・山枡・小谷）　41
　第3節　南谷古墳群の調査 ……（近藤・山枡）　58
第5章　乳母ケ谷第2遺跡・宇野古墳群の調査
　第1節　乳母ケ谷第2遺跡・宇野古墳群の概要 ……（米田）　87
　第2節　乳母ケ谷第2遺跡の調査 ……（山枡・米田）　90
　第3節　宇野古墳群の調査 ……（近藤・米田）　98
第6章　遺構と遺物の検討
　第1節　前方後円墳の築造について ……（近藤）　112
　第2節　弥生土器・土師器のまとめ ……（山枡）　116
　第3節　まとめ ……（米田）　122
註・参考文献 ……　123
遺物実測図 ……　124
遺物観察表 ……（米田・山枡・近藤）　150
特論1　南谷19号墳の土壌に残存する脂肪の分析 ……　165
特論2　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 ……　171
写真図版

挿図目次

挿図1　道路建設ルートと調査区 …… 3
挿図2　羽合町の位置 …… 5
挿図3　周辺遺跡分布図 …… 7
挿図4　南谷ヒジリ遺跡調査前地形測量図 …… 11・12
挿図5　南谷ヒジリ遺跡遺構全体図 …… 11・12
挿図6　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ01遺構図 …… 13
挿図7　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02中央ピット …… 14
挿図8　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02遺構図 …… 15
挿図9　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ03～05遺構図 …… 17・18
挿図10　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05炭化物・焼土出土状況図 …… 19
挿図11　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05既形土器出土状況図 …… 19
挿図12　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ01遺構図 …… 22
挿図13　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ02遺構図 …… 23
挿図14　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ03遺構図 …… 24
挿図15　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ04遺構図 …… 26
挿図16　南谷ヒジリ遺跡ＳＢ01遺構図 …… 27
挿図17　南谷ヒジリ遺跡ＳＢ02遺構図 …… 28
挿図18　南谷ヒジリ遺跡ＳＢ03遺構図 …… 29
挿図19　南谷ヒジリ遺跡ＳＢ03P4内遺物出土状況図 …… 29
挿図20　南谷ヒジリ遺跡ＳＤ04遺構図 …… 30
挿図21　南谷ヒジリ遺跡ＳＤ01遺構図 …… 31
挿図22　南谷ヒジリ遺跡ＳＤ02・ＳＤ03遺構図 …… 32
挿図23　南谷ヒジリ遺跡ＳＸ01遺構図 …… 33
挿図24　南谷ヒジリ遺跡ＳＳ01遺構図 …… 34
挿図25　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群調査前地形測量図 …… 37・38
挿図26　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群遺構全体図 …… 39・40
挿図27　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01中央ピット内遺物出土状況図 …… 41
挿図28　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01遺構図 …… 43・44
挿図29　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ02遺構図 …… 45
挿図30　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ03遺構図 …… 47
挿図31　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ04遺構図 …… 47
挿図32　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ05遺構図 …… 48
挿図33　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ06遺構図 …… 49
挿図34　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ07遺構図 …… 50
挿図35　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ08遺構図 …… 51
挿図36　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ10遺構図 …… 52
挿図37　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ09遺構図 …… 53
挿図38　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ12遺構図 …… 54
挿図39　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ11遺構図 …… 55
挿図40　南谷夫婦塚遺跡ピット群１ …… 57
挿図41　南谷夫婦塚遺跡ピット群２ …… 57
挿図42　南谷19号墳墳丘図 …… 59
挿図43　南谷19号墳盛土除去後平面図 …… 60
挿図44　南谷19号墳土層断面図(1) …… 61・62・63
挿図45　南谷19号墳土層断面図(2) …… 64・65
挿図46　南谷19号墳周溝内遺物出土状況図 …… 66
挿図47　南谷19号墳主体部遺構図 …… 67
挿図48　南谷19号墳周溝内土壙１ …… 68
挿図49　南谷19号墳周溝内土壙２ …… 68
挿図50　南谷19号墳盛土下埋葬施設及び区画溝遺構図 …… 70・71
挿図51　南谷19号墳盛土下埋葬施設遺物出土状況図 …… 72
挿図52　南谷19号墳盛土内石片出土状況図 …… 74
挿図53　南谷20号墳墳丘図 …… 75
挿図54　南谷20号墳土層断面図 …… 76
挿図55　南谷20号墳石蓋土壙遺構図 …… 76
挿図56　南谷21号墳墳丘図 …… 77
挿図57　南谷21号墳土層断面図 …… 78
挿図58　南谷21号墳周溝内土壙遺構図 …… 79
挿図59　南谷22号墳墳丘図 …… 82・83
挿図60　南谷23号墳墳丘図 …… 82・83
挿図61　南谷22号墳・23号墳土層断面図 …… 80・83
挿図62　南谷22号墳石蓋土壙遺構図 …… 84
挿図63　南谷23号墳周溝内土壙遺構図 …… 84
挿図64　南谷古墳群位置図 …… 86
挿図65　乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群全体図 …… 88・89
挿図66　乳母ケ谷第２遺跡ＳＩ01平面図 …… 91
挿図67　乳母ケ谷第２遺跡ＳＩ01土層断面図 …… 92
挿図68　乳母ケ谷第２遺跡土壁断面図(1) …… 93
挿図69　乳母ケ谷第２遺跡土壁平面図 …… 94・95
挿図70　乳母ケ谷第２遺跡土壁断面図(2) …… 94・95
挿図71　乳母ケ谷第２遺跡土壁断面図(3) …… 96
挿図72　乳母ケ谷第２遺跡ＳＳ01遺構図 …… 97
挿図73　宇野３号墳・４号墳墳丘図 …… 99
挿図74　宇野３号墳・４号墳土層断面図 …… 100
挿図75　宇野５号墳主体部遺構図 …… 101
挿図76　宇野６号墳主体部遺構図 …… 102
挿図77　宇野９号墳主体部遺構図 …… 103
挿図78　宇野５号墳墳丘図 …… 104
挿図79　宇野６号墳・９号墳墳丘図 …… 104
挿図80　宇野５号墳・６号墳・９号墳土層断面図 …… 105
挿図81　宇野７号墳土層断面図 …… 106
挿図82　宇野７号墳墳丘図 …… 107
挿図83　宇野７号墳石蓋土壙遺構図 …… 108
挿図84　宇野８号墳墳丘図 …… 109
挿図85　宇野８号墳土層断面図 …… 110
挿図86　宇野古墳群ＳＫ01遺構図 …… 110
挿図87　宇野古墳群ＳＫ02遺構図 …… 110
挿図88　宇野古墳群ＳＫ03遺構図 …… 110
挿図89　京都府大宮町小池古墳群2号土壙遺構図 …… 114
挿図90　南谷19号墳築造段階 …… 116
挿図91　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ01・ＳＩ02(1)土器実測図 …… 124
挿図92　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02(2)土器実測図 …… 125
挿図93　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ04土器実測図 …… 126
挿図94　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05(1)土器実測図 …… 127

挿図95　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05(2)土器実測図 ……128
挿図96　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05(3)土器実測図 ……129
挿図97　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ01(1)土器実測図 ……130
挿図98　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ01(2)土器実測図 ……131
挿図99　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ02土器実測図 ……132
挿図100　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ03土器実測図 ……133
挿図101　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ04・ＳＢ01・ＳＢ03土器実測図…134
挿図102　南谷ヒジリ遺跡ＳＤ その他土器実測図 …135
挿図103　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01・ＳＩ02土器実測図 …136
挿図104　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ04・ＳＫ05土器実測図 …137
挿図105　南谷19号墳(1)土器実測図 ……138
挿図106　南谷19号墳(2)土器実測図 ……139
挿図107　南谷19号墳(3)土器実測図 ……140
挿図108　南谷21号墳土器実測図 ……141
挿図109　南谷22号墳・23号墳土器実測図 ……142
挿図110　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群遺構外出土土器実測図…143
挿図111　乳母ケ谷第2遺跡・宇野古墳群土器実測図 …144
挿図112　土製品実測図 ……145
挿図113　鉄器実測図 ……145
挿図114　管玉・石器実測図 ……146
挿図115　石器実測図（敲石・石鏃） ……147
挿図116　石器実測図（砥石・石皿） ……148
挿図117　石器実測図（石皿） ……149

挿　表　目　次

挿表１　南谷ヒジリ遺跡ピット群一覧表 ……35
挿表２　南谷ヒジリ遺跡竪穴住居跡一覧表 ……35
挿表３　南谷ヒジリ遺跡土坑一覧表 ……35
挿表４　南谷ヒジリ遺跡掘立柱建物跡一覧表 ……35
挿表５　南谷夫婦塚遺跡ピット群一覧表 ……56
挿表６　南谷夫婦塚遺跡土坑一覧表 ……85
挿表７　南谷古墳群一覧表 ……85
挿表８　宇野古墳群一覧表 ……111
挿表９　宇野古墳群埋葬施設他一覧表……111
挿表10　区画溝を有する前方後円墳 ……113
挿表11　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表① ……150
挿表12　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表② ……151
挿表13　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表③ ……152
挿表14　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表④ ……153
挿表15　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑤ ……154
挿表16　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑥ ……155
挿表17　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑦ ……156
挿表18　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑧ ……157
挿表19　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表① ……158
挿表20　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表② ……159
挿表21　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表③ ……160
挿表22　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表④ ……161
挿表23　乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群出土土器観察表 ……162
挿表24　土製品観察表 ……163
挿表25　鉄製品観察表 ……164
挿表26　管玉・石器観察表 ……164

図　版　目　次

図版１　調査区遠景（南東上空より）
南谷ヒジリ遺跡調査前遠景（南東より）
南谷ヒジリ遺跡完掘状況（南上空より）
図版２　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ01完掘状況（北より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ01高坏（Po1）出土状況（南より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02完掘状況（東より）
図版３　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02床面遺物出土状況(東より)
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02床面遺物（Po8・S11）出土状況（東より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02床面遺物（Po6）出土状況（東より）
図版４　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ03・04・05完掘状況(東より)
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05完掘状況（北より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ04遺物出土状況（北より）
図版５　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05焼土・炭化物・遺物出土状況（北より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05壺（Po40）出土状況（北より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05甕形土器（Po60）出土状況（南より）
図版６　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ01遺物出土状況（北東より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＫ02遺物出土状況（北西より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＫ02土層断面
図版７　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ03遺物（Po103）出土状況（南より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＫ04遺物出土状況（南西より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＫ04焼土・炭化物出土状況
図版８　南谷ヒジリ遺跡ＳＢ03完掘状況（東より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＢ03土器（Po125）・石出土状況（南より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＸ01完掘状況（北より）
図版９　南谷ヒジリ遺跡ＳＤ01完掘状況（東より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＤ01完掘状況（南より）
南谷ヒジリ遺跡ＳＤ02・03完掘状況（西より）
図版10　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群調査前遠景（北西より）
南谷古墳群全景（北東上空より）
南谷夫婦塚遺跡全景（南西上空より）
図版11　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01検出状況（南東より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01完掘状況（西より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01中央ピット内壁（Po156）出土状況（南東より）
図版12　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01Ｐ５内石鏃（S23）出土状況（北より）

南谷夫婦塚遺跡ＳＩ02完掘状況（西より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＩ02甘穴内容（Po182）出土状況（西より）
図版13　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ03石片検出状況（西より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ04完掘状況（西より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ04遺物出土状況（西より）
図版14　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ05完掘状況（南より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ06完掘状況（東より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ07完掘状況（西より）
図版15　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ08完掘状況（西より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ08土層断面
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ09完掘状況（南西より）
図版16　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ10完掘状況（西より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ11完掘状況（北西より）
南谷夫婦塚遺跡ＳＫ12完掘状況（西より）
図版17　南谷夫婦塚遺跡ピット群１（東より）
南谷夫婦塚遺跡ピット群２（北東より）
南谷古墳群（南谷19～23号墳）完掘状況（北より）
図版18　南谷19号墳くびれ部北側かき出し土除去前（東より）
南谷19号墳完掘状況（東より）
南谷19号墳盛土除去後旧表土面検出状況（東より）
図版19　南谷19号墳主体部完掘状況（西より）
南谷19号墳後円部墳丘（南側Ｂ－Ｂ′ベルト）盛土状況
南谷19号墳後円部墳丘（北側Ｂ－Ｂ′ベルト）盛土状況
図版20　南谷19号墳くびれ部墳丘（Ａ－Ａ′ベルト中央部）盛土状況
南谷19号墳前方部墳丘（南側Ｃ－Ｃ′ベルト）盛土状況
南谷19号墳前方部墳丘（西側Ａ－Ａ′ベルト）盛土状況
図版21　南谷19号墳後円部周溝内遺物（Po183）出土状況（北東より）
南谷19号墳くびれ部北側周溝内遺物（Po185）出土状況（北西より）
南谷19号墳区画溝検出状況（東より）
図版22　南谷19号墳区画溝埋め土中石材出土状況（北西より）
南谷19号墳区画溝完掘状況（東より）
南谷19号墳区画溝土層断面（東より）
図版23　南谷19号墳盛土下埋葬施設検出状況（北西より）
南谷19号墳盛土下埋葬施設土層断面東軸（南東より）
南谷19号墳盛土下埋葬施設土層断面北軸・西軸（北より）
図版24　南谷19号墳盛土下埋葬施設遺物出土状況（西より）
南谷19号墳盛土下埋葬施設須恵器壺坏出土状況（南東より）
南谷19号墳盛土下埋葬施設鉄刀剣・壺坏出土状況（北東より）
南谷19号墳盛土下埋葬施設鉄製U字形鍬鋤先（F8）出土状況（南東より）
図版25　南谷20号墳石蓋土壙検出状況（北より）
南谷20号墳石蓋土壙完掘状況（北より）
南谷21号墳完掘状況（東より）
図版26　南谷21号墳周溝内遺物（Po210）出土状況（南西より）
南谷22号墳完掘状況（北東より）
南谷22号墳周溝内土器（Po213・214）・石材出土状況（北より）
図版27　南谷22号墳周溝内石蓋土壙検出状況（北より）
南谷22号墳周溝内石蓋土壙完掘状況（北より）
南谷23号墳完掘状況（東より）
図版28　乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群調査前全景（北上空より）
乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群調査後全景（北西上空より）
乳母ケ谷第２遺跡作業風景
図版29　乳母ケ谷第２遺跡ＳＩ01完掘状況（北より）
乳母ケ谷第２遺跡ＳＩ01中央ピット完掘状況（北より）
乳母ケ谷第２遺跡ＳＩ01貼床除去後状況（北東より）
図版30　乳母ケ谷第２遺跡土壁盛土除去後状況（南より）
乳母ケ谷第２遺跡土壁盛土状況（Ｋ－Ｋ′ライン）
乳母ケ谷第２遺跡土壁盛土状況（Ａ－Ａ′ライン）
図版31　宇野３号墳完掘状況（北より）
宇野４号墳完掘状況（南東より）
宇野５・６・９号墳完掘状況（南東より）
図版32　宇野５号墳主体部完掘状況（西より）
宇野６号墳周溝完掘状況（北西より）
宇野６号墳主体部完掘状況（西より）
図版33　宇野９号墳主体部完掘状況（西より）
宇野９号墳ＳＫ01完掘状況（北西より）
宇野７号墳完掘状況（南より）
図版34　宇野７号墳周溝内石蓋土壙検出状況（北より）
宇野７号墳周溝内石蓋土壙完掘状況（南より）
宇野８号墳完掘状況（南東より）
図版35　宇野古墳群ＳＫ02完掘状況（南西より）
宇野古墳群ＳＫ03完掘状況（南西より）
乳母ケ谷第２遺跡ＳＳ01完掘状況（南より）
図版36　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ01・ＳＩ02出土土器
図版37　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ02・ＳＩ04出土土器
図版38　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05出土土器
図版39　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05出土土器
図版40　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ05出土土器
図版41　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ01出土土器
図版42　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ01・ＳＫ02出土土器
図版43　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ03出土土器
図版44　南谷ヒジリ遺跡ＳＫ03・ＳＢ03出土土器
図版45　南谷ヒジリ遺跡ＳＤ01・ＳＤ03・遺構外出土土器・縄文土器
図版46　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01・ＳＩ02出土土器
図版47　南谷夫婦塚遺跡ＳＫ04・ＳＫ05出土土器
南谷19号墳出土土器
図版48　南谷19号墳・南谷19号墳盛土下埋葬施設出土土器
図版49　南谷19号墳盛土下埋葬施設出土土器
図版50　南谷21号墳出土土器
図版51　南谷22号墳・23号墳・遺構外出土土器
乳母ケ谷第２遺跡ＳＩ01出土土器
図版52　乳母ケ谷第２遺跡ＳＩ01・土壁出土土器
宇野４号墳・７号墳出土土器、土製品
図版53　鉄製品・管玉
図版54　石器
図版55　石器・軽石・小石

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経緯

羽合道路　鳥取県中部地域の交通混雑緩和を図るために、1973年より一般国道9号改築工事として北条バイパスの建設が進められ、1990年11月に全面開通した。さらに、この工事の一環として羽合道路が1986年度に自動車専用道路として都市計画決定され、事業に着手し、その後、1988年度に高規格道路として計画変更された。この道路は、現道9号の泊村園地内のインターチェンジから、羽合町長瀬のインターチェンジを抜け北条バイパスに結ぶものである。

周辺遺跡　また、計画地内周辺は橋津古墳群・南谷古墳群・宇野古墳群・園古墳群などの古墳群、南谷遺跡・乳母ケ谷遺跡・宇野第一遺跡などが丘陵上に存在し、文化財の宝庫である。最近では、1985年8月に羽合町教育委員会によって小型箱式石棺の埋葬施設を持つ南谷18号墳の発掘調査がなされた。[1]

発掘調査　この状況の中で、このように多くの遺跡が密集している地域でもあるので、建設に先立って計画地内の遺構・遺跡の広がりを確認する必要性が生じ、1988年度羽合町教育委員会と泊村教育委員会が国庫補助事業として、また、1989・1990年度に羽合町教育委員会が各丘陵の尾根を中心に試掘調査を行なった。[2][3] その結果によると南谷ヒジリ遺跡で土坑・ピット（T5）、南谷所在遺跡で溝状遺構1、南谷古墳群で古墳1・石蓋土壙（T2）、大山所在遺跡群で竪穴住居跡・掘立柱建物跡各1・古墳2・周溝1・土壙2（T3～T7・T9）、乳母ケ谷第2遺跡・宇野古墳群で周溝2・土壙3・土塁（1989年度・1990年度）が確認された。なお、南谷古墳群については踏査によって前方後円墳1も確認された。

調査計画　これを受けて、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のため事前調査を委託した。これによって当文化財団が調査計画を作成し、それに基づき、中部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を担当することになった。本年度は南谷所在遺跡群1568㎡、南谷所在遺跡300㎡、南谷古墳群2240㎡、大山所在遺跡群8380㎡であったが、12月に南谷所在遺跡群（南谷ヒジリ地区）1250㎡、南谷古墳群（南谷夫婦塚地区）3018㎡、乳母ケ谷所在遺跡（宇野乳母ケ谷地区）5564㎡に変更となった。期間は1990年4月～1991年3月と予定された。

調査予定　来年度以降には、南谷所在遺跡、大山所在遺跡群、宇谷第1遺跡、原第1遺跡、園7号墳の他に、南谷ヒジリ地区と南谷夫婦塚地区未調査部分の調査が予定されている。

第2節　調査の経過と方法

調査開始　現地での調査は4月1日から調査準備にかかり、4月3日に打ち合わせを行ない、南谷ヒジリ地区から調査を行なうこととした。

南谷ヒジリ　南谷ヒジリ地区には、鳥取県「急傾斜地崩壊危険区域」が含まれていたことから、ここの調査は来年度以降に先送りすることとし、その他の部分について測量を行なった。また、梨畑や人家が調査区の下に位置しているため、排土を流失させないように土留め柵を築いた。測量に用いた基準杭は建設省道路センター杭№91＋60［X：－55996.900　Y：－40684.661］（D－2杭）と№92［X：－55992.801　Y：－40724.449］（A－2杭）を使い、この2カ所を結ぶ延長線上を東西基線とし、この基線に直交し、D－2杭を通る線を南北の基線とし、地区全体を10m方眼に区割りした。基線は南北を北から1～5、東西を西からA～Fとし、

設定した。グリッド名はグリッド南西で交差する基線を連記するものとした。4月10日からC3グリッドの人力による表土剝ぎに着手した。調査では住居跡や「コ」の字状の溝等が、ローム面において検出された。住居跡の中には焼失住居跡があり、構造材の炭化物が検出され、"C分析を行なった。「コ」の字状の溝は、崩壊危険区域に向かっているため、来年度以降に調査することとした。調査は6月21日をもって終了した。調査面積は1250㎡であった。

南谷古墳群　南谷夫婦塚地区では羽合町の分布踏査と試掘調査で前方後円墳（南谷19号墳）と円墳（南谷20号墳）が確認されていたところである。この地区では基準杭として建設省道路センター杭№91＋60と№88＋20［X：－56068.809　Y：－40352.764］を使い、南谷ヒジリ遺跡と同様にグリッドを設定した。このうち、H－4杭が［X：－56035.546　Y：－40271.038］とM－5杭が［X：－56024.716　Y：－40221.214］である。基線は南北を北から1～7、東西を西からA～Mと設定した。5月15日より調査前地形測量を開始した。この際、西側の切り土面で古墳（南谷22・23号墳）の周溝が確認され、調査範囲が西側に拡張されたが、用地買収の関係で南谷22号墳の一部が来年度以降の調査となった。古墳調査においては耕作による地形の改変が著しかったことと竹の根が密生していたために、羽合町の試掘結果をもとに表土剝ぎを調査員の指導のもと重機で行なった。しかし、南谷19号墳（前方後円墳）については盛土が部分的造成は行なわれていたが比較的よく残っていたため墳丘から周溝までの範囲と土層を確認し、削平部分のみを重機で剝いだ。19号墳は造成によって主体部は破壊されていたが、わずかにその痕跡は残っていた。また、盛土の断ち割りを行なった結果、盛土下埋葬施設と区画溝を持つことがわかった。なお、この特異な南谷19号墳盛土下埋葬施設の埋土の脂肪酸分析をズコーシャ総合化学研究所に委託し、人体が埋葬されたものであると決定した。また、この古墳を調査中弥生土器が出土したことから、弥生時代の遺構が存在する可能性が考えられた。そのため19号墳の盛土断ち割りを行なったところ、竪穴住居跡2棟と貯蔵穴、ピット群が検出された。最終遺構実測を業者委託して、10月31日に3018㎡の調査を終了した。なお、遺物の中からスクレイパーが見つかったので、岡山大学文学部稲田孝司教授指導のもとトレンチ調査をおこなったがそれに伴うものは何も検出できなかった。

南谷夫婦塚

宇野古墳群　当初の計画では南谷所在遺跡、大山所在遺跡群を発掘予定であったが、用地買収の関係で急遽8月に宇野乳母ケ谷地区を調査することになった。この地区では羽合町の試掘調査で古墳と土墓が確認されている。この地区も他の2地区と同様にグリッドを設定した。使用した建設省道路センター杭は№84［X：－56172.669　Y：－39946.089］と№83＋80［X：－56175.772　Y：－39926.331］で、D－3杭が［X：－56217.404　Y：－39895.004］である。基線は南北を北から1～19、東西を西からA～Oと設定した。8月21日から表土剝ぎを始めたが、南谷古墳群と条件が似通っているため重機で行なった。斜面部分については測量の結果と重機によるトレンチの土層観察で調査範囲を設定（5480㎡）しながら掘り進めた。また、調査区北側に遺構の延びることが分かり、建設省、文化課と協議し、トレンチによって範囲を確認し、再協議の結果、84㎡の拡張となった。本調査区では、土墓（残存状況が悪いため土層断面図を作成する）の調査から始め、古墳・住居跡を調査をし、最終遺構実測を業者委託して、12月10日に5564㎡の調査を終了した。整理作業は3月31日で終了した。

乳母ケ谷第2遺跡

調 査 日 誌（抄）

4月10日　南谷ヒジリ遺跡の掘り下げ開始。

5月15日　南谷ヒジリ遺跡ＳＩ03・04・05掘り下げ。ＳＫ01検出。
　　南谷夫婦塚地区調査前地形測量開始。

5月29日　南谷夫婦塚地区の調査開始。

6月21日　南谷ヒジリ遺跡調査終了。

8月4日　南谷ヒジリ遺跡・南谷古墳群現地説明会を開く。

8月10日　猛暑の中、南谷19号墳墳丘断ち割り開始。

8月21日　南谷19号墳盛土中より磨製石斧出土。乳母ケ谷地区の表土剥ぎ開始。

8月24日　南谷19号墳くびれ部で区画溝を確認。

9月7日　南谷19号墳区画溝内で埋葬施設を検出。

9月11日　南谷19号墳盛土下埋葬施設で、須恵器の蓋坏・甕・脚付椀・壺、鉄製鋤（鍬）先出土。

9月12日　南谷夫婦塚遺跡ＳＩ01検出。

10月5日　乳母ケ谷第2遺跡土墓の調査開始。

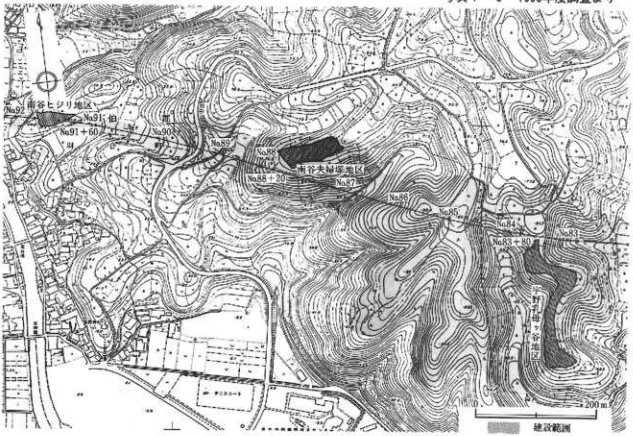
10月31日　南谷夫婦塚遺跡の調査終了。

11月16日　宇野4号墳周溝内で須恵器直口壺出土。宇野6号墳主体部検出。
　　宇野8号墳調査終了。乳母ケ谷第2遺跡土墓調査終了。

11月30日　現地調査終了。

12月16日　南谷19号墳・南谷夫婦塚遺跡・乳母ケ谷第2遺跡・宇野古墳群の現地説明会を開く。

写真1～3　1990年度調査より



挿図1　道路建設ルートと調査区

第3節　調　査　体　制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもと下記の体制で実施された。

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	西尾邑次（鳥取県知事）
副理事長兼常務理事	坂田昭三
事務局長	若松良雄

財団法人鳥取県教育文化財団　埋蔵文化財センター

所　長	山根豊巳（鳥取県教育委員会文化課長）
次　長	中島安一
調査指導係長	田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）
庶務係長	中村金一（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）

○調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団中部埋蔵文化財調査事務所

所　長	入江輝三
主任調査員	米田規人
調　査　員	山枡雅美　近藤哲雄
調査補助員	小谷修一

○調査協力

下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として協力していただいた。

安達日出子、　市橋貴志子、　井手尾ひさの、　伊藤恵美子、　稲垣美智恵、岩室紀男、
植原昭典、　浦木伊都子、　奥田和美、　小倉厚子、　神矢紀子、　上本明子、
吉川久子、　木戸孝行、　蔵益和美、　蔵本重信、　志田　睦、　杉原光雄、
杉村秀吉、　杉本鈴子、　竹田　肇、　竹本富恵、　田中園子、　丹波　稔、
角田磨智子、　津村勝子、　中村勝恵、　中村博子、　中本和子、　中本文子、
長門　茂、　西垣吟枝、　西原徳善、　野崎悦子、　浜口みち子、　林　博、
羽田政夫、　福田延子、　藤田広子、　藤田恭人、　船越トシ子、　松岡朋子、
松本美恵、　道家良平、　森脇幸子、　安田成行、　山崎保子、　山本清子、
山本久美恵、　山本さわ子、　米澤牧子、　米増幹雄

（敬称略）

写真4　発掘参加記念写真

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

鳥取県　南谷ヒジリ遺跡、南谷夫婦塚遺跡、南谷古墳群、乳母ケ谷第2遺跡、宇野古墳群は、鳥取県東伯郡羽合町に所在する。

鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置する。北は日本海、東は兵庫県、南は標高1200mを越える中国山地を県境として岡山県・広島県、西は島根県と接する。鳥取県の県域は、東西126km、南北61.85km、面積349.269km²で、日本全体の約1％を占める。鳥取県は旧国名でいえば、東が因幡国（現在の鳥取市・気高郡・八頭郡・岩美郡）、西が伯耆国であるが、地理的には伯耆国は大山を境として東伯耆（現在の倉吉市・東伯郡）、西伯耆（現在の米子市・境港市・西伯郡・日野郡）に分けられ、因伯合わせて東、中、西部の三地域に分けられる。各地域とも地勢は山がちで、山地が県総面積の86.3％を占める。それぞれの地域には千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）の県下を代表する河川が流れ、その下流域に東部の鳥取平野、中部の倉吉・北条・羽合平野、西部の米子平野が発達している。また各平野の海岸線には、鳥取平野の鳥取砂丘、倉吉・北条平野の北条砂丘・長瀬、米子平野の弓が浜半島などの砂丘、砂州が発達している。その中でも代表的なものは鳥取砂丘で、東西長15km、南北幅最大2kmの規模を持ち、国立公園として県内外から観光客が訪れる。

羽合町　羽合町は、鳥取県の中央部に位置し、東には泊村、東郷池をはさんで東郷町、西には天神川を境に北条町、南は倉吉市と接している。北には日本海が、その波頭を光らせている。人口約7000人、面積12.4km²の田園風景の広がる町である。地形は、馬ノ山の低い丘陵と天神川の河口部に発達した長瀬砂丘、天神川から東郷池に向かって広がる羽合平野、東郷池とからなる。

東郷池　東郷池は、420haの淡水湖で、かつて後氷期の海進で溺れ谷だったものが、その後の北条・長瀬砂丘の発達で湾口が塞き止められてできた潟湖である。中心部での深さは6～8m、湖底より温泉が湧き出る。東郷池には、舎人川、東郷川、羽衣石川、埴見川が流れ込み、その水は橋津川を通って日本海に流れ込んでいる。池には淡水性の魚介類だけでなく、橋津川を逆流して流入する海水にのって海産の魚介類が入る。最近は、漁をする人が少なくなったものの、以前は池の魚を生活の糧として捕っていた人も多かったようである。古くは、正嘉2（1258）年の「伯耆国河村郡東郷庄下地中分絵図」（柳沢真次郎所蔵）においても、池の中心に船と漁民が描かれており、東郷池における漁業が、領主の注目するところになっていたようである。また、交通においても、現在のように道路網が整備される以前は、船を使って池を渡る交通がかなり一般的であったようである。

調査地域　この東郷池の北東にある丘陵から東郷池に向かって伸びる尾根上に存在するのが南谷ヒジリ遺跡、南谷夫婦塚遺跡、南谷古墳群、乳母ケ谷第2遺跡、宇野古墳群である。いずれの遺跡も、東郷池、羽合平野を見渡せるところにあり、中でも南谷19号～23号墳が所在する尾根上からは日本海が一望でき、遠くは鳥取県西部の弓ケ浜半島まで視野にいれることができる。

挿図2　羽合町の位置

第2節　歴史的環境

旧石器時代　東郷池周辺に限らず鳥取県において遺構を伴う旧石器遺跡は確認されていないが、大山山麓の丘陵上でいくつかの旧石器が見つかっている。淀江町小波出土の黒曜石製の東山・杉久保型系統のナイフ型石器[6]、関金町野津三第1遺跡の黒曜石製ナイフ型石器[9]、倉吉市和田出土の石刃[6]、倉吉市上神[8]及び鋤[10]出土の細石刃石核、倉吉市国府出土の掻器[11]、倉吉市中尾遺跡の国府型のナイフ型石器[12]などである。このうち、野津三第1遺跡・中尾遺跡のナイフ型石器は県下では唯一のローム層中の発見であり、大変貴重なものである。

縄文時代早創期　県内では縄文時代早創期に盛行するとされる隆線文土器群は発見されていないが、石器類は二十数カ所で確認されている。中部地区では有茎尖頭器が、大栄町穂波、東伯町根下、関金町笹ケ平などで見つかっている[9]。やはり大山山麓の丘陵上での発見であり、低地ではこの時期のものは見つかっていない。

早期　早期でも丘陵上・台地上だけに遺跡が確認されている。倉吉市取木遺跡では竪穴住居跡・炉跡の他、押型文の深鉢などが見つかっている[13]。東郷池周辺においても、南谷19号墳（B）墳丘下より安山岩製のスクレイパーが見つかった。正確な時期は特定できないが、縄文時代人が海岸部の丘陵上にも足跡を残していたことが窺える。

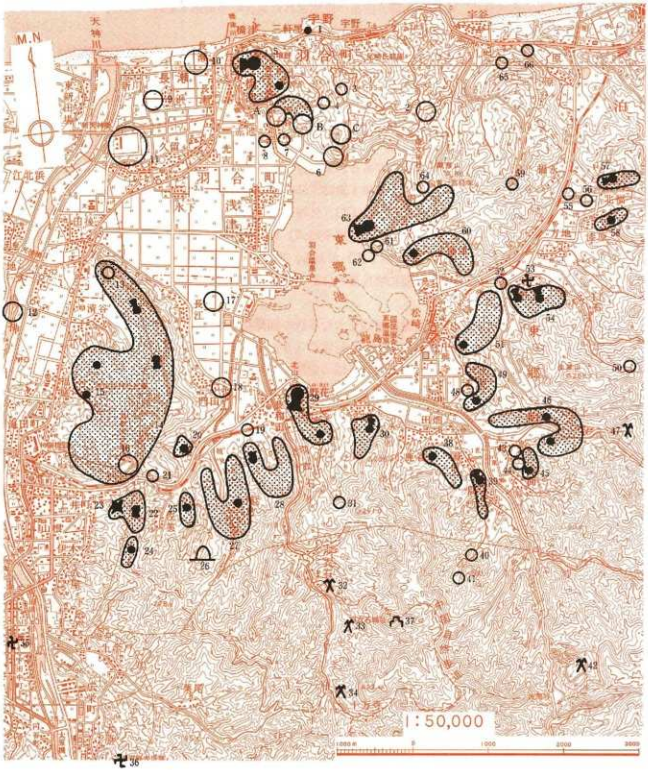
前期　この時期になると気候が温暖になり海進が進み、この地域は広いラグーンが形成され、この周辺にも遺跡が確認されるようになる。北条町島遺跡は、前期から晩期にかけての遺跡で貝塚を伴う[14]。土器のほかに石器、丸木舟、貝、人骨、動物骨が検出されている。丸木舟は県内でも数例知られるに過ぎず、貴重なものである。また、花粉分析の結果や貝の種類から古環境の変化の様子を復元することができるようになった。

中期　この時期の遺跡は、倉吉市平林遺跡[9]、北条町船渡遺跡[15]などが知られるにすぎず、遺跡の密度も少ない。

後期　後期になると遺跡の数は増加し、倉吉市津田峰遺跡[16]・東伯町森藤第2遺跡[17]・関金町横峯遺跡[18]ではこの時期の住居跡が見つかっている。これらの住居の中央には、石組の炉が作られている。三朝町三朝高原穴谷遺跡[19]では、貯蔵穴、落とし穴なども見つかっている。この周辺では、北条町天神川下流遺跡[15](12)、東郷町北福第3遺跡[20](56) で磨消縄文土器などが表採されている。

晩期　晩期では、倉吉市松ケ坪遺跡[21]で、配石墓、土器棺墓、土壙が見つかっている。なかでも、土器棺墓は県内においても岸本町林ケ原遺跡[22]とここにしか見つかっておらず、この時期の葬制を知る貴重な資料である。長瀬高浜遺跡[23]では刻目突帯文土器、北条町北尾遺跡[24]でもこの時期の土器が出土している。時期ははっきりしないが、東郷町別所第2（40）・第6遺跡（41）、福永第3遺跡（59）、野花第2遺跡（31）、白石第1遺跡（50）でも縄文土器が表採されている[25]。泊村宮の谷遺跡[9]では、漁撈具としての石錘が見つかっており、縄文人が海や湖で盛んに魚を獲っていたことが想像される。

弥生時代前期　大陸から伝播した稲作は、日本列島をかなりの速さで北上したと考えられ、鳥取県でも前期には米子市目久美遺跡[26]で水田跡が確認されている。東郷池周辺では水田跡は確認されていないが、稲作に伴う遺物が各所で見つかっており、弥生時代水田跡が発見されるのも近いものと思われる。この時期には、天神川の沖積作用と日本海からの風によって形成された砂丘上に、羽合町長瀬高浜遺跡[23](11) が現れる。この遺跡は弥生時代前期から中世までの複合遺跡であるが、この時期の遺構には4棟の玉作工房跡のほか、土壙墓などがある。玉作工房跡は、日本でも最も古いものの一つである。長瀬高浜遺跡では中期の土壙墓がわずかに見られるが、後期の遺構は全く見られず、古墳時代に入ってからが最も栄える。東郷池周辺では、中期の遺跡は長瀬高浜の土壙墓を除いては確認されておらず、遺跡の密度が少なくなっ



古墳　古墳群　遺跡　寺院跡　窯跡　たたら跡　城跡

A　南谷ヒジリ遺跡
B　南谷夫婦塚遺跡
　南谷19～23号墳
C　乳母ヶ谷第2遺跡
　宇野3～9号墳
1　洋古墳
2　宇野第1遺跡
3　宇野第4遺跡
4　宇野第5遺跡
5　横津(馬ノ山)4号墳
6　乳母ヶ谷遺跡
7　南谷遺跡
8　南谷狐塚遺跡
9　和助老遺跡
10　横津台場
11　長瀬高浜遺跡
12　天神川下流遺跡
13　田後遺跡
14　大平山古墳群
15　福庭古墳
16　福庭遺跡
17　隅ヶ坪遺跡
18　門田遺跡
19　深浜遺跡
20　片平4号墳
21　佐美遺跡
22　山根古墳群
23　鹿和塚丘墓
24　伊木古墳群
25　佐美古墳群
26　堤見中ノ谷古窯跡
27　堤見古墳群
28　長和田古墳群
29　野花北山1号墳
30　引地古墳群
31　野花第2遺跡
32　羽衣石第1生産遺跡
33　羽衣石第2生産遺跡
34　羽衣石第3生産古墳群
35　大御堂廃寺
36　大原廃寺
37　羽衣石城
38　小熊谷古墳群
39　別所古墳群
40　別所第2遺跡
41　別所第6遺跡
42　別所第2生産遺跡
43　高辻第1遺跡
44　高辻第3遺跡
45　高辻古墳群
46　川上古墳群
47　川上生産遺跡
48　久見古瓦出土地
49　久見古墳群
50　白石第1遺跡
51　中興寺古墳群
52　野方第3遺跡
53　野方・弥陀ヶ平廃寺
54　野方古墳群
55　北福第1遺跡
56　北福第3遺跡
57　北福古墳群
58　源塚古墳群
59　福永第3遺跡
60　藤津古墳群
61　大勝遺跡
62　輪郭遺跡
63　宮内狐塚古墳
64　伯耆一宮経塚
65　宇谷第1遺跡
66　屋第2遺跡

挿図3　周辺遺跡分布図

ている。かわりに、中期の土器の散布が確認された羽合町宇野第5遺跡[22]（4）のように丘陵上での遺跡の密度が増すようになる。

後　期　後期においても同様の現象が見られ、焼失住居跡が見つかった倉吉市福庭遺跡[23](15)、炭化米・貝殻などを包蔵する4基の貯蔵穴が見つかった東郷町大鼻遺跡[27](61)、竪穴住居跡が調査された羽合町南谷ヒジリ遺跡（A）・南谷夫婦塚遺跡（B）・乳母ケ谷遺跡[28]（6）・乳母ケ谷第2遺跡（C）・泊村宇谷第1遺跡[29](65)など、丘陵上の遺跡の密度が増加する。低地においては、羽合町和助北遺跡[29]（9）において祭祀関係の土器と思われる、赤色塗彩された脚付注口土器が見られるのみである。東伯耆は銅鐸の出土例が多く、倉吉市小田で2口[15](外縁付鈕Ⅱ式・扁平鈕式)、北福第1遺跡[30](55)・長瀬高浜遺跡[22]で小銅鐸がそれぞれ1口、泊村小浜[31]で2本の舌とともに1口（外縁付鈕Ⅰ式)、北条町米里[32]で1口（外縁付鈕式)、やや離れて東伯町八橋で1口[33](扁平鈕式）が見つかっている。そのほかにも、伝伯耆国とされるもの1口[34](外縁付鈕Ⅰ式）がある。また、弥生時代における集団墓から卓越した阿弥大寺1～3号墓[34]、藤和墳丘墓[35](23）などの四隅突出型弥生墳丘墓が倉吉市で4基調査されている。

古墳時代

前　期　主な前期古墳には、三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品をもつ、復元全長100mを測る前方後円墳である羽合町橋津（馬ノ山）4号墳[20]（5）がある。橋津4号墳を含む24基からなる橋津（馬ノ山）古墳群のうち22基は、国の史跡に指定されている。さらにこの古墳群には橋津（馬ノ山）2号墳などの大型前方後円墳が築造され、東郷池周辺だけでなく広く東伯耆一帯を支配した集団の存在が想定できる。周辺には北条町土下古墳群[36]・曲古墳群[37]などが前期から後期にかけて群集して存在する。橋津古墳群を仰ぎ見る砂丘に立地する長瀬高浜遺跡において、160数棟の竪穴住居跡、40棟の掘立柱建物跡をもつ大集落が再び現れる。この集落は前期から中期にかけて営造されているが、中期の中頃にはその規模も縮小している。集落が廃絶されると古墳が築造されるようになる。また、おびただしい数の器財型埴輪群が見つかっている[38]。他に田下駄・刀状木製品・火きり臼・彩色醂・手づくね土器など祭祀に伴う遺物が出土している東郷町津浪遺跡[39](19）が知られている。この時期の住居跡は、東郷町佐美古墳群において4号墳に切られるかたちで検出された[40]ものなど丘陵上でも確認されている。橋津4号墳以後もこの地域では、東郷池の東岸には全長90mを測る前方後円墳である東郷町宮内狐塚古墳[20](63)、南岸には山陰最大級の規模を誇る全長110mを測る前方後円墳である東郷町野花北山1号墳[20](29）などの大型前方後円墳が累々と築造される。このように、墳丘規模及び内容で他の古墳をはるかに凌駕する古墳が存在する東郷池周辺は、古墳時代前期から中期にかけて東伯耆の中心的な地域であると考えられる。

中　期

後　期　後期になると大型の前方後円墳は見られなくなるが、中小規模の前方後円墳が南谷古墳群（B）など、各古墳群においても見られるようになる。また、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって、横穴式石室が採用される。東郷町片平4号墳[18](20）は基底部を箱式石棺状に組み、板石を持ち送りながら小口積みにするもので、東伯耆では倉吉市大宮古墳[41]とならび導入期の横穴式石室である。その後、この地域で比較的用意に手に入れることができる板状摂理の安山岩を使用する横穴式石室が後期群集墳に取り入れられ、爆発的に増加する[42]。東郷町片平1・5[18][43]号墳、長和田20号墳[44](28)、中興寺1号墳[45](51)、久見17号墳[44](49)、北福23号墳[30](57)、宮内31号墳[20]、羽合町橋津（馬ノ山）9号墳[46]、倉吉市福庭古墳[15](15）などが知られている。これらのうち中興寺1号墳などのように各壁が一枚石で構成されている石室や、福庭古墳に見られるような切石石室は終末の様相を示す。また、6世紀前葉の窯跡である東郷町埴見中ノ谷古窯跡[47](26）があり、当地域の須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。また、各所で土師器・須恵器が表採されており、各古墳群を造った集団の集落跡

の存在が確かめられる日も近いであろう。

歴史時代　この地域は古代寺院跡がたくさん見つかっている。白鳳期には、倉吉市大御堂廃寺[48](35)、

白鳳期　東郷町野方・弥陀ケ平廃寺[49](53)、倉吉市大原廃寺[50](36)が造営される。大御堂廃寺は法

奈良時代　起寺式の伽藍配置であったと考えられている。礎石の中央には柱を捉えた穴が穿たれており、炭化した柱の一部が残っていたという。この寺院は発掘された墨書土器より8世紀後半頃には久米寺と呼ばれていたようである。野方・弥陀ケ平廃寺からは川原寺式の瓦の他に、塔心中央に柱穴をもつ塔心礎・礎石が見つかっている。大原廃寺からは、柱穴をもつ塔心礎、川原式の瓦が見つかっている。また、発掘調査により塔の基壇の一部が明らかになった。東郷町久見（48）でも7世紀後半頃と8世紀後半頃の瓦が見つかっており[49]、寺院跡か官衙跡の存在が考えられる。奈良時代には現在の倉吉市国府に伯耆国衙[51]、伯耆国分寺[52]、国分尼寺[53]も建立されるなど、東伯耆は奈良・平安時代の政治の中心地であった。この地域は律令体制下にあっては伯耆国河村郡にあたり、河村郡は笏賀、舎人、多駄、埴見、日下、河村、竹田、三朝の八郷から成る。郡衙の所在地は不明であるが、河村郷、舎人郷、多駄郷の三か所が候補地として考えられている。[7][54][55]

また、この地域には古代律令体制の名残としての条里遺構が残っている。[54] 天保地図[4]などには整然と並んだ方格地割りがあり、当時の名残りを留めていると考えられている。

平安時代　平安時代に入り自墾地系荘園が現われ律令体制が崩壊し、次第に封建制社会が形成されるようになる。このようななか、力を得てきたのが国司・郡司・寺社であった。東郷池周辺では、伯耆一宮、東郷氏であった。東郷氏は、中央の貴族や寺社に所領を寄進して、地方豪族としての地位を高めていった。伯耆一宮である倭文神社は「伯耆六社」の一つで、承和4（837）年に従五位下の神階が与えられていたが、広大な社領を経済基盤として在地領主層の信仰を集めながら伯耆一宮の地位を獲得したものと考えられている。[56]

平安時代末期になると、末法思想が広まる。伯耆一宮の境内に隣接した山林で経塚（64）が発見された[54]。経塚のなかには石室があり、そのなかに金銅製経筒、金銅製観音菩薩立像、銅製千手観音立像、銅板線刻弥勒立像などが安置されていた。経筒には「（中略）康和五年癸未（中略）」銘が刻まれている。これら出土品は国宝に指定されている。

鎌倉時代　地頭の勢力は鎌倉幕府権力の伸長を背景に、次第に強大になった。歴史の教科書にもよく掲載されている大阪府柳沢真次郎氏所蔵の正嘉2（1258）年銘の「伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図」によって地頭の荘園侵略の様子が窺われる。長瀬高浜遺跡では、約80基の火葬墓や土壙墓が調査され、この時期の葬制が明らかとなった。

室町時代　中世城郭も数多く知られており、南条貞宗によって築城された羽衣石城（37）、その近辺に出城や砦が築かれている。応仁の乱後は各地で騒擾戦乱が絶えず、この地においても大永4（1524）年尼子経久によって羽衣石城が落城し、また馬ノ山で尼子氏と山名氏が合戦をするなど争いの跡をとどめている。天正9（1581）年には羽柴秀吉と吉川元春が対陣した。秀吉は御冠山に、元春は馬ノ山に陣を設けたが、馬ノ山にはこの時に築かれた土塁が残っている。また、乳母ケ谷第2遺跡で調査された土塁も馬ノ山のものと類似しており、この対陣の際に築かれたと思われる。この前後の情勢は『陰徳太平記』に詳しく述べてある。山間地にはこの時期と思われるタタラ跡が数カ所確認されている。また、橋津川改修にともない、中世の貝塚が検出された。この南谷貝塚遺跡[58]（8）は、ヤマトシジミなどの貝類のほか、漆器などの木製品が出土している。

近世近代　文久3（1863）年には外国に対する海岸防備のために砲台が設置された。鳥取県には由良、橋津、赤碕、淀江、境などに台場が建設され、海岸防備に当たった。橋津の台場（10）の建設に当たって橋津4号墳の前方部が削られたことがわかっている。[7]

第３章　南谷ヒジリ遺跡の調査

第１節　南谷ヒジリ遺跡の概要

位　置　南谷ヒジリ遺跡は東郷池の北西、橋津川中流右岸の羽合平野に向かって東西に延びる舌状の低丘陵（標高21～24m）上に存在する。本遺跡は南谷１号墳と２号墳との間にあり、周知の南谷遺跡の北側に位置する。また、南西側を見下ろすと、天神川右岸の砂丘地に古墳時代前期を中心とした大集落跡を持つ長瀬高浜遺跡（弥生時代から中世に至る大遺跡）がある。

遺　構　本遺跡で検出された遺構数は、竪穴住居跡５、土坑４、掘立柱建物跡３、溝状遺構４、埋葬

住　居　施設１、段状遺構１、ピット群であった。竪穴住居跡において斜面部分にあるものは流出し、尾根の中心にあるものは耕作により削平を受けており、残存状態が非常に悪いものであった。形態は方形２（ＳＩ01・04）、隅丸方形２（ＳＩ02・05）、多角形の様相を呈するもの（ＳＩ03）の３種類があった。ＳＩ02は中央ピットの縁が粘質土で盛り上げられ、貼床もみられた。ＳＩ03～05は弥生時代末から古墳時代前期までに建て替えられていた。最後に建てられたＳＩ05は焼失した住居跡で、大量の焼土や構造材の炭化物をはじめ甕や壺、甕等の土器が出土している。構造材の炭化物は^{14}C測定を行なった。周知の長瀬高浜遺跡の集落史の空白部分

土　坑　をうめる良い資料になるであろう。土坑について述べると、標高の高い位置にあるＳＫ01はかなりの削平を受けていたが、それぞれに遺物が一括して残っており、良い資料を提供してくれた。特徴的な遺物として、ＳＫ01では器台が、ＳＫ02では高坏が、ＳＫ04からは焼土や炭化物が出土した。また、全土坑から甕が出土した。本遺跡では、すべて弥生時代後期の袋状土坑であったことから、今回の調査で確認できなかったこの時期の住居跡が近くに存在す

掘　立　る可能性が考えられる。次に、掘立柱建物跡について述べると、ＳＢ01・02は丘陵頂部に存在し、ＳＢ03はＳＩ04・05の黒褐色埋土上で検出した。ＳＢ03のピット埋土中に須恵器と土

溝　状　師器が混入するものがあった。また、本文で述べるＳＤは、墓域を区画するであろう周溝状の溝が「コ」の字形を呈し西側に延びていくＳＤ01、近世の畑地の境界を表すものと思われる尾根を段状に整形し、尾根に沿って東西に延びていくＳＤ02・03、尾根に直交して調査区域外に延びていくＳＤ04があり、用途、時代共に違いはあるが、溝状遺構として同一の表現を用いた。ＳＤ01は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器を含んでいたが、崩壊危険区域に延びこむため完全には検出できておらず、来年度以降の調査が期待される。そ

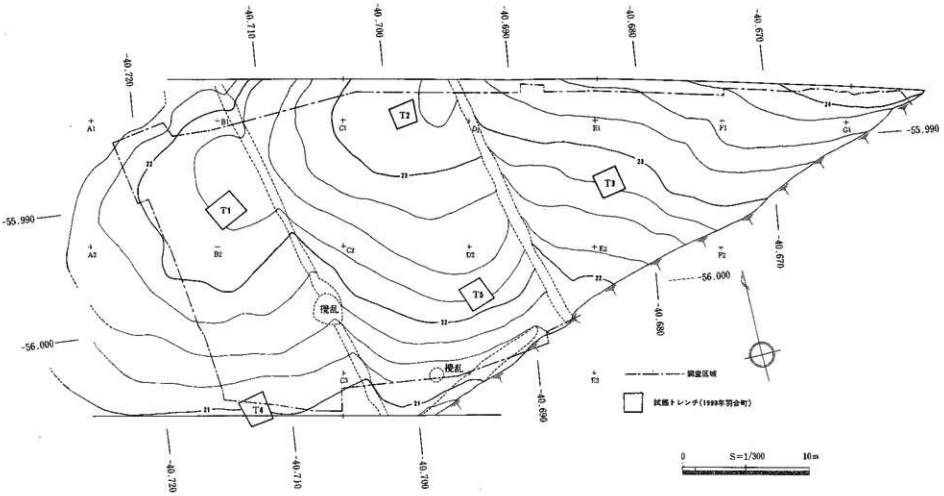
埋葬施設　の他、埋葬施設（ＳＸ01）と段状遺構（ＳＳ01）があり、前者は単独で存在し、住居跡を切

段状遺構　る状態で検出された。石棺材と思われる石も検出したことから石棺と考えられる。後者は地山を整形し段をつけ、平面形が凸状に掘り込んだ遺構であった。近世以降の磁器を多く含み

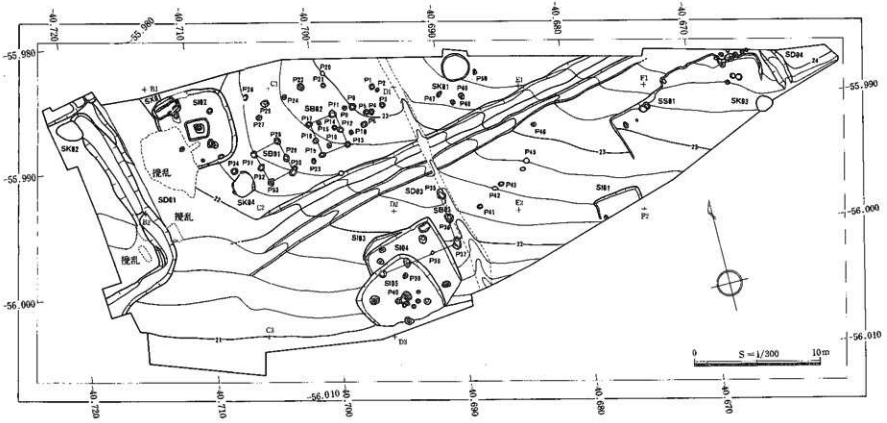
時　期　埋土も柔らかだったが、用途は不明である。

遺構は出土遺物から考えて弥生時代後期後半～古墳時代前期と近世以降に亘っている。表採ではあるが13世紀ごろの青磁片も出土しておりこの磁器の遺構が近くに存在していることも考えられる。

写真５　南谷ヒジリ遺跡現地説明会



挿図4　南谷ヒジリ遺跡調査前地形測量図



挿図5　南谷ヒジリ遺跡遺構全体図

第２節　南谷ヒジリ遺跡の調査

１　竪穴住居跡

ＳＩ01（挿図６・91、図版２・36）

位　置　調査区の南東隅、標高22.25m～22.5m、Ｅ２グリッドに位置する。

形　態　住居の南側が後世の攪乱によって失われているが、平面は方形を呈していたものと思われる。その規模は、長軸3.5m×短軸1.4m以上である。残存している床面積は、4.9㎡である。残存壁高は、北壁で最大0.33mである。壁溝は、現存しない南側を除き、３辺の壁際を巡る。その幅は24cm前後、深さは７cm前後で、断面はＵ字状を呈する。柱穴は１個のみ検出することができた。柱穴の位置より２本柱の住居が考えられるが、詳細は不明である。柱穴の規模は、(24×21－17) cmである。中央ピットは検出することができなかった。焼土も検出することはできなかった。

埋　土　埋土②層に炭化物を含んでいたが、床面の状況などから、焼失した住居とは考えにくい。

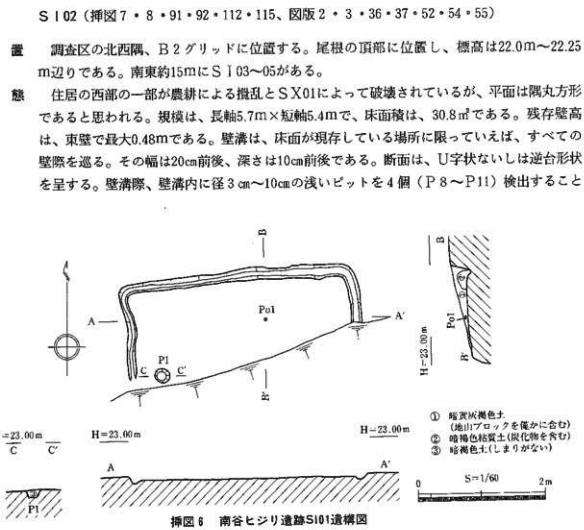
遺　物　床面で、高坏の坏部（Po1）が出土した。口縁部を下に向け、潰れたような状態で出土した。遺構埋土中でも土器片が出土したが、図化できるものはなかった。

時　期　出土土器より、古墳時代前期であると考えられる。

ＳＩ02（挿図７・８・91・92・112・115、図版２・３・36・37・52・54・55）

位　置　調査区の北西隅、Ｂ２グリッドに位置する。尾根の頂部に位置し、標高は22.0m～22.25m辺りである。南東約15mにＳＩ03～05がある。

形　態　住居の西部の一部が農耕による攪乱とＳＸ01によって破壊されているが、平面は隅丸方形であると思われる。規模は、長軸5.7m×短軸5.4mで、床面積は、30.8㎡である。残存壁高は、東壁で最大0.48mである。壁溝は、床面が現存している場所に限っていえば、すべての壁際を巡る。その幅は20cm前後、深さは10cm前後である。断面は、Ｕ字状ないしは逆台形状を呈する。壁溝際、壁溝内に径３cm～10cmの浅いピットを４個（Ｐ８～Ｐ11）検出すること



挿図６　南谷ヒジリ遺跡SI01遺構図

ができた。その他、床面上に7個ピットを検出した。P1～P3、P5が主柱穴と考えられ、4本柱の住居である。P4は、梨作りの際の攪乱によって掘り方の上部を失っていた。それぞれの規模は、P1（40×36－25）cm、P2（40×39－84）cm、P3（51×47－72）cm、P5（34×36－31）cmである。柱穴間距離はP1よりP3までそれぞれ、2.75m、2.60m、P3、P5間は2.73m、P5、P1間は2.75mである。P4はP3を切る（68×52－13）cmの

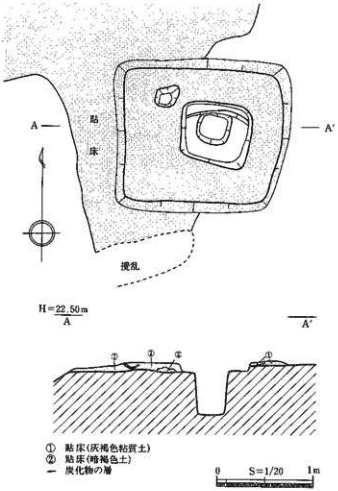
中央ピット 浅いピットである。P6は中央ピットで、平面は方形二段掘り、北側に幅10cmのテラスを持つ。その規模は上縁部で（73×67－55）cmである。ピット内埋土は6層に分層できた。中央ピット内で火を日常的に用いた痕跡は認められなかった。住居床面に堆積していた埋土は流入しておらず住居が廃棄された時点では、中央ピットは埋められていたものと思われる。中央ピットの周囲30cmから60cmの範囲は、床面より3cmほど土手状に高い。断面観察の結果、貼床の土を使って硬く叩き締められながら盛り上げられている事、盛り上げられた土の中に炭化物がサンドイッチ状に挟まれていることが分かった。P7は中央ピットに寄り添うようにあり、（30×20－10）cmの規模を持つ小さなピットであるが、性格は不明である。

焼　土　P4の西約20cmの床面上に（34×24）cmの不整形な焼土の広がりを検出した。遺構の埋土

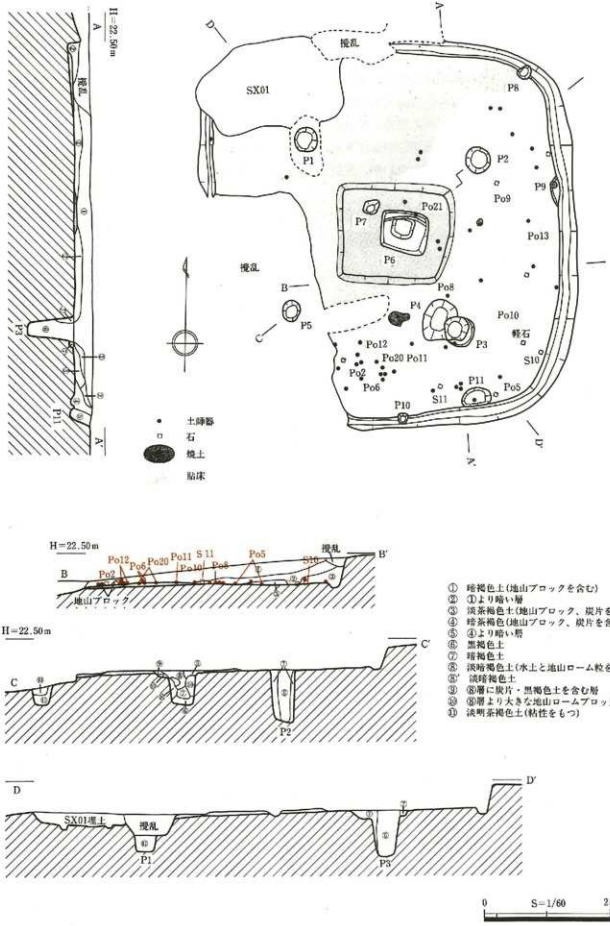
埋　土　は5層で、住居の壁から中央に向かって流れ込んだ様な状態であった。③④層は、炭片を含んでいたが、その密度は薄く、焼失した住居とは考えにくい。床面においても、焼失を裏付けるものは得られなかった。

遺　物　出土遺物は、壺Po2～Po4、甕Po5～Po17、小形丸底壺Po18、高坏Po20・Po21、脚Po19、土玉Po245、石錘S12～S14、敲石S10・S11、軽石である。この内床面出土の土器は、壺Po2・Po3、甕Po5～Po13、高坏Po20、Po21、石錘S12である。脚Po19は、P2内出土である。図化はできなかったが、中央ピット埋土中で土器及び軽石が出土した。また、壁溝内からも土器片が出土した。

時　期　床面出土の甕より、S102は、古墳時代前期であると考える。



挿図7　南谷ヒジリ遺跡S102中央ピット



挿図8　南谷ヒジリ遺跡SI02遺構図

ＳＩ03・04・05（挿図９～11・93～96・112・113・115・116、図版４・５・37～40・52～55）

位　置　調査区の中央部、最も南側のＣ３グリッド・Ｄ３グリッドに位置し、３棟の住居跡が切り合って検出された。これらの住居跡は北から順次構築されており、順にＳＩ03・04・05とした。これらの立地場所は、南側に緩やかに下る斜面であるために、後世の削平等が及びやすいと思われ、いずれの住居跡も南周壁は検出されなかった。

形　態　ＳＩ03は遺存状態が最も悪く、検出面をみるとＳＩ04に付随する遺構であるように思えるＳＩ03が、わずかにではあるが壁溝が確認され、単独の住居跡であると判断した。正確な形態及び規模は窺い知ることはできないが、周壁の屈曲部からすると、平面多角形を呈していたと考えられる。

残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で、最大0.24mである。

壁溝も北壁際にわずかに認められるだけであったが、幅７～10cm、深さ３cmを測り、断面逆台形状を呈するものである。

柱穴は、床面上では確認できないが、ＳＩ04の北壁際で、この住居の柱穴と考えられるＰ１がある。Ｐ１の規模は（45×35－46）cmである。他の柱穴は確認できなかった。

ＳＩ04　ＳＩ04は、南西側がＳＩ05によって大きく切り取られていたが、他の周壁は比較的遺存状態もよく、平面は方形を呈す。

規模は、南西側を復元して考えると、長軸5.9m×短軸5.5m、床面積約32.5㎡と推定される。

残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.52mである。

壁溝は、南側を除いて全周しており、幅10～23cm、深さ２～６cm、断面逆台形状を呈す。

柱穴は、床面上で５個検出することができたが、Ｐ１はＳＩ03に伴うものと考えられ、この住居に伴うものは計３個で、それぞれの規模は、Ｐ２（48×40×－36）cm、Ｐ３（65×50－38）cm、Ｐ４（50×48－45）cmである。基本的には主柱穴は４本と思われ、残りの１個は、ＳＩ05に残るP5（25×25－７）cmと考えられる。主柱穴間距離はＰ２－Ｐ３間から順に、3.9m、4.0m、3.6m、3.9mである。

床面には、柱穴のほかに北東隅に長径95cm、短径60cm、深さ７cmを測る不整形な方形を呈す土坑状のものがあるが、性格は不明である。

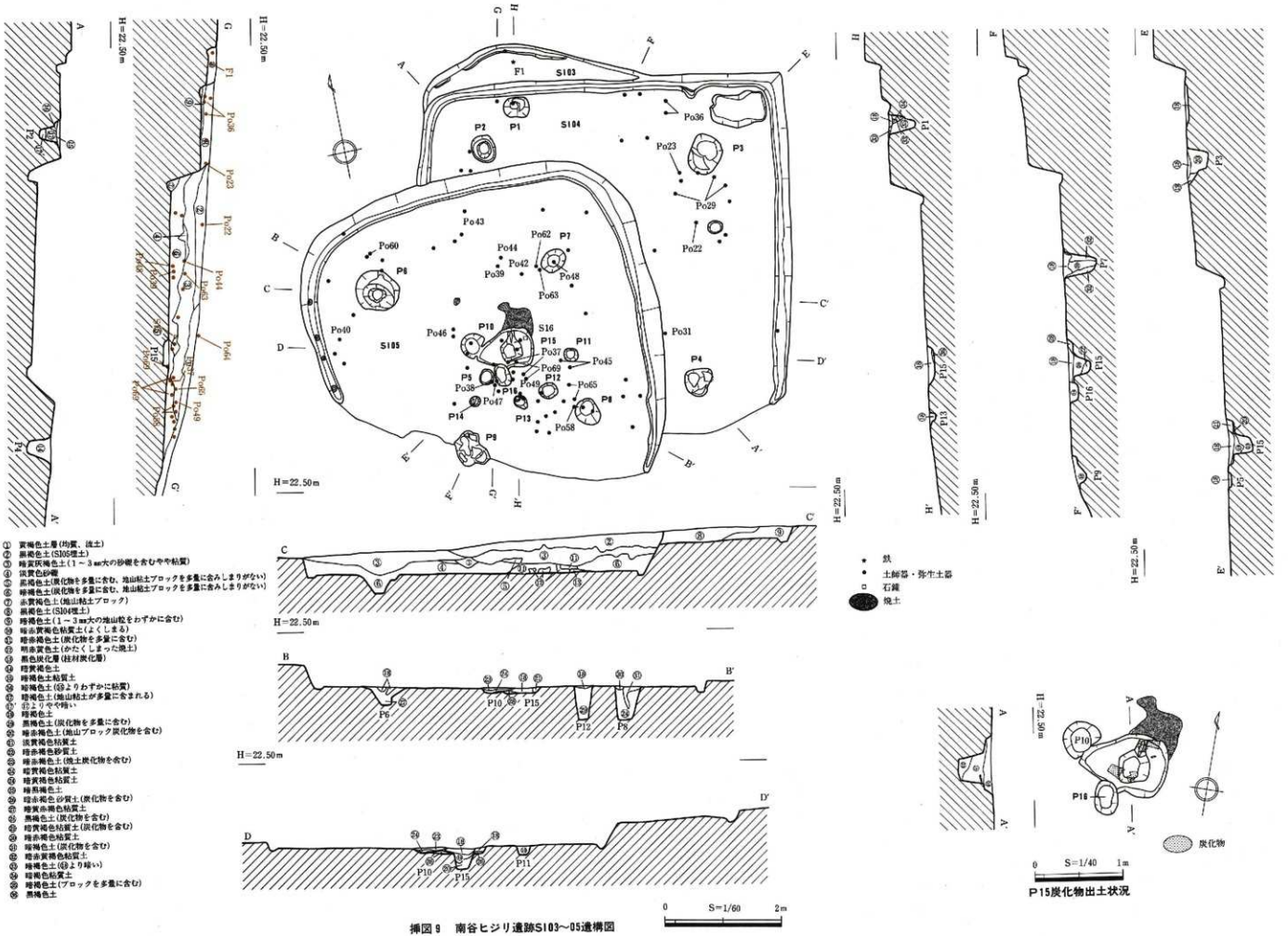
Ｐ３－Ｐ４間にあるピットはＳＢ03に伴うものである。

ＳＩ05　ＳＩ05は、南側が流出しており全形を留めていなかったが、平面は隅丸方形を呈す。

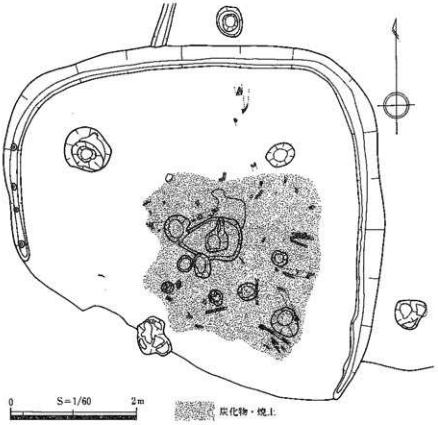
規模は、南側を復元して考えると、東西5.5m、南北5.5mを測り、床面積約28.1㎡と推定される。残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.52mである。

壁溝は、南西隅及び南側を除いて全周しており、幅10～32cm、深さ４～10cmを測り、断面逆台形状を呈す。西側壁溝内には径５～10cm、深さ３cm程度の小ピットが４個あり、これらは、壁溝内に立てた側板を支えるための杭穴であると思われる。

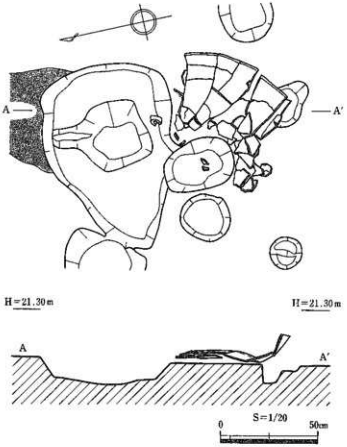
柱穴は、床面上で11個検出することができたが、Ｐ５はＳＩ04に伴うものであり、また、Ｐ16は後述するが後に掘り込まれたものと思われ、この住居に伴う柱穴は計９個である。それぞれの規模はＰ６（75×72－33）cm、Ｐ７（45×35－53）cm、Ｐ８（47×40－60）cm、Ｐ９（55×46－25）cm、P10（43×35－９）cm、P11（25×23－16）cm、P12（30×25－59）cm、P13（26×22－10）cm、P14（17×17－15）cmである。主柱穴はＰ６、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ９の４個で、主柱穴間距離はＰ６－Ｐ７間から順に、3.1m、2.6m、2.2m、3.1mである。他の柱穴については、中央ピット（P15）の周辺にあり、これを囲んだ施設の柱穴の可能性がある。



挿図9　南谷ヒジリ遺跡S103～05遺構図



挿図10　南谷ヒジリ遺跡SI05炭化物・焼土出土状況図



挿図11　南谷ヒジリ遺跡SI05甑形土器出土状況図

中央ピット　中央ピットは、ＳＩ05にのみ遺存していた。このピットは、床面の中央よりやや東側に位置し、二段に掘り込むタイプである。まず、床面を長軸100㎝、短軸60㎝、深さ７～10㎝に不整形な長方形に掘り、さらに二段目をほぼ方形に35×35㎝、深さ26㎝に掘り込んでいる。一段目のテラス部分には薄い炭化物が張り付くように残っており、中央の穴を木蓋のようなもので覆った可能性がある。ピット内には、炭化物・焼土を含む地山ブロックが入っていた。

焼土面　ＳＩ05では、床面上に40×50㎝の不整形に広がる焼土面が中央ピット北側に接した位置で一か所、ここから西にやや離れて15×10㎝の楕円形の焼土面が一か所、計二か所で認められた。

また、ＳＩ03の北側で、住居跡外に40×25㎝の不整形に広がる焼土面が検出されたが、この住居跡に伴うものかどうか不明である。

炭化物・焼土　ＳＩ05では、床面に達するまでに2.8×3.0ｍの不整形に広がる炭化物を多量に含む焼土が検出された。焼土の範囲は、住居の中央部よりやや東に偏っている。焼土の厚さは、最も厚いところで16㎝を測る。炭化物のなかには、家屋の構造材と思われるものが放射状に残っていた。これらのことよりＳＩ05は焼失したものと判断された。

土層　ＳＩ03・04の埋土を観察すると、自然堆積の状況を示す。ＳＩ05については炭化物を含む層がかなり上から検出でき、また、その下には砂礫が入り込んでおり、住居の屋根には茅などの屋根材とともに、土・砂礫などが一緒に葺かれていたものと推定される。また、壁溝付近には粘質土があり、壁溝内のピットと考え合わせると、壁溝には板状のものが立てられたと推定される。

遺物出土状況　ＳＩ03では、埋土及び床面で土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。床面直上で鉄鏃Ｆ１が出土している。

ＳＩ04では、床面上で壺Po22・Po23、甕Po24、高坏Po29・Po31、甑形土器Po36など土器片が散在した状況で、また、砥石Ｓ17が北東隅で出土している。柱穴Ｐ３中で壺底部Po35が出土している。埋土中では、甕Po25～Po28、高坏Po30、鼓形器台Po32、蓋Po33、甕底部Po34などが出土している。

ＳＩ05では、床面の焼土の上で多数の土器片、石器が検出されたが、図化できたものは壺Po37～Po40、甕Po42～Po44・Po46～Po49、鼓形器台Po65、甑形土器Po69、石錘Ｓ15・Ｓ16がある。これらは、住居の焼失による崩壊の際に押しつぶされたと思われる。また、Po69の出土状況を見ると、破損している部分がちょうどＰ16と重なり、Ｐ16によって切られていると判断された。Po40は住居の西壁際で口縁を下にして、また、東側壁溝内より甕Po57が、Ｐ８より甕Po45が出土している。埋土中からも多数の土器、鉄器が出土しているが、図化できたものには、壺Po41、甕Po50～Po56・Po58・Po59・Po61、鉢Po60、高坏Po62～Po64、鼓形器台Po66・Po67、低脚坏Po68、土玉Po246・Po259 、鉋Ｆ２、鉄鏃Ｆ３がある。

ＳＩ05の南側下方の調査区際で土玉Po253・Po254が出土しているが、これらはＳＩ05に伴うものと考えられる。

時期　出土遺物によって、ＳＩ04は弥生時代終末期、ＳＩ05は古墳時代前期に構築されたものと考えられる。ＳＩ03については時期の決め手となる土器が出土していないため、正確な時期は言えないが、弥生時代後期頃のものとされ、ＳＩ04よりは古い。

2　土坑

ＳＫ01（挿図12・97・98・112、図版６・41・42・52）

位　置　調査区の北側、Ｄ１グリッド、標高23.75m付近で尾根の頂部辺りに位置する。畑地の耕作土を30cm程除去した後に、風化した礫を含む赤褐色ローム層上面で暗褐色土の円形の落ち込みを検出すると共に、土器が出土したため、ベルトを設定して４分割して北東区と南西区から掘り始めた。

形　態　耕作のためかなりの削平を受けており残存状態が非常に悪いが、平面は円形であり、断面は微かに掘り込みが内湾する部分が残っていることから袋状であると考えられる。

規　模　規模は上縁部で直径2.08m、底面で長径2.02m×短径2.00mである。深さは最も残りの良いところで上縁部から0.27mである。

土　層　遺構埋土は、大きく褐色土、暗黄褐色土、暗褐色土の３層に分かれている。①層には土器を多く含む。②層は無遺物層である。③層は多くの土器と炭化物を含んでいた。

遺　物　出土土器は①層と③層中でそれぞれに土器群を形成し、２つの土器群はおよそ10cm内外のレベル差を持ちながら、土坑全体に投げ込まれた様相を呈していた。①層の土器群では底面から15cm浮いたところに潰れた状態で甕（Po72）が出土し、その破片が①層中で土坑全体に広がっていた。③層の土器群では底面直上の南西区に器台（Po84）、高坏と思われる脚部（Po86）が潰れた状態で出土した。出土土器全体でみると、甕の口縁が多く、特に波状文を施されたもの（Po72・79）はほぼ①層に集中していた。また、完形に近く櫛目を施されたもの（Po70）はすべて③層に散乱して出土した。これらの出土土器を整理、復元してみると、Po71・72・82・87～89が①層の土器群中から出土し、Po73・74・76～78・81・84～86が③層の土器群中から出土したほか、Po75・79・83・90が①層と②層の土器群から出土した。その他、①層から土玉（Po327）、把手が出土しているが、①層と③層の土器群に同一個体の土器が含まれていたことは興味深い事実であり、土坑外で土器を壊し、短期間に二度にわけて土器が放棄されたと考えられる。甕（Po80）は①層に混入していた。

時　期　時期は底面の出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

ＳＫ02（挿図13・99、図版６・42・55）

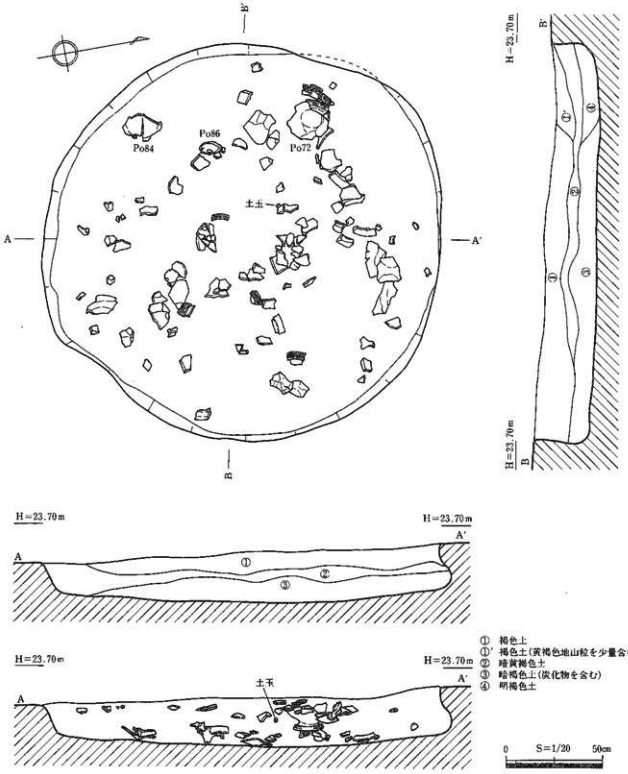
位　置　調査区の北東隅、Ａ２グリッド、標高21.70m付近で尾根の頂部に位置する。梨畑の耕作土を25cm程除去した後に、赤褐色ローム層上面で暗褐色土の円形の落ち込みを検出した。掘り下げはベルトを設定し、半截して南側から始めた。

形　態　耕作による削平をほとんど受けておらず残存状態が比較的よい。平面は楕円形であり、断面は上縁部より最大で40cm、最小で10cm掘り込みの壁面が内湾する顕著な袋状である。

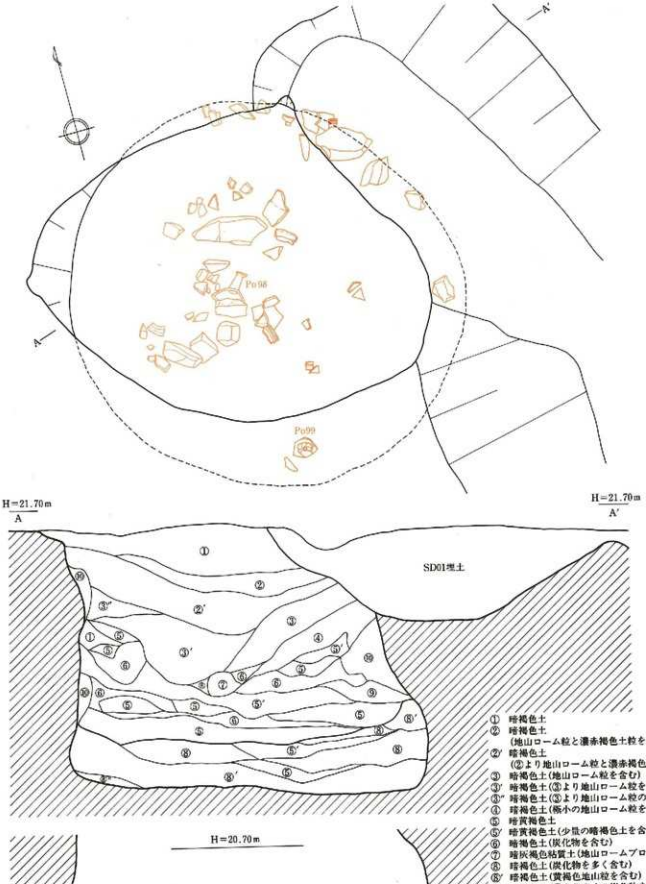
規　模　規模は上縁部で長径2.10m×短径1.73m、底面で長径2.10m×短径1.98mであった。深さは最も残りの良いところで上縁部から1.41mであった。

土　層　遺構はＳＤ01によって上縁部東側の肩部が切られている。遺構埋土を大別すると暗褐色土（自然堆積）、暗黄褐色土（地山の崩れ）、暗褐色土（炭化物を含む）の３つに分かれる。⑤⑤′層は地山ロームと同質の土質であり、壁面の崩れと考えられる。底面中央から25cmの位置にある⑤層は非常に良く締り、南側にいくほど層の厚さを増している。この層の上面の検出状況は中央でほぼ水平に堆積しており、崩れを平坦に均しながら、この深さまで再利用された可能性がある。⑤層より下の⑧層及びそれに類する土層は暗褐色土で炭化物を含み、土器・石を包含していた。

遺　物　土器の出土状況は、北東部に集中していた。2個体分の高坏が底面直上から出土した。Po98は坏部を南西方向に向け横臥した状態で出土し、Po99は坏部を底面に付け倒立した状態で出土した。前者は土坑の北東部全体に散乱しているものの、後者は脚部1点しか出土しなかった。甕の口縁は、浮いた状態で出土したもの（Po95～97）、底面直上で土坑全体に散乱した状態で出土したもの（Po91～94）があった。角のある自然石も底面直上から多数出土し、土坑の東側壁に沿うように9個、土坑中央付近に9個で合計18個であった。大きさは最大で29cm×17cm、最小で4cm×2cmであった。この石も土坑中央から北東部にかけて出土しており、上述の土器の出土位置と一致する。このことは、この袋状の貯蔵穴の中でも、石



挿図12　南谷ヒジリ遺跡SK01遺構図



挿図13　南谷ヒジリ遺跡SK02遺構図

を配置した特別な施設を設け、特別な保存方法を行なっていたのではないかと思われる。遺構埋土上層で里木Ⅱ型式で壁面に縄文が施された縄文時代中期の土器（Po143・148・149）も出土している。

時　期　時期は底面直上出土土器から弥生時代後期後半と思われる。

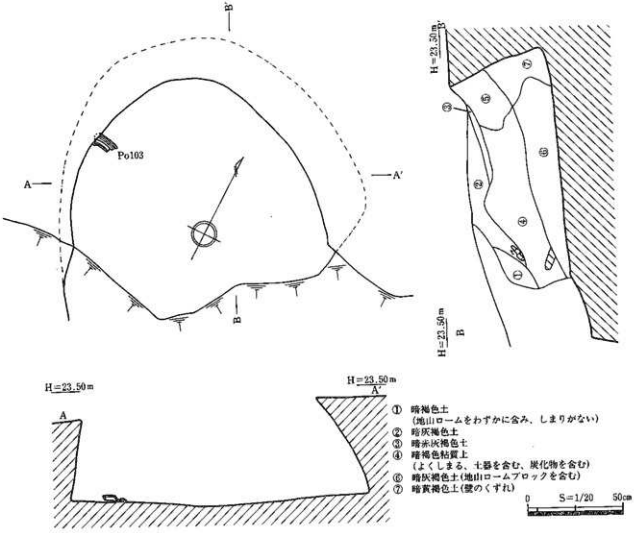
ＳＫ03（挿図14・100・112、図版７・43・52）

位　置　調査区の東端、Ｇ２グリッドのＧ１坑付近、標高23.50m辺りで尾根がなだらかに下った斜面上に位置する。竹林の表土を40cm程除去した後に、土器の出土が見られ、赤褐色ローム層上面でローム粒を含む暗褐色土の円形の落ち込みを検出した。掘り下げは半截して西側から始めた。

形　態　土坑西側が削平を受けているため残存状態が悪い。平面は円形であり、断面は掘り込みの壁面が上縁部より最大で20cm、最小で５cm内鴻する顕著な袋状であった。

規　模　規模は上縁部で長径1.37m×短径1.15m、底面で長径1.55m×短径1.41mであった。深さは残りの良いところで上縁部より0.54mであった。

土　層　遺構埋土は⑤⑦層が壁面の崩れた堆積である。②④層には土器が含まれ、特に④層黒褐色土中に多量の土器と炭化物が含まれる。⑥層は無遺物層ではあるが、よくしまった埋土であった。



挿図14　南谷ヒジリ遺跡SK03遺構図

遺　物　土器の出土状況は、底面直上から甕の口縁（Po103）が出土したほかは、すべて床面から浮いた状態で甕（Po104～110）、底部（Po111～113）が出土した。その他、浮いた状態で土玉（Po248～252）が出土した。

時　期　時期は底面直上出土土器から弥生時代後期後半と思われる。

ＳＫ04（挿図15・101、図版７・44）

位　置　調査区西側で、Ｄ２グリッド南東隅、標高22.50m付近で尾根の頂部に位置する。梨畑の耕土を25cm程除去した後に、赤褐色ローム層上面で黒褐色土の円形の落ち込みを検出した。掘り下げは半截して南側から始めた。

形　態　若干上部に削平を受けていると思われるが、その他は残存状態はよい。平面は楕円形であり、断面は上縁部から最大で20cm壁面が内湾する顕著な袋状である。

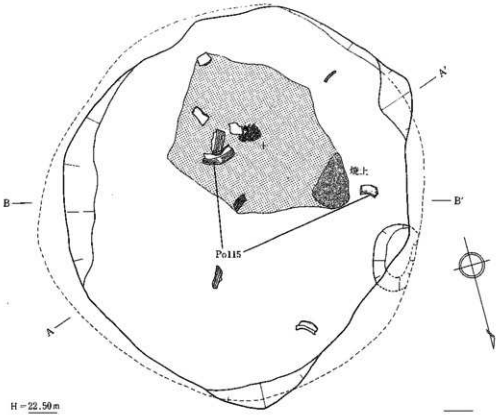
規　模　規模は上縁部で長径2.10m×短径1.85m、底面で長径2.10m×短径2.00mであった。深さは最も残りの良いところで上縁部より0.97mであった。

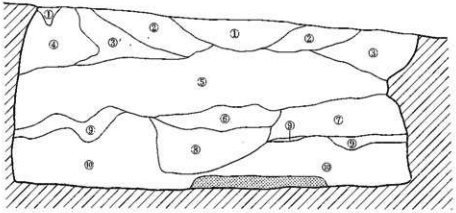
土　層　遺構埋土は⑥～⑩の層で非常に興味深い堆積をしている。その断面をよく観察すると、土質は⑦⑧⑩層が暗黄灰褐色土、⑨層が黄色土（水土）、⑥層が暗桃色土であり、付近の地山ロームを多く含み、さらに、⑥⑧層は粘質がありピット状に落ち込んでいた。また、⑤層は、土坑全体に堆積し、土質も均一であることから自然堆積であると考えられる。その後、壁面の崩れによって④層が溜まり、自然堆積によって①～③層が溜まったと考えられる。底面直上には焼土と炭化物層が見られた。以上のことから、焼失した際、消火のために投げ込まれたと考えられる⑦⑨⑩層が、⑤層の下面でほぼ平坦になっていることと、⑥⑧層が⑦⑩層中でピット状に落ち込むことから、焼失した後、この土坑を⑤層の下面で、もう一度使用しようとした可能性が考えられる。

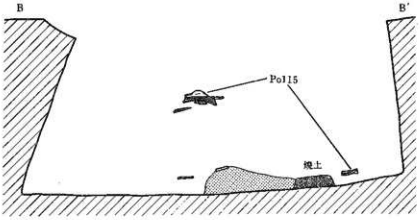
炭化物層　土坑の底面直上で検出した炭化物層の位置は底面の南側部分にあたり、規模は南北幅１m、東西幅0.8mを測り、検出面積は0.54㎡で底面の面積の６分の１に当たる。厚さは最大で15cm、最小で５cmであった。この層の上面では、植物性の繊維が残る炭化物の固まり２ケ所を検出した。その広がりは、長径12cm×短径９cmの楕円形を呈するものと長辺７cm×短辺４cmの四角形を呈するものであった。よく観察すると植物繊維が直交している部分もみられる（図版７参照）ことから、貯蔵穴の屋根材が焼け落ちたことも考えられる。炭化物層と繋がって北西部分に焼土も検出された。大きさは、長径30cm×短径20cm、厚さは９cmで卵形を呈していた。

遺　物　土器は⑤層の黒褐色土中と⑩層の底面付近の２層で出土しており、この２層それぞれに含まれる土器のレベル差は36cm程度であった。土器はすべて甕であった。このうち、Po117・118は⑤層の黒褐色土中から出土して、Po114・120・122は⑩層の底面付近から出土している。また、Po115・116は両方の層から出土しており、土器片をそれぞれ接合することができたが、その内、⑩層中にあった土器片は土坑北西部分に点在した。さらに、炭化物層から出土したもの（Po119・121）があった。

時　期　時期は底面付近の出土土器から弥生時代後期後半と思われる。







① 黒褐色土
② 暗灰褐色土
③ 暗黄灰褐色土
③' ③よりやや赤っぽい土
④ 黄色土(壁面の水土の崩落)
⑤ 黒褐色土
⑥ 暗褐色粘質土
⑦ 暗黄灰褐色土
⑧ 暗黄灰褐色粘質土
⑨ 黄色土(水セ)
⑩ 暗黄灰褐色土
黒褐色土
(炭化物を含む)

0　S＝1/20　50cm

挿図15　南谷ヒジリ遺跡SK04遺構図

3　掘立柱建物跡

ＳＢ01（挿図16・101）

位　置　Ｂ２、Ｃ２グリッドにまたがり、北西にＳＩ02、西にＳＫ01がある。２ｍ離れて東にあるＳＢ02とは、ほぼ並行する関係にある。２ｍ南には、ほぼ主軸を直行させて調査区の南西に延びるＳＤ02・03がある。Ｃ２グリッド付近は、耕作により削平が著しく、柱穴の残存状況はよくない。

形　態　桁行２間・2.8m、梁行１間・2.2mの掘立柱建物跡である。

主軸はＮ－15°－Ｗである。

柱穴は６個で、各柱穴の規模は、Ｐ１（58×50－18）cm、Ｐ２（46×41－15）cm、Ｐ３（58×45－12）cm、Ｐ４（56×40－29）cm、Ｐ５（50×47－15）cm、Ｐ６（50×47－15）cmを測り、Ｐ４がやや深くなっている。

柱穴間距離はＰ１－Ｐ２から順に、1.5m、1.3m、2.0m、1.6m、1.2m、2.2mを測る。

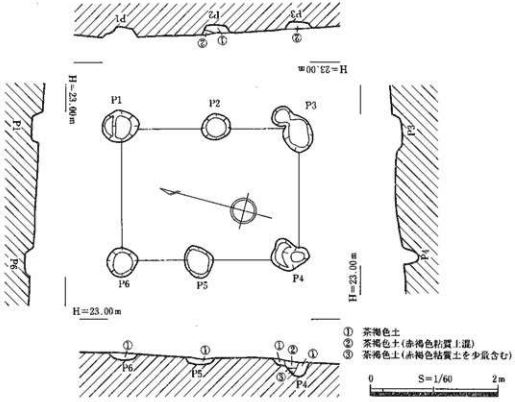
土　層　埋土は地山ロームの混入量によって３層に分層でき、しまりが良くない。

遺　物　遺物はＰ５の埋土から土師器の高台付坏（Po126）と須恵器の脚（Po127）が出土している。

時　期　Po126よりＳＢ01は、平安時代以降の掘立柱建物跡であると思われる。

ＳＢ02（挿図17）

位　置　Ｃ２グリッドのほぼ中央にある。西にはＳＢ01がほぼ主軸を同じくして並立する。２ｍ南には、ＳＢ02の主軸にほぼ直行して東西に延びるＳＤ02・ＳＤ03がある。Ｃ２グリッドでは多数のピットが検出されている（ピット群）が、耕作による削平が著しく、ＳＢ02の柱穴の残存状況も良くない。



挿図16　南谷ヒジリ遺跡SB01遺構図

形　態　桁行２間・2.7m、梁行１間・2.2mの掘立柱建物跡である。

主軸はN－10°－Wである。

柱穴は６個で、各柱穴の規模は、Ｐ１（60×55－16）cm、Ｐ２（49×44－14）cm、Ｐ３（43×36－13）cm、Ｐ４（49×46－12）cm、Ｐ５（45×41－15）cm、Ｐ６（45×35－８）cmを測る。６個の柱穴は良く揃っており、ＳＢ01の柱穴ともほぼ同規模である。

柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間から順に、1.4m、1.3m、2.2m、1.3m、1.4m、2.1mを測る。

土　層　埋土は基本的には、いずれもしまりの良くない茶褐色土で、Ｐ３の埋土上層の一部に黒砂が入っている。Ｐ３のように黒砂のはいる柱穴は、Ｃ３グリッドで検出された他のいくつかのピットにも見られた。

遺　物　遺物はまったく出土していない。

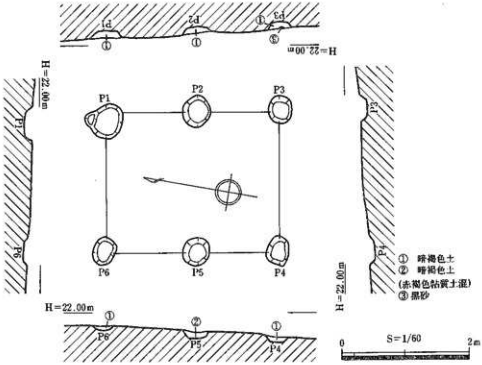
時　期　不明であるが、ＳＢ01とほぼ主軸を同じくすることから、同時期の掘立柱建物跡であると思われる。

ＳＢ03（挿図18・19・101、図版８・44）

位　置　調査区のほぼ中央、Ｃ２、Ｄ２、Ｄ３グリットに位置し、ＳＩ03・04・05より上面で検出された。

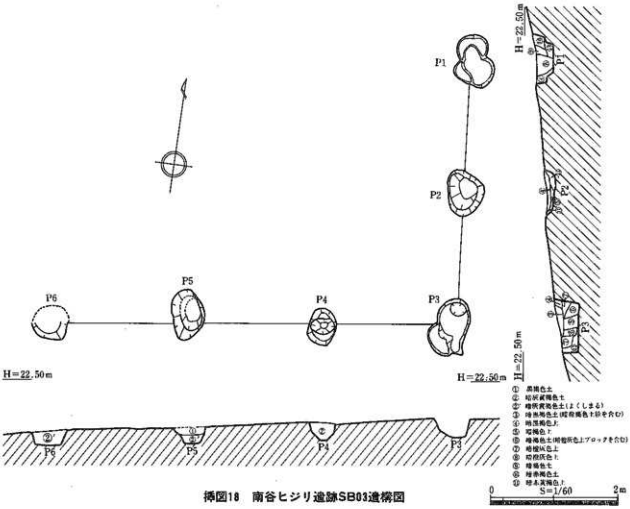
形　態　ＳＢ03は柱穴が６個しか検出できなかったが、これらの柱穴が鉤状に並ぶことより、桁行３間・6.5m、梁行２間・4.2mの掘立柱建物跡と判断した。なお、Ｐ５は1989年の試掘調査で検出され、Ｐ６はＳＩ05の調査中、掘り下げベルトにかかって検出された。主軸方向はN－82°－Eである。各柱穴の規模はそれぞれＰ１（85×43－34）cm、Ｐ２（73×58－21）cm、Ｐ３（93×48－40）cm、Ｐ４（59×42－30）cm、Ｐ５（80×50－28）cm、Ｐ６（59×？－26）cmを測る。残りの柱穴は検出できなかった。Ｐ４の掘り方は、ＳＩ04の床面にまで達している。柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順に、2.0m、2.2m、2.1m、2.1m、2.3mである。

土　層　Ｐ４～Ｐ６についてはＳＩ04・05の埋土（黒褐色土）に掘り込まれていた。

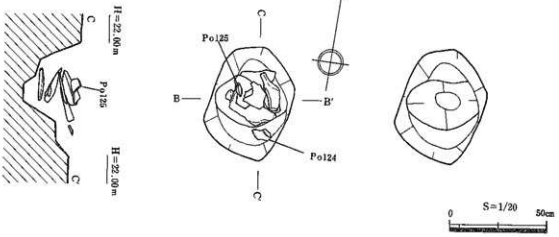


挿図17　南谷ヒジリ遺跡SB02遺構図

遺　物　Ｐ３内で土師器甕Po123、Ｐ４内で土師器坏Po124、須恵器坏身Po125が出土している。
時　期　ＳＢ03はこれらの土器から奈良時代～平安時代ものと考えられる。



挿図18　南谷ヒジリ遺跡SB03遺構図



挿図19　南谷ヒジリ遺跡SB03P4内遺物出土状況図

4　溝状遺構

ＳＤ01（挿図21・102、図版９・45）

位　置　調査区の西端、標高22m付近、Ａ２グリッドからＡ３グリッドにかけて位置する。表土は耕作による撹乱をうけており、撹乱は表土下の赤褐色ローム、水土にまで及んでいた。表土を30cm程掘り下げたところ、「コ」の字状を呈する溝を検出した。南側部分では撹乱がひどく、検出に難行した。この溝は、西側の未調査区へ延びてゆく。

形　態　遺構の残存状態が悪い上に、溝の伸びが未調査区に向かっているため、全体を調査することはできなかったが、墓域を区画する方形状の周溝になる可能性がある。南北方向の溝は、北東隅で浅くなり途切れてしまう。これに直角に交差する東西方向の溝は再び深くなるが、東端は階段状に途切れてしまう。この溝の性格については、未調査区の調査結果を待って決定したい。

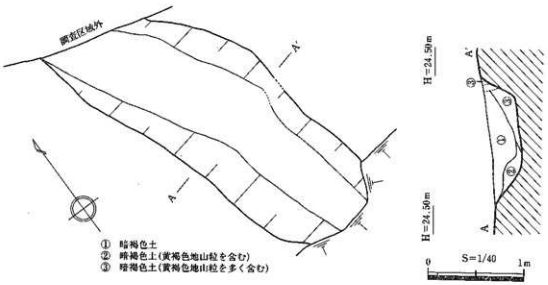
規模は南北の溝が長さ14.5m、幅が最大で1.8m、最小で1.5mあり、深さは最大で0.6mであった。南北方向の溝はＮ－20°－Ｗの方向に走る。東西方向の溝の内、北側のものは、長さ3.8m以上、深さは0.22mあり、南側のものは、長さ4.1m以上で、幅が1.3m、深さは0.3mあった。

遺　物　土器の出土は南側の東西溝底面から弥生土器甕（Po130）が出土している。周溝埋土中から掘り込まれたピット中で出土した土師器甕（Po133）や黒褐色土中で里木Ⅱ型式で縄文時代中期の土器（Po145・147）も出土している。

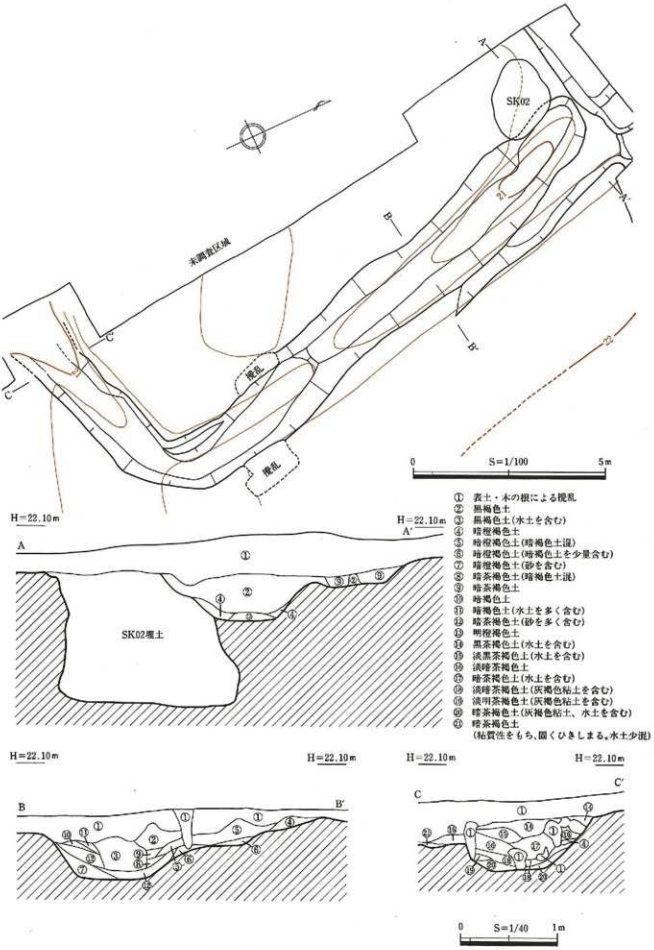
時　期　ＳＤ01はＳＫ02を切って掘り込まれていることが確認されていることから、時期は弥生時代後期後半以降のものであると思われる。

ＳＤ04（挿図20）

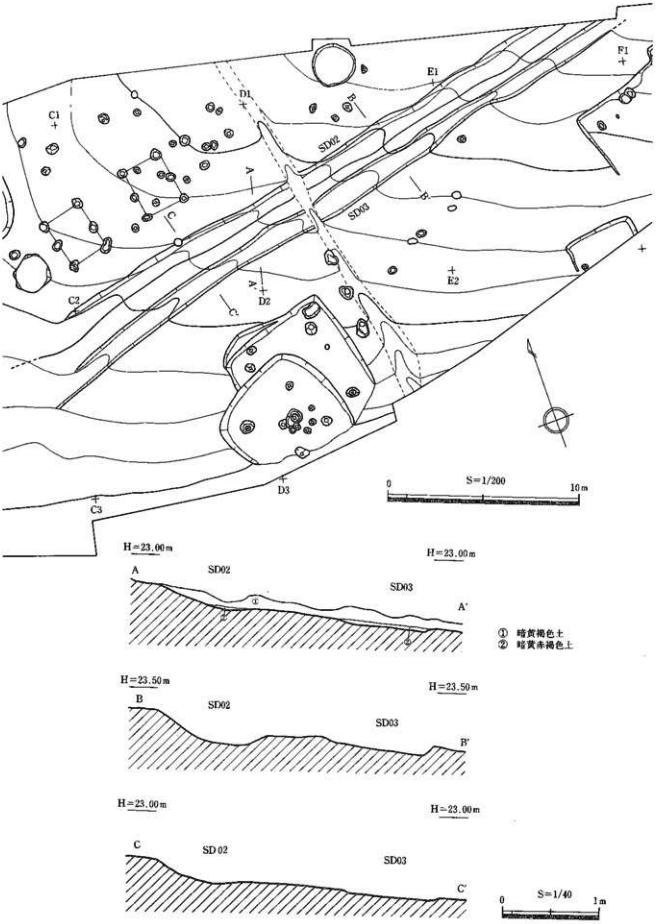
調査区の東端、Ｇ１坑付近、標高24m付近に位置する。溝は尾根に直交する方向に延びている。検出時は土坑として掘り始めたが、地山と考えていた土層から土器片が出土したため、精査した結果、溝状遺構であることが判った。規模は長さ3.3m以上、幅は1.3m、深さは0.3mであった。用途、時期は不明であるが調査区外に延び出している。



挿図20　南谷ヒジリ遺跡SD04遺構図



挿図21　南谷ヒジリ遺跡SD01遺構図



挿図22　南谷ヒジリ遺跡SD02・SD03遺構図

ＳＤ02・03（挿図22・102、図版９・45）

位　置　調査区中央、Ｃ３グリッド（Ｃ２杭付近）からＥ２グリッド（Ｅ１杭付近）に向かって東西に直線的に延びる溝である。標高21.25mから23.50m付近で尾根の肩辺りに位置する。畑地の耕作土を20cmから30cm程除去した後に、風化した礫をふくむ赤褐色ローム層上面で砂を含む暗黄赤褐色土の落ち込みを検出した。

形　態　尾根を段状に削り込み（最大で30cm）赤褐色ローム層をほぼフラットに整形し、その面に２条の溝の痕跡が残っていた。２条共に平行して走り、東端の方で浅くなっている。「天保14年河村郡南谷村田畑地続全図」を参照すると[4]、当時の畑地の境界線が本遺構の検出状況と非常によく似ていることから、耕作に関係するものであった可能性が考えられる。なお、最近の地籍図にはこの方向の境界線はない。ＳＤ02は幅0.8m、長さ30m以上、ＳＤ03は幅１m、長さ34m以上の規模があった。

遺　物　遺物は近世以降の磁器が出土している。

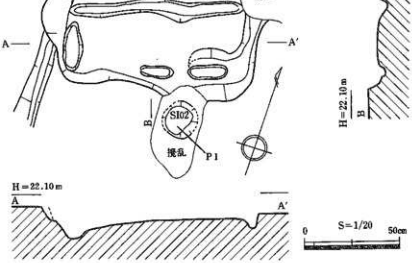
時　期　時期は江戸時代頃であると思われる。

5　その他の遺構

ＳＸ01（挿図23、図版８）

位　置　調査区の北西隅、標高22.0m辺り、ＳＩ02の北壁を切って掘り込まれる。ＳＩ02検出時に、

形　態　住居の掘り方の北西部に、板状の石片が灰色の粘土ブロックとともにバラバラと不規則に出土した。埋土に、水土がブロック状に入り、梨の耕作に伴う肥料穴にその埋土が近似していたため、当初は、ＳＩ02を切り込む攪乱坑と考えて調査を行い、一気に底面まで掘り下げた。掘り下げ中にも、板状の石片が不規則にバラバラと出土した。底面を精査したところ、四至に深さ約10cmの溝状の窪みを検出した。この溝を石棺の側板及び小口を立てるためのものと考え、石棺を用いた埋葬施設と考えた。平面は、南側の一部が攪乱を受けてはいるものの、やや胴張りの長方形であるものと思われる。断面は、逆台形状を呈する。その規模は上縁部で長軸1.15m×短軸0.68m、底面で長軸0.99m×短軸0.54mである。深さは最も残りの良い

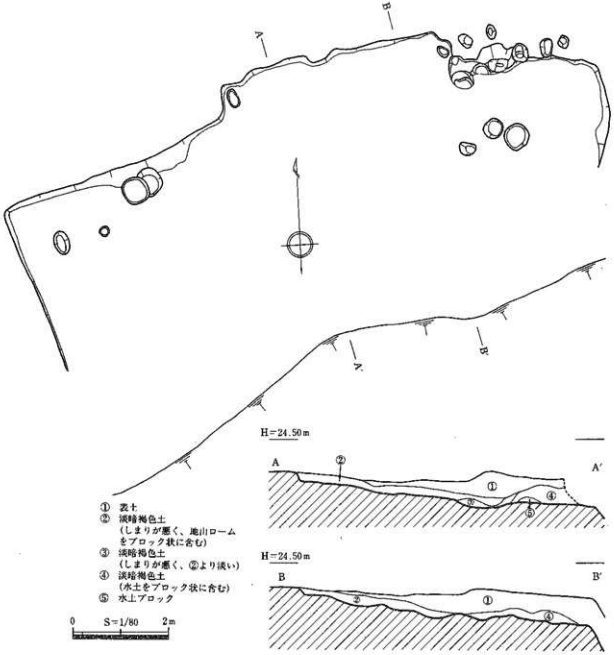


挿図23　南谷ヒジリ遺跡SX01遺構図

遺　物　ところで、0.15mである。遺物は石片以外全く出土しなかった。時期は、切り合い関係から、
時　期　ＳＩ02（古墳時代前期）より新しいものであるが、詳細は不明である。

ＳＳ01（挿図24）

位　置　調査区の北東隅、Ｅ２・Ｆ１・Ｆ２グリッド、標高23m～24mに位置する。検出時には、その平面形より切り合う３棟の方形竪穴住居を考え、縦横ベルトを設定して掘り下げた。その結果、切り合い関係はなかった。床面は起伏が激しく、柱穴になりうるピットも確認でき
形　態　なかったことから、竪穴住居とする根拠に乏しく、段状遺構としてあつかった。平面は凸形を呈する。床面は地形に従って、南側に傾斜する。その規模は、東西12.5mである。段の高さは、最も残りの良いところで、0.2mである。床面上及び段の外側に18個のピットを検出したが、いずれのピットも浅く、深さ10cm内外のものである。ピットの底面は平坦ではない。ピット内の埋土はしまりが悪く、②層が落ち込んでいた。
埋　土　遺構の埋土は、４層に分層できた。埋土のしまりは大変悪く、水土がブロック状に混入し



挿図24　南谷ヒジリ遺跡SS01遺構図

時　期　ていた。埋土中より近代の陶磁器片が出土したが、性格時期ともに不明である。

ピット群（挿図22）

調査区の北東側、標高22m～23m辺り、尾根頂部の平坦部と南側緩斜面に50個のピットを検出した。C２グリッドにほぼ収まる範囲にピットが集中している。その広がりは南北約15m、東西約12mである。P28～P33はＳＢ01の柱穴、P11～P13・P17～P18はＳＢ02の柱穴、P35～P40はＳＢ03の柱穴である。他のピットに規則性は見られなかった。各ピットの詳細に付いては、下のピット群一覧表の通りである。

ピット番号	規模（長径×短径－深さ）	備考
1	43×60－10	
2	30×25－30	
3	44×38(?)－9	
4	48×42－7	土器片
5	45×35－4	土器片
6	54×40－14	
7	40×29－11	土器片
8	47×42－11	
9	34×31－17	
10	33×23－22	
11	60×53－6	ＳＢ02　Ｐ１
12	49×44－14	ＳＢ02　Ｐ２
13	43×36－13	ＳＢ02　Ｐ３
14	37×32－6	
15	34×26－20	
16	36×32－22	
17	45×35－8	ＳＢ02　Ｐ６
18	45×41－15	ＳＢ02　Ｐ５

ピット番号	規模（長径×短径－深さ）	備考
19	49×46－12	ＳＢ02　Ｐ４
20	33×28－28	
21	33×30－9	
22	55×50－11	
23	38×28－10	
24	41×38－13	
25	53×47－13	
26	46×34－14	
27	41×39－28	
28	58×50－18	ＳＢ01　Ｐ１
29	46×41－15	ＳＢ01　Ｐ２
30	58×45－12	ＳＢ01　Ｐ３ 土器片
31	50×47－13	ＳＢ01　Ｐ６
32	50×41－15	ＳＢ01　Ｐ５
33	56×40－29	ＳＢ01　Ｐ４
34	50×48－30	
35	85×63－34	ＳＢ03　Ｐ１

ピット番号	規模（長径×短径－深さ）	備考
36	73×56－21	ＳＢ03　Ｐ２
37	93×48－40	ＳＢ03　Ｐ３
38	59×42－30	ＳＢ03　Ｐ４ 須恵器・土師器石
39	80×50－28	ＳＢ03　Ｐ５
40	59×－－26	ＳＢ03　Ｐ６
41	33×27－9	
42	40×32－8	
43	40×32－8	
44	39×28－11	
45	42×42－11	
46	41×40－8	
47	42×32－15	
48	42×30－11	
49	54×42－20	
50	42×30－11	

挿表１　南谷ヒジリ遺跡ピット群一覧表

遺構名	形態	規模	床面積（㎡）	残存壁高（m）	主柱穴（本）	遺物	時期	備考
ＳＩ01	方形（推定）	3.5×1.4以上	6.9（残存）	0.33	2（推定）	高坏	古墳時代前期	
ＳＩ02	隅丸方形	3.7×5.4	30.8（復元）	0.48	4	壺・鉢・高坏・小型丸底壺・土玉・石錘・敲石	古墳時代前期	中央ピット、方形２段掘り 焼土…有、貼床…有
ＳＩ03	多角形（推定）	?	?	0.34	?	鉄鏃	弥生時代後期？	
ＳＩ04	方形	5.9×5.5（復元）	32.5（復元）	0.52	4	壺・壺・鉢・甕・長形器台・蓋石	弥生時代終末期	
ＳＩ05	隅丸方形	5.5×5.5（復元）	28.3（復元）	0.52	4	壺・壺・甕・高坏・長形器台・鉢・低脚坏・土玉・亀・鉄鏃	古墳時代前期	中央ピット、方形２段掘り 焼土…有、焼失住居

挿表２　南谷ヒジリ遺跡竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	断面形	規模（m）①上端部②底面（長径×短径）	深さ	遺物	時期	備考
ＳＫ01	円形	袋状（推定）	① 2.08 × 2.08 ② 2.02 × 2.00	0.27	壺・蓋・器台・土玉・砥石	弥生時代後期後半	
ＳＫ02	楕円形	袋状	① 2.10 × 1.73 ② 2.10 × 1.98	1.41	壺・高坏	弥生時代後期後半	自然石有
ＳＫ03	楕円形	袋状	① 1.37 × 1.15 ② 1.53 × 1.41	0.54	壺・土玉	弥生時代後期後半	
ＳＫ04	楕円形	袋状	① 2.10 × 1.85 ② 2.10 × 2.00	0.97	壺	弥生時代後期後半	焼土・炭化物有

表３　南谷ヒジリ遺跡土坑一覧表

遺構名	間数（間）	規模（桁）（m）		規模（梁）（m）		長方形度	床面積（㎡）	主軸方向	遺物	時期
ＳＢ01	２×１	2.8	2.8	2.2	2.0	1.27	6.16	Ｎ－15°－Ｗ	須恵器高坏脚 土師器高台付坏	平安時代以降
ＳＢ02	２×１	2.7	2.7	2.2	2.1	1.23	5.94	Ｎ－10°－Ｗ	な　し	ＳＢ01と同時期か？
ＳＢ03	３×２(？)	6.5	——	4.2	——	1.55		Ｎ－82°－Ｅ	須恵器坏身、土師器	奈良－平安時代

挿表４　南谷ヒジリ遺跡掘立柱建物跡一覧表

第４章　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の調査

第１節　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の概要

位　置　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群は東郷池の北、橋津川最上流右岸で羽合平野に向かって、南西から北東に舌状に延びる尾根上（標高75～87m）に位置する。南谷古墳群全体は23基から成り、地形で分類すると、斜面裾部に位置し、横穴式石室を持つ14～17号墳と丘陵上に位置する古墳群とに大別される。このうち、後者は３群に分かれ、西から南谷ヒジリ遺跡が位置する低い丘陵上にある１～３号墳、高い丘陵上にある４～６・18号墳と７～13・19～23号墳である。今年調査した古墳は19～23号墳である。また、南谷古墳群全体は、橋津（馬ノ山）４号墳（全長100m　前方後円墳）のある橋津古墳群に隣接している。

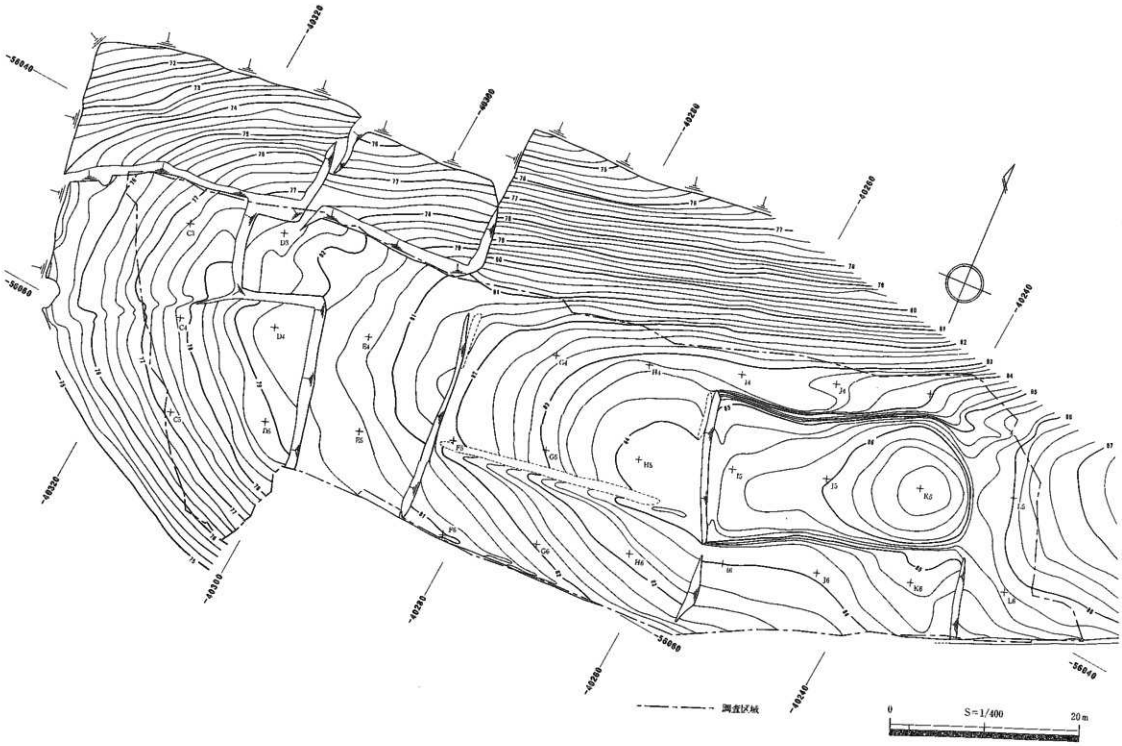
南谷夫婦塚　南谷夫婦塚遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡２棟、土坑９基、ピット群を検出した。竪穴住居跡には六角形（ＳＩ01）と方形（ＳＩ02）の２種類の形態があった。ＳＩ01には貼床が施されているだけでなく、垂木をかけたであろうテラスとピットも検出されている。

ＳＩ02にも貼床を施そうとしていた。遺物は弥生時代後期後半の甕や低脚坏等の土器、石皿や砥石等の石器が出土している。土坑には平面が方形（ＳＫ04）と円形または楕円形（ＳＫ05・06・08・09・11）、不定形（ＳＫ07・10・12）の３種類の形態があった。ＳＫ04は上面で弥生時代の甕類が出土し、土壙墓の可能性がある。他の土坑は弥生時代後期後半の甕が出土したものがあることから、この時期に竪穴住居跡と土坑が一斉につくられた可能性があり、人々の生活が盛んに行なわれていたことが想像される。ピット群は22号墳墳丘下と19号墳墳丘下から南側周溝へと広がりをもって検出された。以上のことから住居跡、土坑群、ピット群が南斜面へと広がっていくと思われる。

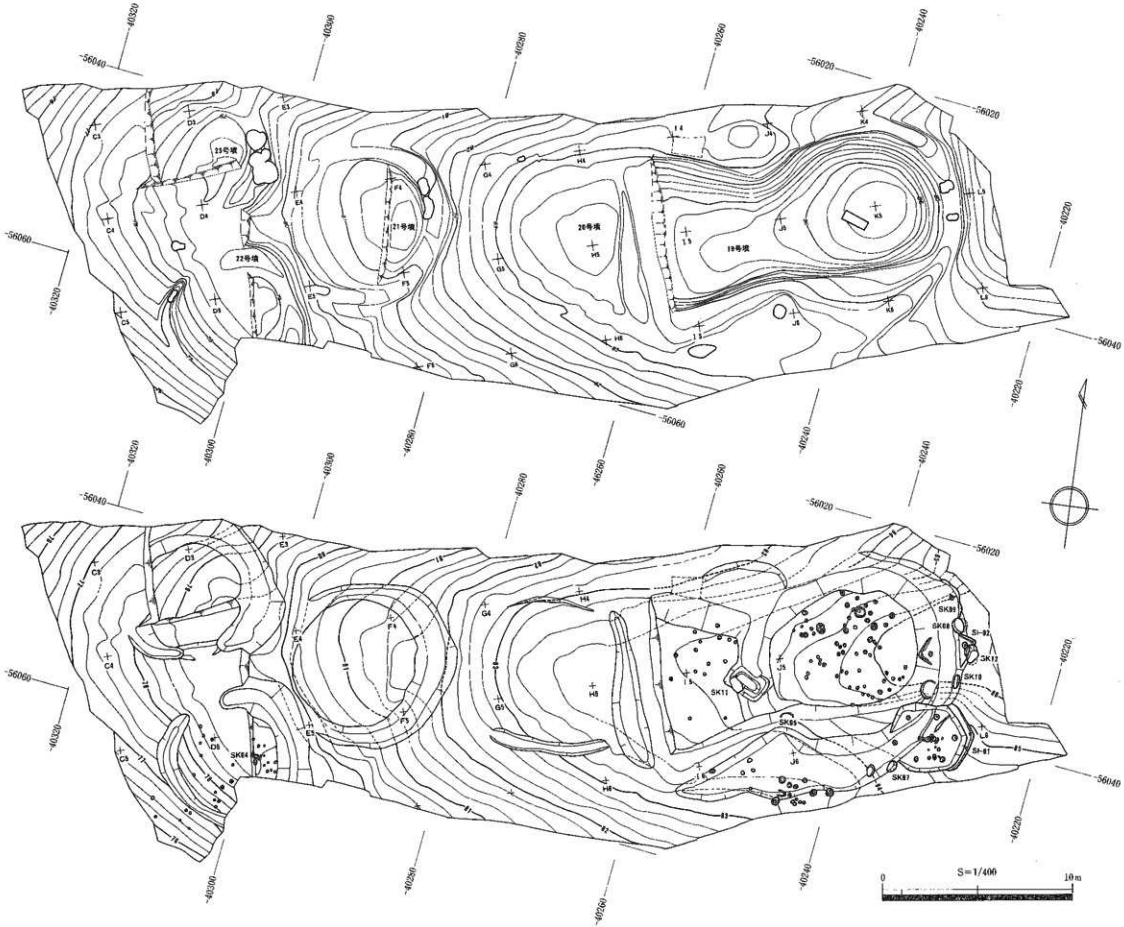
南谷古墳群　南谷古墳群調査では、新たに５基の古墳が確認され、東から南谷19・20・21・22・23号墳と命名した。南谷19号墳は南谷古墳群全体の中で、唯一の前方後円墳であることが判明し、墳丘は一部削平を受けているものの盛土が比較的よく残っていた。墳形から19号墳の被葬者は南谷古墳群の他の古墳の被葬者より地位が高かったことが窺われる。また、19・22・23号墳で盛土の断ち割りを行なった。19号墳の盛土断ち割りでは、前方後円墳築造過程の手順を解明するに必要な土層等の資料を得ることができた。さらに、くびれ部で後円部の円形を整えるために掘られた区画用と考えられる溝とこの溝の伸びの途中で２段に掘り込まれた盛土下の土壙を検出した。盛土下の土壙の用途を明確にするために脂肪酸分析を行なった結果、埋葬施設であることが確定した。その他、南谷20～23号墳は円墳であり、墳丘はいずれも開墾による削平がひどく、22・23号墳のごく一部に盛土が残る以外は周溝のみで検出した。また、盛土の除去によって、22・23号墳では地山が傾斜していることが判り、この尾根での築造可能となる範囲の端に築造されていたと考えられる。出土遺物や土層、周溝の検出状況、地山地形から築造順位を類推すると［②19号墳←①20号墳→③21号墳→④22号墳・23号墳］と図化できると考える。時期は６世紀前葉から末葉にかけてのものだと考えられる。

ＳＫ03は時期不明であるが、形態が方形で石材が多数発見されたことから石棺の可能性がある。

写真６　南谷19号墳調査前



挿図25　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群調査前地形測量図



挿図26　南谷古墳群(上図)・南谷夫婦塚遺跡(下図)遺構全体図

第２節　南谷夫婦塚遺跡の調査

１．竪穴住居跡

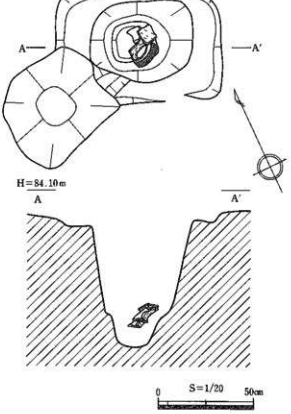
Ｓｉ01（挿図27・28・103・112・113・116・117、図版11・12・46・53・55）

位　置　調査区の南東端、Ｋ６・Ｋ７グリッドにあり、南側の緩やかな斜面に立地する。すぐ北にはＳＫ06とＳＫ10とがあり、５ｍ北方にはＳＩ02がある。すぐ南西にはＳＫ07がある。本住居跡の北側から南西側にかけて南谷19号墳の周溝が掘られており、住居跡が周溝に分断されている。また、西側の壁は後世の開墾によってかなり削られている。

形　態　平面は東西方向に長い６角形である。北側から東側の側壁にはテラスを有し、テラスは平面プランにそって掘られている。床面の規模は長軸は8.0mと推定され、短軸は6.3mを測る。床面積は、推定される部分も含めて38.5㎡位である。残存壁高はテラスも含めて北壁で最大1.11m（上縁～テラス0.47m、テラス～床面0.56m）である。また削平されている北西壁についても、19号墳墳丘下の旧表土面から推測すると、壁高は1.5m位あったと思われる。南側の床面には貼床がなされており、北側の床面は赤褐色ローム層に含まれる礫を除いて床面を整形している。

壁溝は幅６～20㎝、深さ３～７㎝で、断面はＵ字状である。検出した床面にはすべて壁溝があるが、全周するか否かは19号墳周溝に切られているため不明である。また床面北東隅からＰ７に向かって延びる、長さ2.5m、幅10～30㎝、深さ３㎝程の溝がある。またＰ８から西方向に延びると思われる深さ５㎝程の溝があるが、19号墳周溝に切られているため規模は不明である。

主柱穴は６個で、柱穴の規模はＰ１より順にＰ１（32×25－60）㎝、Ｐ２（55×46－64）㎝、Ｐ３（62×51－55）㎝、Ｐ４（56×44－73）㎝、Ｐ５（52×35－57）㎝、Ｐ６（41×32－43）㎝で、各柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間から順に3.0m、3.0m、2.7m、2.8m、2.9m、2.9mを測る。Ｐ６では19号墳周溝底で検出した落ち込みだが、位置からして本住居跡の柱穴と判断した。また床面中央にＰ８（56×48－70）㎝があるが、埋土も他の柱穴と同じであり柱穴として機能していた可能性がある。このＰ８から西に延びる溝中にＰ13（24×16－21）㎝がある。この他床面にはＰ９（18×18－10）㎝、Ｐ10（20×20－14）㎝がある。また、テラス部分にも斜めに掘り込まれたＰ11（19×14－20）㎝、Ｐ12（31×24－37）㎝を検出した。



挿図27　南谷夫婦塚遺跡SI01中央ピット内遺物出土状況図

中央ピット　Ｐ７が中央ピットである。二段掘りのピットで、まず床面には隅丸長方形状の深さ３㎝程の掘り方不明瞭な落ち込みがあり、その面から（58×42－70）㎝の落ち込みが検出された。埋土は他の柱穴等とほぼ同じであるが、下層には比較的多くの炭片が含まれていた。

焼　土　焼土は４箇所で検出され、それぞれ柱穴より20㎝～40㎝内側の位置にある。

土　層　埋土は大別すると２層で、上層から下層は黒褐色土系の層、最下層の暗黄褐色土（水土の濁ったような土）層である。⑦層まで掘り下げたところで６個の落ち込みを検出したが、いずれも本住居に伴わないピットであるため遺構図からは除外した（挿図26参照）。テラス部分の埋土は地山と区別のつきにくいもので、ところどころに赤褐色ロームが入っている。

柱穴の埋土は粘性をもった土でしまりも良い。Ｐ４の埋土内で石皿（Ｓ23）が出土している。その出土状況からして、柱が引き抜かれた後に埋められたと思われる。

遺　物　床面で甕（Po150～153）、蓋（Po160）、手づくね土器（Po161）が出土しており、また側壁付近の床面では、砥石（Ｓ19～21）と石皿（Ｓ22）が出土している。砥石はいずれも良く使い込まれており、石皿は自然面を利用したものである。刀子と思われるＦ７も床面直上で出土している。この他、Ｐ３中で甕（Po155）、Ｐ７中で甕（Po154、155）が出土している。Po155は口縁のみが完形で残っており、故意に埋められたものと思われる。Po154はその下で出土しており、Ｐ４の北西隅埋土上層で出土した土器と接合している。Ｐ４中で出土した石皿（Ｓ23）は両面に敲打痕がある。この他、埋土内の⑦層で甕（Po157～159）が出土しており、Ｓ18、Ｆ８は埋土最上層で出土している。また埋土には多数の小石（図版55）が含まれていた。

時　期　床面出土の甕などから弥生時代後期後半の竪穴住居跡と考えられる。

ＳＩ02（挿図29・103、図版12・46）

位　置　調査区の東端、Ｋ５・Ｋ６グリッドにあり、標高86m付近の尾根の稜線上に立地する。南谷19号墳完掘後、周溝壁面で検出された遺構である。すぐ北にはＳＫ08が、南にはＳＫ06とＳＫ10があり、５m離れた南にはＳＩ01がある。また、東側でＳＫ12と複合しており、本住居跡の方が新しい。本来はＳＫ08・ＳＫ10とも複合していたと思われるが、南谷19号墳の周溝によって遺構の半分以上を掘削されているため不明である。

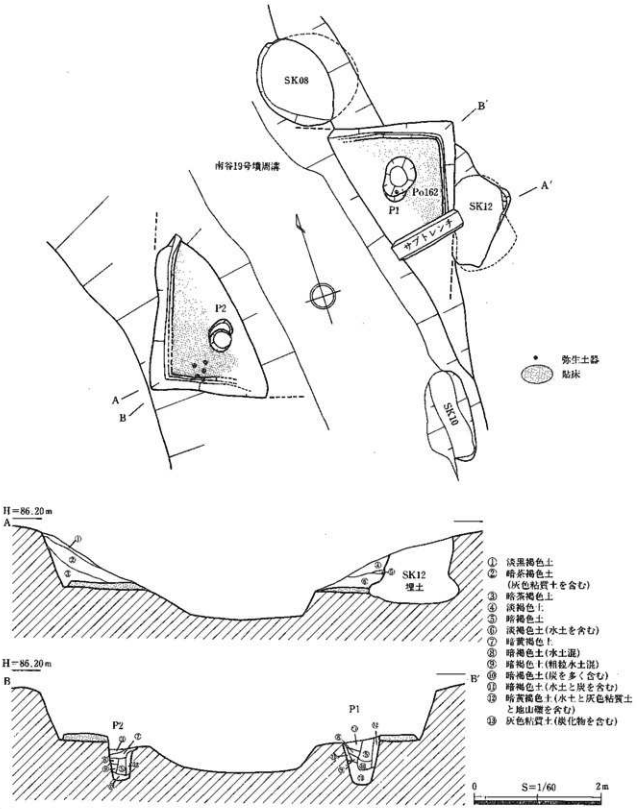
形　態　平面は方形である。推定される規模は床面で長軸4.2m×短軸3.8mで、床面積は16㎡位と思われる。床面全面に貼床がなされていたようである。東側の貼床がしっかりとしているのに比べて、西側の貼床はしまりが悪く、遺存状態も良くない。残存壁高は東壁で最大0.78mを測る。壁溝は幅８～14㎝、深さ８～10㎝で、断面はＵ字状を呈す。床面が一部しか残っていないため、全周するか否かは不明である。主柱穴は２個検出したが、本来は４個あったものと思われる。各柱穴の規模はＰ１（72×47－79）㎝、Ｐ２（52×35－54）㎝である。

土　層　埋土のほとんどが19号墳築造時に掘削されているため、壁面付近にしか残っていない。いずれも水土と区別のつきにくい土であった。柱穴内の埋土⑬層は貼床と酷似した土であり、柱穴に柱を立てた後の埋土にも粘質土を詰めたものと思われる。

遺　物　埋土内の遺物は極めて少なく、土器片と小石が少量出土した程度である。西側床面と壁溝内から甕の胴部片が、Ｐ１から甕（Po162）が出土している。しかしながら、この付近の19号墳の周溝斜面壁を精査中に弥生土器片が出土しており、これらの遺物はＳＩ02のものであった可能性が強い。

時　期　Ｐ１出土の甕から判断して、弥生時代後期後半の竪穴住居跡と考えられる。

挿図28　南谷夫婦塚遺跡SI01遺構図



挿図29　南谷夫婦塚遺跡SI02遺構図

2．土坑

ＳＫ03（挿図30、図版13）

位　置　尾根の西斜面、Ｃ５グリッドに位置し、南３ｍに南谷22号墳、北３ｍに南谷23号墳がある。掘り方の西側と底面の南側が後世の掘り込みによって攪乱を受けているが、残存部分より平面は長方形を呈していたものと思われる。断面は逆台形を呈していたものと推定される。その規模は、上縁部で長軸0.73m以上×短軸0.61m、底面で長軸0.56m以上×短軸0.55mである。深さは最も残りのよいところで、0.38mである。主軸方向はＮ－79°－Ｅである。

遺　物　南側攪乱部分には、板状の石片が投げ込まれたような状態で出土した。

時　期　22号墳もしくは23号墳に伴う墳丘外の埋葬施設とも考えられるが、遺物も全く出土せず、詳細は不明である。時期は不明である。

ＳＫ04（挿図31・104、図版13・47）

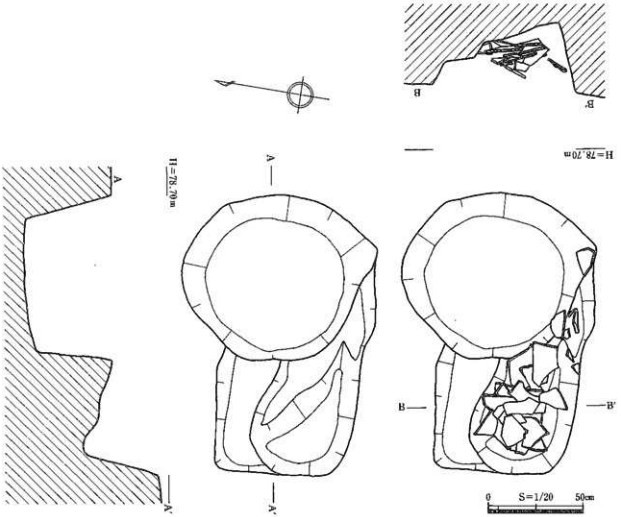
位　置　調査区の西側、Ｄ６グリッド、標高79.5m辺りで尾根の傾斜が変換する辺りに位置する。

形　態　南谷22号墳の盛土除去後に小さな炭化物を含む灰褐色ローム上面で、炭化物を多く含む黒灰色土と共に土器がまとまって出土したことから遺構の検出に努めた。しかし、灰褐色ローム上面では、遺構の輪郭を明確にすることができず、灰褐色ロームを約10cmほど削ったところで遺構の輪郭を明瞭につかむことができたが、掘り方の南東部については、全貌を明らかにすることはできなかった。また、掘り方の西側は後世の削平によって削り取られているが、平面は隅丸長方形の２段掘りであると考えられる。断面は、１段目・２段目とも逆台形を呈するものと思われる。その規模は、上縁部で長軸推定1.10m×短軸推定0.56m、２段目で長軸0.79m×短軸推定0.36m、底面で長軸0.72m×短軸0.23mである。深さは、最も残りの良いところで、上縁部より0.18mである。主軸方向はＮ－５°－Ｗでほぼ南北方向である。

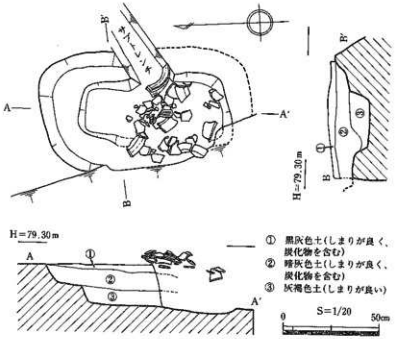
埋　土　埋土は、①層に多くの炭化物と土器を含み、②層にも少量ではあるが炭化物を含んでいた。埋土の堆積状況は、東西断面で②層が壁際でＵ字状に落ち込む他は、ほぼ水平に堆積していた事から、自然に土坑内に土砂が流入したのではなく、人為的に埋められたものであると思われる。

遺　物　出土遺物は甕のみでPo163～Po168である。土器は土坑の南側に向かってその出土レベルをわずかに下げる。Po163は肩部以下を欠き、口縁を下に向けて置かれたような状態で出土した。他の土器は、破片が横臥状態で出土した。復元の結果、完形品になったものはなかった。後の南谷22号墳の築造時に、土坑上面が削平されたことも考えられるので、土器の出土状況からは、当時の土器の置かれた状況ははっきりとしないのであるが、埋土の状況及び土器の出土状況から土坑が埋められた後に、土坑上に土器が置かれたものであると思われる。炭化物があったことについては、土坑上で火を用いたためか、他の場所で火を燃やした後に炭化物のみ運んで来たためか判断しかねるが、①②層に焼土等が検出されなかったことを考えると、後者の場合である可能性が高い。

時　期　出土した甕から弥生時代後期後半の土坑であると思われる。



挿図30　南谷夫婦塚遺跡SK03遺構図



挿図31　南谷夫婦塚遺跡SK04遺構図

ＳＫ05（挿図32・104、図版14・47）

位　置　南谷19号墳の南側のくびれ部付近にあり、東10mにＳＩ01、北西５mにＳＫ11がある。南谷19号墳墳丘が後世の開墾によって掘削されると共に、ＳＫ05もその大半が掘削されている。また、動物による攪乱も受けており、遺存状態は良くない。

形　態　底面は楕円形と推定され、断面は残存する北側から判断すると袋状であったと考えられる。

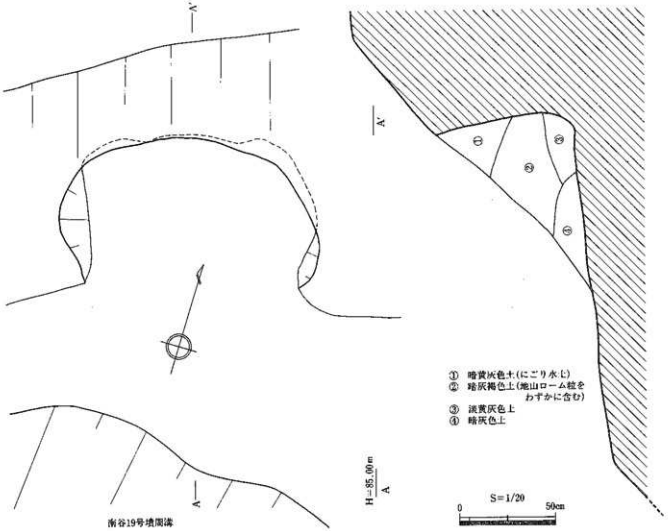
残存する範囲で指定される規模は上縁の長軸が1.4m、短軸が0.8m以上で、底面の長軸は1.2m、短軸は0.9m以上である。深さは北側の最も残りの良い所で0.78mを測るが、19号墳墳丘下の旧表土面から判断すると、1.2m程度の深さがあったものと思われる。

主軸はＮ－78°－Ｅである。

埋　土　埋土は水土が濁って灰褐色がかったもので、地山との区別がつきにくく、全体的にしまりが良くない。

遺　物　埋土内から甕（Po169・170・171）と蓋（Po172）が、底面から浮いた状態で出土している。この他、長さ３㎝、径１㎝程の小石（図版55参照）が出土している。

時　期　埋土内で出土した甕から判断すると、弥生時代後期後半の貯蔵穴跡と考えられる。



挿図32　南谷夫婦塚遺跡SK05遺構図

ＳＫ06（挿図33、図版14）

位　置　Ｋ６グリッドの中央にあり、南谷19号墳南東区墳丘斜面で検出された貯蔵穴跡である。すぐ南にＳＩ01、すぐ北にＳＩ02があり、１m北東にはＳＫ10がある。19号墳築造時に遺構の東側が破壊され、上縁部も墳丘斜面に沿って削りとられているため、遺構の遺存状態は良くない。

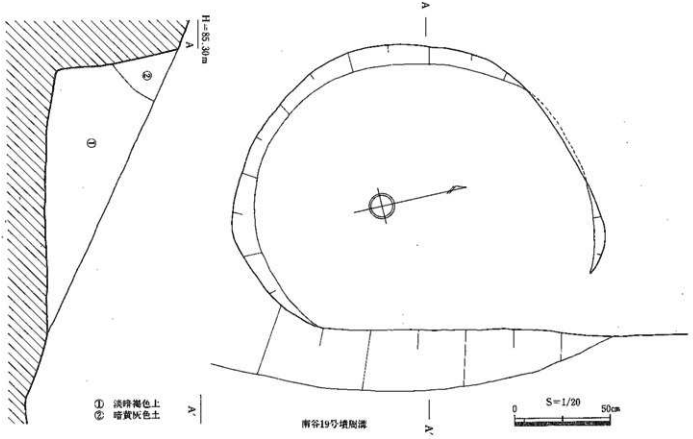
形　態　上縁部の平面、底面いずれもややいびつながらほぼ円形を呈す。断面は遺構の遺存状態が悪く、壁面が崩落した痕跡もあるので断定はできないが、本来は袋状であったと思われる。

残存する規模は上縁で長軸1.93m、短軸1.60m以上、底面で長軸1.78m、短軸1.45m以上である。深さは最も残りの良い北西側で0.66mを測るが、19号墳墳丘下の旧表土面から推測すると本来は1.5m以上の深さがあったと思われる。

埋　土　埋土は水土が濁ったような土で、地山との区別がつきにくいものである。②層は壁面水土が崩落したものと思われる。

遺　物　埋土内より土器片が出土しているが図化できるものはなかった。他に様々の形の小石が多数出土している。

時　期　時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土がＳＫ08のそれと酷似していることから弥生時代の貯蔵穴跡と思われる。



挿図33　南谷夫婦塚遺跡SK06遺構図

ＳＫ07（挿図34、図版14）

位　置　Ｋ６杭から南に2.5mのところにあり、南西方向に緩やかに下る斜面に立地する。ＳＩ01のすぐ南東に位置し、南谷19号墳の南側周溝の斜面で検出した土坑である。19号墳築造時にほとんど破壊されており、残存するのは東側の底面付近だけである。

形　態　平面、規模ともに不明である。深さは最も残りの良い南東隅で0.48mを測る。

埋　土　埋土は水土が褐灰色に濁った土であり、他の土坑と同様に地山との区別がつきにくい土である。

遺　物　全く出土していない。

時　期　不明である。

ＳＫ08（挿図35、図版15）

位　置　調査区最東端、Ｋ４グリッドのＬ５杭西側、標高85m付近で尾根の中央に位置し、南側にＳＩ02がある。南谷19号墳後円部の北東区周溝検出中に、周溝東壁の赤褐色ローム層で茶褐色土の楕円形の落ち込みを検出した。南谷19号墳調査終了後に、南北方向に軸を設定し西側から半截して掘り下げ、土層実測後に南東区も掘り下げて東西方向の堆積状況を確認した。

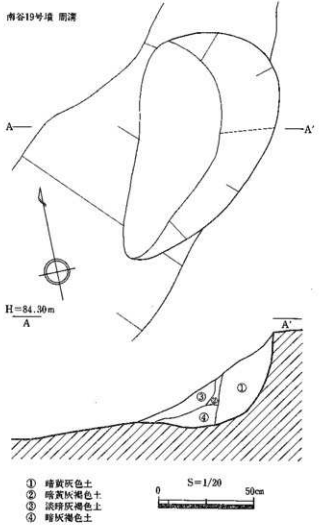
形　態　土坑の西側が南谷19号墳の周溝により削平を受けていたために上縁部の残存状態が悪いが完全に検出できた。底面の平面は円形であった。断面は上縁部から最大で45cm掘り込みの壁面が内湾することから袋状であったと考えられる。

規模は検出した上縁部の平面で長径1.53m×短径1.03m、底面で長径1.50m×短径1.30mであり、深さは0.95mであった。

土　層　ＳＫ08とＳＫ09が重複している状態が土層で観察できた。新旧関係はＳＫ08遺構埋土の④～⑦層をＳＫ09が掘り込んでいることからＳＫ08の方が時代が遡ると考えられる。⑥層は壁面の崩れであり、①層は壁面が迫り出したものであり、他は自然堆積であろうが、全面に堆積している④層は中央が盛り上がる様相を呈している。全体に柔らかい埋土であった。

遺　物　ほとんど遺物を包含しなかったが、弥生時代の甕胴部の土器片が出ている。また、埋土中に長径４cm程度の楕円形の小石が包含されていた。

時　期　時期は出土土器から弥生時代後期後半頃と考える。

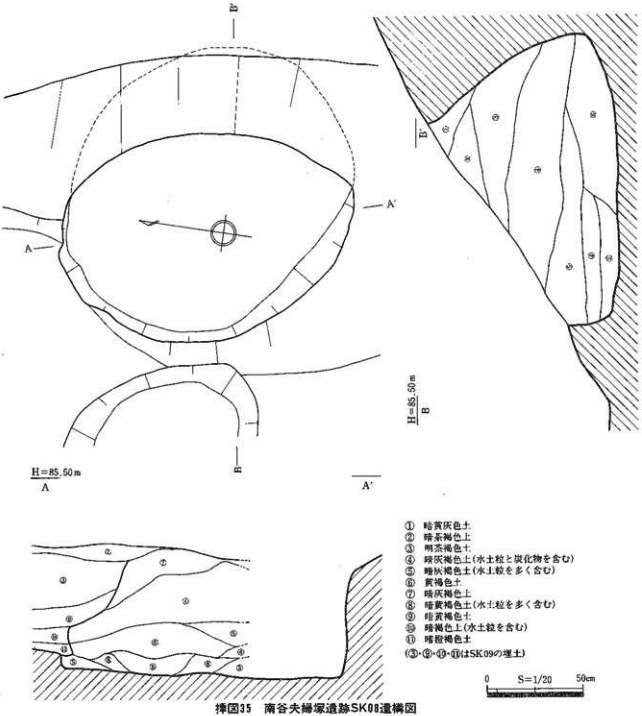


挿図34　南谷夫婦塚遺跡SK07遺構図

ＳＫ09（挿図37、図版15）

位　置　調査区最東端北東より、Ｋ４グリッド、標高85m付近で尾根の中央に位置する。南谷19号墳後円部の北東区検出中に周溝東壁の赤褐色ローム層で茶褐色土の規模の大きい楕円形の落ち込みを検出した。南谷19号墳調査終了後に、東西方向に軸を設定して北側から半截して掘り下げた。ＳＫ08の北側に隣接している。

形　態　土坑の西側が周溝の壁面にかかり、削平を受けていたために、上縁部、底面ともに残存状態が悪かった。墳丘側の周溝の肩部への広がりを考え精査を行ったが、検出できなかった。従って、平面は長楕円形と考えられる。また、断面は上縁部から底面の間がわずかに内湾し、



挿図35　南谷夫婦塚遺跡SK08遺構図

袋状であると考えられる。さらに、底面の中央部やや東側と思われるところでピットを検出した。

規模は残存部分で南北方向の径が上縁部で4.5m、深さが0.95mであった。ピットの規模は長径40cm×短径30cm、深さ10cmであった。

土　層　ＳＫ08よりＳＫ09の方が新しかった。①～⑦層までは締りが悪く、⑥⑦層には炭化物が含まれていた。よく締まった⑧層上面を底面と考え検出したところ、底面と思われていた検出面が平坦にならず、盛り上がる様相を呈したので、サブトレンチを入れて⑧層以下の層位を確認した。その結果、土坑の立ち上がりにかかる⑪層が⑧層の下に潜り込んでいく状況が確認できたので、さらに、⑧～⑩層を地山の崩れと判断して掘り下げた。その下からピットを検出した。

遺　物　ほとんど遺物を包含していなかったが、⑦層付近の埋土から弥生時代の波状紋の施された甕胴部の土器片が出土した。また、19号墳の周溝掘り下げ中に、土坑の検出面付近で弥生時代後期後半の甕の口縁（Po187）が出土した。

時　期　時期はPo187から弥生時代後期後半と考える。

ＳＫ10（挿図36、図版16）

位　置　調査区最東端南東より、Ｋ５グリッド、標高85m付近、尾根の中央辺りに位置する。北側にＳＩ02がある。南谷19号墳後円部の北西区周溝検出中に、周溝東壁の赤褐色ローム層で、茶褐色土の楕円形の落ち込みを検出した。南谷19号墳調査終了後に軸を設定して南側から半截して掘り下げた。

形　態　土坑の西側が周溝の壁面にかかり、かなりの削平を受けているため、上縁部、底面ともに残存状態が非常に悪い。平面、断面ともに形態は不明である。

規模は残存部分で南北方向の径が1.43m、深さが0.39mであった。

土　層　遺構埋土は茶褐色土１層であった。

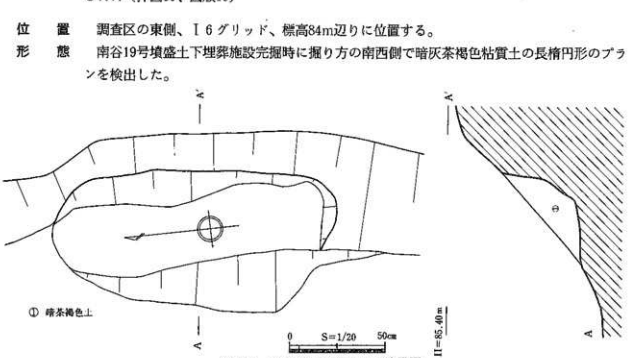
遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　時期は不明である。

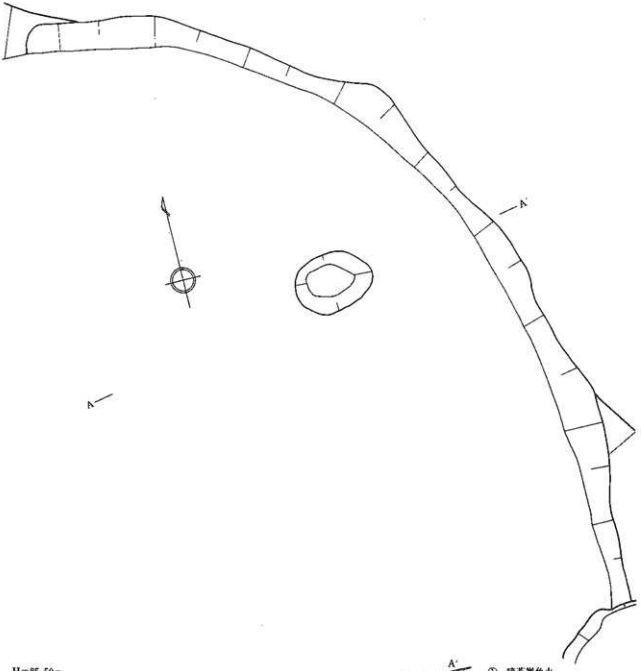
ＳＫ11（挿図39、図版16）

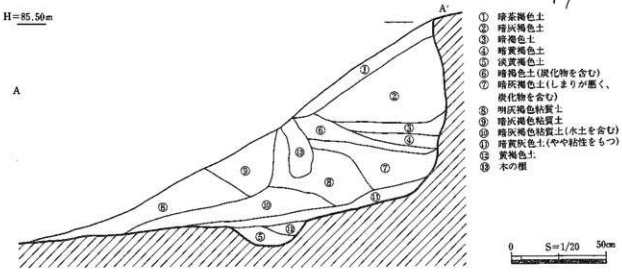
位　置　調査区の東側、Ｉ６グリッド、標高84m辺りに位置する。

形　態　南谷19号墳盛土下埋葬施設完掘時に掘り方の南西側で暗灰茶褐色粘質土の長楕円形のプランを検出した。



挿図36　南谷夫婦塚遺跡SK10遺構図





挿図37　南谷夫婦塚遺跡SK09遺構図

ＳＫ11は盛土下埋葬施設によって掘り方の北東側を切られる。底面は長楕円形である。断面は袋状を呈する。その規模は、上縁部で長軸1.85m×短軸1.00m以上、底面で長軸2.05m×短軸0.96mである。深さは最も残りの良い南東辺で0.95mである。

埋　土　埋土は12層に分層できた。12層の内①②⑨層を除いた９層はよくしまり、粘性をもっていた。埋土の堆積状況も水平であったことから、自然に流入した土とは考えにくく、人為的に埋められたものであると考えられる。⑪層は炭化物を含み、叩きしめられたようによくしまり、竪穴住居跡の貼床を思わせた。

遺　物　埋土中で径約３㎝の自然石が出土したほかはまったく遺物は出土しなかった。

時　期　時期は不明である。

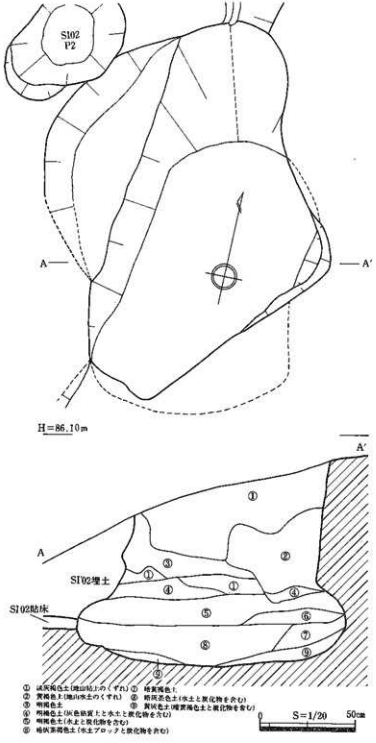
ＳＫ12（挿図38、図版16）

位　置　調査区東端にあって、Ｌ５杭から南に1.5mのところにある。調査区内で最も標高の高い尾根の稜線上に立地する貯蔵穴跡である。北西にはＳＫ08、南西にはＳＫ10がある。土坑の西側がＳＩ02（弥生時代後期後半）と重複しており、本土坑の方が古い。西側の掘り方はＳＩ02の貼床除去後に検出した。また南側の一部が動物による攪乱を受けている。

形　態　平面形は不明であるが、底面は楕円形と思われる。断面は、壁面が崩れて乱れているものの、袋状であったと思われる。

規模は上縁については不明であるが、底面は長軸1.45m、短軸0.85mである。深さは最も残りの良い東側で1.05mを測る。底面の主軸はＮ－７°－Ｗを示す。

埋　土　上層の埋土①層は粘性を失った赤褐色ロームで、地山との識別が困難であったため、上面での検出はできなかった。④層以下

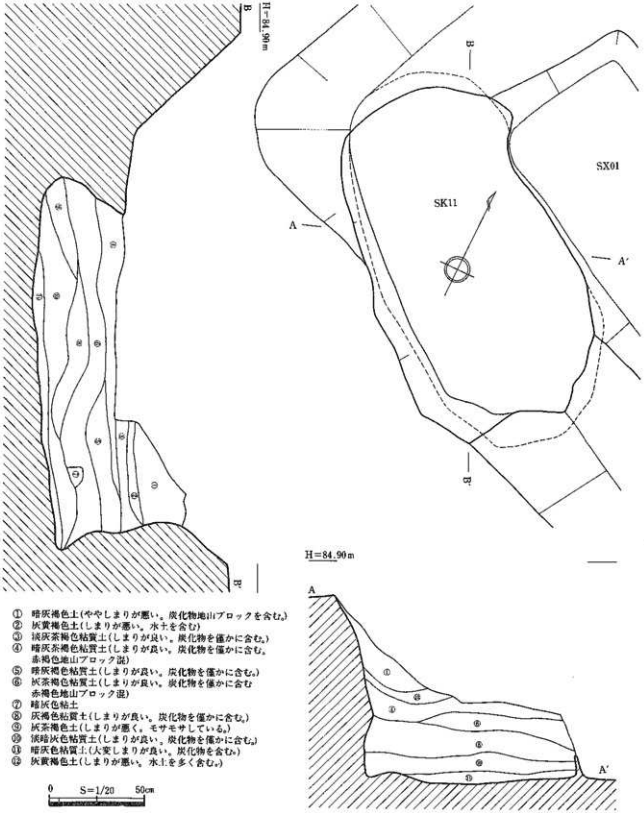


挿図38　南谷夫婦塚遺跡SK12遺構図

は炭化物を含む層であり、壁面付近には壁の崩落と思われる層がある。

遺　物　土器は全く出土していないが、他の土坑と同様に小石（図版55参照）が出土している。

時　期　Ｓ１02より古い遺構なので、弥生時代後期後半か、もしくはそれ以前の貯蔵穴跡と考える。



挿図39　南谷夫婦塚遺跡SK11遺構図

3．ピット群

ピット群1（挿図40、図版17）

位　置　19号墳盛土及び黒色土除去後、墳丘下及び墳丘の東側でピット群を検出した。検出されたピットの総数は101個である。埋土は黒褐色土ないしは暗褐色土であった。ピットの配列に

遺　物　規則性は見いだされなかった。後円部墳丘下P９、P12、P19、P22、P43、P45、P49、P55で弥生土器片が出土したが、図化できなかった。墳丘東側、P86で甕の口縁部が出土し

時　期　た（Po173）。Po173からこのピット群は弥生時代後期後半の時期であると思われる。各ピットの詳細については、下表を参照されたい。

ピット群2（挿図41、図版17）

22号墳の墳丘下、及びその西側斜面C６グリッドで30個のピットを検出した。その配列に規則性は見られなかった。遺物は出土しなかった。22号墳の墳丘下で検出されたことから、ピット群１と同時期のものであると思われる。各ピットの詳細については下表を参照されたい。

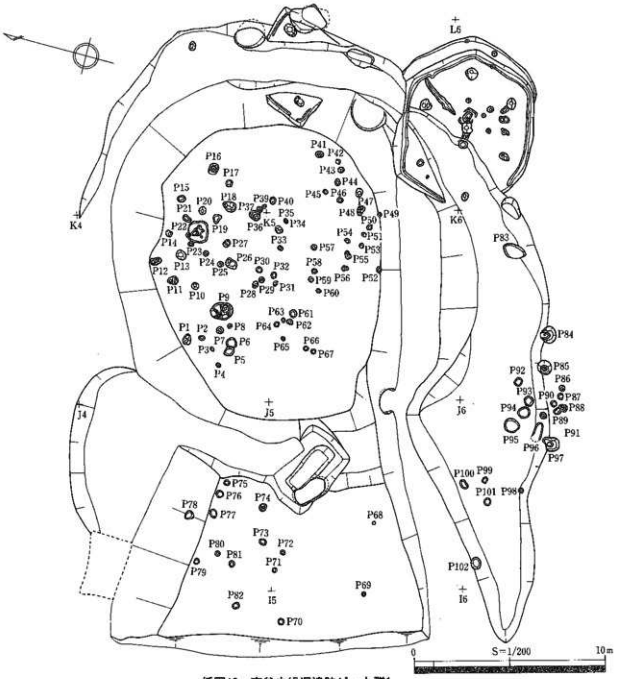
ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	備考
1	60×42－26.1	
2	30×26－30.7	
3	20×18－10.2	
4	22×20－10.0	
5	55×45－1.6	
6	56×48－4.6	
7	34×30－21.1	
8	38×23－19.7	
9	115×81－48.5	
10	35×30－23.4	
11	53×42－22.9	
12	56×32－41.7	
13	53×44－23.1	
14	34×30－34.0	
15	36×28－21.0	
16	55×50－35.1	
17	33×28－12.8	
18	70×53－38.5	
19	47×37－22.4	
20	40×35－38.3	
21	49×37－16.4	
22	124×100－27.8	
23	30×22－25.5	
24	25×23－5.8	
25	30×23－6.1	
26	64×43－31.9	
27	41×32－？	
28	33×30－23.3	
29	30×25－18.5	
30	32×31－13.9	
31	30×24－18.7	
32	32×27－30.0	
33	23×21－25.8	

ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	備考
34	44×33－38.5	
35	21×19－10.0	
36	58×44－38.2	
37	28×22－24.8	
38	——	木の根
39	24×20－11.4	
40	39×29－27.8	
41	42×30－40.5	
42	23×20－16.7	
43	30×25－29.1	
44	33×30－30.0	
45	26×18－23.3	
46	33×26－43.1	
47	43×32－39.0	
48	53×30－17.9	
49	23×17－26.3	
50	31×27－24.4	
51	25×20－14.3	
52	30×20－20.5	
53	27×25－13.7	
54	27×22－16.0	
55	44×24－27.2	
56	36×20－11.2	
57	27×21－20.4	
58	28×20－20.3	
59	24×22－24.5	
60	26×22－20.2	
61	38×33－12.1	
62	31×28－42.5	
63	25×19－11.7	
64	27×25－18.3	
65	20×20－15.4	
66	25×24－8.7	

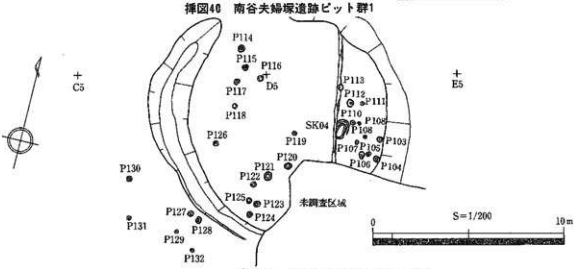
ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	備考
67	25×24－23.4	
68	14×14－5.3	
69	22×20－45.8	
70	31×27－9.1	
71	25×23－20.3	
72	24×22－17.4	
73	36×29－6.8	
74	39×35－16.5	
75	28×28－70.7	
76	41×37－5.6	
77	46×37－6.4	
78	46×42－29.9	
79	25×22－18.4	
80	24×22－21.7	
81	29×28－2.4	
82	34×30－13.2	
83	125×73－12.6	
84	77×77－42.3	
85	76×70－33.0	
86	29×25－23.5	
87	32×27－16.6	
88	46×32－46.8	
89	45×30－25.8	
90	34×30－10.9	
91	34×28－30.6	
92	46×36－3.8	
93	52×40－7.8	
94	59×56－13.0	
95	80×69－10.2	
96	40×？－8.2	
97	95×75－30.9	
98	23×23－30.0	
99	35×25－5.1	

ピット番号	規模（cm）（長径×短径－深さ）	備考
100	48×27－10.4	
101	36×35－7.5	
102	58×44－24.1	
103	27×24－18.4	
104	32×25－32.0	
105	23×19－12.4	
106	38×27－29.0	
107	21×16－24.7	
108	17×15－7.2	
109	13×13－8.3	
110	28×20－25.5	
111	16×15－5.9	
112	38×32 26.3	
113	29×21－20.0	
114	38×32－26.1	
115	29×24－29.4	
116	28×28－15.6	
117	27×24－22.0	
118	23×22－28.3	
119	19×17－13.3	
120	35×31－28.5	
121	52×49－16.5	
122	22×22－11.8	
123	31×27－35.0	
124	28×25－38.7	
125	26×24－25.6	
126	24×23－25.0	
127	28×27－39.3	
128	34×26－33.5	
129	19×18－10.8	
130	25×25－15.1	
131	20×18－12.9	
132	17×15－18.5	

挿表５　南谷夫婦塚遺跡ピット群１・２一覧表



挿図40　南谷夫婦塚遺跡ピット群1



挿図41　南谷夫婦塚遺跡ピット群2

第３節　南谷古墳群の調査

１．南谷19号墳（挿図42～52・105～107・113・114、図版18～24・47～49・53・54）

位　置　調査区の最も東側、標高85.5mから86.9mの地点に立地する。19号墳の東側約30mには調査区外に径18mを測る円墳と思われる南谷13号墳が、西には径14.5mを測る円墳である20号墳が接している。同丘陵平坦面の南北幅は約27mで、尾根幅一杯に築造されている。

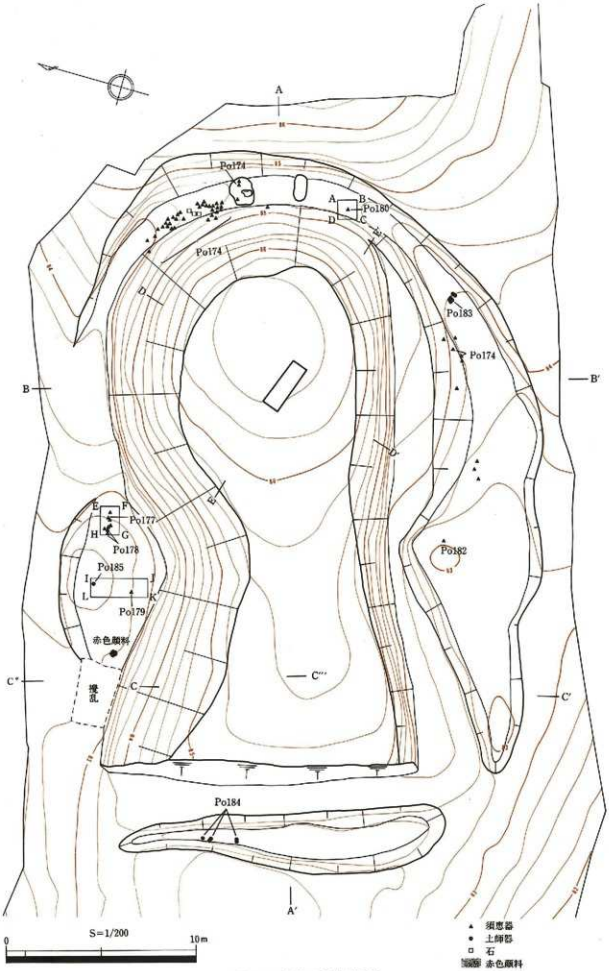
墳　丘　調査前の墳丘の規模は、全長29m、後円墳部径14.7m、前方部端部幅16.5m、高さは墳裾北側からの比高で２～2.9mを測る。現況は、後円部頂部が耕作により大きく削平されており、前方部にむかってわずかに傾斜しているがほぼ平坦になっていた。また、墳丘南側裾部及び前方部前面も耕作により大きくカットされ、墳裾がほぼ一直線になっていた。墳丘北側は、墳丘頂部を削平したときの盛土の一部が、くびれ部を中心にかき出されており、墳裾ラインは緩やかに内湾する程度であったが、19号墳は南谷古墳群中唯一の前方後円墳であることが判明した。

表土・耕作土及び墳丘くびれ部北側のかき出し土を除去したところ、墳丘北側は比較的遺存状態がよく、墳裾ラインがきれいに残っていた。墳丘南側及び前方部前面は、カットされてはいたが墳裾の遺存状態はよい。墳丘規模は、全長32m、後円部南北径18.8m、東西径19.2m、前方部長13.2m、端部幅20.5mを測る。くびれ部は大きく入り込み、幅12.2mを測る。後円部の高さは最も高いところで、南側周溝底から2.9m、前方部が西側周溝底から2.5mを測る。後円部頂部は削平されてはいるものの墳裾はよく残り、ほぼ円形が呈すが、北側に比べて南側のラインがやや大きく外側に張り出しており、墳丘南側を大きく見せようとした意識が認められる。前方部は前面が後円部径より109％大きく開き、また、長さは後円部径より短くなる。墳丘斜面には段築はされず、また、埴輪・葺石等の外表施設も認められない。墳丘から見ると後期古墳の様相を呈す。

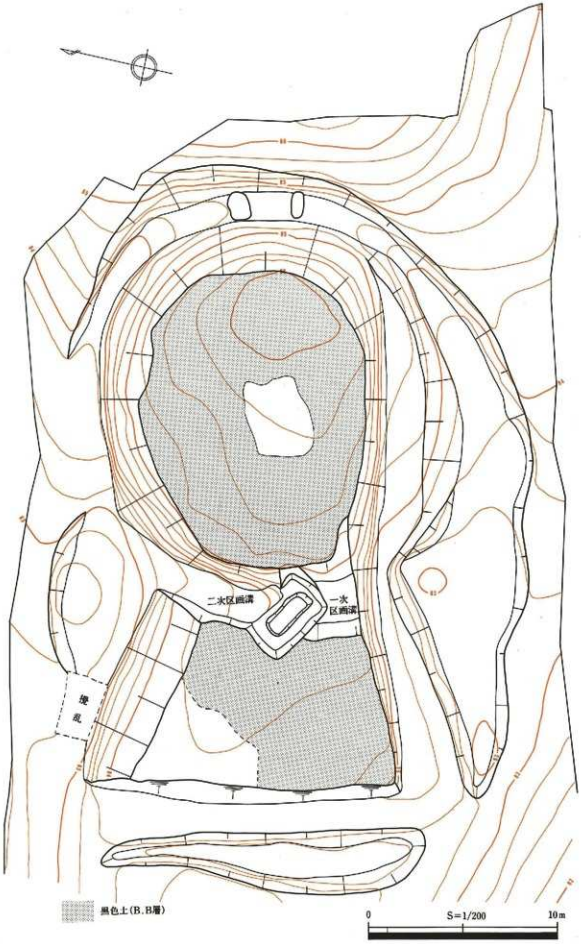
周　溝　周溝は、後円部東側の残りがよく、幅1.5～3.3m、深さは東側外縁部で1.3mを測り、断面逆台形状を呈す。南側は、耕作による削平が激しく、底部のみが遺存している。幅は最も広い所で6.6m、深さ0.4mを測り、断面U字状を呈す。前方部西側は、幅1.5～3.4m、深さ0.7mを測り、断面逆台形状を呈す。この部分で20号墳の周溝と重なるように見られるが、北側の幅を見ると南側に比べて狭く、また、わずかに20号墳側に曲がる状況が見られることから、19号墳前方部西側の周溝は、20号墳に制約されたものと思われる。北側周溝は、梨耕作による攪乱が著しく、部分的にしか残っていない。幅は5.5m、深さは0.3mを測り、断面はU字状を呈す。北側は地形制約のためか、南側に比べて幅が狭くなっている。周溝は遺存状態のよい東側・南側から判断すると、楕型の形態を呈すが、前方部両端でブリッジ状の掘り残しがあり、全周はしていない。墳丘同様南側の周溝が北側に比べて大きく、南を意識した様子が窺われる。

盛　土　墳丘は、地山の削り出しと盛土によって形成されている。地山は、東側から西側に向かって緩やかに傾斜しているがほぼ平坦で、墳丘基盤は、周溝底からの比高差が後円部で1.7～2.5m、前方部で1.7～1.8mを測る高さまで削り出している。盛土に先立っての地山整形はほとんどされておらず、旧表土（㊸層）が一面に残っている。しかし、後円部の中央部では、旧表土を長さ4.0m、幅3.2mの不整な長方形に剝ぎ取っているのが認められる。

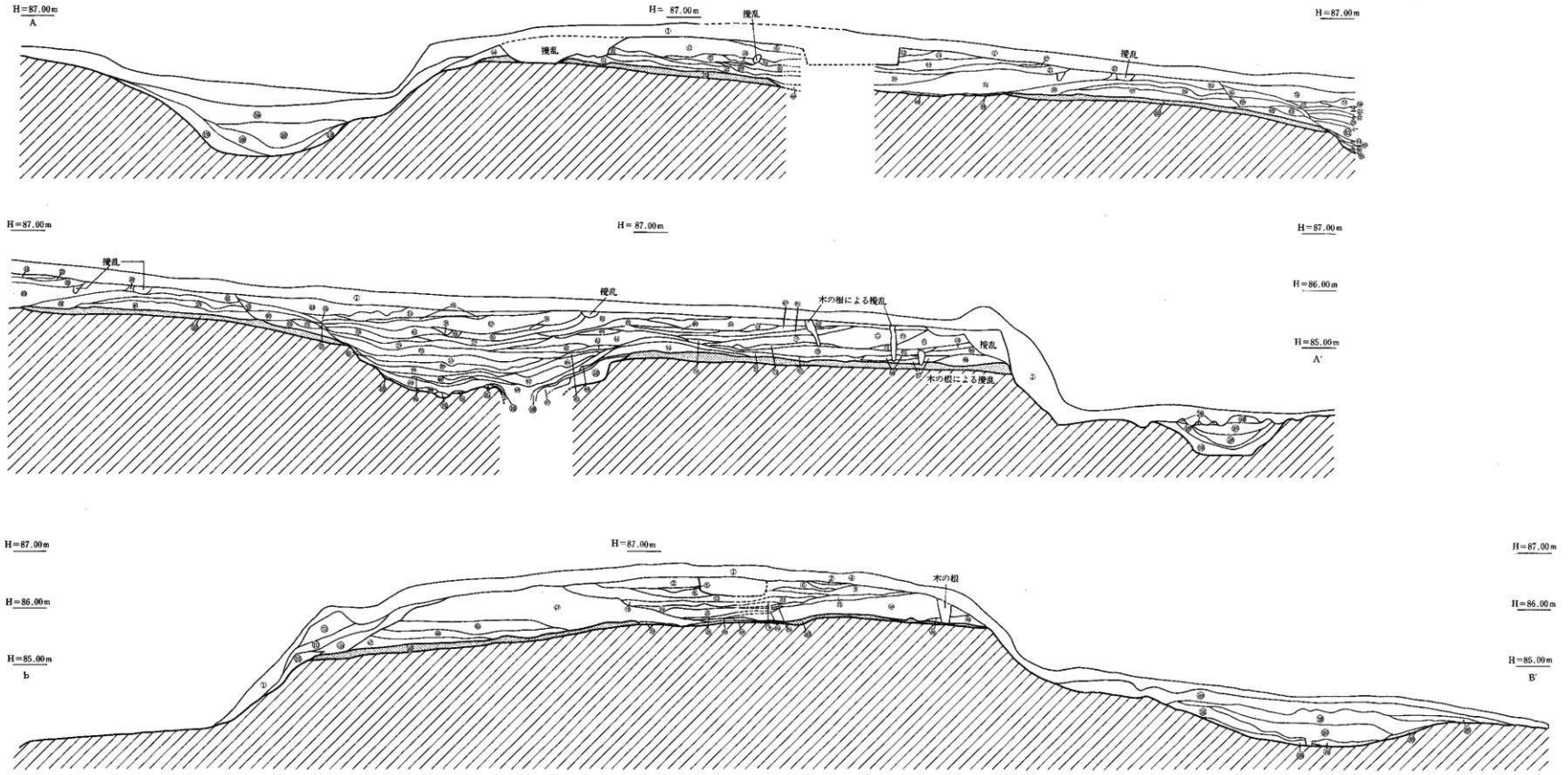
盛土は、最も厚いところで後円部、前方部とも80cm残っている。後円部の盛土の状況を見ると、墳丘斜面側を粘性の強い土（㊻・㊺・㊹・㊸・㊵層）で高くなるように盛っているが、



挿図42　南谷19号墳墳丘図

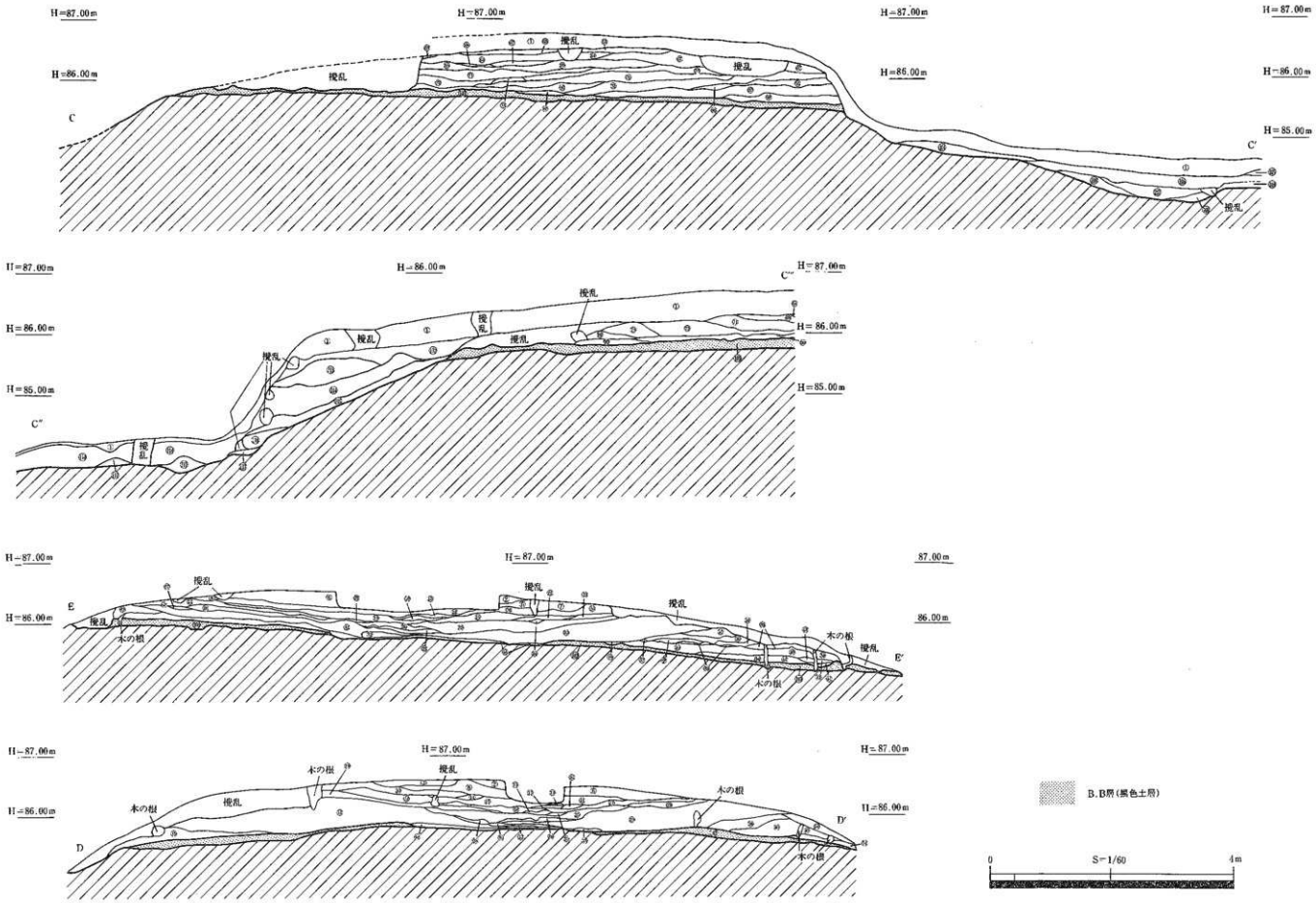


挿図43　南谷19号墳盛土除去後平面図



① 表土・耕作土
② 暗赤褐色土
(しまりがない)
③ 暗赤黄褐色土
(しまりがない)
④ 黒褐色粘質土
(地山ロームブロックを多量に含む)
⑤ 暗黄褐色土
(地山ロームブロックを多量に含む)
⑥ 淡黄赤褐色土(水土ブロックを多量に含む)
⑦ 暗褐色土
(しまりがない、水土ブロックを含む)
⑧ 暗赤灰褐色土
(しまりがない)
⑨ 暗赤灰褐色土(水土・黒色土ブロックを含む)
⑩ 黒褐色土
⑪ 暗赤黄灰褐色土
⑫ 暗赤灰褐色土(水土・地山ロームブロック、黒褐色土粒を含む)
⑬ 暗赤灰褐色土
(砂質よりやや暗い)
⑭ 褐赤灰褐色土
(水土・地山ロームブロックを多量に含む)
⑮ 褐赤灰褐色土
(水土粒を含む)
⑯ 暗黄灰褐色土
(水土・地山ロームブロックを多量に含む)
⑰ 暗黄灰褐色土
(地山ロームブロックを含む)
⑱ 淡赤灰褐色粘質土
⑲ 暗褐色土
(地山ロームブロックを多量に含む)
⑳ 暗黄灰褐色土
(水土ブロックを含む)
㉑ 暗褐灰褐色土
㉒ 暗赤灰褐色粘質土
(水土ブロックを多量に含む)
㉓ 暗赤灰褐色粘質土
㉔ 暗赤黄灰褐色粘質土
(粘性強い)
㉕ 暗赤黄灰褐色粘質土
㉖ 黒褐色土
(2～3cm大の地ロームブロックを含む)
㉗ 暗黄赤灰褐色土
(水土ブロックを多量に含む)
㉘ 暗赤黄灰褐色粘質土
(地山ロームブロックをわずかに含む)
㉙ 赤褐色粘質土
㉚ 黒褐色土(地山ロームブロックを含む)
㉛ 黒褐色土
㉜ 暗赤黄灰褐色土
㉝ 暗赤黄灰褐色粘質土
(赤褐色粘質土・水土ブロックを含む)
㉞ 暗赤褐色土
(しまりがない)
㉟ 暗赤褐色粘質土
㊱ 暗赤灰褐色粘質土
㊲ 黒褐色土
㊳ 暗黄灰褐色土
㊴ 黒褐色土
㊵ 暗赤灰褐色粘質土(3cm大の地山ロームブロックを多量に含む)
㊶ 赤褐色土(黒色土ブロックを多量に含む)
㊷ 黒灰褐色土(赤色粘質土ブロックをわずかに含む)
㊸ 暗赤灰褐色粘質土
㊹ 黒灰褐色土(赤色粘質土ブロックを含む)
㊺ 黒褐色土(しまりがなく、3cm大の地山ロームブロックを含む)
㊻ 暗赤黄褐色土
(3～10cm大の地山ロームブロックを含み、よくしまる)
㊼ 暗灰褐色土
(しまりがない)
㊽ 黒褐色粘質土(3～5cm大の地山ロームブロックを含む)
㊾ 淡暗灰黄褐色土(水土粒・黒色土細粒を含む)
㊿ 明黄褐色土(黒色土細粒を少量含む)
(51) 淡灰茶褐色土(黒色土粒をわずかに含む)
(52) 黒褐色土
(水土粒を多量に含む)
(53) 淡褐色土
(水土粒・黒色土細粒を含み、しまりがない)
(54) 赤褐色粘質土(水土を含む、よくしまる。)
(55) 淡茶褐色土
(地山ロームブロックをわずかに含む)
(56) 暗灰黄褐色土
(地山ロームブロック・水土ブロックを含む、ボロボロ。)
(57) 赤褐色粘質土(水土を含む、よくしまる。)
(58) 暗灰黄褐色土
(地山ロームブロック・水土ブロックを含む、ボロボロ。)
(59) 明黄褐色土
(地山ロームブロック・黒色土粒を含む)
(60) 赤褐色土(地山ロームブロックの層)
(61) 暗灰黄褐色土
(地山ロームブロック・水土ブロックを含む、ボロボロ。)
(62) 淡黄赤褐色土
(地山ロームブロック・水土ブロックを多量に含む)
(63) 淡黄茶褐色土
(水土粒を多量に含み、地山ロームブロックをわずかに含む。)
(64) 淡黄赤褐色土(水土がベース、しまりがない)
(65) 暗赤褐色土(地山ロームブロック・水土を含み、よくしまる)
(66) 淡黄茶褐色土
(水土を多量に含み、地山ロームブロックをわずかに含む。)
(67) 淡灰褐色土
(水土粒・ブロック、黒色土粒を含む)
(68) 呉褐色土
(69) 淡灰褐色土(水土粒・ブロック、地山ロームブロックを含む)
(70) 淡明黄褐色土
(地山ローム粒・ブロックを多量に含む)
(71) 暗黄赤褐色土(地山ローム粒・ブロックを多く含む、黒色土ブロックを含む)
(72) 淡暗黄赤灰色土
(73) 淡暗灰褐色土
(地山ロームをベースにして、水土と黒色土粒を含む)
(74) 淡褐色土
(水土ブロックを含む)
(75) 淡暗黄赤褐色土
(地山ローム粒・黒色土ブロックを含む)
(76) 淡明褐色土
(地山ロームブロックを多量に含む)
(77) 明黄褐色土
(地山ロームブロックを多量に含む)
(78) 淡明黄褐色土
(地山ロームブロックを多量に含む)
(79) 淡明黄褐色土
(地山ロームブロック・黒色粒を少量含む)
(80) 淡明黄褐色土
(地山ローム粒を含む)
(81) 淡明黄褐色土
(地山ロームブロックを多量に含む)
(82) 淡灰褐色土
(地山ローム粒・水土粒をわずかに含む)
(83) 淡灰褐色土(地山ローム・水土を含む)
(84) 淡灰褐色土
(地山ローム粒・ブロックを多量に含む)
(85) 明黄褐色土(地山ローム粒・ブロックを含む)
(86) 暗灰褐色土(黒色土ブロック・地山ロームブロックを含む)
(87) 明黄褐色土
(水土の均一な層)
(88) 淡暗灰褐色土(水土ブロック、地山ロームブロックを含む)
(89) 暗黄褐色土
(水土の均一な層)
(90) 淡暗灰褐色土
(水土ブロック・地山ロームブロック・黒色土ブロックを含む)
(91) 黒褐色土(地山ロームブロックを多量に含み、よくしまる)
(92) 淡灰赤褐色粘質土
(93) 暗灰赤褐色粘質土
(94) 暗黄褐色土(水土粒・黒色土粒を含む)
(95) 淡褐色土
(地山ロームブロックを含み、しまりがない)
(96) 黒褐色土
(地山ロームブロックを含み、よくしまる)
(97) 淡暗灰赤褐色粘質土
(黒色土粒を含み、脱色物を含みよくしまる)
(98) 黒褐色土
(地山ロームブロックを含み、よくしまる)
(99) 黒色土
(100) 暗褐色砂質土
(しまりがない)
(101) 暗灰褐色砂質土
(102) 暗黄褐色土
(地山ロームブロックを含み、しまりがない)
(103) 黒色土(B・B層)
(104) 淡暗褐色土
(105) 淡赤褐色土
(106) 暗黄褐色土(盛土)
(107) 黒褐色土
(108) 暗灰褐色土
(109) 淡灰褐色土
(110) 暗黄赤褐色土
(111) 淡明褐色土
(112) 暗褐色土
(113) 暗黄褐色土(地山ロームブロックを含む)
(114) 暗灰褐色土
(115) 黒褐色土
(116) 暗黄灰褐色土
(117) 黄褐色土

挿図44　南谷18号墳土層断面図(1)

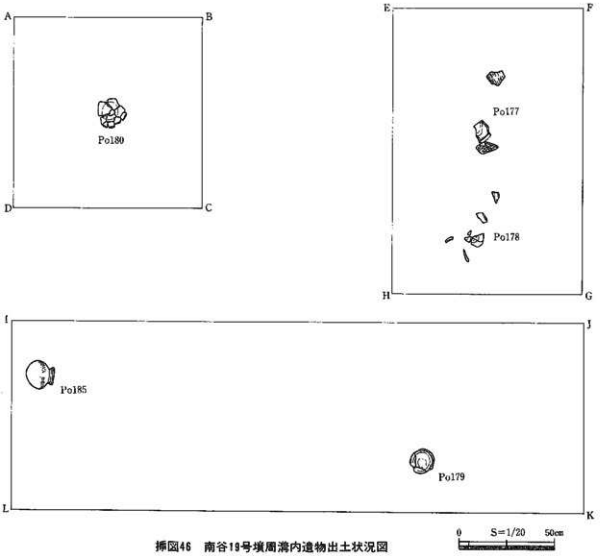


挿図45　南谷19号墳土層断面図(2)

地山は南側から北側に傾斜し、北側が南側と比べて若干低くなっており、まずそのレベル差をおぎなうために褐色土（㊼・㊽層）と粘質土（㊻層）を交互に盛っている。東側は地山が高く、粘性の強い土も他の箇所と比べて薄く盛られており、盛土は東側のレベルに合わせて行われていると推定される。墳丘斜面部は高く・厚く盛られるのに対し、墳丘中心部は盛土が薄く、中央にむかって皿状にへこんだ状態を示す。さらにこの部分を、赤褐色系の土と黒褐色系の土を使って交互に盛っている状況が見られる。主体部は後円部がある程度盛土された後に掘り込まれている。

前方部の盛土の状況を見ると、墳丘斜面側を粘性の強い土（㊷・㊸・㊹層）を使って高く盛り上げている。また、後述する区画溝の西側上縁部も、暗黄褐色土（㊹層）を土手状に高く盛り上げるなど、後円部とほぼ同様の状況が見られる。㊹層は、盛土下埋葬施設がある程度埋め戻された時点で盛られている状況が見られる。A－A′ラインを見ると、後円部は前方部に先立って盛土が行われている状況を示す。

区画溝　盛土を除去したところ、旧表土面が検出された。この旧表土は、くびれ部のところで後円部の円弧にそって幅3.5～4.5mの範囲で、途切れていることが確認された。この範囲で縦断するベルトを設定して掘り下げたところ、北側に長さ5.6m、上端部幅3.5m、下端部幅1.7～

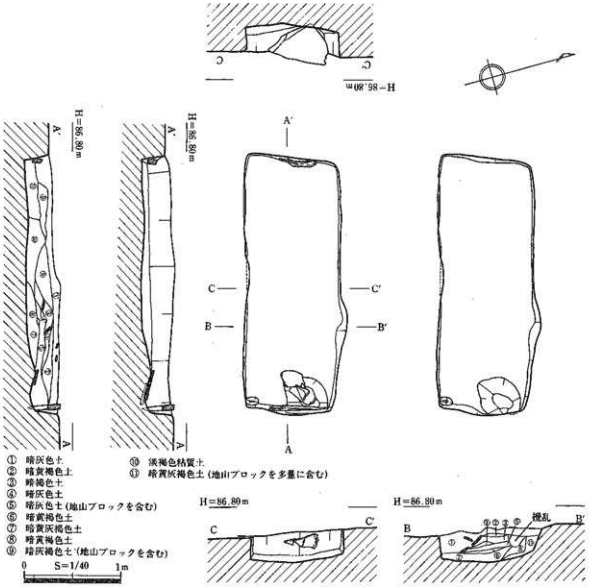


挿図46　南谷18号墳周溝内遺物出土状況図

2.0m、深さ0.9〜1.4mの規模をもつ溝が現われた。この溝は、後円部の円弧にそって湾曲している。底面は平坦であるが、南に向かうにつれて約5°の傾斜をもって次第に高くなり、北側はくびれ部に続く。断面は逆台形状を呈すが、西側の壁は上端部よりやや掘り込まれオーバーハングしている。

この溝の南には後述するが一段高い地点に埋葬施設が掘り込まれており、それを挟んで南側は北側ほど深く掘られておらず、旧表土を深さ33cmに、北側同様後円部の円弧にそって湾曲させながら剥ぎ取っている。

この溝の土層を見ると、北側くびれ部の底部には大型の黒褐色土ブロックを含む層（㉓層）と粘質土層（㉗層）が盛り上がるように積まれる。さらに、この層が盛られたために生じたレベル差を埋めるために、後述する盛土下埋葬施設の北側テラスの高さまでの皿状になった部分を、黒褐色系の土（㉔・㉓層）と黄褐色系の土（③・⑦層）を使って交互に積んで水平にしている。溝埋土（㉔＝㉚層）が埋められた時点では、すでに前方部が㊹層まで盛土されていることから、溝の埋め戻しは、前方部盛土と平行して行われたものと考えられ、後円部・



挿図47　南谷19号墳主体部遺構図

前方部旧表土のレベルに合う地点まで、すなわち㊸〜㊾層が埋め戻されている。なお、㊼（＝㊷層）－㊼′層間で分層することができたが、両者には大きな違いを認めることができず、㊼・㊼′層とも一連の区画溝の埋め土と考えられる。その後は、前方部側・くびれ部側と交互に盛土されている状況が見られる。

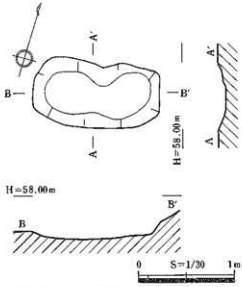
この溝は、墳丘計画・築造に伴う区画溝であると考えられ、南側は、北側ほど深くは掘られていないが、明らかに区画溝の意識はあると思われる。

この溝の底面直上には、地山（DKP・大山倉吉軽石）が風化したと思われる層（㊿層）が一面にあり、短期間と思われるが一定期間放置されたものと考えられる。

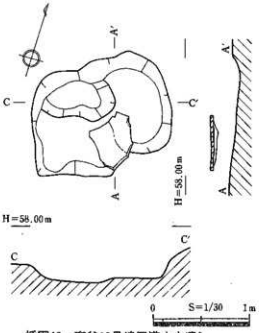
区画溝埋め土（㊼＝㊸層）中において、溝幅内にほぼ同じレベルで人為的に破砕されたと思われる板状安山岩の破片が散乱していた。これらの石材がこの場所で破砕されて埋められたものか、別の場所で破砕されたものがこの場所に埋められたものかは判断できないが、一部に接合関係が認められた。

主体部　後円部のほぼ中央で、表土及び耕作土を除去した時点で、一枚の石材が立った状態で検出された。掘り下げたところ、撹乱土とともに板状安山岩の破片が散乱していた。墓壙の規模は長さ2.7m、幅1.0m、残存深さ0.4mを測り、この墓壙内に箱式石棺が納められたと考えられる。主軸方向はN−70°−Wとほぼ東西に振る。頭位方向は不明である。

石棺は、小口板の一部のみが残っており、遺存状況を見ると墓壙内に納められた後、暗褐色土によっ



挿図48　南谷19号墳周溝内土壙1



挿図49　南谷19号墳周溝内土壙2

て裏込めされる。墓壙底面もかなり撹乱されているが、底面には板石が敷かれていたと思われる。墓壙東側の底面には小口板を建てた掘り方がわずかに認められた。側板を建てた掘り方は確認できなかった。撹乱されて破砕された石棺材のなかには、赤色塗彩されたものが一部見られた。

墓壙は盛土が行われた後に掘り込まれたものと考えられ、底面の掘り方は⑫層まで達している。

盛土下埋葬施設　くびれ部のほぼ中央部、区画溝の南側に、N－74°－Wと後円部主体部とほぼ同じ主軸方向になる埋葬施設が地山を掘り込んでつくられている。この埋葬施設は平面が隅丸方形を呈し、墓壙を二段に掘り込んでいる。墓壙上面は、長さ4.5m、幅2.2m、深さ0.5～0.6mに掘り、幅0.2～0.5mのテラスを設けた後に、さらに長さ2.8m、幅1.2m、深さ0.4mの二段目の墓壙を掘り込んでいる。墓壙底面中央には、主軸に平行して長さ2.2m、幅0.3m、深さ13cmの溝を掘り込んでいる。

土層の状況を見るとd－d′ラインで、一段目テラスから墓壙内にむかってV字状の幅5～8cmの黒色土（㊀層）の落ち込みが見られる。これは木蓋状のものが腐朽して落ち込んだものと思われる。二段目墓壙内には、木蓋が腐朽するに従い流入していったと思われる砂質層（㊁層）が皿状に堆積している。また、溝内には朱と思われる赤色顔料の塊がわずかに残っていた。墓壙底部には、木棺等が埋置された痕跡は認められないが、墓壙底面の溝内には、黒褐色土がみられたことより、墓壙底部には板状のものが置かれていた可能性がある。側板は無かったものと思われ、木蓋を一段目墓壙テラスに置いた木蓋土壙と考えられる。木蓋を置いた後は㊇・㊈層でテラス部を埋めているが、区画溝埋め土（㊄層）以前には㊃層が入り込んでいることから、盛土下埋葬施設の埋め戻しは区画溝埋め戻しに先立って行われたと考えられる。その後は、区画溝埋め戻し・墳丘盛土工程に続くものと考えられる。

周溝内土壙　後円部東側周溝底部で、2基の土壙を検出した。いずれも底部のみ遺存していた。南側のものは、長径0.65m、短径0.4m、深さ6cmを測るもので、平面は楕円形を呈す。北側のものは、長径0.75m、短径0.6m、深さ10cmを測り、不整形な平面プランを呈す。

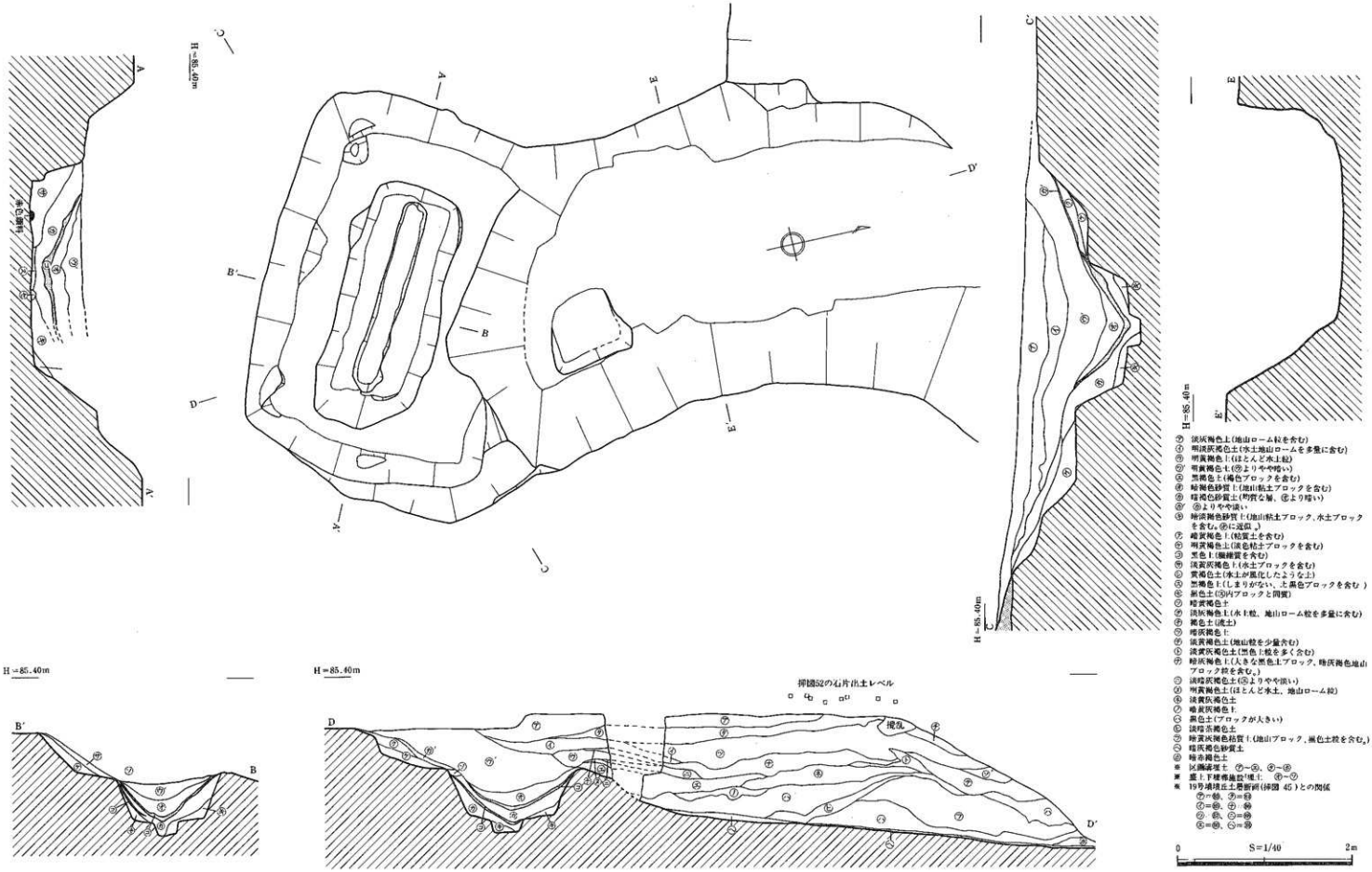
いずれの土壙内からも遺物は検出されなかったが、東伯耆で多数発見されている周溝内土壙と考えられる。

また、前方部北側の墳裾付近では、0.8×0.9mの不整形に広がる範囲で朱と思われる赤色顔料塊が検出された。厚さは15cm程度あった。この周囲は耕作が著しく及んでおり、遺構は検出されなかったが、周溝内土壙状のものが北側周溝内にもあった可能性がある。

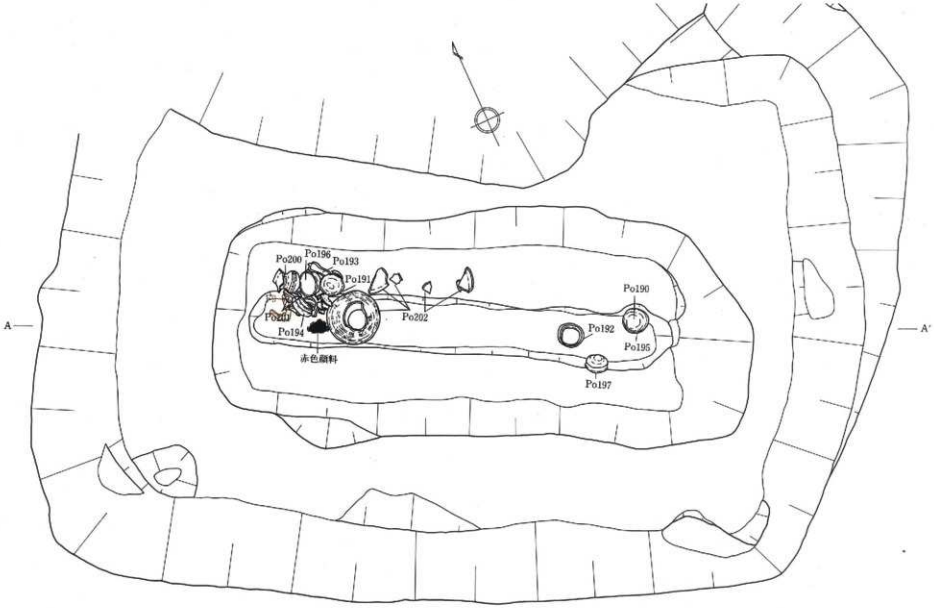
遺物出土状況　主体部は、すでに攪乱・削平されており、まとまった遺物は出土していないが、須恵器坏蓋Po188・189が攪乱土中から出土している。また、図化できなかったが、同じく攪乱土中で鉄器片が出土している。

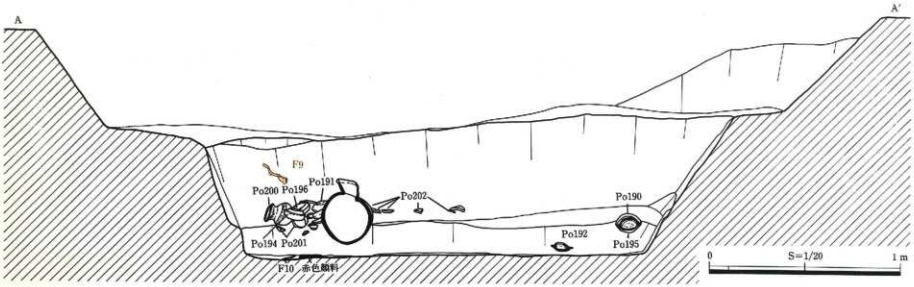
盛土下埋葬施設は盗掘を受けた様子はなく、良好な一括遺物が出土している。墓壙内埋土中で、鉄製U字状鋤（鍬）先F190が刃先を南にむけて出土している。墓壙内東側では須恵器坏身Po190・192、須恵器坏蓋Po195・197が出土している。Po190とPo195はPo190が上になり重なった状態で検出された。Po197は中央部溝の肩で、Po192は溝底部で出土しているが、もともとはPo190・195同様重なっていたと思われ、こちらが須恵器枕になっていた可能性がある。西側からは須恵器坏身Po191・193・194、坏蓋Po196・198・199、聴Po200、脚付椀Po201、壺Po202がまとまって出土している。Po191・194・196は完形で、そのほかは壊れていたが、Po200を除いてほぼ完形に復元できた。なおPo200の口縁部がPo202中にあり、接合している。また、溝西側底部より刀子F10は、切先を西にむけて出土している。

周溝内では、後円部東側で埋土中より須恵器大甕Po174が破砕されて散在したような状態



挿図50 南谷19号墳盛土下埋葬施設及び区画溝遺構図





挿図51　南谷19号墳盛土下埋葬施設遺物出土状況

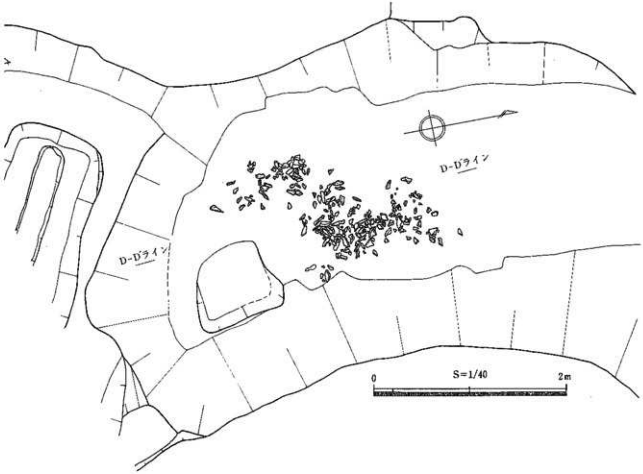
で出土している。甕片は墳丘斜面の中央部からも出土している。また、南東側では須恵器坏蓋Po180が押し潰された形で、土師器壺Po183が二箇所でかたまって出土し、また北東側周溝斜面ではPo187が出土している。くびれ部南側では黒褐色土層で土師器鉢Po181・182が、くびれ部北側では須恵器坏身Po177・178が黒褐色土層中より、また、須恵器坏身Po179、土師器壺Po185が北側周溝底よりやや浮いたような状況で出土している。前方部西側周溝底では、土師器高坏Po184が西側斜面に接して出土している。

盛土中で、磨製石斧Ｓ８が出土している。南谷19号墳は古墳築造以前の遺構を壊して築造されており、Ｓ８は築造時に混入したものと思われる。

盛土のかき出し土で、須恵器坏身Po176、円筒埴輪片Po186が出土しているが、Po186は混入したものと考えられる。

時　期　Po187は弥生時代後期のものと思われ、ＳＫ09に伴うものが混入したものと思われる。

周溝で出土している須恵器は、おおむね山本編年Ⅲ期(56)新相（６世紀後半）の時期を示すと思われるが、盛土下埋葬施設の須恵器は山本編年Ⅱ期（６世紀前葉）の時期を示す。墳丘下埋葬施設は19号墳に伴うものか異論があると思われるが、これが19号墳の墳丘築造計画に組み入れられたものであると考えると、南谷19号墳の築造計画は６世紀前葉と考えられる。周溝で出土している須恵器は、黒褐色土中かまたは暗灰褐色土中での出土であり、６世紀後半までこの古墳の祭祀が続いたものと考えられる。



挿図52　南谷19号墳盛土内石片出土状況図

2．南谷20号墳（挿図53～55、図版25）

位　　置　調査区のほぼ中央部、標高83.75mの地点に立地する。20号墳は21号墳の東側３ｍの地点にあり、墳丘東側は19号墳と接している。

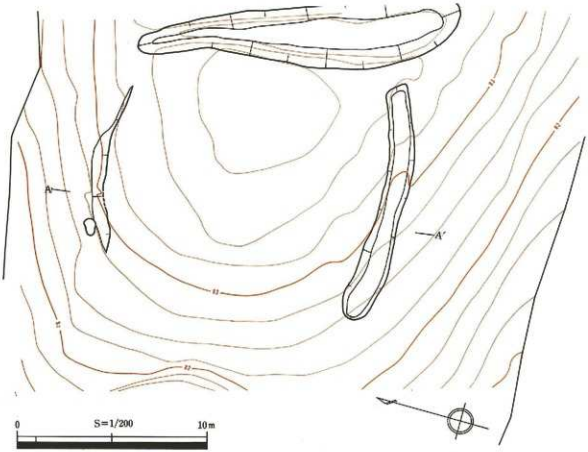
墳丘・周溝　墳丘は、すでに耕作によって削平されており、わずかに80cmの丘状の高まりが見られる程度である。周溝もわずかに残る程度であるが、南側のものは緩やかに湾曲することにより、径14.5mを測る円墳と考えられる。

比較的残りのよい南側周溝は、幅1.0～1.5m、深さ0.2mを測る。北側は、梨耕作のための撹乱が著しく、墳丘側に傾斜変換点がわずかに認められる程度であった。

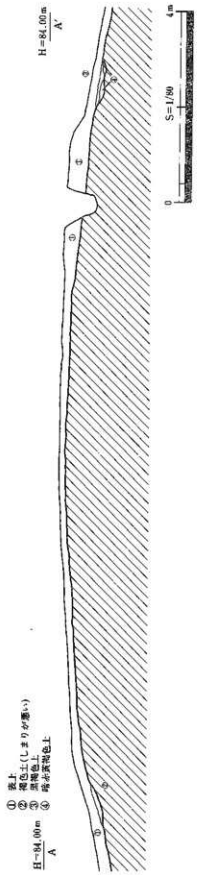
東側は19号墳の周溝と重なり、北端はわずかに西側に湾曲しており、20号墳の周溝が一部残っていると思われる。

周溝内土壙　北側周溝のやや西側寄り、周溝斜面において４枚の板石を重ねた石蓋土壙が検出された。この土壙は、1988年に羽合町教育委員会の試掘調査ですでに確認されていたが、その調査では単独の石蓋土壙と考えられていた。今回の調査の結果、この石蓋土壙は古墳に伴うものであり、規模は長さ0.82m、幅0.5m、深さ0.3mを測るものと判明した。立地場所が周溝斜面であるために、墓壙底は北に傾斜している。

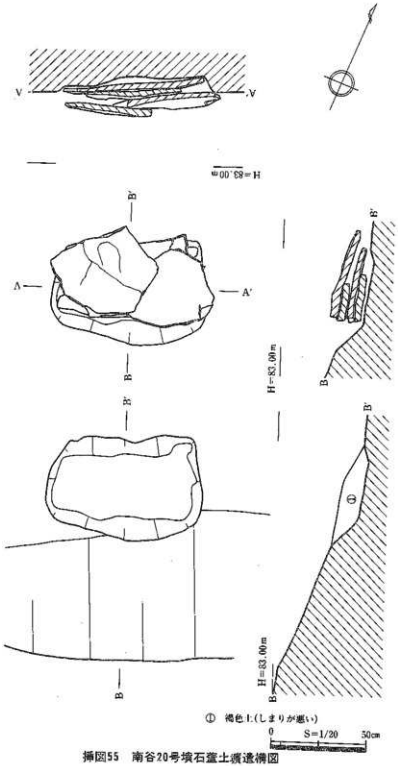
遺物・時期　遺物が全く出土していないために、正確な時期は不明であるが、東側周溝が19号墳に切られていることから、19号墳より若干古く築造されたものと考えられる。



挿図53　南谷20号墳墳丘図



挿図54　南谷20号墳土層断面図



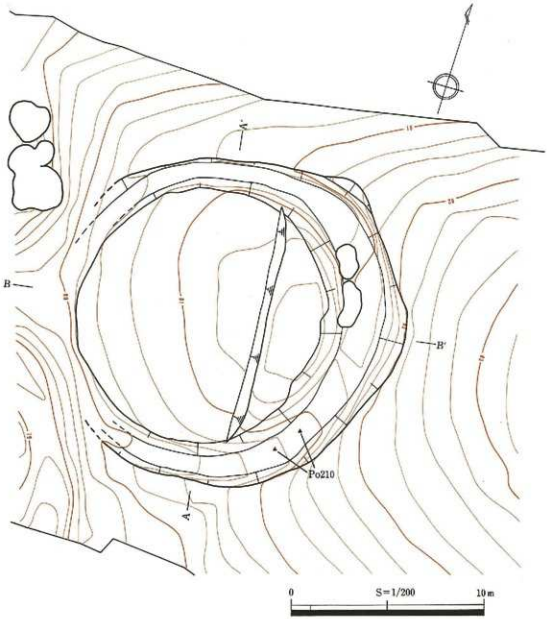
挿図55　南谷20号墳石室土壙遺構図

3．南谷21号墳（挿図56～58・108、図版25・26・50）

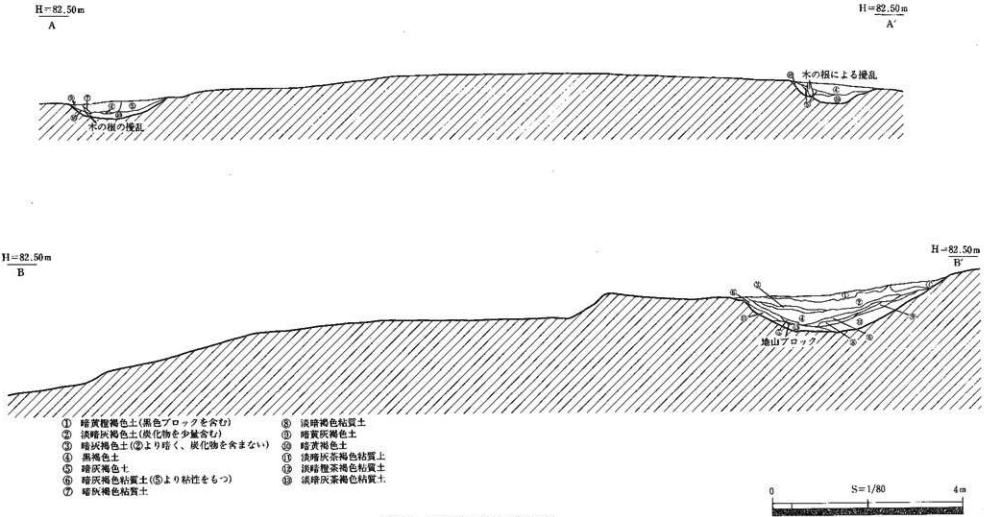
位　置　調査区の中央のやや西寄り、尾根の頂部、標高80m～82mの間に位置し、E５・F５グリッドにほぼおさまる。20号墳をはさんで東16.5mに19号墳、西約１mに23号墳があり、22号墳とは南西側で周溝が重なる。

墳　丘　調査前においては、墳丘を確認できるような地形はなく、耕作による高さ約50cmの崖が、墳丘の中央に当たる部分を南北に縦断していた。墳丘は円形で、その規模は、南北径14.6m、東西径14.0m、残存していた高さは、東側周溝底より0.7mであった。

周　溝　周溝は標高の高い東側で一番深く、標高の低い西側で浅くなり不明瞭になる。南西側で22号墳の周溝と重なり、断面観察の結果、21号墳の方が、22号墳より古いことが分かった（挿図61）。周溝の規模は、幅1.8m～4.5m、深さは0.3m～1.3mである。断面は、U字状を呈する。



挿図56　南谷21号墳墳丘図



挿図57　南谷21号墳土層断面図

盛　土　墳丘は耕作による削平のため盛土を全く残していない。付近の土の堆積状況を観察した結果、斜面に耕作のための平坦面を造り出すために、21号墳の墳丘を削平した土を用いて、22号墳側に土盛りがされていることが分かった。この土の中から碧玉製の管玉１個（Ｓ１）が出土した。

この管玉は21号墳の墳丘が削平された際に埋葬施設からかき出されてきたものと思われるが、墳丘上の埋葬施設は残っていなかった。

周溝内土壙　東側周溝底、墳裾寄りで２基の土壙を検出した。周溝埋土中から掘り込まれたものか、周溝底面で掘り込まれたものかは不明であるが、いずれの土壙も墳裾部分をわずかに削り込んでいた。いずれも平面は不整形で、断面は皿状を呈する。その規模はそれぞれ、南の土壙から、底面で長軸1.80m×短軸0.60m、長軸0.80m×短軸0.60mである。深さは最も残りのよいところで、それぞれ0.25m、0.30mである。埋土はしまりがなく、水土が風化したような土であった。

遺　物　南東側周溝で、須恵器坏身Po203、Po205、須恵器坏蓋Po206～Po207、土師器甕Po211が埋土中で、須恵器坏身Po204が底面近く、須恵器壺Po210が底面で破砕された状態で出土した。須恵器蓋Po208のみ南西側周溝埋土中で完形の状態で出土した。

時　期　出土した須恵器蓋坏の内、Po203、Po206は山本編年Ⅱ期の古相を示し、他は新相を示すことから、21号墳は６世紀後半の築造であると思われる。

４．南谷22号墳（挿図59・61・62・109、図版26・27・51）

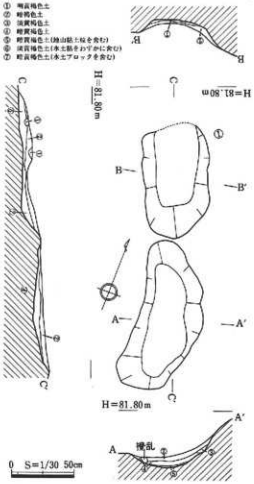
位　置　調査区の西側、Ｃ６・Ｄ６・Ｃ５・Ｄ５グリッド、標高78m、東約32mに19号墳が位置する。北約５ｍには23号墳が、22号墳と尾根の頂部を二分するようにならぶ。

調査前の地形では、墳丘の存在は確認できず、墳丘の西側に当たるところが大きく削り取られ約１ｍの崖となっていた。崖の断面を観察したところ、周溝の落ち込みを確認したことから古墳と判断した。

墳　丘　墳丘の西側が地山まで大きく削り取られ、また、墳丘の南側が調査区域外に延びるが、周溝の形状から、墳丘は円形である

周　溝　と思われる。その規模は東西径12.4m、南北径12.5m、残存する墳丘の高さは、

写真７　南谷22号墳周溝内遺物出土状況（Po212）



挿図58　南谷21号墳周溝内土壙遺構図

北側周溝底から1.2mである。周溝は全周せず、北西側で約3.5mをブリッジ状に掘り残す。西側の周溝端には、不明瞭ではあるが、階段状のものが3段設けられていた。また、周溝は東側で21号墳の周溝埋土を掘り込んでいた。周溝の幅は北側で最大4.5m、南側で最小1.0mである。残存する深さは標高の高い東側で最も深く1.0mである。標高の低い西側では、周溝は浅く、最も浅いところでわずか0.3mを残す。墳丘の西側部分の削平とともに西側の周溝も一部削平されていると考えられるが、削平以前においても、西側の周溝は、東側の周溝に比べて、浅かったものと思われる。断面は、逆台形状ないしはU字状を呈する。

盛　土　墳丘の盛土は、東側部分でわずかに残っていた。④層は黒色土層で、ロームの上に帯状に堆積していた。ロームは、ほぼ地形に沿うように南側に向かって傾斜していた。②③層は盛土である。②層は、赤褐色ロームを用いた盛土で、灰褐色ロームを含みよくしまる。③層は、灰褐色ロームを用いた盛土で、④層の黒色土粒を含みよくしまる。地形の低い南側ほど厚く盛土し、盛土によって、墳頂部を水平にしようとする意図が見られる。

墳丘上の埋葬施設は既に失われていた。

石蓋木棺墓　北西側周溝を約30㎝程掘り下げたところで、約20㎝～30㎝大の自然石が出土した。その下60㎝程の周溝埋土中で、石蓋木棺墓を検出した。石蓋は、長さ1.05m、幅0.55m、厚さ5㎝～9㎝の板状の石で南側にわずかに傾斜した状態で出土した。墓壙は石蓋の輪郭にほぼ沿うような長方形の墓壙で、その規模は、上縁部で長軸1.38m×短軸0.55m、底面で長軸1.23m×短軸0.45m、深さは0.15m内外であった。墓壙の埋土の観察で、長軸方向断面の南北端で小口板の痕跡（⑧層）を確認した。短軸方向断面においては、⑧層は存在しなかった。墓壙底面で掘り方の短辺に沿うように幅20㎝～25㎝、深さが5㎝～10㎝の楕円形状の落ち込みを検出した。側板を用いない石蓋木棺墓であると考える。墓壙内及びその周辺で遺物は全く出土しなかった。

遺　物　遺物は、墳丘上では出土しなかったが、北東側周溝と西側周溝で出土した。北東側周溝では、土師器甕Po213、Po214の破片が、それぞれまとまって、底面から約30㎝ほど浮いた状態（⑨層下層）で出土した。破片の磨滅が著しく全体を復元することはできなかった。口縁部のみを図化することができた。また、多量の板状の石片が、周溝埋土中⑨層以下及び周溝の底面に沿って、21号墳側から流れ込むように出土した。その出土状況から、22号墳の築造後早い段階で21号墳側から投げ込まれた石片と考えられる。21号墳は、葺石を施した痕跡が全くないことから、21号墳の葺石が周溝内に流れ込んだとは考えられない。21号墳の埋葬施設が破壊され、その石材が投げ込まれた可能性があるが、21号墳の埋葬施設は残っていないことから断言はできない。22号墳の西側周溝底面で、3方に把手を持つ須恵器短頸壺Po212が、潰れたような状態で出土した。地形の低い南側にその破片がわずかに流れてはいるものの、元位置を保っていると思われる。復元の結果ほぼ完形にまでなった。坏類は出土しなかった。

時　期　出土した土器からは古墳の築造時期を断言できないのであるが、周溝の切り合い関係より、22号墳は21号墳より新しく築造されたものと考えられ、21号墳、23号墳とさほど変わらない築造時期であると考える。

5．南谷23号墳（挿図60・61・63・109、図版27・51）

位　置　調査区の最も西側、標高79.3mの地点に立地し、23号墳の4m南側には22号墳が、東側には21号墳が隣接している。

墳　丘　調査前は平坦な畑地であったが、南側・西側は地山まで大きくカットされ、その断面に黒色土が帯状に入っていたために、古墳の存在が想定された。他の古墳と同様、後世の耕作による削平が著しく、盛土はほとんど削り取られ、また、墳丘北側・東側には頂部を削平したときの盛土の一部がかき出されていた。

表土及び耕作土を除去したところ、北側墳裾及び東側周溝は比較的よく残っていた。墳丘規模は、長径11.6m、短径11.3m、高さは北側墳裾から1.4m、東側周溝底から0.9mを測り、東西軸がやや長くはなっているもののほぼ円形を留める円墳であることが判明した。

周　溝　周溝は、東側の残りがよく、幅2.7～3.7m、深さ0.9mを測り、断面U字状を呈す。南東部分は他の箇所に比べて広くなっているが、底部に後述する周溝内土壙が造られたための処置と考えられる。その他の箇所の遺存状態は悪く、原状を残しているとは思えないが、周溝は墳丘南側でブリッジ状の掘り残しがあり、全周するものではない。

盛　土　墳丘は地山削り出しと盛土によって形成されている。旧表土は、墳丘北側と西側に遺存しているが東・南側には見られず、もともと東・南側の地山が高かったためにこの部分を地山整形したことが窺われる。地山削り出しは、北側周溝底より1.0m、東側周溝底では0.8m以上行われている。盛土は北側・西側にわずかに残る程度（⑨層）であったが、南側はブリッジ状の掘り残しがあり、他の箇所とは異なり地山削り出しは行われず、ほとんどが盛土によって形成されたものと推定される。

主体部　墳丘頂部がすでに削平されており、主体部は不明であるが、かき出し土中より赤色塗彩された石材が出土しており、箱式石棺が埋納されたと考えられる。

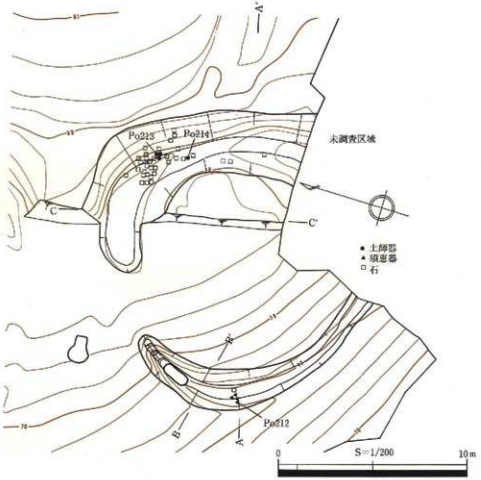
周溝内土壙　東側周溝の中央から南東部にかけて、計4基の周溝内土壙が検出された。北側から1号土壙、2号土壙、3号土壙、4号土壙とした。1号土壙はサブトレンチで切られているが、長径1.1m、短径1.0m、深さ10cmを測り、不整形な平面を呈す。2号土壙は、長径0.6m、短径0.45m、深さ10cmを測り、平面楕円形を呈す。3号土壙は2号土壙に切られており、長径0.8m、短径0.7m、深さ10cmを測り、不整形な平面を呈す。4号土壙は3号土壙に切られており、長径1.3m、短径1.2m、深さ5cmを測り、平面は隅丸方形を呈す。2～4号土壙の切り合い関係を見ると、4号土壙→3号土壙→2号土壙の順に掘り込まれていることが分かる。

いずれの土壙からも遺物は出土していないため性格は不明であるが、埋葬に関係した土壙であると思われる。

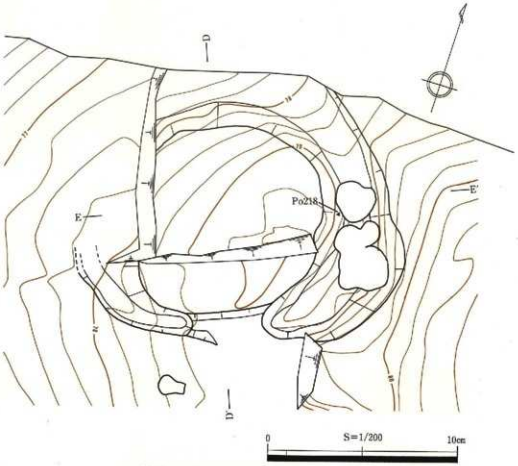
遺　物　かき出し土中で、須恵器坏身Po215、坏蓋Po217、提瓶Po219、管玉S2・3が出土している。

周溝内埋土中で、須恵器坏身Po216、有蓋高坏Po218、甕Po220が出土している。

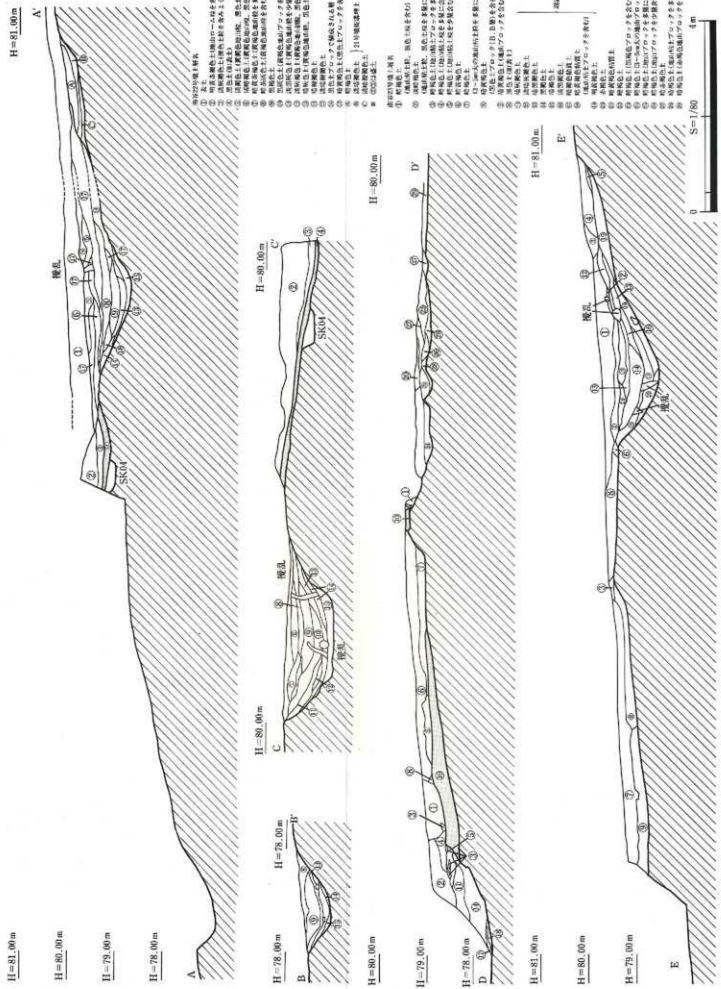
時　期　かき出し土中で出土した須恵器は23号墳のものか、21号墳のものかは判断できないが、21号墳の西側周溝は23号墳に切られたために遺存状態が悪いと考えられ、23号墳のほうが新しく築造されたものと考えられる。Po215、Po217、Po219は山本編年Ⅲ期（6世紀後半）の特徴をよく残している。出土地は23号墳側の出土ではあるが21号墳ものと考えられる。Po216、Po218は山本編年Ⅳ期古相（6世紀末葉）の特徴を残しており、これが23号墳に伴うものと考えると、23号墳は6世紀末葉頃に築造されたと考えられる。



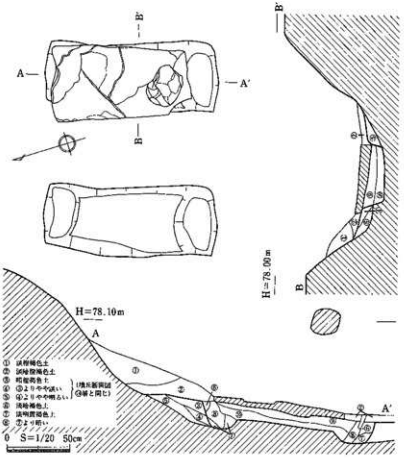
挿図59　南谷22号墳墳丘図



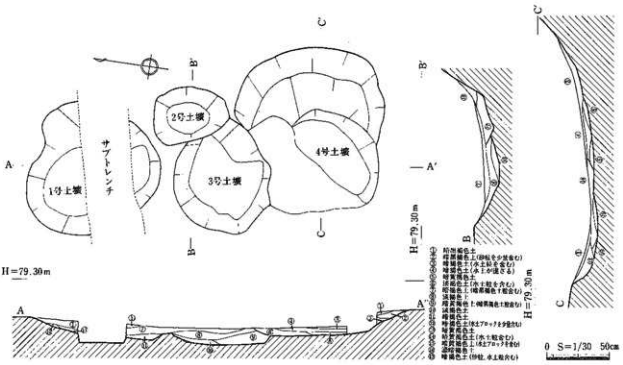
挿図60　南谷23号墳墳丘図



挿図61　南谷22号墳・23号墳土層断面図



挿図62　南谷22号墳石蓋土壙遺構図



挿図63　南谷23号墳周溝内土壙遺構図

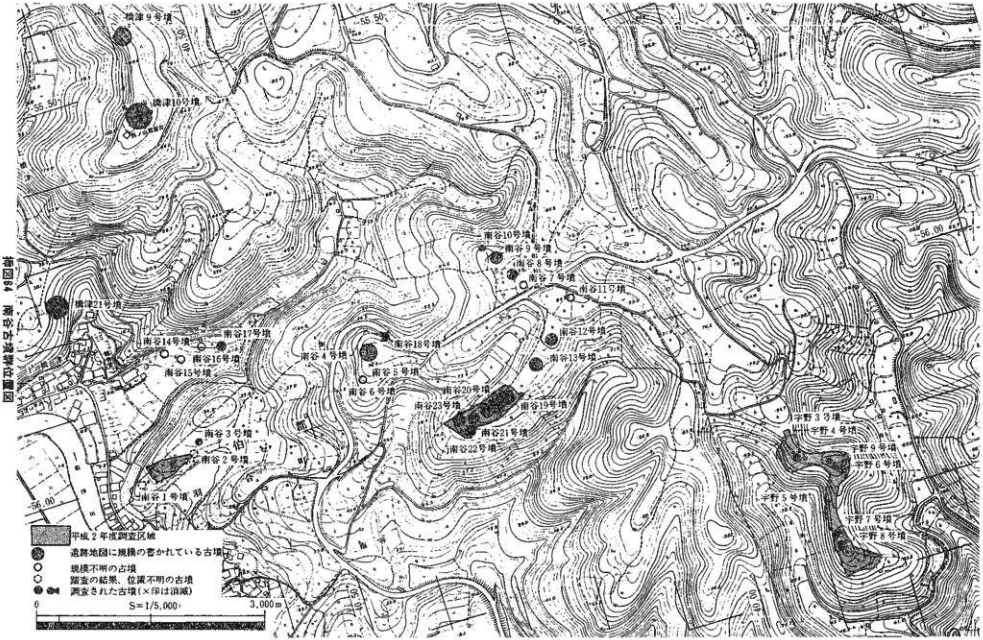
遺構名	平面形	断面形	規模(m) ①上縁部 ②底面 (長径×短径)	深さ	遺物	時期	備考
SK03	長方形(推定)	逆台形	①0.73以上×0.61 ②0.56以上×0.55	0.38	なし	不明	主軸方向 N-79° E
SK04	隅丸長方形	逆台形	① 1.10 × 0.56 ② 0.72 × 0.23	0.18	弥生壺	弥生時代後期後半	主軸方向 N-5° -W
SK05	楕円形(推定)	袋状	①1.40×0.80以上 ②1.20×0.90以上	0.78	弥生壺・蓋、小石	弥生時代後期後半	主軸方向 N-78° -E
SK06	円形	袋状	①1.93×1.60以上 ②1.78×1.45以上	0.66	土器片、小石	弥生時代	
SK07	不明	不明	不明	0.48	なし	不明	
SK08	円形	袋状	① 1.53 × 1.03 ② 1.50 × 1.30	0.96	弥生土器片・小石	弥生時代後期後半	
SK09	長楕円形(推定)	袋状	①4.50 × —— ②4.30 × ——	0.95	弥生土器片	弥生時代後期後半	底面にピット有
SK10	不明	不明	①1.43 × —— ② 不明	0.39	なし	不明	
SK11	長楕円形	袋状	①1.85×1.00以上 ② 2.05 × 0.96	0.95	自然石	不明	
SK12	楕円形	袋状	① 不明 ② 1.45 × 0.85	1.05	小石	弥生時代	主軸方向 N-7° -W

挿表6 南谷夫縛塚遺跡土坑一覧表

名称	墳形	所在地	直径(m)	高さ(m)	埋葬施設	出土遺物	備考
南谷1号墳	円墳	羽合町南谷	−	−	箱式石棺?	−	
南谷2号墳	円墳	羽合町南谷	−	−	箱式石棺?	−	
南谷3号墳	円墳	羽合町南谷	9	0.9	箱式石棺?	−	
南谷4号墳	円墳	羽合町南谷	6	0.8		−	
南谷5号墳	円墳	羽合町南谷	22	2	−	−	
南谷6号墳	円墳	羽合町南谷	−		箱式石棺	−	
南谷7号墳	円墳	羽合町南谷	−	−	−	−	
南谷8号墳	円墳	羽合町南谷	13	0.5	箱式石棺	土師器	
南谷9号墳	円墳	羽合町南谷	16	1.5	箱式石棺?	−	
南谷10号墳	円墳	羽合町南谷	9	0.5	−	−	
南谷11号墳	円墳	羽合町南谷	−	−	−	−	
南谷12号墳	円墳	羽合町南谷	15	0.5	−	−	
南谷13号墳	円墳	羽合町南谷	18.4	1.5	−	−	
南谷14号墳	円墳	羽合町上橋津	−	−	横穴式石室	−	石室露出
南谷15号墳	円墳	羽合町上橋津	−	−	横穴式石室	−	
南谷16号墳	円墳	羽合町上橋津	−	−	横穴式石室	−	
南谷17号墳	円墳	羽合町上橋津	−		横穴式石室	−	
* 南谷18号墳	不明	羽合町南谷	−	−	箱式石棺	土師器甕	1985年度調査後消滅
* 南谷19号墳	前方後円墳	羽合町南谷	全長32.0 後円部径18.8	後円部2.9	箱式石棺 木蓋土壙墓(盛土下)	須恵器蓋坏・壺・大甕・脚付碗、刀子、土師器壺、朱、U字型鏡(鍬)先	1990年度調査
* 南谷20号墳	円墳	羽合町南谷	14.5	0.8	石蓋土壙(周溝内)	なし	1990年度調査
* 南谷21号墳	円墳	羽合町南谷	14.6	0.7	−	須恵器蓋坏・壺、土師器甕	1990年度調査
* 南谷22号墳	円墳	羽合町南谷	12.5	1.2	石蓋土壙(周溝内)	須恵器短頸壺、土師器甕	1990年度調査
* 南谷23号墳	円墳	羽合町南谷	11.6	1.4	−	須恵器蓋坏・高坏・壺・提瓶	1990年度調査

古墳名の前に* 印が付してあるものは発掘調査済みの古墳である。南谷1～17号墳については、鳥取県教育委員会『改訂 鳥取県遺跡地図』第2冊分 1974年をもとにした。南谷18号墳については、羽合町教育委員会『南谷18号墳発掘調査報告書』1986年を参照。南谷19～23号墳は、本報告書を参照。

挿表7 南谷古墳群一覧表



第回94 南谷古墳群位置図

第５章　乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群の調査

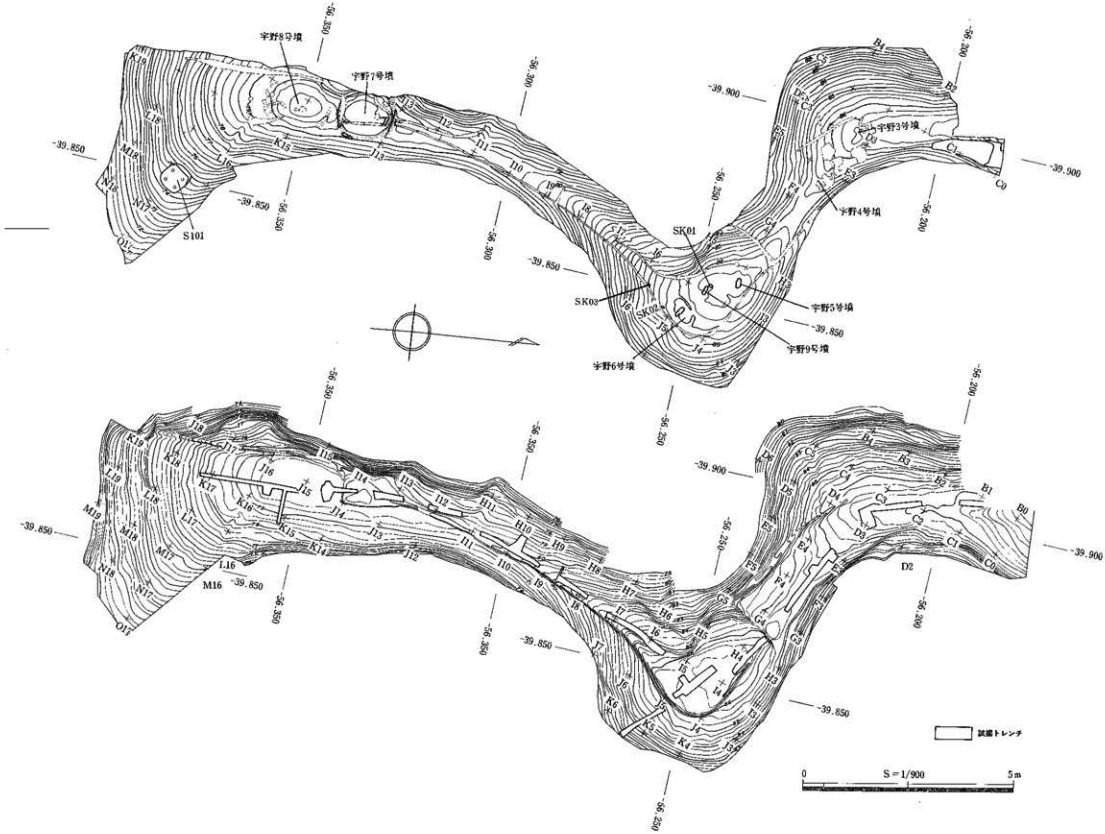
第１節　乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群の概要

位　置　乳母ケ谷第２遺跡・宇野古墳群は、東郷池の北端に向かって北から南に延びだす舌状の丘陵（標高89m～71m）のほぼ全体に位置する。調査区の西側に隣接する尾根の先端部に、弥生時代後期に位置づけられた周知の乳母ケ谷遺跡がある。

遺　構
乳母ケ谷第２遺跡　乳母ケ谷第２遺跡では古墳時代の竪穴住居跡、中世の土塁、近世以降の段状遺構を検出した。竪穴住居跡は形態が隅丸方形であった。床面は貼床がなされ、中央ピットは縁が粘質土で盛り上げられ土手状になっていた。中央ピットの盛り上がりと壁溝が南側で切れており、遺物は古墳時代前期初頭の甕や高坏が出土している。また、住居跡は調査区の南端の緩やかな斜面に位置していた。住居跡は１棟しか検出されなかったが、同じ地形が続くことから、南に向かって集落が広がる可能性がある。次に、土塁は11本のサブトレンチを入れ、断面を観察しながら調査を進めた。その結果、土塁は台形状に盛土され、西側を平坦にし、東側を立ち上げるように盛られていた。段状遺構は試掘調査では確認されておらず、調査区の北側の端で検出され、調査区を拡張することによって遺構の全体が確認できた。遺物は近世以降の磁器が出土している。

宇野古墳群　宇野古墳群の調査では古墳７、土壙３を調査した。宇野古墳群は今まで２基の古墳の存在が知られていた。今回調査した古墳は新たに確認されたもので、古墳名は宇野９号墳を除き、調査区の北から順に宇野３号墳から宇野８号墳まで命名した。宇野９号墳は主体部でしか確認できなかった。また、古墳のある丘陵の尾根は非常に狭いものであり、古墳の在り方はかなりこの地形に制約を受けていると考えられる。古墳はいずれも尾根が屈曲し、やや広がる場所に位置しており、７基の古墳が３・４号墳、５・６・９号墳、７・８号墳の３群に分布している。それぞれの群で見てみると、３・４号墳は小規模な円墳であり、４号墳周溝から出土した須恵器の直口壺から５世紀代のものと考えられる。５・６・９号墳は小規模な円墳と方墳からなり、時期は不明であるが、地山を深く掘り込んだ主体部を持つ共通点がある。７・８号墳は前者が方墳で、後者が円墳であるが調査区の古墳の中では規模が大きなものである。７号墳から土師器の甕と高坏が、８号墳では須恵器の甕がそれぞれ出土している。土器はどちらも５世紀後半頃で近い時期にあたり、古墳の築造も同じ頃だと思われる。次に、埋葬施設は５～７・９号墳で調査された。７号墳で調査した埋葬施設は、周溝内に存在した石蓋土壙である。土壙はＳＫ01が９号墳に伴う以外はＳＫ02・03とも用途、時期が不明である。

写真８　宇野古墳群・乳母ヶ谷第２遺跡完掘



挿図65　乳母ヶ谷第２遺跡・宇野古墳群全体図

第２節　乳母ケ谷第２遺跡の調査

１．竪穴住居跡

ＳＩ01（挿図66・67・111、図版29・51・52・55）

位　置　調査区の南端の緩斜面、標高74m～75mに位置する。今回の乳母ケ谷第２遺跡の調査で唯一の竪穴住居跡である。ＳＩ01が検出された所は、調査前の地形測量図（挿図65）を見ると、等高線の幅が広がっており、調査前の地形においても斜面の傾斜がその周りに比べて緩やかになっていることが分かる。

形　態　平面は、隅丸方形で、三ケ月形のテラスを持つ。規模は、テラスで長さ5.2m、幅0.7m、床面で5.2m×5.2mである。床面積は、24.4㎡である。残存壁高は北西壁で、床面まで1.04mである。壁高は斜面下側になるほど低くなる。壁溝は、３辺の壁際を巡り、全周しない。壁溝の幅は10cm～20cm、深さは５cm～14cmである。断面は、Ｕ字状を呈する。床面上でピットを12個検出した。それぞれの規模はＰ１（53×42－65）cm、Ｐ２（60×53－76）cm、Ｐ３（53×45－67）cm、Ｐ４（40×38－72）cm、Ｐ５（後述）、Ｐ６（56×48－31）cm、Ｐ７（45×43－42）cm、Ｐ８（26×26－46）cm、Ｐ９（45×35－40）cm、Ｐ10（28×25－25）cm、Ｐ11（24×19－25）cm、Ｐ12（18×16－19）cmである。その内主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４の４個である。主柱穴間距離は、Ｐ１から2.9m、2.7m、3.1m、2.7m、Ｐ６～Ｐ８は主柱穴を結ぶ直線上に位置し、Ｐ11、Ｐ12は主柱穴を結ぶ直線のやや内側にその直線に平行するように、0.64mの距離をおいて並ぶ。

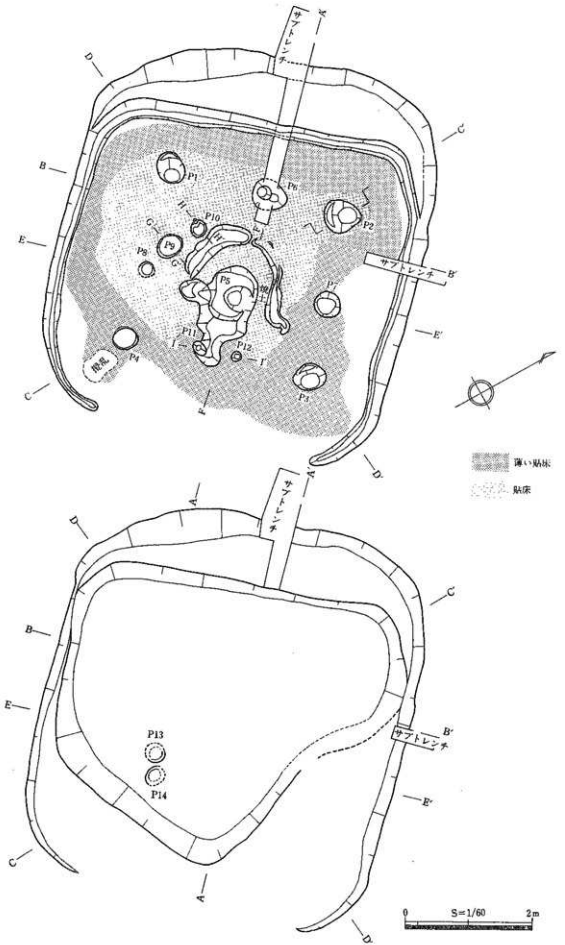
中央ピット　Ｐ５が中央ピットである。床面のほぼ中央で検出した。掘り方の南東側と南西側で溝状の飛び出しがあるが、平面は隅丸長方形を呈する。掘り方は飛び出し部分を含めると３段になり、底面に（40×46）cmのピットを有する。その規模は、飛び出し部分も含めて上縁部で長軸170cm×短軸122cmである。中央ピットの周りは、貼床の土を盛り上げることによって、16cm～36cmの幅で２cm程土手状に盛りを築き、土手の周りには幅10cm～30cm、深さｉcmほどの断面皿状の浅い溝があった。中央ピットの埋土は９層に分層できた。炭片を含む層（54層）もあったが、ピット内で火を日常的に用いた形跡はみられなかった。また中央ピット内には床面上に堆積していた埋土は流入しておらず、住居廃絶時には、中央ピットは埋められていたものと考える。

焼　土　焼土は１箇所床面上で検出された。中央ピットの北東20cmの所で、径３cm×５cm程度の不整形な広がりであった。貼床は床面のほぼ前面にほどこされており、暗褐色土に地山ロームを混ぜ、叩きしめられていた（㊻㊽′層）。床の中央近くほど地山ロームの含有量が多く、しっかりとしまっていた。

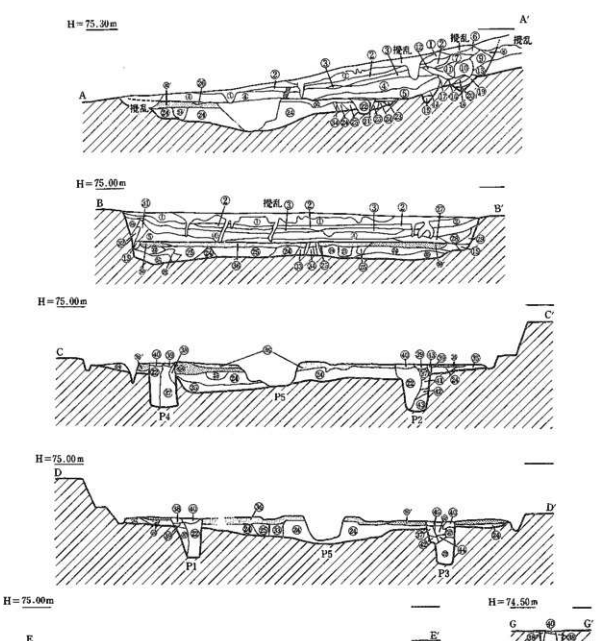
遺　物　掘り下げ中及び床面で土器が出土したがその量は少なく、土器の遺存状態もあまり良いものではなかった。図化できたものは甕Po230・Po231・Po233・Po234、高坏Po232、不明口縁Po235である。このうちPo232はＰ９の埋土中で出土した。Po230・Po234が床面で出土した。Po231・Po233・Po235は埋土⑩層中で出土した。

時　期　出土土器より古墳時代前期の住居であると考える。

不整形落ち込み　貼床除去後不整形な落ち込みを検出した。掘り下げた結果、断面は皿状で、その規模は、4.9m×3.9m、深さは0.4m～0.08mである。ＳＩ01の床は、この落ち込みを埋め立てた後に貼られていた。住居の貼床直下から掘り込まれる黒灰褐色土の落ち込みをいくつか断面で確認したのであるが、平面的にそのプランを検出することができたものはＰ13、Ｐ14の２個のみであった。遺物は全く出土しなかった。この落ち込みの北西辺と南西辺がＳＩ01の掘り方



挿図66　乳母ヶ谷第2遺跡SI01平面図



① 黒色土(粒子が細かい)
② 黒灰褐色土
③ 暗灰褐色土
(ややしまる)
④ 暗黄灰褐色土(しまる)
⑤ 淡灰褐色土(しまる、炭片をパラパラと含む)
⑥ 暗赤褐色土
(ややしまる、地山白色岩粒を含む)
⑦ 暗赤黄褐色土
(しまりが悪い)
⑧ 暗赤褐色土(ややしまる、地山白色岩粒を含む)
⑨ ⑤より暗く、地山白色岩粒を多く含む
⑩ ⑤より暗く、地山白色岩粒を含む
⑪ ⑤より暗く
⑫ 明黄黄灰褐色土
(③より褐色が暗く、大変しまりが悪い)
⑬ 褐暗褐色土
(炭片をわずかに含み、粘質を持つ)
⑭ 淡黄灰褐色土
(しまりが悪い)
⑮ ⑤より暗く、地山白色岩粒をわずかに含む
⑯ 淡暗灰褐色土
⑰ ⑥より明るく、しまりが大変悪い
⑱ ⑥より淡く、⑩よりさらにしまりが悪い
⑲ 明茶褐色土
(地山白色岩粒を多く含み、しまりが悪い)
⑳ 暗灰色土
㉑ 暗灰黄色土
㉒ 暗灰褐色土
(粘性を持つ)
㉓ 暗灰色土
(水土粒を含む)
㉔ ⑤より暗く
㉕ 黒灰褐色土(水土粒、地山ローム粒を含む)
㉖ 暗黄灰褐色土
㉗ 淡暗黄灰色土
㉘ 淡暗褐色土
(炭片を含む)
㉙ 淡褐色土
㉚ ⑤に、地山ローム粒が入る
㉛ ⑤に、褐色土粒、地山ローム粒が入る
㉜ 明茶褐色土
(ややしまる)
㉝ 淡暗黄灰褐色土
㉞ 暗灰色土
㉟ 淡黄灰白色土
(しまりが悪い)
㊱ 貼床(暗褐色土に地山ローム粒を混ぜてたた

挿図87　乳母ヶ谷第2遺跡S101土層断面図

とほぼ平行していること、この落ち込みの範囲がＳＩ01の床面の範囲におさまっていることからＳＩ01に伴う落ち込みであると考えるが、その性格は不明である。

２．その他の遺構

土塁（挿図68～71・111、図版30・52）

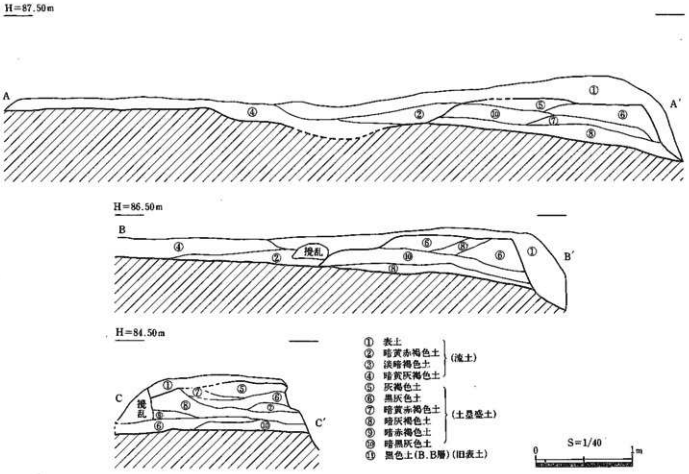
位　置　Ｈ４杭－Ｊ４杭－Ｉ７杭－Ｉ11杭－Ｊ14杭を繋ぐように狭い尾根上を走り、標高80m～86m付近、尾根の頂部に辺りに位置し、宇野５～７号墳、ＳＫ02・03を切って延びている。検出は灰褐色土、或いは黒灰色土の盛り土を確認しながら行った。

規　模　規模は全長128m、標高差6.5m、最大幅５m、最小幅２m、盛土高0.5mであった。

土　層　①層から④層までは流土であり、⑤層から⑪層までが土塁に関わる層である。⑪層は土塁築造時の旧表土で、人為的に盛り上げられたのは⑤層から⑩層と考えた。流土は締まりがなく、盛土はよく締まっている点で見分けられた。土層は全体に黒色系の土が多いが、⑦⑨層のように地山の土も混じることから、近辺の旧表土や地山を削り盛り上げたものと考えられる。盛り方は西側で平坦面を意識し、東側で急な立ち上がりを意識しているように思えるが、東側は後世の開墾があり、西側はトレンチで削られた部分もあって断定はできない。

遺　物　土塁築造の時期に伴う遺物は出土しなかったが、盛土中から（Po240～242）が出土している。Po240はＩ６杭付近の土塁盛土の最下層で底を上にし潰れた状態で出土した。

時　期　時期を決定づける遺物は出土しなかったが、羽合町誌の中で『陰徳太平記』をもとに、吉川元春が天正９（1581）年に築いたと記されている馬ノ山に残る土塁の土層と本遺構のものが類似していた。



挿図68　乳母ヶ谷第２遺跡土塁断面図(1)

Po242

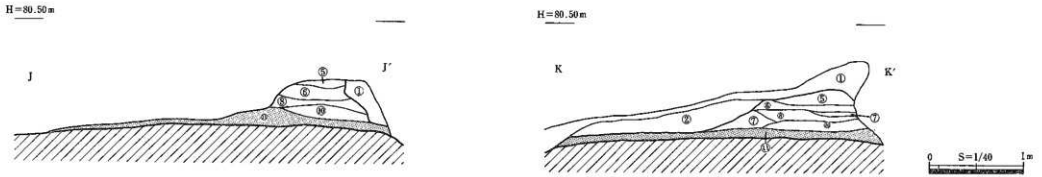
土師器

⑪暗黒色土(B.B層)

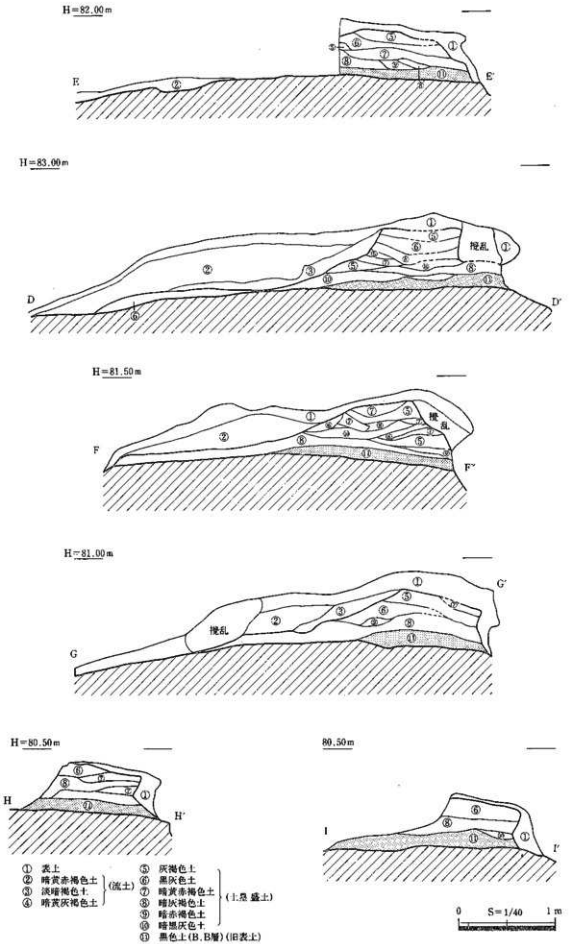
0　S=1/400　20m

① 表土
② 暗黄赤褐色土
③ 淡緑褐色土
④ 暗黄灰褐色土
(流土)
⑤ 灰褐色土
⑥ 黒灰色土
⑦ 暗黄赤褐色土
⑧ 暗灰褐色土
⑨ 暗赤褐色土
⑩ 暗黒灰色土
土盛盛土
⑪ 黒色土(B.B層)(IB表土)

挿図69　乳母ヶ谷第2遺跡土塁平面図



挿図70　乳母ヶ谷第2遺跡土塁断面図(2)



挿図71 乳母ヶ谷第2遺跡土壌断面図(3)

ＳＳ01（挿図72、図版35）

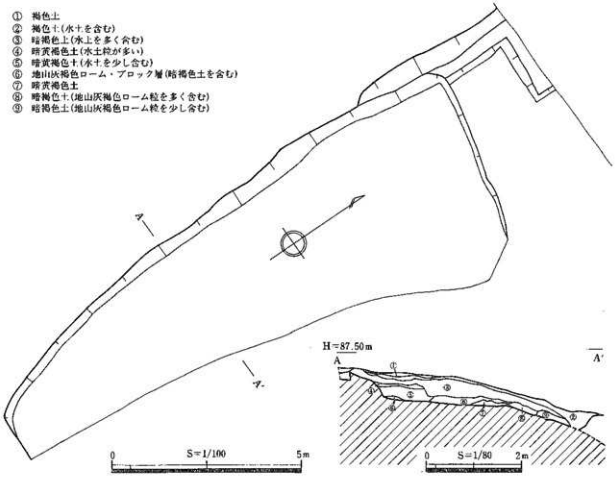
位　置　調査区最北端、Ｂ１・Ｂ２・Ｃ２グリッド付近、尾根の頂部から肩部にかけて位置する。耕作土を除去し、灰褐色ローム層で褐色土の落ち込みを検出したが、遺構が北に延びる様相を呈したため、10m程拡張して全体を確認した。

形　態　灰褐色ローム層を切りこみ平坦面を作ると共に、北側に２段の階段上の施設を設けている。平坦面には10cm幅の溝がほぼ等間隔に尾根に直行して延びている様子が確認できたが、浅いもので図化できなかった。この溝は耕作の畝の可能性がある。

土　層　①層から③層までは近年の耕作による撹乱である。

規　模　規模は南北方向の幅が最大で５m、最小で1.5mであった。深さは70cm程で、段状の高さは２段とも30cm程であった。

遺　物　近世以降の磁器が出土していることから、この時期の遺構と思われる。



挿図72　乳母ヶ谷第２遺跡SS01遺構図

第３節　宇野古墳群の調査

１．宇野３号墳（挿図73・74、図版31）

位　　置　鉤状に北から南に伸びる丘陵の、最も北側の屈曲部上、標高86.5mに位置している。この部分には２基の古墳が隣接して築造されている。３号墳の南東側には４号墳が隣接している。

墳丘・周溝　墳丘は、すでに梨耕作によって大きく削平を受けており、わずかに70cmの高まりが残る程度であった。周溝も大変遺存状態が悪く、北側にわずかに残っている程度で、幅1.3m、深さ12cmを測る。黒褐色土がほぼ円形に見られたことより、径約10mを測る円墳であると思われる。南西側の周溝内縁がやや外側に張り出しており、造り出し状のものが付設していた可能性がある。

遺物・時期　遺物は、墳丘の南側に降りた斜面で、表土及び耕作土中より須恵器片が出土しているが、小片のため図化することができず、時期を判断することができなかった。また、出土位置からも３号墳に伴うものかどうか疑わしい。

隣接する４号墳においては、５世紀後半と思われる須恵器直口壺が出土しており、４号墳との切り合い関係は不明であるが、４号墳に近い築造年代が与えられると思われる。

２．宇野４号墳（挿図74・111、図版31・52）

位　　置　調査区の北側、丘陵の最初の屈曲部の標高85.8mに位置し、４号墳の北西側には３号墳が隣接している。４号墳は、1990年の羽合町教育委員会の試掘調査で確認されたものである。

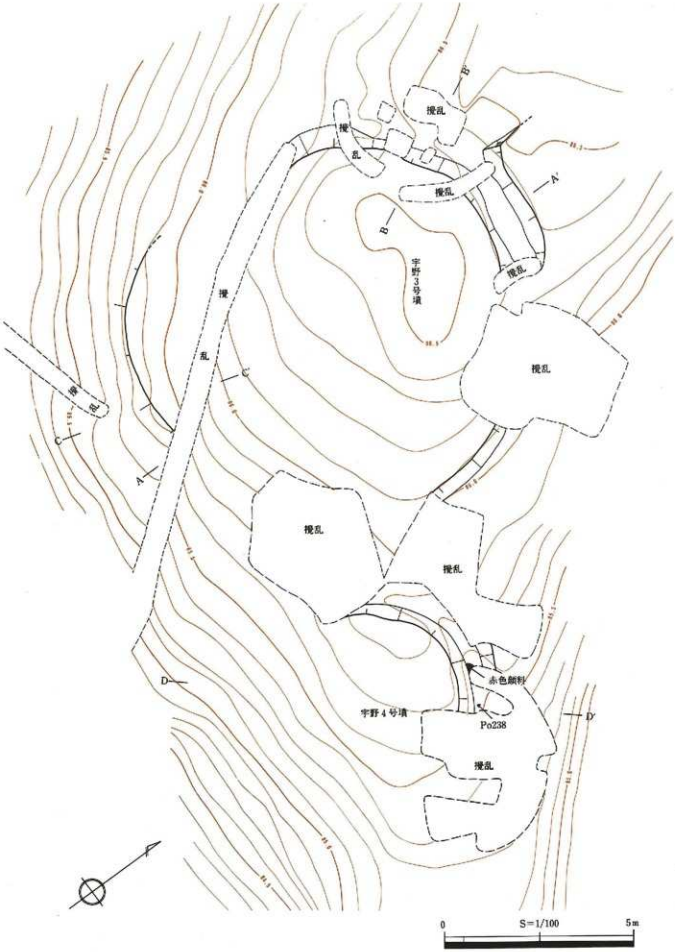
墳丘・周溝　墳丘は３号墳同様、梨耕作によって大きく削平され平坦になっていたが、わずかに弧状にのびる周溝埋土（黒褐色土）が検出されたために円墳であることが判明した。正確な規模は不明であるが小規模なものと思われる。周溝は東側にわずかに残る程度で、幅0.6m、深さ10cmを測る。周溝底には、朱と思われる赤色顔料塊がわずかに検出され、周溝内には周溝内埋葬等の施設があった可能性がある。

遺　　物　本調査で周溝を掘り下げたところ、黒褐色土中よりバラバラの状態で須恵器直口壺Po238が出土している。接合はしないが、同一個体と思われる口縁部の破片が先の試掘調査で出土している。

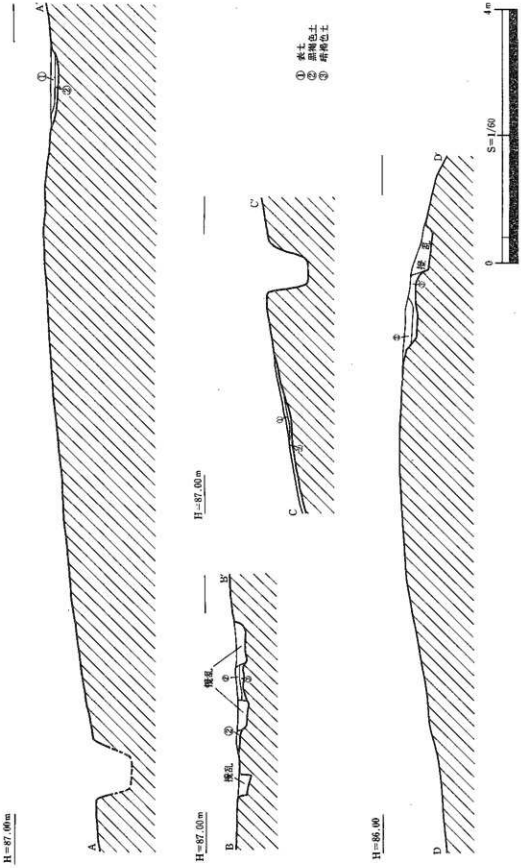
時　　期　須恵器直口壺Po238は、山本編年Ⅰ期（５世紀後半）の時期が与えられると思われ、築造時期もこの時期に近いものが与えられると思われる。

写真９　宇野古墳群現地説明会

写真10　宇野古墳群・乳母ヶ谷第２遺跡完堀



挿図73　宇野3号墳・4号墳墳丘図



挿図74　宇野3号墳・4号墳土層断面図

3．宇野５号墳（挿図75・77・79、図版31・32）

位　置　鉤状に伸びる丘陵の、北から二番目の屈曲部のやや広くなった標高86.7mの尾根上に位置する。この部分には３基の古墳が隣接して築造されている。この一群の最も北側に５号墳がある。

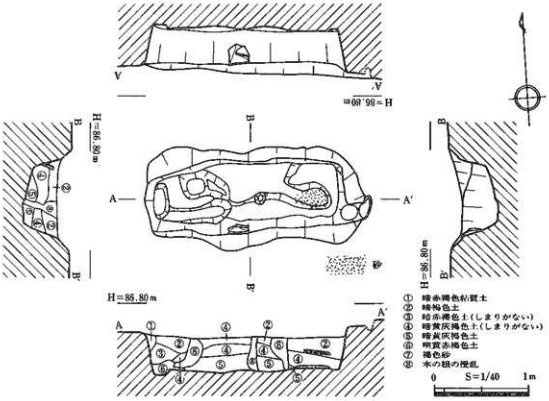
墳　丘　５号墳上には土塁が構築されており、この時点で墳丘はすでに削平されたと思われ、ほぼ平坦になっていた。また、北東側が梨耕作によってカットされているが、遺存する周溝がほぼ円形に巡ることより、径7.2mを測る円墳と考えられる。

周　溝　周溝は南東側の遺存状態が比較的よく、幅0.7～1.3m、深さ10cmを測る。北西側は外縁部が削られており不明であるが、周溝は西側部分にブリッジ状の掘り残しがあり、全周するものではない。

主体部　墳丘のほぼ中央で、地山まで掘り込んだ主体部が検出された。掘り下げたところ、攪乱土とともに板状の安山岩の破片が散乱していた。石材の一部が墓壙壁に張り付いた状態で検出されており、主体部は箱式石棺であると考えられる。墓壙の規模は、長さ2.1m、幅1.0m、深さ0.5mを測り、主軸方向はN－84°－Eとほぼ東西に振る。石棺の規模は不明であるが、小口板・側板を支えるための幅15cm、深さ５cmの掘り方が検出された。その内法を測ると、長さが約1.7mあった。幅については不明である。石棺内には底石は用いておらず、砂が敷かれていたと思われる。この砂は東側底部に遺存していた。石棺と墓壙の間には粘土を裏込めしていたと思われる。

主体部が地山を掘り込んで造られていることより、本来は盛土がさほど行われない低墳丘の古墳であったと思われる。

遺物・時期　遺物は全く出土していないために、５号墳の築造時期は不明である。



挿図75　宇野５号墳主体部遺構図

4．宇野６号墳（挿図76・78・79、図版31・32）

位　置　隣接する３基の古墳のうち、最も東側の標高86.1mの地点に位置する。

墳　丘　６号墳上には土塁が築かれており、墳丘はこの時点ですでに削平されたと思われ、平坦になっている。また、南東側は後世の耕作によって大きく掘削されている。1989年の羽合町教育委員会による試掘調査で、周溝と溝状の落ち込みが確認されていたものである。

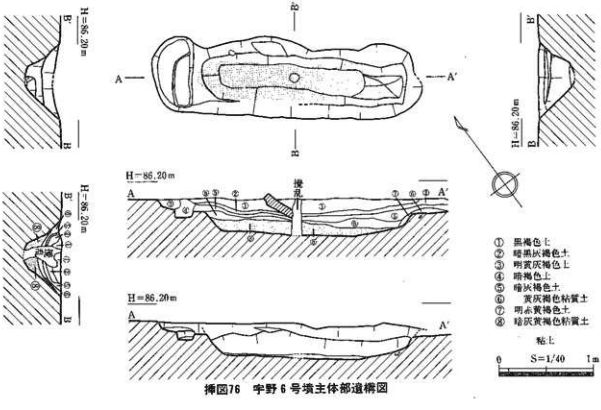
周　溝　周溝は、幅0.5〜1.0m、深さ10〜15cmを測る。周溝がやや丸みを帯びてはいるものの北東側のコーナーが角度をもって折れ曲がる状況を示すことから、一辺5.5mを測る方墳であると考えられる。周溝は西側でブリッジ状の掘り残しがあり、全周するものではない。

溝状遺構　先の試掘調査で墳丘の中央に当たる部分で、溝状の落ち込みが検出されている。この溝は場所的には６号墳の主体部に当たる位置にあるが、この溝の土層を見ると、他の溝状遺構と同じ自然堆積したと思われる黒褐色の埋土が入っている。また、幅54cm、厚さ10cm、高さ36cmの扁平な石材が斜めに落ち込んでいる。黒褐色土を除去すると、その下はよく締まった粘質土が入っており、この粘質土の断面は、U字状になっている。このことから、この溝状遺構は６号墳の主体部を再利用したもので、６号墳が削平された時点で主体部が溝状に現れ、石材を立てたものと思われる。その後溝内に腐食土が堆積したと考えられる。６号墳上には土塁があり、この溝状遺構は土塁に伴うものとも考えられる。

主体部　６号墳の主体部は、粘質土の断面がU字状になることより割竹形木棺の可能性がある。墓壙の規模は、長さ2.2m、幅0.5m、深さ0.38mを測る。主軸方向は、N－51°－Wに振る。墓壙底面の東側には幅５cm、深さ４cmの溝が掘り込まれており、小口板状のものが立てられたものと思われる。

主体部の西には隣接して長径0.8m、短径0.4mを測り楕円形を呈し、二段に掘り込む土壙があるが、土層の状態を見ると、後に２回にわたって掘り込まれたものである。

主体部が地山を掘り込んで造られていることにより、本来は盛土がさほど行われない低墳



挿図76　宇野６号墳主体部遺構図

丘の古墳であったと思われる。

土　　壙　6号墳に隣接して土壙が2基検出されている。東側のものをＳＫ02、やや離れて西側のものをＳＫ03とした。ＳＫ02は隅丸の長方形を呈し、長軸0.48m、短軸0.45m、深さ0.34mを測る。主軸方向はＮ－48°－Ｅに振る。ＳＫ03は隅丸の長方形を呈し、長軸0.96m、残存短軸0.33m、深さ0.38mを測る。主軸方向はＮ－68°－Ｅに振る。いずれも南側は後世に削平されている。6号墳に伴うものかどうか不明である。

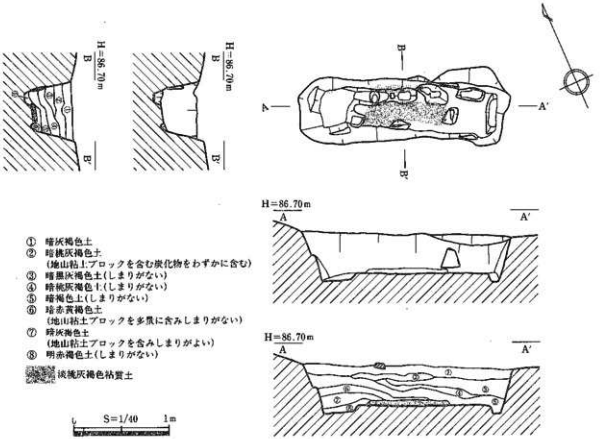
遺物・時期　遺物は全く検出されていないため、時期は不明である。

5．宇野9号墳（挿図78～80、図版31・33）

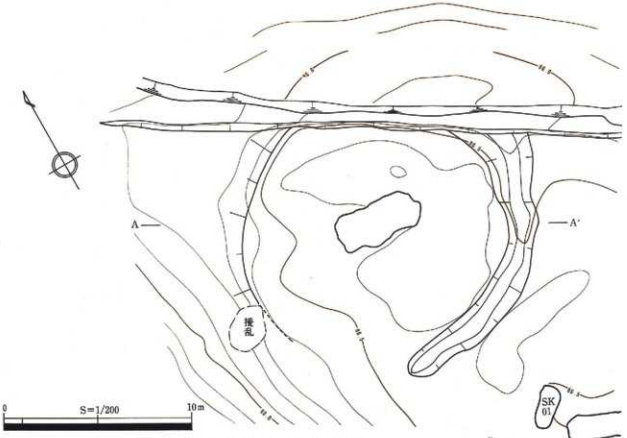
位　　置　3基の古墳が隣接する場所の6号墳の西側、標高86.6mの地点に位置する。

墳　　丘　墳丘、周溝も削平され、ほぼ平坦になっていたが、他の2基とほぼ同じ主軸方向をもつ主体部と、ごくわずかに周溝の肩が東側に検出でき、単独の古墳であると判断した。墳形・規模とも不明であるが、他の古墳同様小規模なものと思われる。

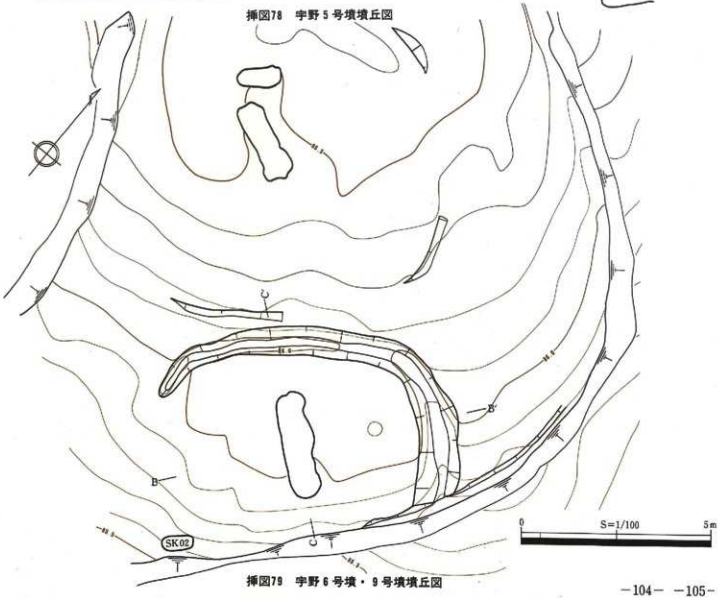
主 体 部　墳丘の中央と思われるところに主体部が検出された。これは1989年の羽合町教育委員会の試掘調査のＴ13で検出されたものである。掘り下げたところ、攪乱土とともに、破砕された扁平な安山岩が入り込んでおり、主体部は箱式石棺と考えられる。主軸方向はＮ－65°－Ｗに振る。石棺の規模は不明であるが、墓壙底には石棺の石材を立てたと思われる掘り方が検出され、その内法を測ると、長さ約1.4mある。幅については不明である。石棺の底には石は用いず、粘土を敷くものと考えられる。墓壙の規模は、長さ2.2m、幅0.65m、深さ0.4mを測る。



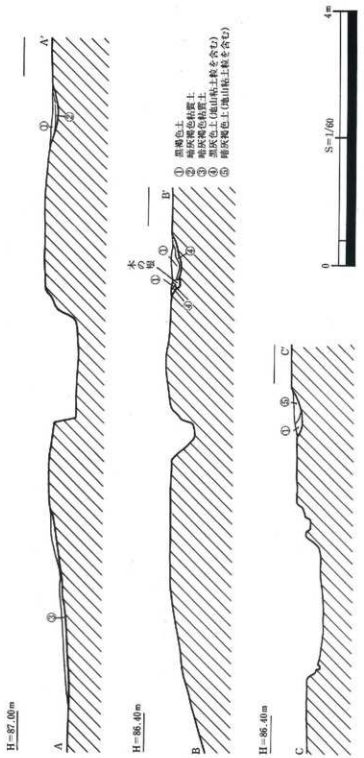
挿図77　宇野9号墳主体部遺構図



挿図78　宇野5号墳墳丘図



挿図79　宇野6号墳・9号墳墳丘図



挿図80　宇野5号墳・6号墳土層断面図

主体部が地山を掘り込んで造られることより、本来は盛土がさほど行われない低墳丘の古墳であったと考えられる。

ＳＫ01　主体部の西40cmのところには、長楕円形を呈す長径1.18m、短径0.46m、深さ0.19mを測る土壙が検出された。主軸方向はＮ－36°－Ｅに振る。ＳＫ01は９号墳に伴う埋葬施設と思われる。

遺物・時期　遺物は全く検出されていないため、時期は不明であるが、隣接して築造されている３基の古墳のなかでは、最も周溝の遺存状態が悪く、一番初めに築造されたものと思われる。

６．宇野７号墳（挿図81～83・111、図版33・34・52）

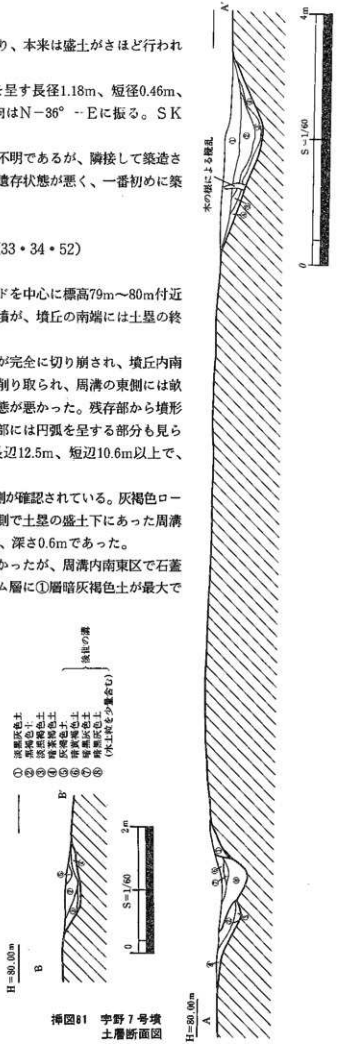
位　置　調査区南側、Ｉ14グリッド及びＪ14グリッドを中心に標高79m～80m付近の、尾根の先端に位置し、南側には宇野８号墳が、墳丘の南端には土塁の終点が存在する。

墳　丘　開墾による削平がひどく、墳丘は西側斜面が完全に切り崩され、墳丘内南側と東側は土地の境界用の溝によって地山が削り取られ、周溝の東側には畝の痕跡が残っており、墳丘、周溝共に残存状態が悪かった。残存部から墳形をみると方墳と考えられる。東側の周溝内縁部には円弧を呈する部分も見られる。主体部は確認できなかった。規模は長辺12.5m、短辺10.6m以上で、高さ0.9mであった。

周　溝　周溝検出はＴ13（羽合町試掘）で周溝の北側が確認されている。灰褐色ローム層に黒褐色土の落ち込みが確認された。北側で土塁の盛土下にあった周溝部分は比較的残りがよかった。規模は幅3.0m、深さ0.6mであった。

石蓋土壙　埋葬施設に関して、墳丘内では検出できなかったが、周溝内南東区で石蓋土壙の存在を確認した。検出時は赤褐色ローム層に①層暗灰褐色土が最大で25cm、最小で15cm埋め込まれていた。その下から、板状安山岩が10枚重なって出土した。最下位の石材は、大きさが最大幅38cm、最小幅20cm、長さ64cmで片袖型をしたもので、最大幅の方を南西に向けて置かれていた。さらに、順々に板石が積み上げられ、最上位の北東と南西に小さな板石が１枚ずつ置かれ、特に南西側に対角線で22cm程の大きさがある六角形をした石が置かれ、この石に赤色塗彩された痕跡も観察できた。この土壙の主軸方向はＮ－63°－Ｅである。土壙は２段に掘り込まれていた。石蓋土壙の規模は１段目が長軸0.9m×短軸0.6mで、深さ0.25mであり、２段目が長軸0.63m×短軸0.32mで、深さ0.22mである。全体の深さは0.47mである。

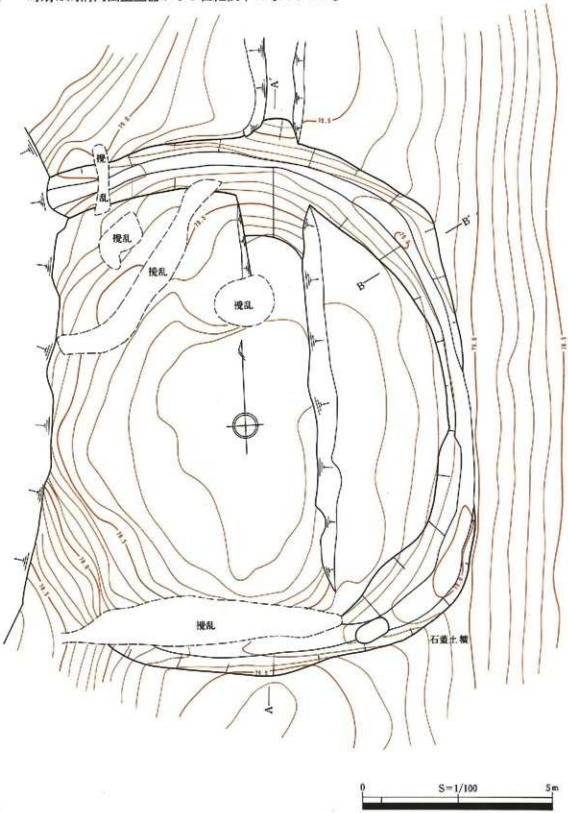
土　層　⑤～⑧層は後世の攪乱土である。①～④層は周溝埋土である。



挿図81　宇野７号墳
土層断面図

遺　物　出土遺物は土師器片と埴輪片で、周溝内北東区では高坏の坏部（Po237）が石蓋土壙上から西2m以内に破砕して出土し、③層を掘り下げ中に埴輪（Po238）が出土した。北東区では接合できなかったが細かく砕け散乱した状態で赤色塗彩が施された甕も出土している。古墳から北に5m程離れ、土墓の東側に掘り込まれた開墾溝の付近から、甕口縁部（Po243）がかたまって出土した。

時　期　時期は周溝内出土土器から5世紀後半と考えられる。



挿図82　宇野7号墳墳丘図

7．宇野８号墳（挿図84・85・111、図版34）

位　置　調査区南端Ⅰ14・15グリッド周辺で標高79m～80m付近の尾根の先端に築造されている。宇野７号墳南側に位置する。

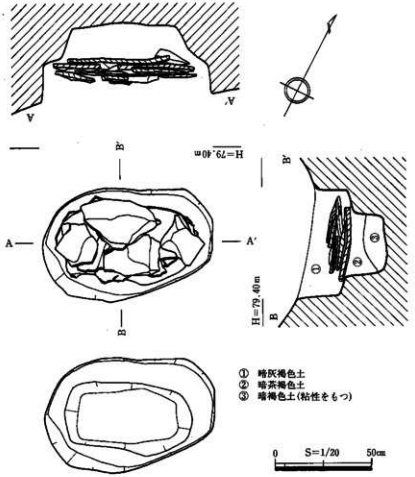
墳　丘　開墾による削平がひどく、北西側は切り崩され、墳頂部には梨穴が掘り込まれ残存状態が悪かった。残存部で墳形をみると円墳と考えられる。規模は残存部で測定し、墳丘規模は長径13.8m、短径11m以上で高さ0.8mであった。主体部は確認できなかった。

周　溝　周溝検出はT14（羽合町試掘）で周溝の北側を確認し、赤褐色ローム層で黒褐色土の落ち込みを追いかけながら行ない、周溝全体を確認したが、残存状態は非常に悪かった。周溝の規模は幅2.8m、深さ0.4mであった。

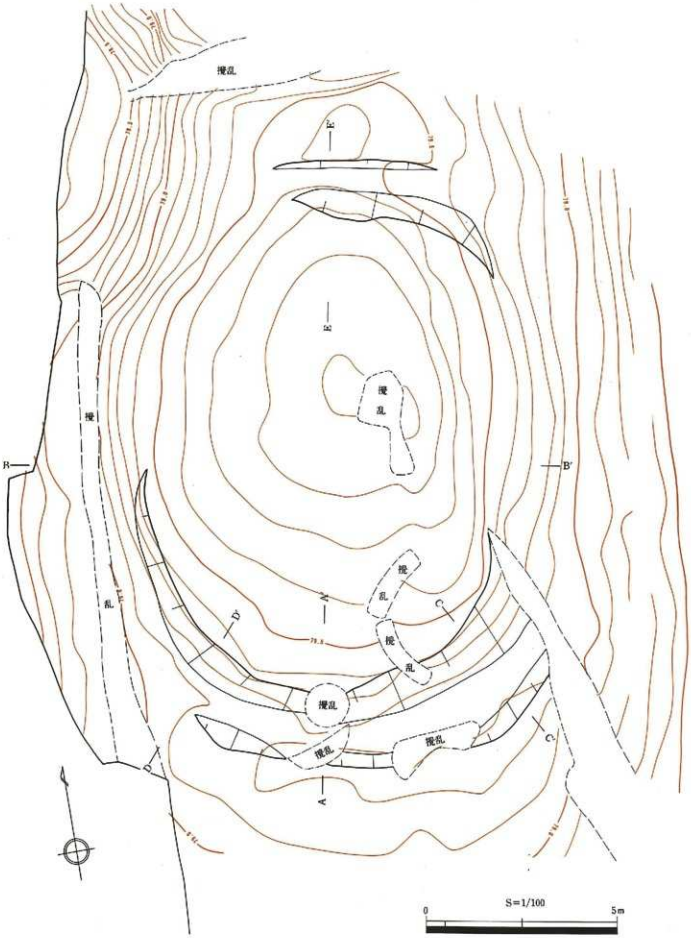
土　層　②③層が周溝埋土で、②層に土器が含まれていた。

遺　物　土器の出土は希薄であったが、周溝西側で黒褐色の中から同一個体と思われる須恵器甕（Po239）が２ケ所にかたまって出土したが、接合はしなかった。

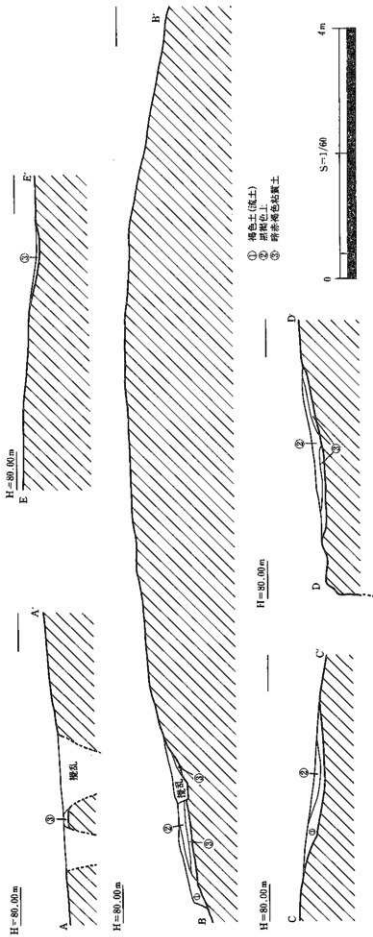
時　期　時期は周溝内出土土器から５世紀後半と考えられる。



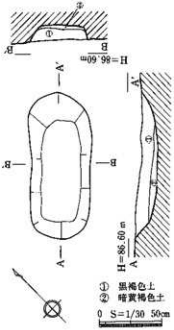
挿図83　宇野７号墳石蓋土壙遺構図



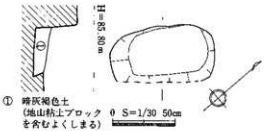
挿図84　宇野8号墳墳丘図



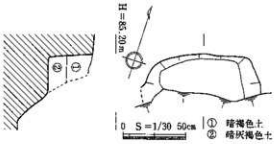
挿図85　宇野８号墳土層断面図



挿図86　宇野古墳群SK01遺構図



挿図87　宇野古墳群SK02遺構図



挿図88　宇野古墳群SK03遺構図

古墳名	墳形	直径（m）		埋葬施設	出土遺物	備考
		径（全長）	高さ			
宇野1号墳	円墳	14	1	−	−	−
宇野2号墳	−	−	−	−	−	再踏査の結果古墳ではない
*宇野3号墳	円墳	10.3	0.48	−	−	1990年度調査
*宇野4号墳	円墳	−	−	−	須恵器直口壺	1990年度調査
*宇野5号墳	円墳	7.0	0.42	箱式石棺	−	1990年度調査
*宇野6号墳	方墳	5.5	0.25	割竹形木棺	−	1990年度調査
*宇野7号墳	方墳	12.5	0.9	石蓋土壙（周溝）	土師器高坏・埴輪	1990年度調査
*宇野8号墳	円墳	13.8	0.8	−	須恵器壺	1990年度調査
*宇野9号墳	−	−	−	箱式石棺	−	1990年度調査　土壙1

古墳名の前に*印が付してあるものは、発掘調査済みの古墳である。1・2号墳は鳥取県教育委員会『改訂　鳥取県遺跡地図』第4冊分　1978年による。3～9号は本報告書参照。

挿表8　宇野古墳群一覧表

埋葬施設	形態	規模（m）（長軸×短軸−深さ）	主軸方向	遺物	備考
宇野5号墳主体部	箱式石棺	2.1 ×1.0 −0.52	N−84° −E	なし	底面に砂
宇野6号墳主体部	割竹形木棺	2.2 ×0.5 −0.38	N−51° −W	なし	
宇野7号墳周溝内埋葬施設	石蓋土壙	（1段）0.9 ×0.6 （2段）0.63×0.32	N−65° −E	なし	
宇野9号墳主体部	箱式石棺	2.21×0.63−0.47	N−65° −W	なし	底面に粘土
SK01	土壙	1.18×0.46−0.19	N−36° −E	なし	9号墳に伴う
SK02	土壙	0.84×0.45−0.34	N−48° −E	なし	
SK03	土壙	0.96×0.33−0.38	N−68° −E	なし	

挿表9　宇野古墳群埋葬施設他一覧表

第6章　遺構と遺物の検討

第1節　前方後円墳の築造について　―南谷19号墳を例にして―

古墳の造営は、言うまでもなく綿密な企画と準備、そして構築に際して大量の労働力、高度な土木技術が必要である。とりわけ、前方後円墳の築造には、一般的に見られる円墳、方墳と比較しても、その整美な平面プランを見ても分かるようにより周到な企画・施工技術が必要と思われる。橋本誠一[58]は、墳丘の築造には、

① 考古学的には明確にしがたいものの、計画の段階。
② 施工計画策定後、そのプランを実際の地表面に移す段階。
③ 実際に盛土、削平によって墳丘を形成する段階。
④ 外表施設を整える段階。

があったことを論じている。

①の段階については、綿密な地形測量をもとに上田宏範[59]、石部正志、田中英夫、堀田啓一、宮川渉[60]などの研究があり、墳丘の企画性および設計段階・施工段階で使用されたと思われる基準尺度の「尋」が推定されている。また、特に各地に存在するバチ形に開く前方部をもつ出現期の前方後円墳が奈良県・箸墓古墳の相似形となることが指摘されてきており[61][62]、各地の首長層と畿内との密接な関係があったと考えられている。

②段階以降は、発掘調査の成果として検討されている。南谷19号墳についても同様な築造段階があったものと思われるが、特に②・③の段階については調査の結果ある程度推定することができる。④の段階については葺石・埴輪等は確認されておらず、省略されたものと考えられる。

まず、この古墳の築造について注目される3つの点について考えてみたい。

区画溝　1点目は、19号墳には墳丘の周囲を巡る周溝とは別に、盛土される以前に南北のくびれ部を結ぶように、幅3.5mにわたって旧表土が後円部の円弧に沿うように削り取られていることである。盛土下埋葬施設をはさんで南側は深さ0.3mであるのに対し、北側は深さ0.9～1.4mと深くなる、断面逆台形状の溝が掘り込まれている。北側溝の埋め土を見ると、くびれ部北側墳端部は意図的に高く土手状に積まれ、さらに、盛土下埋葬施設の北側テラスと土手状の埋め土との間の部分を黄褐色系の土と黒褐色系の土で交互に積んで、ほぼ水平になるように埋めている状況が見られ、明らかに人為的な状況が見られる。

前方後円墳に見られる盛土以前の溝・段は、これまでに埋没溝、埋没周溝、区画溝と呼ばれてきたものである。

金子章は埼玉県児玉町・長沖8号墳の溝について検討し[63]、「(1)前方後円墳として構築する際の施工段階的作業のなかで採られた措置なのか、(2)当初円墳として設計、施工されたものが、ある段階で前方後円墳に設計変更された為なのか、(3)当初円墳として構築されたものが、後に前方後円墳に改築されたため」の3点の考えがあることを指摘し、(1)については後円部の周溝を一周させる必要はないとし、円墳が変更ないしは改築されたものと考えている。

これに対し、真田廣幸は鳥取県倉吉市・高鼻2号墳の溝について検討し[64]、状況としては円墳を前方後円墳に改築したように見えるが、これは盛土作業に段階があるためで、まず墳丘下の溝内縁に沿って盛土し、さらに仕上げの盛土が行われるものとし、前方後円墳を築造する過程のなかで採られた措置と考えている。

古墳名	所在地	墳形 墳丘規模	墳丘下溝規模 幅(m)	深さ(m)	溝形態	内部主体	時期(72) その他
南谷19号墳	鳥取県東伯郡羽合町南谷	前方後円墳 全長32m 後円部径19.2m	3.5	0.9～1.4	A類	箱式石棺	6世紀前 MT15 盛土下埋葬施設
高鼻2号墳	鳥取県倉吉市鋤	前方後円墳 全長26m 後円部径17.7m	2.2	0.6	A類	箱式石棺	6世紀前 MT15～TK10
西穂波16号墳	鳥取県東伯郡大栄町穂波	前方後円墳 全長32m 後円部径20m	4.0※	1.2※	A類	横穴式石室	6世紀後 TK43
上種西14号墳	鳥取県東伯郡大栄町上種	前方後円墳 全長28m 後円部径20m	3.4※ 2.0※	0.32 0.7	A類 B類	木棺	6世紀後 TK10～TK43
下種8号墳	鳥取県東伯郡大栄町下種	前方後円墳 全長28m※ 後円部径18m※	2.5	－	B類	箱式石棺	6世紀中 TK10
別所1号墳	鳥取県米子市別所	前方後円墳 全長27m 後円部径18m	4.0	0.42	A類	横穴式石室 (2基)	6世紀後
陰田37号墳	鳥取県米子市陰田	前方後円墳 全長22.5m 後円部径15.5m	3.2	0.3	A類	横穴式石室	6世紀後 TK10
長瀬高浜遺跡 10BSD03・05・06	鳥取県東伯郡羽合町長瀬	前方後円墳 全長30m 後円部径17m	2.5～4.0	－	A類	－	－

※は報告書図面で測定

挿表10　区画溝を有する前方後円墳（鳥取県内）

また、植野浩三は鳥取県大栄町西穂波16号墳について検討し[64]、自然堆積で埋まった状況が見られないことより墳丘を後円部と前方部に区画し、後円部の盛土を行うための目安となる地割りのために掘り込まれたものと考えている。

以上をまとめると円墳を変更・改築したものか、前方後円墳築造の段階の一工程とする2つの考え方になるが、南谷19号墳については、金子氏による（2）の可能性はあるものの、円墳を改築した状況は窺えず、前方後円墳築造の一段階で採られた措置と考えたほうがよいと思われる。さらにこの溝の性格を考えるならば、後円部の盛土の目安としての地割のために掘り込まれたものと考えられ、他の古墳についても同様の性格があったものと思われる。

この種の溝の名称については、植野氏にならって以下区画溝と呼ぶことにする。なお、19号墳には後述するが性格を異にする2種類の溝があり、盛土下埋葬施設をはさんで南側に残る浅い溝を一次区画溝、北側の深い溝を二次区画溝と区別することとした。南谷19号墳と同様に区画溝をもつ前方後円墳は、管見に触れるかぎり17例あり、鳥取県内だけでも、南谷19号墳・高鼻2号墳・西穂波16号墳・上種西14号墳・下種8号墳・別所1号墳・陰田37号墳・長瀬高浜遺跡10BSD05・06の8例が知られている[65]。これらの区画溝の形態を見ると、(A)後円部の円弧に沿ってくびれ部を連結するように弧状に入るもの、もしくは方形になるもの、(B)前方後円形に区画するものに大きく分けることができ、南谷19号墳は前者に含まれる形態になると思われる。

近年になり、前方後円墳のほかに円墳にも溝・段が見られることが分かってきた[66]。前方後円墳のものと円墳のものと機能的に違いがあるのかどうかは今後の課題としたいが、いずれも墳丘構造の段階の一つとして採られた工程と考えてよいだろう。

南谷19号墳の区画溝は同様の役割を持っていたと考えられるのであるが、単に区画のための溝であれば、一次区画溝のように浅いもので十分にその役目を果たすと思われ、二次区画溝のように1m以上も掘り込む必要はないと思われる。二次区画溝の底面は緩やかに南側に

むかって高くなっていることと、19号墳の墳丘基盤は旧表土面を2m以上も削り出していることに注目すると、二次区画溝は後円部墳丘築造に当たって、北側周溝底と後円部墳丘基盤上を結ぶ通路の役割を果たしたものと考えると解決すると思われる。つまり、一次区画溝は後円部を区画するためだけに機能し、二次区画溝は後円部盛土作業のために使った通路（作業道）として、底面に傾斜を持たせながら掘り込んだものとすることである。二次区画溝の底部の平面形は円弧を残していることから、一次区画溝内縁（後円部旧表土面）を意識して掘り込まれ、区画溝の役目を残していると考えられる。

後円部旧表剝取り部分

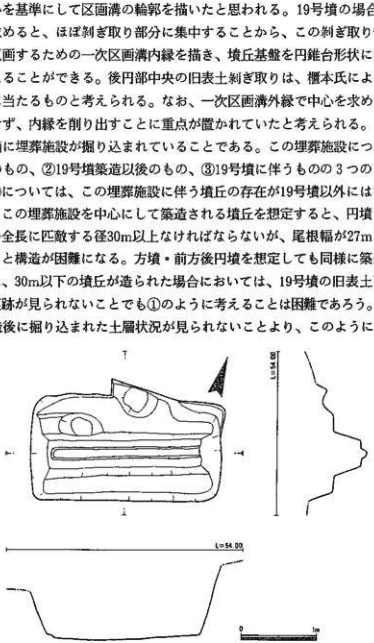
2点目は、後円部のほぼ中央部に4.0m×3.2mの不整な方形に旧表土が剝ぎ取られた部分が見られることである。このような剝ぎ取りをもつ古墳の類例を待ちたいが、この剝ぎ取り部分が何のためにあるのかを検討してみたい。

まず考えられることは、この部分の上方は、のちに主体部が作られる場所であり、主体部の中央が剝ぎ取り部分にあることから、主体部を後円部の中央に作るための目印として剝ぎ取ったものとすることである。

次に考えられることは、一次区画溝の基準点であるということである。区画溝を実際に地面に掘るためには、どこかを基準にして区画溝の輪郭を描いたと思われる。19号墳の場合、一次区画溝内縁の中心を求めると、ほぼ剝ぎ取り部分に集中することから、この剝ぎ取り部分を中心にして後円部を区画するための一次区画溝内縁を描き、墳丘基盤を円錐台形状に削り出していったものと考えることができる。後円部中央の旧表土剝ぎ取りは、櫃本氏による②段階の最も初期の段階に当たるものと考えられる。なお、一次区画溝外縁で中心を求めても剝ぎ取り部分には集中せず、内縁を削り出すことに重点が置かれていたと考えられる。

盛土下埋葬施設

3点目は、墳丘盛土以前に埋葬施設が掘り込まれていることである。この埋葬施設については、①19号墳築造以前のもの、②19号墳築造以後のもの、③19号墳に伴うものの3つの考え方があると思われる。①については、この埋葬施設に伴う墳丘の存在が19号墳以外には考えられないこと、つまり、この埋葬施設を中心にして築造される墳丘を想定すると、円墳であればその規模は19号墳の全長に匹敵する径30m以上なければならないが、尾根幅が27mしかないという状況を考えると構造が困難になる。方墳・前方後円墳を想定しても同様に築造は困難と考えられる。また、30m以下の墳丘が造られた場合においては、19号墳の旧表土面には他の古墳が築かれた痕跡が見られないことでも①のように考えることは困難であろう。②については、19号墳築造後に掘り込まれた土層状況が見られないことより、このようには考え難い。よって③と考えるのが妥当であると思われる。また、後円部に造られた主体部とほぼ同じ主軸方向となることからもこの埋葬施設は19号墳に伴うもので、墳丘築造計画に盛り込まれたものと考えたほうがよいであろう。この埋葬施設は、二次区画溝が通路として機能しな



挿図89　京都府大宮町小池古墳群2号土壙遺構図（報告書より転載）

くなった後に掘り込まれたものと考えられ、二次区画溝底面が一次区画溝底面にむかって傾斜するために、北側墓壙壁を造ることができなかったものと思われる。

盛土下埋葬施設の墓壙底には、主軸方向に平行して幅30cm、深さ15cmを測る断面逆台形状を呈す溝が掘り込まれている。この溝の埋土を見ると、中央に黒褐色土層（㉘㊿層）が入り込んでいる。この層は自然に入り込んだものと思われ締まりがない。このことにより、この溝は本来は空洞で、墓壙底に敷かれたと思われる木板が腐朽していった可能性がある。同様な溝は京都府大宮町・小池古墳群2号土壙[66]にも見られ、朴美子氏によるⅡC_3類に分類され、排水・排湿のために掘られたものと考えられている[67]。19号墳盛土下埋葬施設の溝は、排水のために掘られたものと考えてよいだろう。

以上南谷19号墳の注目される点を整理したが、以上のことを踏まえ、この古墳の築造工程を推定すると、次の段階があると思われる。

Ⅰ段階　南谷19号墳を築造するに当たって、まず築造場所が選ばれる。このことについては南谷古墳群の一支脈7号墳から23号墳全体を見渡さなければならない。13号墳は調査されていないが、立地が19号墳より高い位置にあり、立地状況を見ると19号墳より古い様相を呈す。20号墳も周溝が19号墳に切られることから、19号墳より古い築造と考えられる。19号墳は13号墳と20号墳との間の空間に築造され、13号墳からは約30m離れるが、20号墳とはほぼ接するところに立地していることから、13号墳に制約された立地状況を示す。

Ⅱ段階　後円部の中央部に当たる部分を剥ぎ取り、区画のための中心点を設け、この点を中心にして一次区画溝が掘られ後円部を区画する。

Ⅲ段階　周溝を掘り、墳丘基盤を前方後円形に削り出すと同時に二次区画溝を掘って通路とし、後円部盛土が行われ主体部が掘り込まれる。後円部盛土がある程度終了した段階で盛土下埋葬施設が掘り込まれる。

盛土の状況を細かく見ると、後円部は基盤層目体から東から西へ、南から北へ緩やかに下って傾斜しており、まずこのレベル差を補うために盛土が行われ、墳丘基盤を水平に整える。北側では㊸～㊼層を、西側では㊴㊹層を用いているが、北側の層は締まりが悪く、西側の層はよく締まるという違いが見られ、西側（前方部接合部側）を丁寧に造る意識が見られる。また、㊾～㊿層で、この西側基盤土層を押さえたものと思われる。

基盤面が整えられると、粘質の土を使って墳丘斜面側を高くなるように、北側では㉙㉝㊶層を、南側では㉙㉝㉟㊶層を、西側では㉝㉟㊱層を積む。これは、盛土が流失するのを未然に防ぐための処置と思われる。この段階でも東側はレベルが高く、ごく薄い盛土しかされない。墳丘斜面側が高く盛られるのに対し、中央部は薄く盛られるため、中央がへこんだ状況を示す。このへこんだ部分には黒褐色系の土と赤褐色系の土を互層状に積んでいる状況が見られる。

主体部はこの中央部のへこんだ部分が盛られた後に掘り込まれる。

Ⅳ段階　盛土下埋葬施設・二次区画溝の埋め戻し、前方部の盛土が行われる。

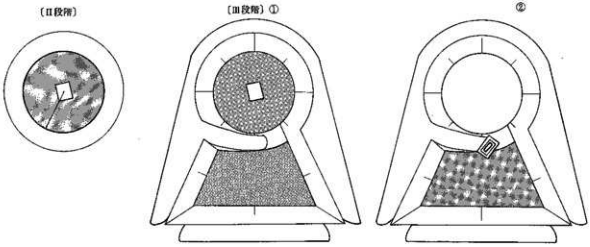
可能な限り細かい過程を復元すると、まず盛土下埋葬施設の埋め戻しが行われる。木蓋が置かれた後に一段目テラスを墓壙の中心にむかって傾斜するように埋め、㊲層で木蓋が隠れる程度に埋める。テラス埋め戻し土（㉗層）上には、地山が風化したような㉖層が薄く存在するが、この地山風化層は、二次区画溝底部においても見られ（㉟層）、この段階で一旦放置されたような状況が窺われる。盛土下埋葬施設、二次区画溝が掘り込まれている基盤層は大山倉吉軽石層で、短時間の雨水によっても風化しやすいものであるため、この放置の期間はごく短期間のものであったと思われる。

前方部墳丘の盛土は、二次区画溝が埋め戻されるのとほぼ同時に行われている。後円部同

様西側墳丘斜面側を⑯⑮⑭⑬⑫層で、南側を㉒㉑⑳⑲⑱層で高く積む。また、区画溝側も㉔層を土手状に高く盛る。

さらに二次区画溝を埋め戻すのであるが、くびれ部北側墳端は盛り上げることで土砂の流失を防いでいる。さらに、盛土下埋葬施設の北側テラスのレベルにあうようにほぼ水平に埋め戻す。この埋め戻しは、前方部墳丘盛土（⑲層）の後に行われる。さらに㉚層～㉙層が盛られるが、㉘㉗層のレベルはほぼ後円部・前方部の旧表土レベルになり、㉖層中には二次区画溝上にだけ破砕した石材が散在する。この層までを埋葬施設・区画溝の埋め戻し土と考えることができ、㉕～㉑層は前方部墳丘盛土とすることができる。

以上、南谷19号墳の築造過程を推定したのであるが、盛土下埋葬施設がなぜあのような位置に掘り込まれたのか、また、墳丘下の溝・段についても十分な検討ができないままになった。南谷古墳群における19号墳の相対的な位置については来年度以降の調査に期待するとともに、今後の課題としたい。



挿図90　南谷19号墳築造段階

第２節　弥生土器・土師器のまとめ

今回の調査で出土した土器の内、比較的まとまって出土した弥生土器、土師器の壺形土器、甕形土器、高坏形土器、器台形土器について分類を行なう。括弧内は出土位置を表わす。遺構名の前に付してあるアルファベットは遺跡名を表わす。Hは南谷ヒジリ遺跡、Mは南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群、Uは乳母ヶ谷第２遺跡・宇野古墳群である。文章中で土器番号は、Poを省略して用いる。最も出土量の多かった甕形土器から分類を行なう。

１．甕形土器

甕は口縁部の形態を中心に分類を行なった。甕Ａは、直立・外傾・外反してたちあがる複合口縁をもつ甕、甕Ｂは、複合口縁を呈するのであるが、口縁部下端の稜が鈍く、非常に分厚い感じであり甕Ａとは一見して異なるものである。甕Ｃは内傾する複合口縁をもつ甕、甕Ｄは「く」の字状の口縁をもつ甕、甕Ｅは内湾しながらたちあがる口縁をもつ甕である。

甕Ａはさらに複合口縁の形態でＡ１～Ａ４に、甕Ｄは口縁部の厚さでＤ１・Ｄ２に細分した。甕Ａはさらに、口縁部内外面の施文・調整技法で細分した。その細分基準は、口縁部外面にａ擬凹線を施すもの、ｂ平行沈線（波状文）を施すもの、ｃ平行沈線（波状文）を施した後にナデ消すもの、ｄ平行沈線（波状文）を施した後にミガキ消すもの、ｅヨコナデのみ

で仕上げるもの。口縁部内面を①ヨコナデするもの、②ミガくものである。

（1）甕A

A１　外傾して短く立ち上がる口縁をもつもの。口縁部は厚ぼったい感じである。口縁部外面ｃ、ｄに該当する個体はない。

ａ①：17（HSI02埋土）である。頸部以下を欠く。

ａ②：95（HSK02床）である。95は頸部にもミガキが認められる。107（HSK03埋土）は外面に擬凹線があることは確認でき、ａに属するのであるが、内面は風化が激しく不明である。

ｂ①：169（MSK05埋土）である。

ｂ②：96（HSK02埋土）、106（HSK03埋土）、109（HSK03埋土）、118（HSK04埋土）である。109は外面の風化が激しいのであるが、わずかに平行沈線の痕跡が残る。106、109は辛うじてミガキの単位がみられる。118は丁寧にミガく。

108（HSK03埋土）は、風化が激しく、外面に平行沈線が微かに残り、ｂに属するが、内面は不明である。

ｅ①：131（HSD01埋土）である。

その他、24（HSI04床）・77（HSK01床）はＡ１に属するが、風化のため調整不明。

Ａ１は、口唇端は丸く、口縁部下端は下垂しても極わずかで、ほとんどそのまま屈曲する。96は丸みをもって屈曲し、Ａ１の他の個体とは異なる。肩部の形状が分かるものは108・107・169で、いずれも張りがなく極なだらかにくだる。108は、肩部に刺突文を巡らす。169は貝殻腹縁による平行沈線を肩部に施す。内面のケズリは頸部直下から行われ、その方向の分かるものは頸部から肩部までは、左方向である。底部は不明である。

Ａ２　ほぼ直立して立ち上がる口縁をもつもの。口縁部外面ａ、ｃ～ｅに該当する個体はない。

ｂ①：105（HSK03埋土中）、159（MSI01埋土中）である。

ｂ②：150（HSI01埋土）は、内面ヨコナデされるが、一部にミガキがみられる。155（MSI01中央ピット内）は、口縁部内面全面をミガく。

口唇端は丸い。口縁部下端は、159がそのまま屈曲する他は、わずかに下垂する。肩部の形状が分かるものは、150のみである。肩部に張りはなく、極なだらかにくだる。150の肩部には平行沈線、155の肩部は風化しているのであるが、波状文の痕跡が認められた。内面のケズリは頸部直下から行われ、頸部から肩部までは左方向である。

Ａ３　外傾して立ち上がる口縁をもつもの。口縁の幅は拡張される。外反気味のものもある。口縁部外面ａに該当する個体はない。

ｂ①：73（HSK01床）、117（HSK04埋土）、153（MSI01埋土）、158（MSI01埋土）、170（MSK05埋土）、222（M19号墳黒色土層中）である。158の口唇端は、おさえたような面を持つが、その他は丸い。口縁部下端はそのまま屈曲するかわずかに垂れる。肩部の形状は分からない。内面のケズリは、頸部直下から始められる。頸部から肩部の間は、ケズリの方向は左方向である。

ｂ②：70～72・75・76（HSK01床）、91・92・94（HSK02床）、114～116（HSK04床）、である。口縁部から頸部にかけてヨコ方向のミガキがされる。口唇部からミガかれるものはなく、ミガキの単位が確認できるのは、口縁部下位から頸部にかけてである。口唇部付近はミガキのあとナデられたのか、口唇部付近はもともとミガかれなかったのか全個体についてははっきりとはしないが、ミガキ後にミガキがナデ消されたと思われる個体もある。72、116は口縁部に波状文を施す。いずれも口唇端は、おさえたような面をもつ。口縁部下端はいず

れも下垂する。肩部はなだらかながらも、A１・A２に比べて張りをもち、平行沈線と波状文によって飾られる。内面のケズリは、頸部直下から行われ、胴部までは左方向である。口縁部に平行沈線が施されるものは、70、71、75、76、91、92、94、114、115である。口唇端は丸い。口縁部下端は、71以外の個体は下垂または斜め下方に垂れる。全体が把握できるのは70のみである。肩部の張りは小さく、平行沈線で飾る。胴部から底部にかけてミガキがみられる。底部は小さな平底である。内面のケズリは、頸部直下から始まり、胴部下位まで左方向、以下は下→上のケズリである。

cに属するものはbに比べて外反気味に立ち上がるものが多い。

c①：74（HSK01床）、163（MSK04埋土）、164（MSK04埋土）である。163は、口縁部外面に平行沈線後波状文を施し、さらにその上をヨコナデする。口唇端は、163、164は、おさえたような面をもつ。74は丸い。口縁部下端は斜め下方か下に垂れる。

c②：79（HSK01床）、93（HSK02床）、104（HSK03埋土）、156（MSI01中央ピットおよび柱穴内）である。104は内面のミガキもナデ消す。79は波状文をナデけす。口唇端は丸い。口縁部下端部は、斜め下方または下方に垂れる。体部以下の形状は、不明である。内面のケズリは、頸部直下から始まる。方向は左方向である。

d①：該当する個体はない。

d②：103（HSK03床）、151・152（MSI01埋土）である。103の外面のミガキは部分的である。151、152は、口唇端をおさえる。口縁部下端は、151は外方に突出し、152はわずかに下垂する。内面のケズリは頸部直下から始まり、その方向は左方向と右方向のものがある。103は、ケズリの後、頸部直下をミガく。

e①：162（MSI02埋土）、165・166（MSK04）、171（MSK05埋土）、173（Mピット群1）である。171 を除いて、口唇端は丸いが、やや引き出されたようになる。口縁部下端は、そのまま屈曲するか、外方にわずかに突出するものがほとんどである。179は大きく外傾する。171はやや特異で、立ち上がりが高く外傾度も小さく、口唇端におさえたような面をもち、内面にハケ状の工具痕を残すヨコナデがされる。

e②：該当する個体はない。

A４　薄く外反気味に立ち上がる口縁部をもつもので、全てe②である。

全体を復元できたものはない。口縁部下端は外方に鋭く突出する。内部のケズリは、頸部直下から始まり、丁寧に器壁が薄くなるまでケズる。ケズリの方向は頸部直下から胴部下位までを右方向が主流である。口唇端の形状によりイ　口唇端が引き出したように先細り気味でおさえたような面をもたない。やや丸いものもある。ロ　口唇端をわずかにおさえるが、ハほどの面をもたない。ハ　口唇端をおさえるか外方へつまみ出すかするため、口唇端に面をもつに細分する。

イ　5・11（HSI02床）、15（HSI02埋土）、27・28（HSI04埋土）、54・56（HSI05埋土）、231（USI01埋土）である。48は風化していて断言はできないが、aに属するものだと思われる。

ロ　6・10（HSI02床）、14（HSI02埋土）、44（HSI05床）、137（H遺構外）である。

ハ　7・8・12・13（HSI02床）、16（HSI02埋土）、42・43・45・47・49（HSI05床）、50〜53・55（HSI05埋土）、132（H遺構外）、230（USI01床）である。

（2）甕B　口唇端は丸いものと、強いヨコナデによって外面に面をもつのがある。口縁部下端は、外方に鈍くわずかに突出する。外面をヨコナデで仕上げる。25（HSI04埋土）、78（HSK01埋土）、110（HSK03埋土）、119（HSI04床）、120（HSK04床）がある。内面は、78、25を除き、ハケ状の工具痕を残す強いナデの後粗いミガキをほどこす。Po78は小型の甕で、

胎土も特異である。焼成も他の土器に比べて堅い焼き上がりである。口縁部外面は、平行沈線後ナデる。

(3) 甕C　口縁部内外面は、全てe②である。9（HSI02床）、57（HSI05床）、58（HSI05埋土）である。58は風化が激しい。全体を把握できるのは、8のみである。口縁部下端は外方に突出する。胴部はよく張り、胴部最大径が器高をしのぐ。外面肩部ナデ、胴部中位ヨコナナメハケ、胴部下位から底部はタテハケ後ナデ。内面は頸部直下から底部近くまで右方向のケズリ。底部に指頭圧痕が見られる。底部に焼成後穿孔する。

(4) 甕D　D1は口縁部が薄手のもの、D2は口縁部が厚手のものである。

D1　口縁部内外面は、全てe②である。61（HSI05埋土）、128（HSD01埋土）、129（HSD01埋土）、135（H遺構外）、233（USI01埋土）、234（USI01床）がある。233は、口縁が外反して立ち上がり、外面頸部直下に、タタキの痕がみられる。

D2　口縁部内外面は全てe②である。213・214（M22号墳周溝）である。肉厚の土器で、口縁部は外反しながら大きく開いて立ち上がる。全体を復元できたものはなかった。頸部以下をケズる。

(5) 甕E　口縁部内外面は、全てe②である。133（HSD01）、211（M21号墳周溝内）がある。133は、胴部はよく張る。底部は不明であるが、丸底を呈しているものと思われる。体部外面ナデ。体部内面は、頸部直下にはナデ、以下底部近くまで右方向のケズリである。211は、口唇端は、わずかに内側に肥厚する。体部は外面ナデ、球状によく張る様相を呈する。内面のケズリは頸部やや下から始まり、胴部中位までは左方向である。以下は不明である。

2．壺形土器

壺の資料は少ない。口縁部の形態を中心にA～Cに分類した。壺Aは複合口縁をもつもの、壺Bは直立気味に立ち上がる頸部から屈曲して短く直立してたちあがる口縁部をもつもの、壺Cは小形丸底壺である。壺Aは複合口縁の形態でA1～A3に細分した。

(1) 壺A

A1　130（SD01埋土）である。口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部から頸部まで内外面ともミガく。肩部外面はタテハケ後、ヨコ方向にミガく。

A2　102（HSK03埋土中）である。A1に比べて口縁部は拡張される。口唇端は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部外面に平行沈線を施す。口縁部内面は、口唇部辺りを除き丁寧にミガく。内面のケズリは、頸部直下から始まり、頸部直下ではその方向は左である。

A3　2（HSI02床）、37・38・39・40（HSI05床）、41（HSI05埋土）である。38、39は、他に比べて大きく開く。3・4（HSI02床）、22（HSI04床）、23（HSI04埋土）、136（HSD01埋土）は口縁部が完存していないが、A3に属するものと思われる。頸部に突帯を有するものとそうでないものがある。頸部に突帯を有するものは、40のみである。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げる。2、37、38、40の口唇端は、壺A4ハの形状と同じである。41は、壺A4ロの口唇端と同じ形状である。136は、平坦面に凹線状の窪みをもつ。頸部外面は、タテハケのもの37、ナデのもの3、4、40、41である。頸部内面は、タテ方向のナデである。肩部以下の形状が分かるのは、37のみである。肩部は張り気味であり、ヨコハケを施す。胴部はタテヨコのハケメが確認できる。内面のケズリは頸部下から行われ、胴部中位までしか確認できないが、その方向は右方向である。

(2) 壺B　体部がよく張る185（M19号墳周溝）と長胴気味の183（M19号墳周溝）がある。

185は完形品である。口縁部はヨコナデで仕上げられ、その立ち上がりは短い。屈曲部は、鈍く外方に突出する。頸部から肩部にかけてナデられ、胴部タテハケ後にヨコハケを少々施した後に、軽くナデる。底部は丸い。内面は、頸部下から胴部中位まで右方向にケズられ、以下は下→上にケズられる。口縁部から頸部内外面、肩部から胴部外面に赤色塗彩痕が認められる。

183は、口縁部曲部は外方へ突出せず、鈍い稜をなす。頸部から体部はナデ。内面のケズリは頸部からやや下る辺りから右方向にケズる。底部は不明である。
口縁部から胴部内面に赤色塗彩痕が認められる。

(3) 壺C　18（HSI02埋土）の1点である。

3．高坏形土器

高坏は、坏部と脚部が接合できたものはほとんどなかった。坏部の形状を中心に分類する。**高坏A**は径の大きい浅い椀状の坏部をもつもので、口縁部は屈曲した後に内傾してたちあがるものである。**高坏B**は、浅い坏部で屈曲した後に外反して立ち上がるもの、**高坏C**は浅い坏部で屈曲せずに口唇部にいたるもの、**高坏D**は、深い椀状の坏部をもつもの、**高坏E**は、屈曲した後に外傾してたちあがる深い坏部をもつものである。

(1) 高坏A

98（SK02床）のみである。98はほぼ完形まで復元することができた唯一の個体である。口縁端は丸い。筒部は直線状にわずかに広がり、裾部は筒部から屈折して広がる。裾端は肥厚する。裾部には円形透かしが2個1対で3方に穿たれる。坏部は風化が激しく調整不明であるが、内面にわずかにミガキが残る。筒部は、外面にタテ方向のミガキ、内面はケズリ後ナデ。裾部は、外面ヨコナデで、内面左方向のケズリである。

(2) 高坏B

29（HSI04床面）1点のみである。脚部を欠く。内外面ともミガかれる。

(3) 高坏C

風化が進んでいるものが多い。1（HSI01床）、20（HSI02床）、30（HSI04埋土）、232（USI01ピット内）である。内湾しながらそのまま口縁部にいたる1、20、232と口縁付近で外反する30がある。坏部外面にはタテハケが確認できる。口唇部は、引き出したように先細る30と上端をおさえて面をもつ1、17がある。232は風化のため不明。

(4) 高坏D

坏部の径が小さい184（M19号墳周溝）の1点である。深い椀状の坏部をもつ。脚部は短く、外反して開く口縁端は、外傾する面をもつ。裾端は肥厚しない。坏部は内外面ともヨコナデで仕上げる。脚部は外面ヨコナデ、内面ケズリ後ナデ。

(5) 高坏E

237（U7号墳周溝内）の1点である。内外面ともヨコナデで仕上げる。ヨコナデの下にわずかではあるが、ハケメが認められる。

(6) 脚部

脚部は、スムーズに広がる円錐状の脚部で中空のもの：63（HSI05床）、64（HSI05埋土）、直線的に広がる中空の脚部で、屈曲して広がる裾部を持つもの：21（HSI02床）、31（HSI04床）、中実の脚部のもの99（HSK02床）がある。

4．器台形土器

今回の調査で出土した器台は全て鼓形器台といわれるものである。**器台A**受部・脚台部に平行沈線を施し筒部が細くて長いもの、**器台B**受部・脚台部が薄く外反し、筒部が短いものに分類した。

(1)器台A

83・84・85（HSK01埋土）、100（HSK02床）である。84は受部から筒部まで残存し、受部内面と筒部外面をミガく。また筒部外面に平行沈線を施す。83は、脚台部と筒部が残存する。84に比べて小さい。筒部外面に平行沈線を施す。85、100は、脚台部のみの破片である。85は、脚台部外面、平行沈線後ナデる。

(2)器台B

32（HSI04埋土）、65（HSI05床）、66（HSI05焼け土）、67（HSI05埋土）である。いずれも受部を欠く。受部下端・脚台部上端は外方に突出する。66〜67の脚台端部は、**甕A4ハ**の形態と同じである。32は脚台端部を欠く。

5．土器の時期

以上、土器の分類を行なった。この分類に基づいて、遺構ごとに土器の構成をみてゆく。床面出土の土器が比較的多かったHSI02、HSI05、HSK01、HSK02、HSK04、MSK04、MSI01を対象とし、床面出土の土器のみをあつかう。**HSI02**は壺A3、甕A4ロ〜ハ・C、高坏C、直線的に広がった後に屈曲して広がる高坏脚で構成される。底部は出土していない。**HSI05**は壺A3、甕A4ロハ・C、器台B、大型の甑形土器、**HSK01**は甕A3b①・A3b②・A3c①・A3c②・B、器台A、蓋、小さな平底の底部、**HSK02**は甕A3b②・A3c②、高坏A・中実の脚、器台A、**HSK04**は甕A3b②・B、小さな平底の底部、**MSK04**は甕A3c①・A3e①、小さな平底の底部、**MSI01**は甕A2b②・A3b①・A3c②・A3d②、蓋、椀状の手づくね土器で構成される。

HSK01の土器は、完形で出土したものはないが、土坑の床面でかたまって出土した資料である。甕AはA3のみである。外面の平行沈線をナデ消す個体とナデ消しを行なわない個体がある。内面は2 個体を除いてミガく。底部は小さな平底である。HSK02の甕はA3、器台はA1のみ、MSK04の甕はA3のみ、MSI01の甕はA3・A2であるが、A3が主流でありHSK01と同じ傾向である。HSK01、HSK02、MSK04、MSI01床面出土の土器は、鳥取県倉吉市阿弥陀大寺遺跡Ⅲ期[7]〜鳥取県倉吉市上種第5遺跡貯蔵穴7号・住居跡27号[8]出土の土器、青木編年Ⅲ期の新段階[9]の時期と併行すると考える。

HSI05出土の土器も、完形で出土したものはないが、床面出土の土器は床面上で一括出土した資料である。頸部に突帯をもつ40は壁近くで口縁を下に向け、潰れた状態で出土した（図版5）。甕は全てA4・CでありA4の口唇端の形状は端部をおさえるが、内外に肥厚しないロ・ハのみである。壺A3の口唇端も甕のそれと共通する。HSI02も壺はA3、甕はA4・CでHSI05とおなじであり、A4は口唇端が先細り気味のA4イが2個体出土するが、口唇端をおさえるb・cが中心であり、HSI02とHSI05出土の土器は、同じ時期のものであると考える。HSI02、HSI05床面出土の土器は、壺、甕、器台より島根県八束郡出雲町大木権現山1号墳出土の土器[10][11]、青木編年のⅤⅥ期[9]に併行するものであると考えられる。

第３節　まとめ

１．集落

今回の調査では、南谷ヒジリ遺跡（以下「ヒジリ」と略称）で竪穴住居跡５棟（弥生時代終末１・古墳時代前期３＝青木ⅤⅥ期・不明１）、土坑４基（弥生時代後期後半＝青木Ⅲ期新段階）、南谷夫縊塚遺跡（以下「夫縊塚」と略称）で竪穴住居跡２棟（弥生時代後期後半）、土坑10基（弥生時代後期後半７、不明３）、乳母ケ谷第２遺跡（以下「乳母」と略称）で竪穴住居跡１棟（古墳時代前期＝青木ⅤⅥ期）を確認することが出来た。

このうち土坑について見てゆくと、ヒジリで確認された土坑は断面形が袋状を呈する「貯蔵穴」といわれるものであった。夫縊塚の土坑は、弥生時代のものは、SK04を除き貯蔵穴であった。夫縊塚の貯蔵穴は、同遺跡の竪穴住居跡の時期と一致するのに対し、ヒジリでは異なる。ヒジリは、部分的な発掘調査でもあり、今回の調査区域の周辺で、弥生時代後期後半の竪穴住居跡が発見される可能性が高い。古墳時代前期のヒジリ竪穴住居跡・乳母竪穴住居跡と時期的に併行する貯蔵穴を確認することはできなかった。部分的な発掘調査という制約もあり、断言は出来ないのであるが、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間に貯蔵形態の変化があったと考えられなくもない。県内出土の貯蔵穴群を全て検討する時間的余裕はないのであるが、東伯郡大栄町上種第５遺跡において、報告書に基づくと、貯蔵穴といわれる土坑は弥生時代後期後半でその姿を消すとがいえる。貯蔵穴が食糧保存のための土坑であるとすると、その消滅は食糧保存方法もしくは食糧管理方法の大きな変化と言える。それは、食糧とする作物の変化であるか、集団の中での食糧占有関係の変化であるかははっきりとしないのであるが、いずれにしても、古墳時代になると、食糧をいくつかの小規模な貯蔵穴群で保存管理することがなくなったと考えられる。

竪穴住居跡についてみると、羽合町管内では砂丘地（当時は草原地カ？）で弥生時代前期・古墳時代前期（青木Ⅶ～Ⅷ期）の竪穴住居跡が発見されている。今回の調査は、長瀬高浜遺跡で欠落した時期を一部ではあるが、埋めることが出来た。また、集落の立地については、東郷池周辺の平野部分についての調査が皆無に近いので、一概には言うことはできないが、丘陵の奥まった所に立地する宇野第５遺跡で弥生時代中期の土器の散布が確認されていることから、弥生時代前期～中期にかけて丘陵の奥まった場所に集落が移動し、弥生時代後期、古墳時代前期（青木ⅤⅥ期）にかけて丘陵上に位置しながらも、だんだんと丘陵の先端方向に集落の位置を移してきたことがいえる。古墳時代前期の青木Ⅶ期になると突然と集落を長瀬高浜＝海岸部に移し、大集落が営まれるようになる。この時期は、山陰の土器に混じって畿内の布留式土器が出土する事が多くなる時期であり注目されるところである。海岸部→丘陵上→海岸部という集落の移動の要因は気候・政治・生産形態等考えられるのであるが、現在のところいずれとも断定できない。また、今回の調査も含めて、羽合町管内で集落全体を捉えた調査が行われていないことも考えると、集落の立地が海岸部→丘陵上→海岸部となるという仮説が今後の調査によって検証される必要がある。

２．古墳群

今年度調査のうち、古墳については南谷古墳群中の５基（19～23号墳）、宇野古墳群中の７基（３～９号墳）の調査をした。南谷19号墳は、この古墳群中の唯一の前方後円墳で、前方後円墳築造計画に基づく一次区画溝、盛土作業に使用されたと考えられる二次区画溝やその中央に握り込まれた６世紀前葉（山本編年Ⅱ期）の�土埋葬施設等、大変興味深い施設を確認することができた。また、この時期の窯跡である東郷町埴見中ノ谷窯跡のものと同時期で、土器の胎土分析等の今後の調査結果によっては、その流通関係を知る上で貴重な資料になるであろう。南谷21～23号墳は径11～15mを測る円墳で６世紀後半（山本編年Ⅱ期）である。その他、19号墳と20号墳の関係は、20号墳の時期決定する遺物がないため明確ではないが、19号墳の前方部西側の溝溝が20号墳の墳丘に制約されて掘りあがっていたことから、20号墳は６世紀前葉より遡ると考えられる。

宇野古墳群中の７期の古墳は、径10m前後の円墳５期、一辺10m前後の方墳２期を確認することができた。これらの古墳は尾根を有効に使い、２～３期の古墳を小単位とする群構成を示した。４号墳から５世紀後半（山本編年Ⅰ期）の須恵器、７号墳から５世紀後半と考えられる土師器、８号墳からも５世紀後半（山本編年Ⅰ期）の須恵器が出土しており、時期的に遡る長瀬高浜遺跡の古墳群との関係を探る上で良い資料を提供することになった。

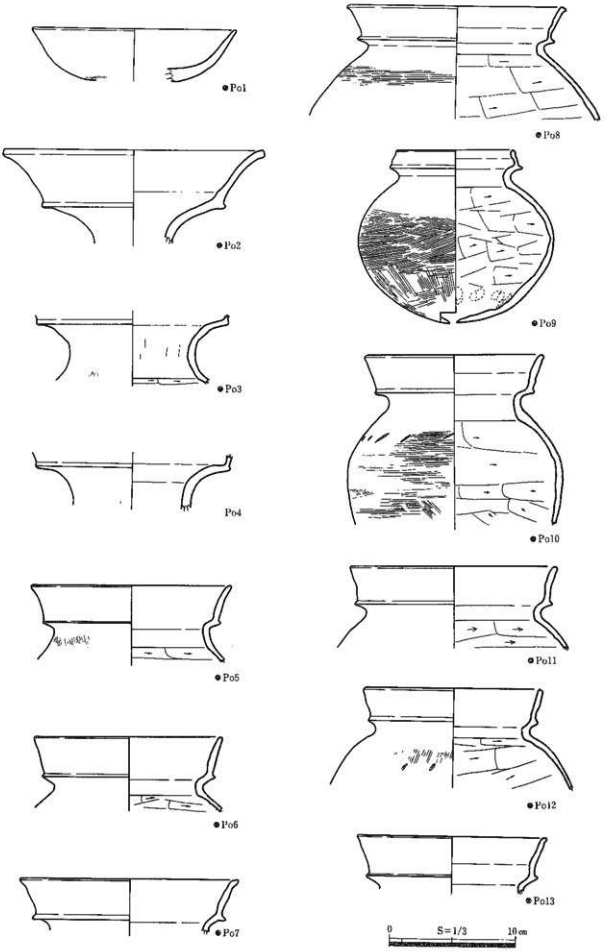
３．遺構外遺物

ここでは、今年度調査の全遺跡における遺構外遺物として検出したものについて述べることにする。まず、南谷ヒジリ遺跡（ＳＩ02、ＳＫ02・04、ＳＤ01）の埋土中で縄文時代中期の土器（Po143～Po149）、南谷夫縊塚遺跡の南谷19号墳後円部盛土下旧表土中で縄文時代晩期の土器（Po221）が出土し、さらに、同旧表土中で弥生時代後期の土器（Po222・Po223）が出土した。次に、南谷古墳群の南谷19号墳耕作土中で時期不明の土師質土器（Po224・Po225）が、南谷21～23号墳付近の表土及び盛り土掻き出し土中で、山本編年Ⅲ期のものと考えられる須恵器坏蓋（Po226・Po227）、須恵器坏身（Po228）、須恵器壺（Po229）が出土した。また、南谷ヒジリ遺跡の耕作土中で須恵器片（Po140・Po141）、青磁片（Po139）が出土した。

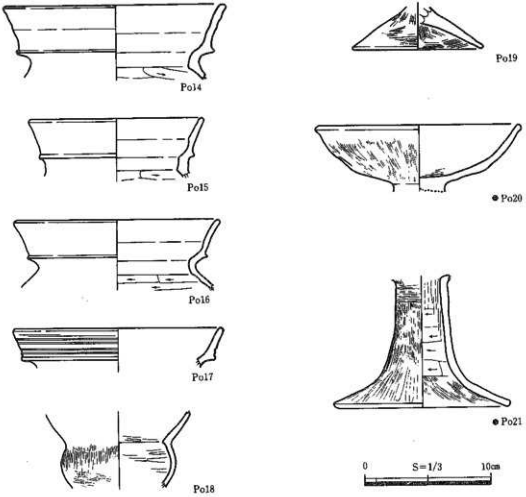
最後に、ここに報告書を上梓する運びになったが、調査の実施、報告書の作成にあたり、指導・協力あるいは助言いただいた各位に深甚の謝意を表します。

註・参考文献

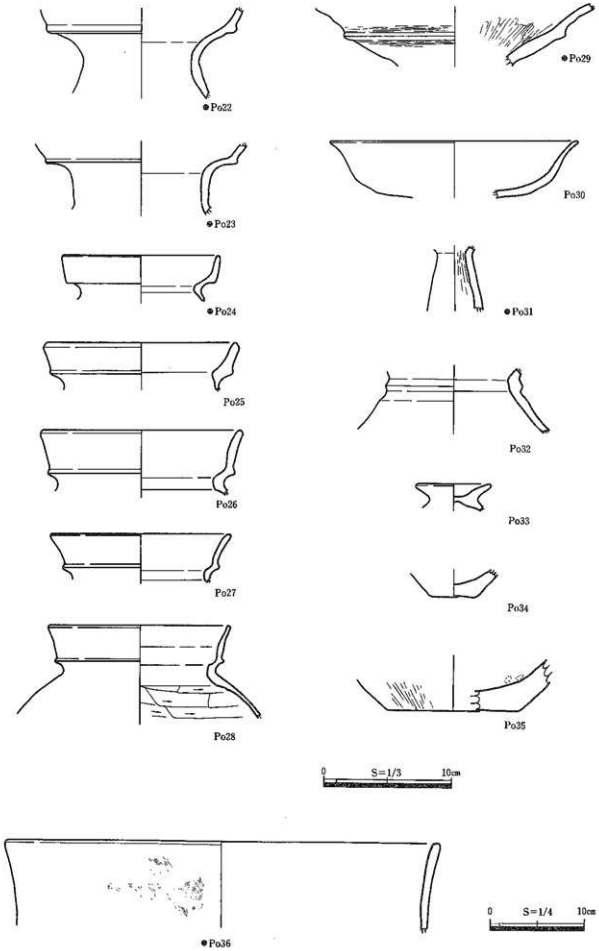
註 1. 羽合町教育委員会『南谷18号墳発掘調査報告書』1988
2. 羽合町教育委員会『羽合町内遺跡発掘調査報告書』1989
3. 羽合町教育委員会『南谷所在遺跡群（大ナル地区・ヒジリ地区）』1990
4. 羽合町教育委員会の御好意により、「天保14年伯耆国河村郡南谷村出畑地絵会図」を拝見させていただいた。
5. 『鳥取県大百科事典』新日本海新聞社 1984
6. 『角川日本地名大辞典31鳥取県』角川書店 1982
7. 羽合町『羽合町史』前編 1967
8. 福田孝司「旧石器集団の行動軌跡」『古代史復元1旧石器人の生活と集団』講談社 1988
9. 鳥取県埋蔵文化財センター『旧石器・縄文時代の鳥取県』1988
10. 倉吉市教育委員会『高鼻2号墳（遺手2号墳）発掘調査報告書』1982
11. 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報（第3次）』1975
12. 鳥取県埋蔵文化財センター『鳥取埋文ニュース』№28 1990
13. 倉吉市教育委員会『立縄遺跡群　取木遺跡・一反半田遺跡発掘調査報告書』1984
14. 北条町教育委員会『島遺跡発掘調査報告書第1集』1983
15. 名越勉「原始・古代」『倉吉市史』1973
16. 倉吉市教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』1986
17. 東伯町教育委員会『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』1987
18. 関金町教育委員会『横峯遺跡発掘調査報告書』1986
19. 三朝町教育委員会『三朝高原穴谷遺跡発掘調査報告書』1976
20. 山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ』1978
21. 『さんいん古代史の周辺－上－』山陰中央新報社 1978
22. 鳥取県教育文化財団『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ケ原遺跡発掘調査報告書』1984
23. 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅱ～Ⅵ 1981～1983
24. 北条町教育委員会『北尾遺跡発掘調査報告書』第1集 1987
25. 米子市教育委員会『目久美遺跡』1986
26. 佐々木謙他『倉吉福庭遺跡』1970
27. 鳥取県教育委員会「東郡町大鼻遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報』1973
28. 泊村教育委員会『泊村内遺跡発掘調査報告書』1989
29. 鳥取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』1985
30. 名越勉・甲斐忠彦「鳥取県東郷町出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第59巻2号 1973
31. 泊村『泊村誌』1989
32. 鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書第1集』1960
33. 倉光清六「伯耆八橋町銅鐸出土遺跡」『考古学雑誌』第23巻4号 1933
34. 倉吉市教育委員会「上米横遺跡発掘調査報告Ⅱ－同弥大寺地区－」1980
35. 東森市良『四隅突出型墳丘墓』ニューサイエンス社 1989
36. 北条町教育委員会『土下古墳群発掘調査報告書』第1集 1983
37. 北条町教育委員会『曲古墳群発掘調査報告書』1981
38. 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅳ 墳軸編 1982
39. 東郷町教育委員会『津波遺跡発掘調査報告書』1974
40. 東郷町教育委員会『佐美4・13号墳発掘調査報告書』1979
41. 倉吉市教育委員会『大宮古墳発掘調査概報』1979
42. 近藤哲雄「東伯畜における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第4集　島根考古学会　1987
43. 東郷町教育委員会『片平5号墳発掘調査報告書』1977
44. 鳥取県教育委員会『鳥取県装飾古墳分布調査概報』1981
45. 梅原末治「因伯二国に於ける古墳の調査」『鳥取県史蹟勝地調査報告』第二冊　1924
46. 羽合町教育委員会『馬ノ山古墳』1961
47. 鳥取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』1984
48. 真田廣幸「伯耆国大御堂廃寺考」『山陰考古学の諸問題』1986
49. 真田廣幸「奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相」『考古学雑誌』66-2　1980
50. 倉吉市教育委員会『史蹟大原廃寺跡第2次発掘調査概報』1968
51. 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報』第3次・第5次・第6次　1975～1978
52. 倉吉博物館『伯耆国分寺』1983
53. 倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺発掘調査概報』1973
54. 佐々木謙・亀井照人「原始古代概編」『鳥取県史』1鳥取県　1972
55. 東郷町『東郷町史』1987
56. 羽合町教育委員会『南谷貝塚遺跡発掘調査報告書』1990
57. 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』人文科学編　1960
58. 櫻本誠一「前方後円墳の企画とその実態」『考古学ジャーナル』№150ニューサイエンス社　1978
59. 上田宏範『前方後円墳』学生社　1969他
60. 石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89　古代学研究会　1979他
61. 北条芳隆「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』第32巻4号　1986
62. 宇垣匡雅「吉備の前期古墳Ⅰ－浦間茶臼山古墳の測量調査－」『古代吉備』第9集　1987　「吉備の前期古墳Ⅱ－宍甘山王山古墳の測量調査－」『古代吉備』第10集　1988　「吉備の前期古墳Ⅲ－網浜茶臼山古墳操山109号墳の測量調査－」『古代吉備』第12集　1990
63. 金子章『長声古墳群』埼玉県児玉郡児玉町教育委員会　1980
64. 植野浩三「前方後円墳の築造方法（1）－鳥取県西郷波16号墳を例にして－」『文化財学報』第3集　1984
65. 真田廣幸氏の御教示による。このほかにも沢べり1号墳にその可能性がある。
66. 大宮町教育委員会『小池古墳群』1984
67. 朴美子「埋葬施設底部における土抗・溝に関する若干の考察」奈良県立橿原考古学研究所『宇陀北原古墳』1986
68. 大栄町教育委員会『上福田5遺跡発掘調査報告書』1985
69. 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ A・B・E・H地区』1978
70. 東出雲町教育委員会『大木権現山古墳群』1979
71. 花谷ゆぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究－島根県内の資料を中心にして－」『島根考古学会誌』第4集　島根考古学会　1987
72. 田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966



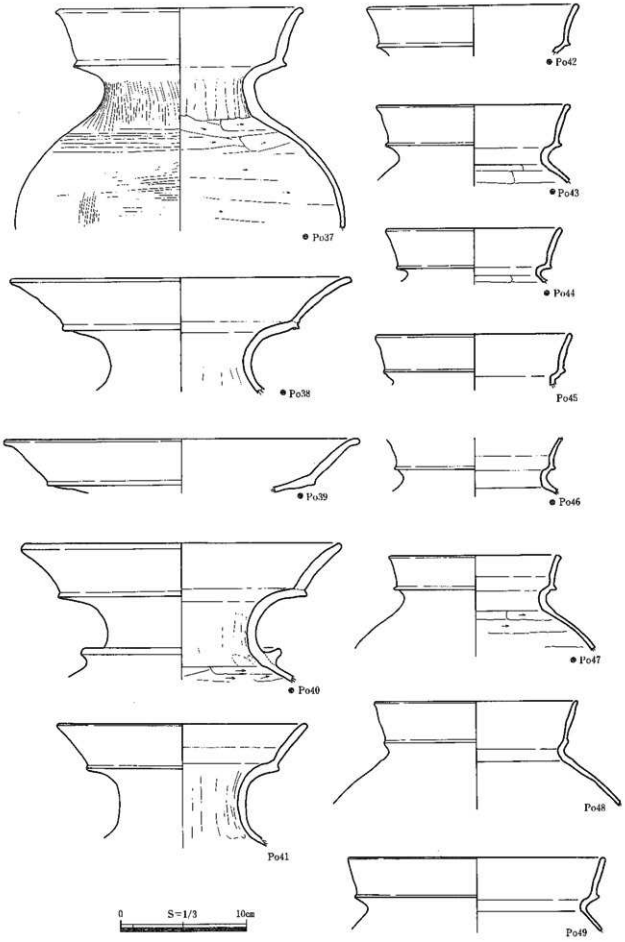
挿図91　南谷ヒジリ遺跡SI01(Po1)
SI02(Po2～Po13)土器実測図



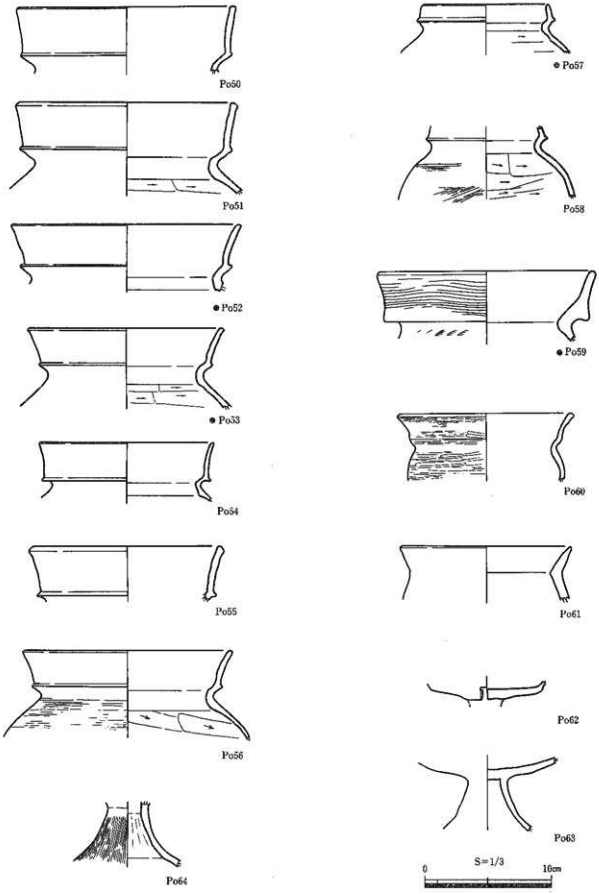
挿図92　南谷ヒジリ遺跡SI02(2)土器実測図



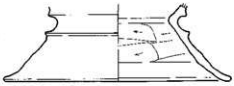
挿図93　南谷ヒジリ遺跡SI04土器実測図

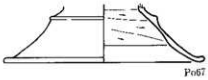


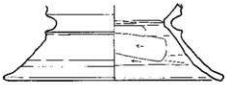
挿図94　南谷ヒジリ遺跡S105(1)土器実測図

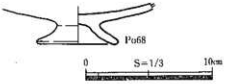


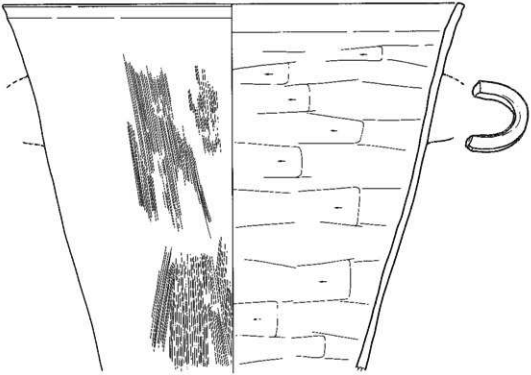
挿図95　南谷ヒジリ遺跡SI05(2)土器実測図

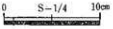




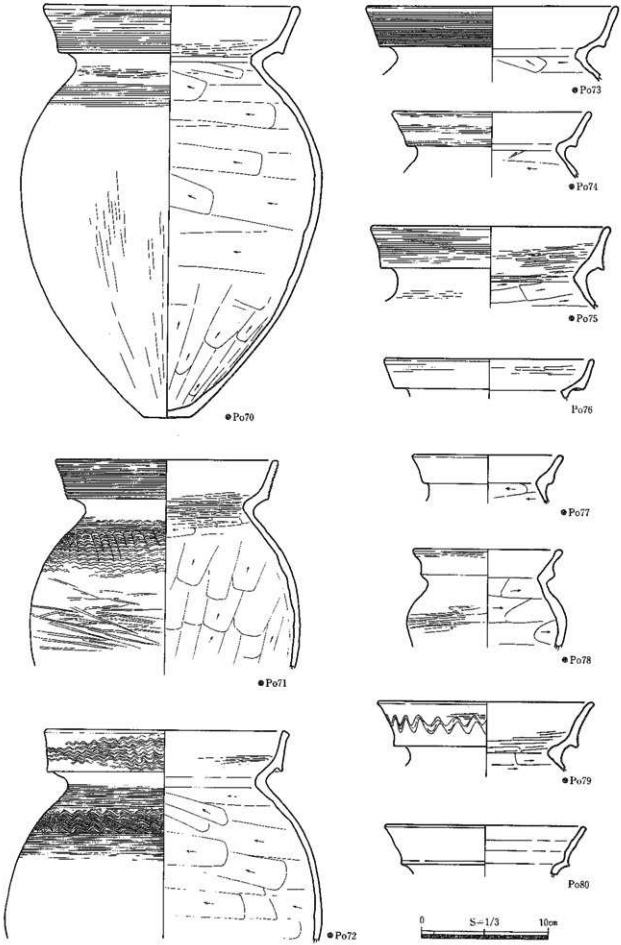




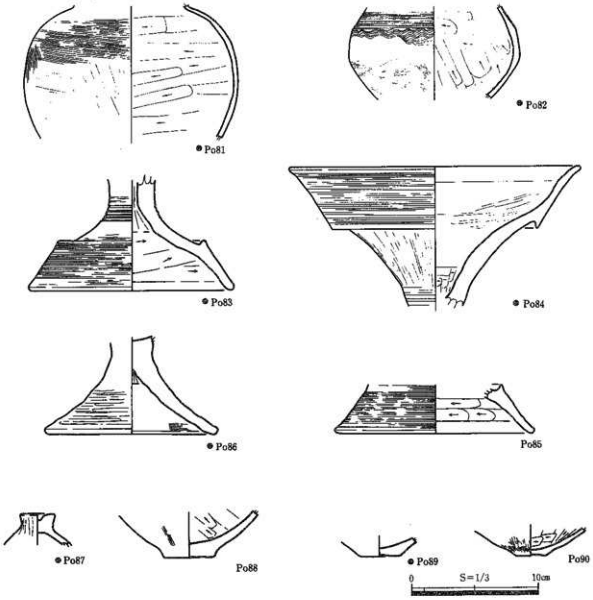




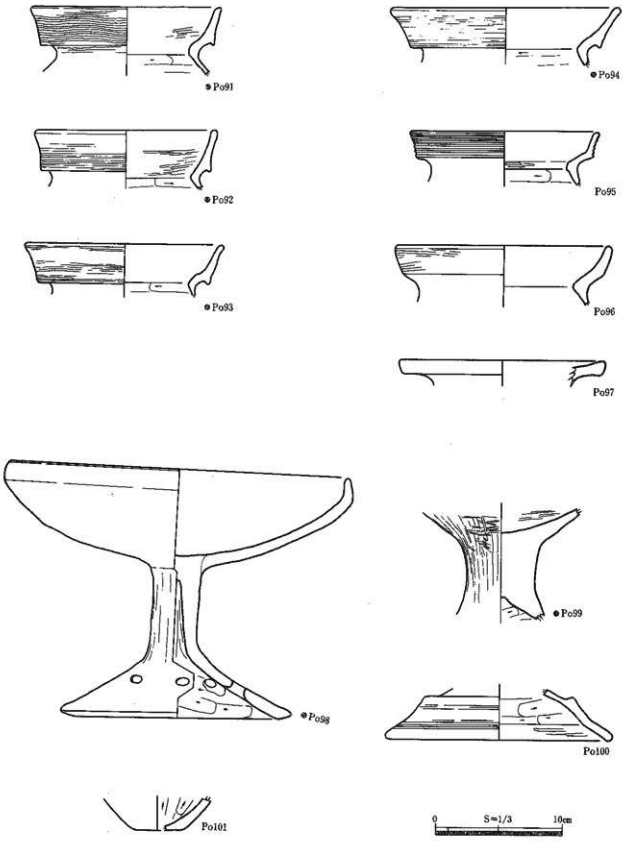
挿図96　南谷ヒジリ遺跡SI05(3)土器実測図



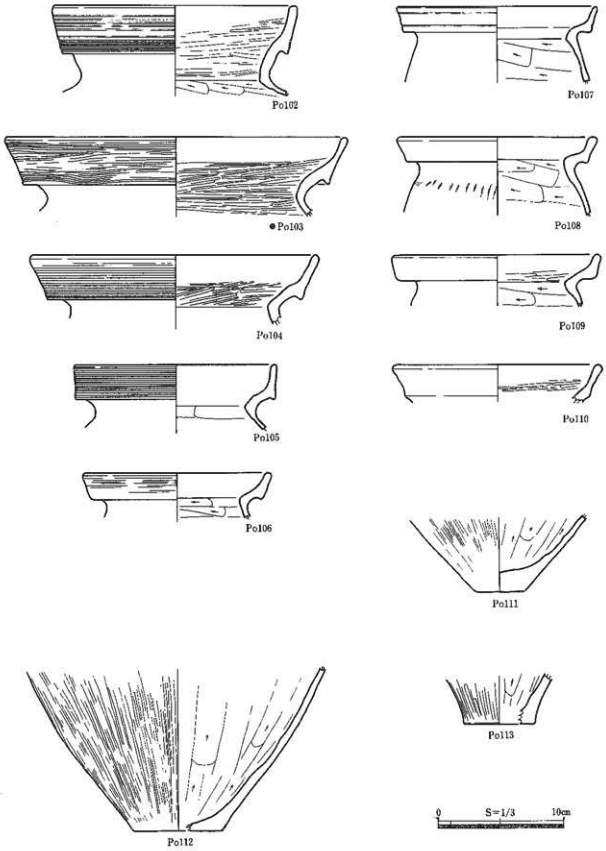
挿図97　南谷ヒジリ遺跡SK01(1)土器実測図



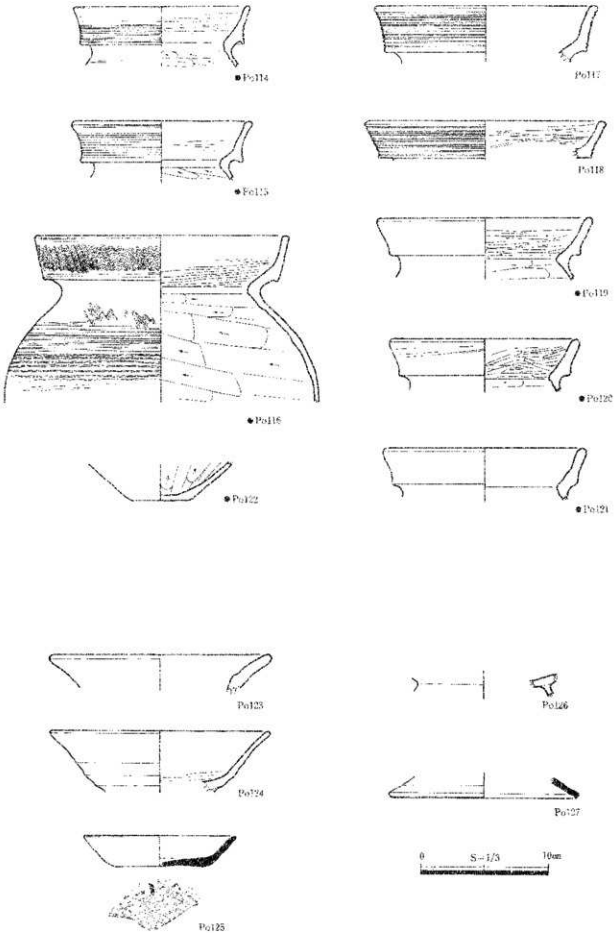
挿図98　南谷ヒジリ遺跡SK01(2)土器実測図



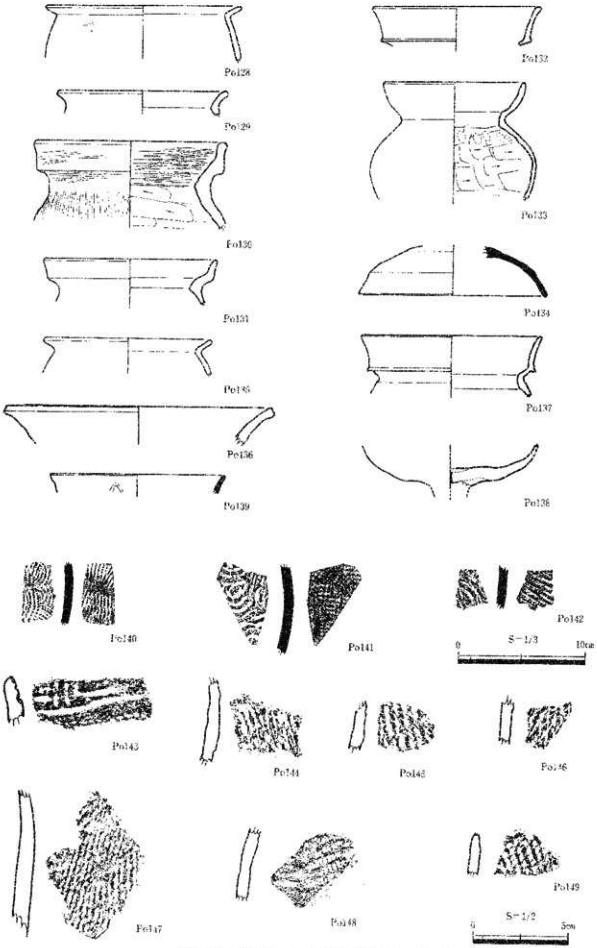
挿図99　南谷ヒジリ遺跡SK02土器実測図



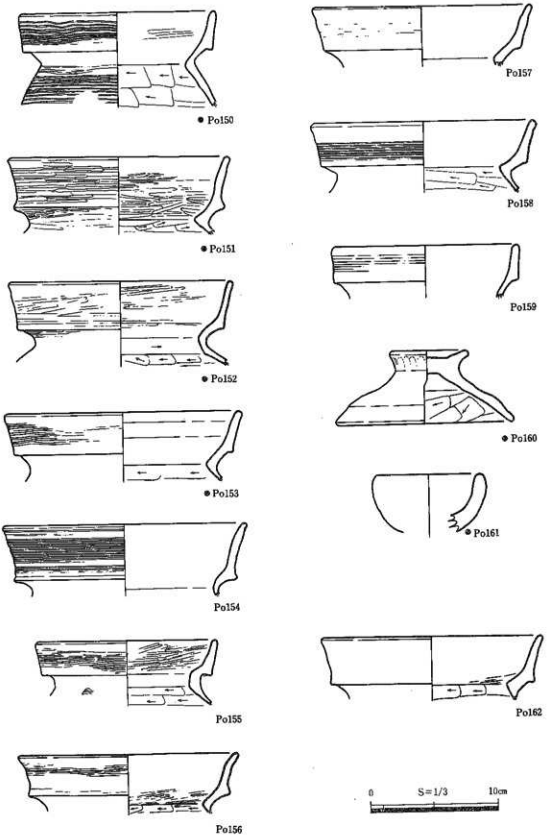
挿図100　南谷ヒジリ遺跡SK03土器実測図



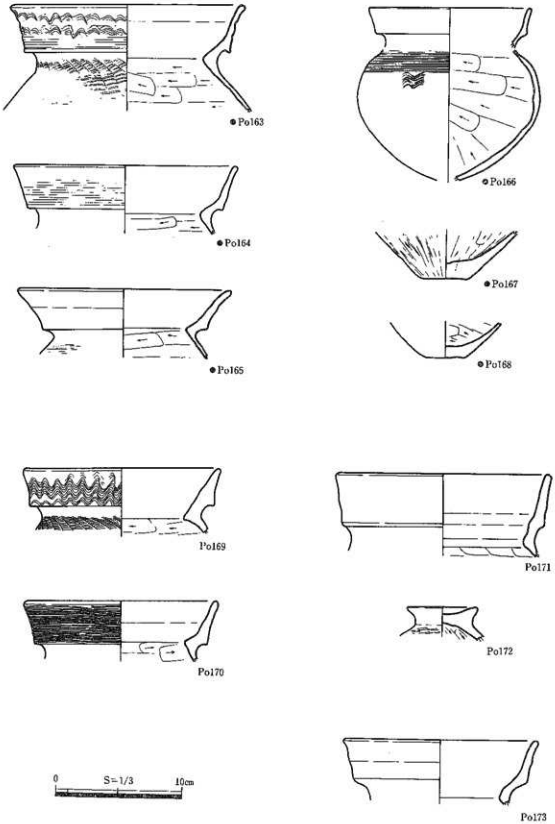
挿図101　南谷ヒジリ遺跡SK04(Po114～Po122)
SB01(Po126・Po127)
SB03(Po123～Po125)土器実測図



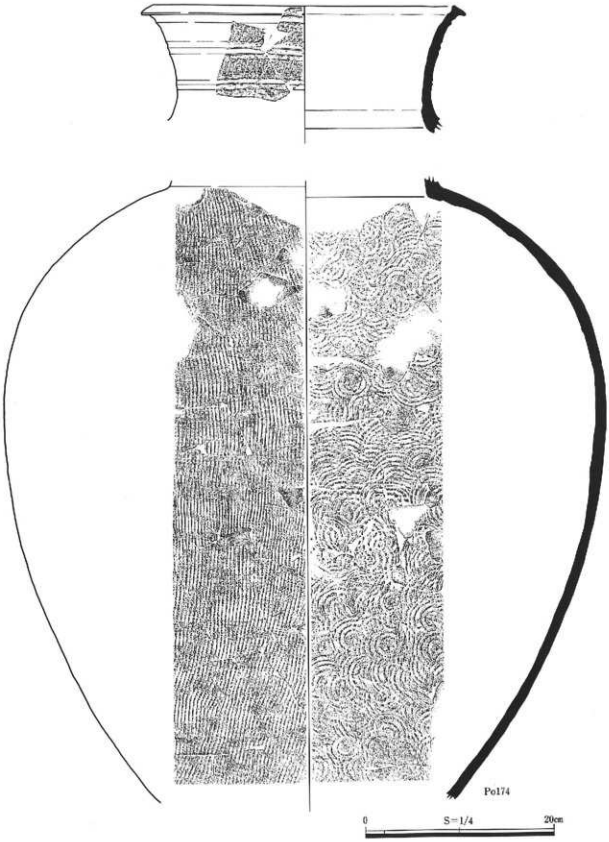
挿図182　南谷ヒジリ遺跡 SD01(Po128～Po136)
SD03(Po142)
遺構外(Po137～Po141)
縄文土器(Po143～149)



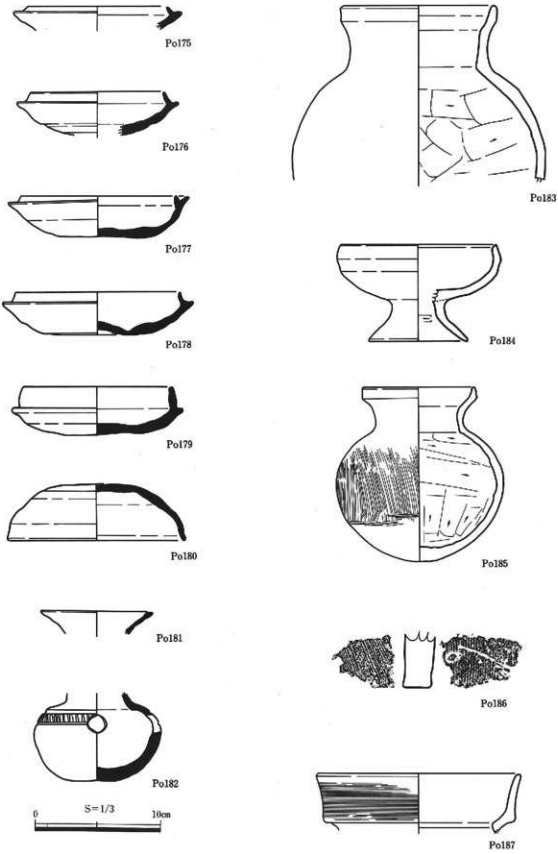
挿図103　南谷夫婦塚遺跡 S101(Po150～Po161)
S102(Po162)土器実測図



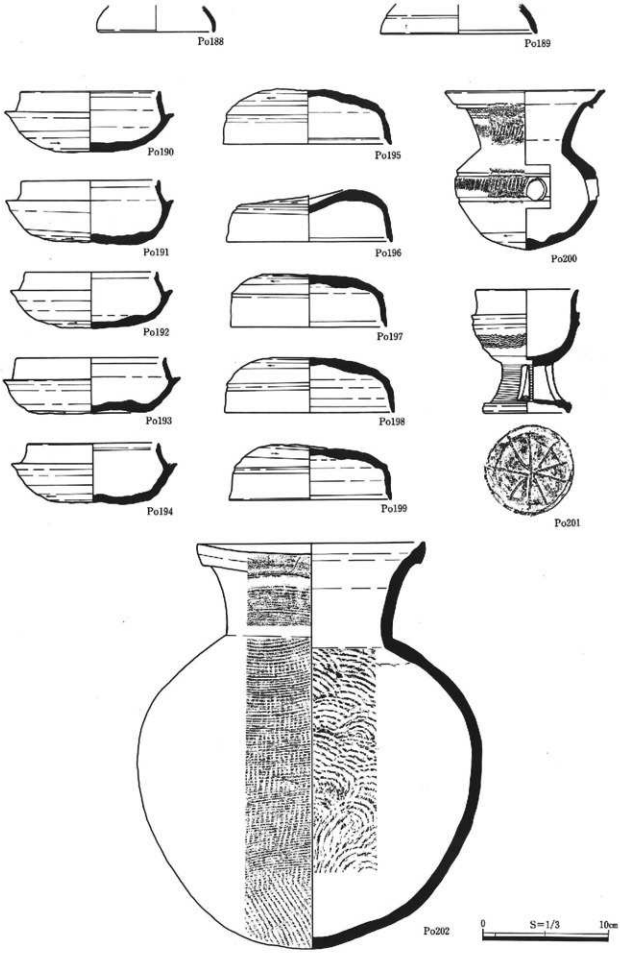
挿図104　南谷夫婦塚遺跡SK04(Po163～Po168)
SK05(Po169～Po173)土器実測図



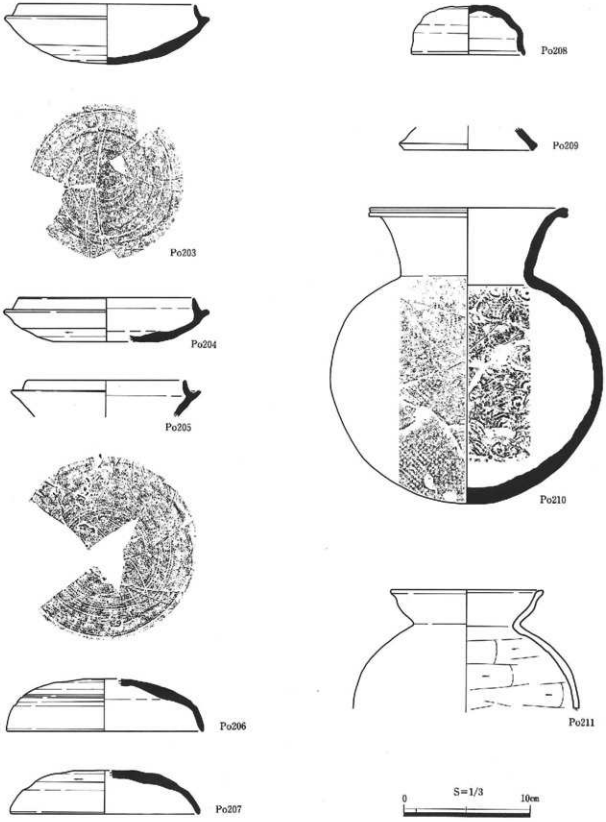
挿図105　南谷19号墳(1)土器実測図



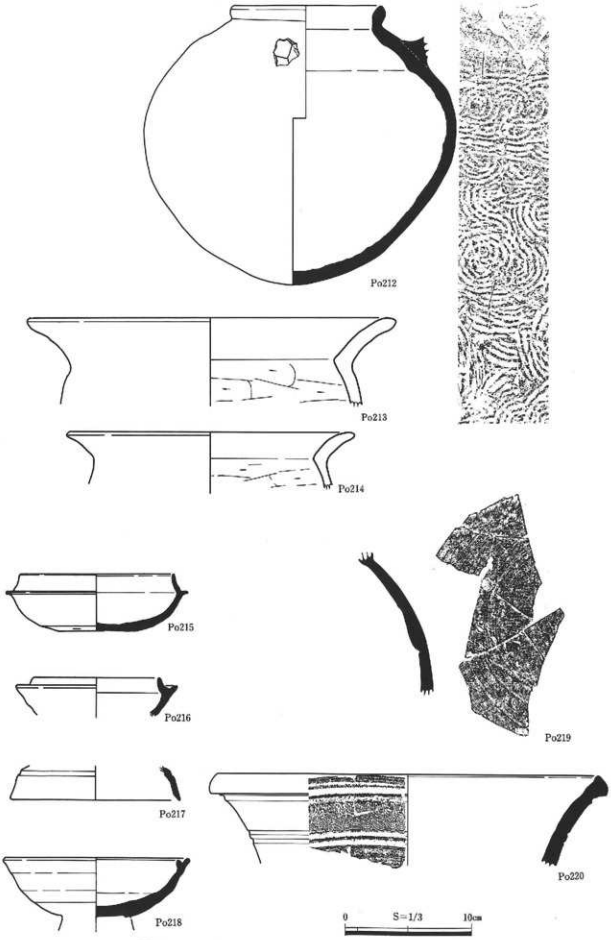
挿図106　南谷19号墳(2)土器実測図



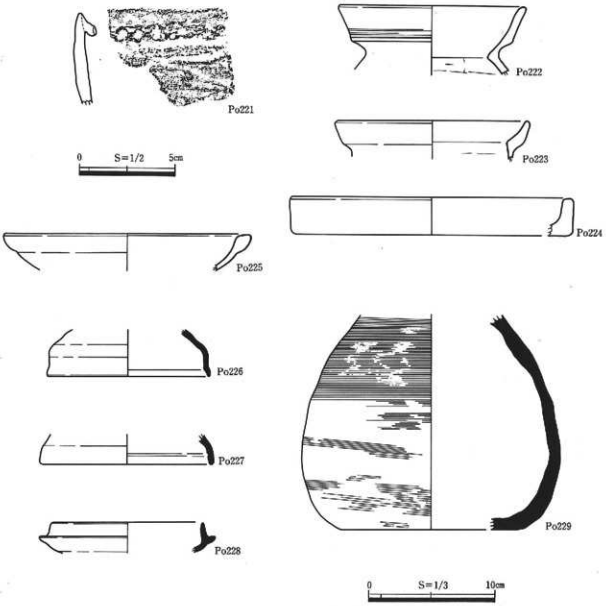
挿図107　南谷19号墳(3)土器実測図



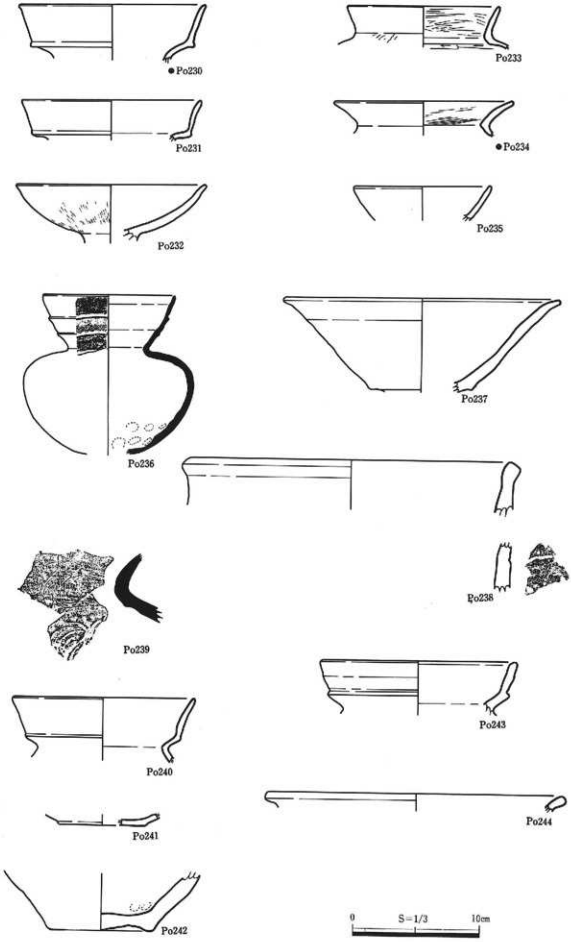
挿図108　南谷21号墳土器実測図



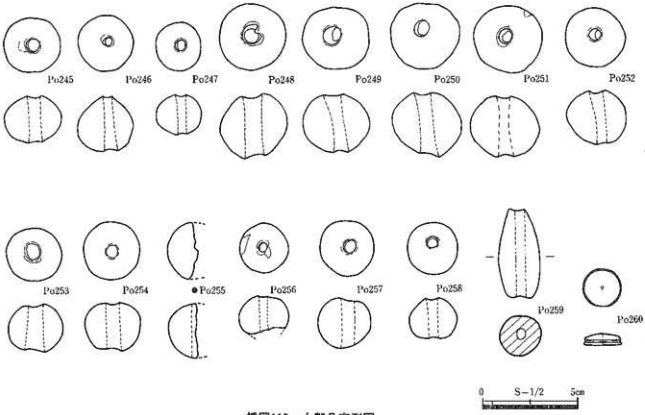
挿図 109　南谷22号墳(Po212～Po214)
23号墳(Po215～Po220) 土器実測図



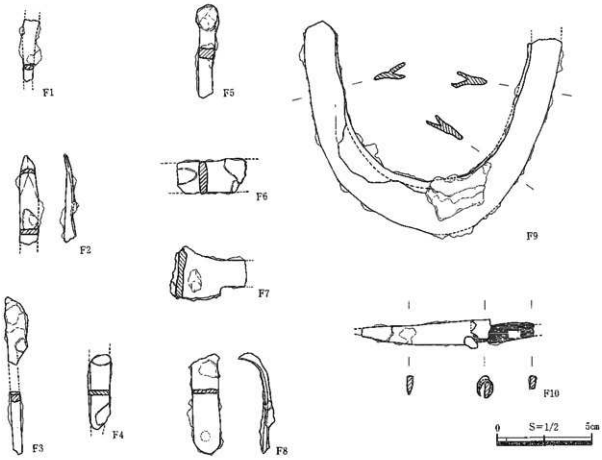
挿図110　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群遺構外出土土器実測図



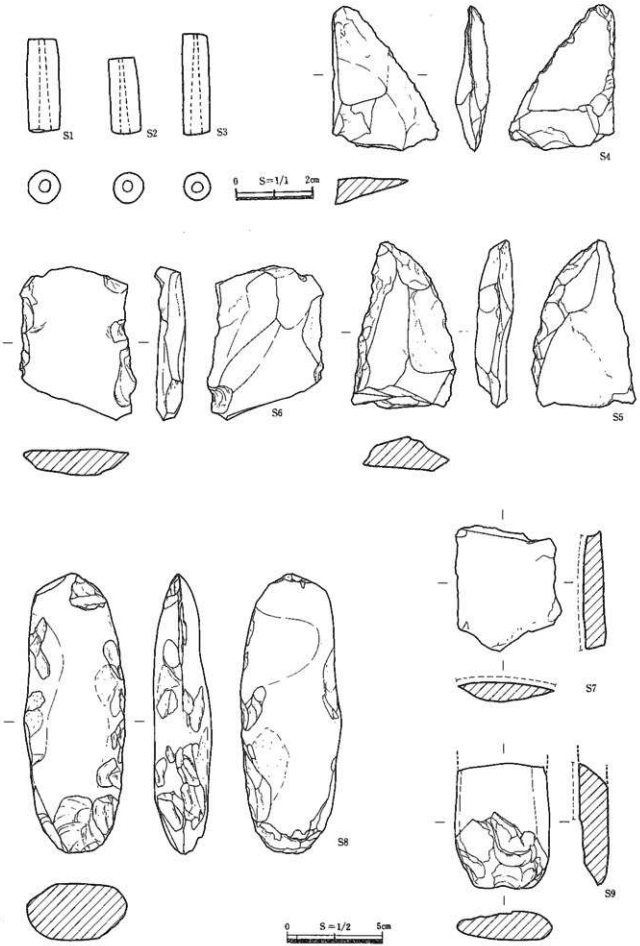
挿図111　乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群土器実測図



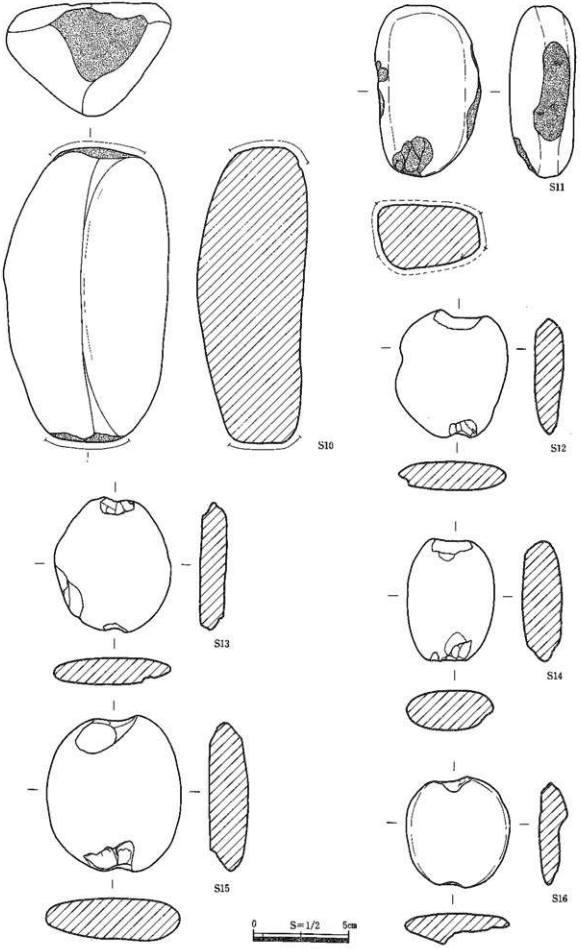
挿図112　土製品実測図



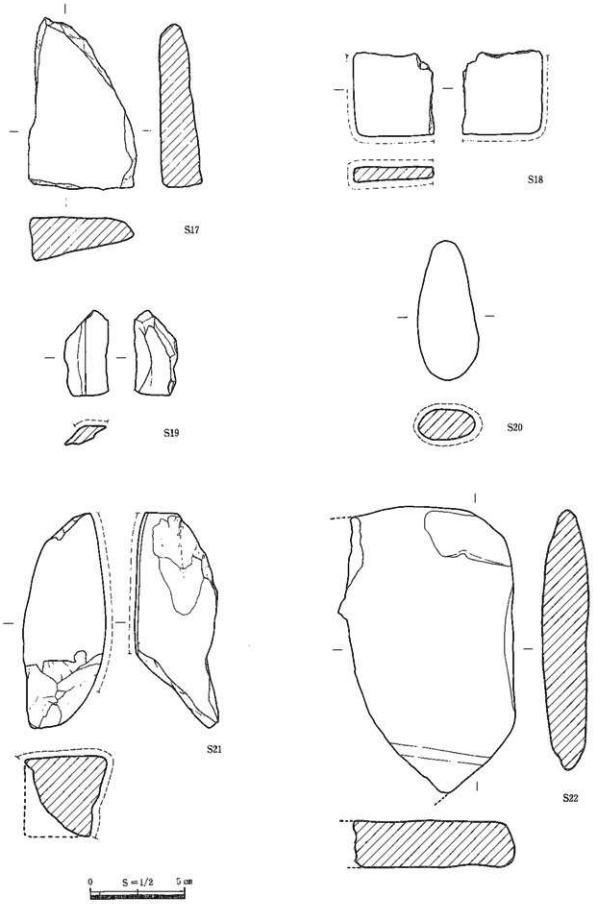
挿図113　鉄 器 実 測 図



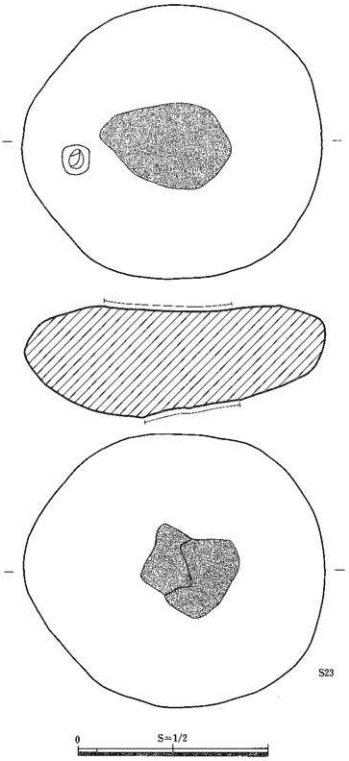
挿図114 管玉・石器実測図



挿図115　石器実測図(敲石・石錘)



挿図116 石器実測図(砥石・石皿)



挿図117　石器実測図（石皿）

出土遺跡	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
HS102 洗4	●1	91	36	58	①16.2㎝ ②4.2㎝	横位の球部。口縁端はかさえたような面をもつ。	全体的に風化が著しい。内外面にタテハケがかすかに残る。	密(1~2mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-264
HS102 東	2	91	36	51 61 68 75	①29.7㎝ ②7.5㎝ ③5.1	口縁部は、外反しながら大きくひらく複合口縁である。口唇部は上端をおさえて、面をもつ。口縁部下端は、すぐと外方へ突出する。	内外面ヨコナデ。	緻密(0.5~1mm程の石英含む。雲母含む。)	良好堅緻	外面淡灰褐色~淡黄色。内面淡茶褐色~黒褐色。	F-98
HS102 東	●3	91		92		ゆるやかに曲がってたちあがる鉢の頸部。	外面:ヨコナデ。内面:一部ヨコナデ。	緻密(1mm程の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-237
HS102 東	4	91		67		大きく外反しながら口縁部へつづく頸部。	外面:ヨコナデ。内面:無節上半ヨコナデ。下半ナデ。	緻密(1~2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-238
HS102 東	●5	91		83	①15.8㎝ ②6.0㎝ ③3.1	口縁部は、外反しながら外相してたちあがる複合口縁。口唇部は、わずかに引き出す。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸胴内面は、丸みをもって屈曲する。	外面~口縁部~頸部まではヨコナデ。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	緻密(砂粒含む。)	良好	外面褐色~黒褐色。内面淡褐色~淡灰褐色。	頸部外面にスス付着。F-93
HS102 東	●6	91	36	76	①14.8㎝ ②5.7㎝ ③3.1	口縁部は、外相してたちあがる複合口縁。口唇端部は丸いが上端をおすかにおさえる。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は2段に屈曲する。	外面~口縁部~頸部までヨコナデ。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	緻密(0.5~2mm の石英含む。)	良好堅緻	外面淡褐色~黒褐色。内面淡褐色~淡褐色。	口縁部内外面に黒斑。F-33
HS102 東	●7	91		62	①17.2㎝ ②4.1㎝ ③3.1	外相してたちあがる複合口縁。口縁部は外方へ曲げ、上端におさえたような面をもち外方へ肥厚。口縁部下端は、真く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。	内外面~ヨコナデ。	緻密(0.5mm程の石英含む。)	良好堅緻	外面淡褐色~黒褐色。内面淡褐色。	口縁部外面に黒斑。F-32
HS102 東	●8	91	36	85	①16.8㎝ ②8.0㎝ ③2.8	口縁部は、外反気味に外相してたちあがる複合口縁。口唇部は外方へ曲げ、上端におさえたような面をもち外方へ肥厚。口縁部下端は、強く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は2段に屈曲し、張り気味の異形につづく。	外面~口縁部~頸部までヨコナデ。胴部ヨコハケ後ナデ。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密(1~2mm の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色。内面淡褐色。	口縁部外面に黒斑。外面にスス付着。F-26
HS102 東	●9	91	36	52 66 69 93 (別ゆ)	①9.4㎝ ②13.8㎝ ③15.5㎝ ③1.6	口縁部は、内相して低くたちあがる複合口縁。口唇端は、丸く口縁部下端は、外方へ真く突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は丸みをもって屈曲し短き頸部へとつづく。胴部は、丸底で球成後に穿孔される。	全体的に風化している。外面~口縁部~頸部までヨコナデ。胴部ヨコ・ナデ・ノハケ。胴部下半~底部、タテハケ後ナデ。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部~胴部、右方向ケズリ。底部に強横圧痕。	密(1~2mm 程度の石英を含む。)	良好	内外面淡褐色。	Y-28
HS102 東	●10	91	36	81 93 (別ゆ)	①13.8㎝ ②13.6㎝ ③17.2㎝ ③3.1	口縁部は、外反気味に外相してたちあがる複合口縁。口唇端は丸いがかすかに上からおさえる。口縁部下端は、真く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、真く2段に屈曲し張り気味の異形から頸部へとつづく。	外面~口縁部~頸部までヨコナデ。体部ヨコハケ後ナデ。胴部に貝殻腹痕による制文。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部以下胴部まで右方向、以下左旋する下一上方向ケズリ。	密(1~2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色~黒褐色。	口縁部~胴部外面にスス付着。F-1
HS102 東	●11	91	36	80	①16.1㎝ ②6.5㎝ ③3.0	口縁部は、外反気味に外相してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は真く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲し肩部へとつづく。	外面~口縁部~頸部までヨコナデ。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密(1~3mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色~淡茶褐色。	F-16
HS102 東	●12	91		75	①13.7㎝ ②7.9㎝ ③2.9	口縁部は、外相してたちあがる複合口縁。口唇部は上端におさえたような面をもつ。口縁部下端は、外方へ突出する。頸部内面は2段に屈曲し、張り気味の異形へつづく。	外面~口縁部~頸部までヨコナデ。肩部、斜突文、ナデの下にタテハケが残る。内面~口縁部ヨコナデ。頸部以下、右方向ケズリ。	密(1~3mm の石英含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F-39
HS102 東	●13	91		87	①14.8㎝ ②4.2㎝ ③3.3	外反気味に外相してたちあがる複合口縁。口唇部は外方へ曲げ、上端におさえたような面をもち、外方へ肥厚。口縁部下端は、真く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。	内外面~ヨコナデ。	緻密(1mm程の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-94
HS102 東	14	92	36	148	①17.4㎝ ②5.7㎝ ③3.8	口縁部は、外相してたちあがる複合口縁。口唇端は丸いがかすかにたからおさえる。口縁部下端は真く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。内面は3段に屈曲する。	外面~口縁部~頸部までヨコナデ。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密(砂粒含む。)	良好	内外面淡茶褐色~黒褐色。	口縁部外面に黒斑。F-10
HS102 東	15	92		51	①14.0㎝ ②4.5㎝ ③3.0	外相しながらたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、真く外方へ突出する。頸部内面は、やや丸みに2段に屈曲する。	内外面~ヨコナデ。	緻密(1mm程度の石英、長石を含む。)	良好	外面黒褐色。内面淡茶褐色~黒褐色。	Y-1
HS102 東	16	92		52	①16.0㎝ ②5.4㎝ ③3.9	口縁部は、外反気味に外相してたちあがる複合口縁。口唇端は丸いが上端をおさえる。口縁部下端は、外方へ真く突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面~口縁部~頸部までヨコナデ。内面~口縁部~頸部までヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	緻密(1mm程の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-92
HS102 東	17	92		63	①16.4㎝ ②3.1㎝ ③2.5	外相して短くたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。	外面~口縁部に平坦以上の凝固痕。頸部ヨコナデ。内面~ミガキ。	密(1~2mm の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色~褐色。内面褐色。	F-95
HS102 小型丸底	18	92	37	44	②5.9㎝	扁球状の体胴。口縁部欠損。体胴の最大径を疑える。	ていねいなつくりである。外面~口縁部~頸部までヨコナデ。体部、ハケ後ていねいなナデ。内面~ていねいなミガキ。	緻密(0.5~1mm程の石英含む。)	良好堅緻	内外面褐色。	F-96
HS102 (別)	19	92	37	149	②3.4㎝ ③10.1㎝	大きく「へ」の字状内側気味にひらく脚。	内外面~ナデ、ヨコハケ後ナデ。	密(1~4mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色~褐色。内面褐色。	F-97

挿表11　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表①

出土遺構	上層番号	層位	国版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
HS102 品46	● 20	92	37	76	①15.9㎝ ②5.3㎝	浅鉢の形態。口縁部は頑おさえをもつ。	外面—口縁部ヨコナデ。以下タテハケ。後合部ナデ。 内面—口縁部ヨコナデ。以下ヨボ。	密(1—2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面褐色。	F-13
HS102 品76	● 21	92	37	42 46 90 91	②19.2㎝ ③14.9	中央で屈曲のにひがみる鉢部に接所して大きくひらく頸部がつづく。頸部は、カットしたような平面図をもつ。	外面—鉢部、タテハケ後にハケ部との後合部延ヨコナデ。頸部、タテ方向のミガキ。 内面—鉢部ケズリ後ナデ。頸部にハケ後、頸部付近ヨコナデ。	密(0.5—1mm 程の石英含む。)	良好	内外面茶褐色。	F-57
HS104 表	● 22	93	37	252	②6.7㎝	口縁部の上半を欠く。口縁部下端は、風化しているが、外方への突出は認められる。口縁部内面の段は、不明瞭。胴部は、ゆるやかに弾曲してのびる。	風化著しく不明。	密(1—2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡灰褐色—淡後褐色。	F-235
HS104 表	● 23	93		246	②5.1㎝	口縁部は、下端以上を欠く。口縁部下端は風化しているが外方への突出が認められる。口縁部内面の段は明瞭。胴部は、直立してのびる。	風化消ために不明。	密(1—2mm の石英含む。)	良好	内外面淡灰褐色。	F-231
HS104 表	● 24	93	37	340	①12.4㎝ ②3.6㎝ ③2.2	口縁部は、直立気味にたちあがる複合口縁。口唇端は鋭た。口縁部下端はそのまま延面する。口縁部内面の段はなだらか。頸部内面は、短く2段に屈曲する。	風化のため不明。	密(0.5—1mm 程の石英含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F-105
HS104 表	25	93	37	147	①15.0㎝ ②3.8㎝ ③2.4	口縁部は、外反して短くたちあがる複合口縁部は強いヨコナデによる外面と面をもつ。口縁部下端は長くて外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部—頸部、ヨコナデ。 内面—口縁部ハケ後工具痕ナヨコナデ。頸部以下ハケ。	密(1mm程の長石、石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F-107
HS104 表	26	93	37	147	①15.8㎝ ②4.5㎝ ③3.3	口縁部は、外反気味に外傾してたちあがる複合口縁。口縁部は風化気味。口縁部下端は長く延びてあるが、外方へ突出している。口縁部内面の段は明瞭である。頸部内面は、2段に屈曲する。	風化著しく不明。	密(0.5mm程の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-106
HS104 表	28	93	37	111	①14.2㎝ ②7.2㎝ ③2.8	口縁部は、外反気味に外傾してたちあがる複合口縁。口縁部は上端をひき出したように尖頭りとなる。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面部は、2段に屈曲し、強り気味の胴部へつづく。	外面—口縁部—頸部ヨコナデ。 内面—口縁部—頸部ヨコナデ。頸部以下ヨ方向ケズリ。	密(1—2mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。—淡灰褐色。	F 29
HS104 品76	● 29	93		244	①21.9㎝ ②4.9㎝	浅い鉢。球部外面に稜をもつ。内面には段をもたない。口縁部は外反するものと思われる。	外面—ヨコ方向のミガキが認められる。 内面—口縁部、ヨコナデ。以下、タテ方向のミガキ。	密(1—2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面暗灰色。内面淡黒褐色。	F-109
HS104 品76	30	93	37	115		椀形の球鉢。口縁部は外反し、口唇端はひきだしたように尖頭りとなる。	風化著しく不明。	密(1—3mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-116
HS104 表	● 31	93		254	②4.9㎝	底脚のにひらがる高坏の脚部。	全体的に風化著しく不明。	密(0.5—4mm 程の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-110
HS104 器台	32	93		147	②4.6㎝	器台の脚台部。脚台部下端の突出は緩い。	風化のため不明。	密(1—2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面褐色。	F 232
HS104 壺	33	93		120	②1.9㎝ ④5.7 (つまみ径)	大きくひろがつまみ。	内外面—ナデ。	密(1—2mm の石英含む。)	良好	内外面茶褐色。	F 102
HS104 (底部)	34	93	37	147	②1.8㎝ ③3.3㎝	平底の底面。わずかに底面をへこます。	外面—ナデ。 内面—ケズリ。	密(1—2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色 —褐色。内面明灰色。	F-100
HS104 (底部)	35	93		343	②2.4㎝ ④10.2㎝	大きな平底の底部。	外面—風化のため不明。 内面—風化していると推測に板が認められる。	やや粗(0.5—5mm程の石英含む。)	良好	内外面淡橙褐色。	F-120
HS104 鉢	36	93	37	242	①45.6㎝ ②9.6㎝	鉢の口縁部。口唇端は、直広い面をもつ。	風化著しい。 外面—ハケが見られる。 内面—不明。	密(1—3mm の長石、石英を含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-123
HS105 壺	● 37	94	38	312 315	①19.4㎝ ②17.5㎝ ③4.7	口縁部は、外反してたちあがる複合口縁。口唇部は、外方へ曲げ、上端をおさえ面をもつ。口縁部下端は、外方へ見出する。口唇部内面の段は明瞭。頸部は、ゆるやかに弾曲してのび、強り気味の肩部につづく。	外面—口縁部、ヨコナデ。頸部—胴部、タテハケ後ヨコハケが認められる。 内面—口縁部、ヨコナデ。頸部ナデ。頸部以下右方向ケズリ。	粗 密(1—2mm 長石、石英含む。)	良好	外面淡褐色—暗褐色。内面淡褐色。	頸部—胴部に赤色塗彩痕。 F-2
HS105 壺	● 38	94	38	314	①27.3㎝ ②8.3㎝ ③5.6	口縁部は、外反しながら大きくひらいてたちあがる複合口縁。口唇端は、カットしたような平面図をもち、口縁部下端は、斜めド方に長く突出する。口唇部内面の段は明瞭。頸部は大きく弾曲してのびる。	全体的に風化。 外面—口縁部—頸部ヨコナデ。 内面—口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	密(1—5mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-129
HS105 鉢	● 39	94	38	270 288	①28.2㎝ ②4.3㎝ ③3.0	外反気味に大きくひらく複合口縁。口唇部は外方へ曲げ頸部は丸い。口縁部下端は風化しているが、外方へ突出する。	風化著しく不明。	密(1—3mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-50

挿表12　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表②

出土遺構	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
HS105 壺	● 40	94	38	302	①25.3 ②10.6 ③ 4.8	口縁部は、外反して大きくひろく複合口縁。口唇部は上端を おさえ、面をもつ。口縁部下端は 丸く外方へ突出する。口縁部内面の段は、明瞭。頸部はゆるやかに高角してのび、張りぎみの肩部へと続く。頸部下位に断面台形状の突帯をもつ。	外面…口縁部～肩部、ヨコナデ。突帯は貼りつける。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部以下右方向ケズリ。	良好	内外面淡黄色。	F－133
HS105 壺	41	94	38	190 191	①19.8cm ②9.2cm ③ 4.2	口唇部は、外反気味に外視してたちあがる面合口縁。口唇部は上端をおさえ、ふすかな面をもつ。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明瞭。頸部は長めで、直立してのびる。	全体的に風化が進。 外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部、ナデ。	密(砂粒含む1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄褐色。	F－132
HS105 壺	● 42	94	38	272	①16.4cm ②3.5cm ③3.2	外反気味に外視してたちあがる複合口縁。口唇部は上端におさえたような面をもつ。口縁部下端は、丸く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。	内外面…ヨコナデ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－37
HS105 壺	● 43	94	38	266	①15.1cm ②6.0cm ③3.3	口縁部は、外反気味に外視してたちあがる複合口縁。口唇部は外方へつまみ出し上端におさえたような内傾する面をもち、外方へ肥厚する口縁部下端は外方へ丸く突出する。口縁部内面の段は、明瞭。肩部内面は丸味をもって2段に屈曲し、張り気味の胴部へとつづく。	外面…口縁部～肩部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	外面淡黄褐色。内面褐色。	F－35
HS105 壺	● 44	94		269	①33.7cm ②4.2cm ③3.3	口縁部は、外反気味に外視してたちあがる複合口唇。口唇部は風化無味である。口縁部下端は、外方へ緩く突出する。口縁部内面の段は、明瞭。頸部内面は緩く2段に屈曲する。	内外面…不明。	密(1～3mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－39
HS105 壺	45	94		289 353	①13.3cm ②4.0cm ③3.0	外反気味に外視してたちあがる複合口縁。口唇端はおさえたような面をもち、下端は外方へ突出する。口縁内面の段は明瞭。	内外面…ヨコナデ。	密(1～4mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－38
HS105 壺	● 46	94	38	286	②4.2cm	口縁部は、外反してたちあがる複合口縁。口唇部は残存しない。口縁部下端は、丸く外方へ突出する。口縁内面の段は、明瞭。頸部内面は、2段に屈曲する。	全体的に風化著しく不明。	密(1mm程の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－234
HS105 壺	● 47	94		314	①13.6cm ②7.4cm ③2.6	口縁部は、外反気味に外視してたちあがる面合口縁。口唇部は上端におさえたような面をもち外方へ肥厚する。口縁部下端は外方へ丸く突出する。口縁部内面の段は、明瞭。頸部内面は、長く2段に屈曲し張り気味の胴部へつづく。	全体的に風化が著しい。 外面…不明。 内面…口縁部～頸部、不明。頸部以下右方向ケズリ	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内面淡茶褐色。内面淡黄褐色。	F－44
HS105 壺	48	94		275	①16.0cm ②9.6cm ③3.4	口縁は、外視してたちあがる複合口縁。風化が著しいため、口縁端、口縁部下端の形態は明確ではない。頸部内面は2段に屈曲し、張り気味の肩部につづく	内外面…不明。	密(1～3mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－42
HS105 壺	49	94	38	301	①20.2cm ②5.7cm ③3.1	口縁部は、外視してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におさえたような面をもつ。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	全体的に風化著しく不明。	密(1mm程の石英含む。)	良好	外面淡灰褐色～黒灰色。内面淡灰褐色。	口縁部外面の黒褐色。 F－121
HS105 壺	50	95	39	235	①17.1cm ②5.3cm ③3.8	外反気味にわずかに外視してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におさえたような面をもちわずかに内外に肥厚する。口縁部下端は下方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭	内外面…ヨコナデ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－34
HS105 壺	51	95	39	295	①17.3cm ②7.0cm ③3.4	外視してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におさえたような面をもつ。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲し、張り気味の肩部へつづく。	外面…口縁部～肩部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－43
HS105 壺	● 52	95	39	196	①13.2cm ②4.8cm ③3.4	外反気味に外視する複合口縁。口唇部は、上端におさえたような面をもつ。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	内外面…ヨコナデ。	微密(砂粒含む。)	良好	内外面淡黄色。一部灰褐色。	F－40
HS105 壺	● 53	95	39	196	①15.3cm ②6.3cm ③2.9	外反気味に外視してたちあがる複合口縁。口唇部は、外方へ肥厚し上端におさえたような面をもち外方へ肥厚。口縁部下端は外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲し、張り気味の胴部へつづく。	全体的に風化している。 外面…口縁部～肩部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密(1～3mm の石英含む。)	良好	外面淡黄色～淡茶褐色。内面淡褐色～灰褐色。	F－41
HS105 壺	54	95	39	183	①13.8cm ②4.3cm ③3.1	外反気味にわずかに外視してたちあがる複合口縁。口唇端は、ひき出されたように上端りとなる。口縁部下端は、緩く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は2段に屈曲する。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下不明。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡黄色。	F－36
HS105 壺	55	95	39	173	①14.9cm ②4.5cm ③3.7	外反気味に外視してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におさえたような面をもち、わずかに内外に肥厚。下端は、緩く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。	内外面…ヨコナデ。	密(1mm程の石英含む。)	良好	内面淡茶褐色。内面淡褐色。	F－47

挿表13　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表③

出土遺構	土器番号	掃図	図版	遺址番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
HS105 壁	56	95		188	①16.4㎝ ②6.9㎝ ③3.0	口縁は、外反気味に外傾してたちあがる複合口縁。口唇は、丸く口縁部下端は、外方へ突出する。頸部内面は、丸みをもって2段に屈曲し、張り気味の胴部へとつづく。口縁部内面の段は明瞭。	外面—口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ヨコハケ後、ヨコナデ。 内面—口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下、右方向ケズリ。	密(1～3mm の石英含む。砂粒含む。	良好	外面淡褐色、内面淡褐色～褐色。	口縁部、頸部外面にスス付着。F-12
HS105 壁	● 57	95	39	339	①9.8㎝ ②4.1㎝ ③1.4	口縁部は、内方してたちあがる複合口縁。口唇は、先細りで口縁部下端は、長く外方へ突出する。口縁部内面の段は、明瞭。短く屈曲する頸部から張り気味の胴部へとつづく。頸部内面は、2段に屈曲する。	風化著しく不明。	密(1～3mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色	F-46
HS105 壁	58	95	39	294	①6.0㎝ ②11.0 (胴中) ③3.2㎝	小型の壺。口縁部はほとんど欠損する。頸部内面は、丸みをもって2段に屈曲する。体部は上に張る。	外面—頸部～胴部ヨコナデ。胴部ハケ。 内面—頸部ヨコナデ。以下、右方向ケズリ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-48
HS105 壁	59	95		196	①16.9㎝ ②5.3㎝ ③4.0	口縁部は、外反気味に外傾してたちあがる複合口縁。口唇は、丸く口縁部下端は、下方にする。頸部内面は、丸みをもって「く」の字状に屈曲する。	風化が進んでいる。 外面—口縁部とB面上の平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面—不明。	やや粗(1～3mm の長石、石英含む。長石含む。)	良好	外面淡茶褐色～淡灰褐色。内面淡茶褐色。	F-233
HS105 外	60	95	39	308	①13.4㎝ ②5.2㎝ ③12.2㎝	口縁部は、複合口縁状を呈する。口唇部は、上端におさえたような窪みをもち、口縁部下端は鋭く外方へ突出する。口縁部内面の段は、ゆるかや。体部はくび細り、器底状を呈する。	外面—ヨコナデ。 内外面—ていねいなミガキ。	極微密(砂粒をほとんどふくまない。)	良好堅緻	外面明橙褐色～黒褐色。内面明橙褐色。	F-49
HS105 壁	61	95	39	294	①13.4㎝ ②4.2㎝	外傾してひらく口縁はそのまま口唇端に至る。口縁端は丸頭りとなる。頸部は「く」の字状に屈曲しそのまま丸だらかな肩へつづく。	外面—口縁部～胴部ヨコナデ。 内面—口縁部～頸部ヨコナデ。以下不明。	やや粗(1～4mm の石英含む。雲母含む。	良好	外面淡褐色、内面黒褐色～淡褐色。	F-45
HS105 品坪	62	95	40	316		高坏の坏部。複合口縁状の中上がりがあり、その中央に孔。孔は、内面まで貫通する。	全体に風化著しく不明。	密(0.5～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-215
HS105 品坪	63	95	39	274	②5.1㎝	坏部の口縁。頸部を欠く。スムーズにひろがる円錐状の胴部は中空である。	全体的に風化著しく不明。	密(砂粒含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-31
HS105 品坪	64	95	39	187	②4.8㎝	スムーズにひろがる円錐状の中空の胴部。	外面—ケナハケ。 内面—ケズリ後ナデ	密(1～2mm の石英含む。雲母含む。	良好	内外面淡褐色。	F-236
HS105 器台	● 65	96	40	290	①5.9 ②17.9 ③5.0	受部は、下端以上を欠く。脚部は、短い。脚外部は、外反して大きくひらく複合口縁状を呈する。上端は丸く外方に突出し、下端は丸い。	外面—ヨコナデ。 内面—脚台部上半左方向ケズリ。他はヨコナデ。	密(1～3mm の石英含む。)	良好	外面淡褐色～黒色内面淡褐色。	脚内部下半外面に黒斑。F-53
HS105 器台	66	96	40	196	①5.9㎝ ②17.3 ③5.0	受部は、下端以上を欠く。脚部は短い。脚台部は、外反して大きくひらく複合口縁状を呈する。上端は丸く外方に突出し、下端は丸い。	外面—ヨコナデ。 内面—脚台部上半、左方向ケズリ。下半はヨコナデ。ケズリ後ヨコナデ。その他はヨコナデ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	淡褐色。	F-52
HS105 器台	67	96	40	188	②4.5㎝ ③15.7㎝ ③5.0	外反して大きくひらく複合口縁状を呈する脚台部。脚台部下端は丸く、上端は外方へ突出する。	外面—ヨコナデ。 内面—脚台部上半、右方向ケズリ。下方、ヨコナデ。	密(0.5mm程の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-213
HS105 低脚坏	68	96	40	203	①2.8㎝ ④6.2	大きくひらく脚部と大きな坏部。	全体的に風化が進む。 外面—不明 内面—脚部不明。坏部ナデ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F 6
HS105 器	● 69	96	40	303 301 314	①48.7 ②39.5㎝ ③10.3㎝	口唇端は、カットしたような面をもつ。把手は一対の小耳状の突起に近ならかった。上部把手は、底方向のくちのと思われる。体部突孔状に挿入。最部の突帯はしっかりと張り出す。	全体的に風化している。 外面—口唇部ヨコナデ。体部にナデハケ。器部ヨコナデ。突帯は貼りつける。 内面—口唇部ヨコナデ。以下体部左方向ケズリ。底部、左方向ケズリ後ヨコナデ。	密(1～2mm の粗度の石英を含む。砂粒を含む。)	良好	内外面淡褐色。	Y-23
HSK01 壁	● 70	97	41	217 218 219 220 224 324 329 330 331 332	①20.2 ②30.2 ③24.0 (胴中) ④4.0	口縁部は、わずかに外反してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、わずかに下垂する。頸部内面は、2段に屈曲する。なだらかな肩部から、最大径を上半部にもつ胴部に至る。底部は小さな平底。	外面—口縁部、17条以上の平行沈線。頸部、ヨコナデ。胴部、9条以上の平行沈線。胴部、風化して いるが、左傾する縦方向のミガキが認められる。 内面—口縁部～頸部までヨコナ方向ミガキ後、口縁部上半をヨコナデ。頸部～胴部下半まで左上方向ケズリ。以下は、右傾する タテ方向のケズリ。	密(1～3mm の石英含む。雲母含む。	良好	内外面淡茶褐色。	体部にスス付着。F-133
HSK01 壁	● 71	97	41	207 219 324	①17.6 ②16.3㎝ ③21.6 (胴中) ③3.2	口縁部は、外傾してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、そのまま鋭角する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は丸みをもって屈曲し、なだらかな肩部から胴部に至る。	外面—口縁部、平行沈線強ヨコナデ。頸部、ヨコナデ。胴部、長線風結による装飾文(右～左上)後、頸部部に平行沈線。胴部、ヨコ左上方向の細かい(幅約1mm)のミガキ。このミガキによって肩部の波状文の下端が消える。 内面—口縁部～頸部までヨコナ方向ミガキ後、上下部ヨコナデ。頸部～肩部まで左方向ケズリ。肩部以下右傾するタテ方向のケズリ。	密(1～3mm の長石、石英含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部内面、胴部外面上半に黒斑あり。胴部外面、口縁部外面にスス付着。口縁部外面に赤色塗彩痕。F-3
HSK01 壁	● 72	97	41	207 208 215 325 326 222 259 326 332	①19.9 ②16.5㎝ ③25.4 (胴) ④3.2	口縁部は、ほぼ直立してたちあがる複合口縁。口唇端は、外方へ開利する平坦面をもつ。口縁部下端は、ちなみ外方へ垂れる。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は、2段に屈曲し、なだらかな肩部を経て胴部に至る。	外面—口縁部、櫛状文、頸部ヨコナデ。肩部～胴部まで10条以上の平行沈線を2列。その内側に櫛状文を施す。胴部にミガキが認められる。 内面—口縁部～頸部ヨコナデ。口縁部に一部ミガキが認められる。頸部以下左方向ケズリ。	密(1～3mm の石英含む。)	良好	外面淡黄褐色～淡茶褐色。内面淡灰茶褐色。	内面の口縁部～肩部に赤色塗彩痕。F-154

掃図14　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表④

出土遺構	上器番号	神部	胴張	口縁部	口縁上の特徴	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
HSK01 壺	● 73	97	41	269 316 319 322 331 332	①15.6㎝ ②5.0㎝ ③3.4	外域してたちあがる複合口縁。口唇端は丸くおさめ、下端は、わずかに下垂する。内面の段は不明瞭。頸部内面は2段に屈曲する。	外面－口縁部、20条の平行沈線（右一左）。頸部、ヨコナデ。胴部にわずかに平行沈線がめられる。 内面－口縁部～頸部まで横ナデ。頸部以下左方向ケズリ。	やや粗（1～4㎜の石英含む。）	良好	内外面淡茶褐色。	外面、口縁部から頸部にかけてスス付着。 F－27
HSK01 壺	● 74	97	41	321 ③5.9㎝ ②5.0㎝ ③3.0	①15.6㎝ ②5.0㎝ ③3.0	外域してたちあがる複合口縁。口唇端は丸くおさめ、下端はわずかに上垂する。内面の段は明瞭。頸部は丸く、短く屈曲する強頸内面は丸みをもって2段に屈曲する。	外面－口縁部、8条以上の平行沈線横位ヨコナデ。胴部ヨコナデ。 内面－口縁部～頸部まで横ナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜の石英含む。）	良好	外面淡茶褐色～黒褐色。 内面淡茶褐色。	F－18
HSK01 壺	● 75	97	41	214 216 319 329	①18.6㎝ ②6.0㎝ ③3.5	口縁部は、外域して、口唇端は丸く、下端は、やや外へ開く。口縁部下端は、口縁部内面の段は不明瞭。	外面－口縁部、10条以上の平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面－口縁部～頸部まで横ナデ。頸部以下右方向ケズリ。	やや粗（1～4㎜の長石、石英含む。雲母含む。）	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部内外面に黒斑あり。 F－122
HSK01 壺	76	97	42	328	①16.3㎝ ②3.0㎝ ③2.6	外域してたちあがる複合口縁。口唇端は丸くおさめ、下端はそのまま垂直する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	内外面とも強化している。 外面－口縁部、平行沈線を横認できる。頸部ヨコナデ。 内面－口縁部、ヨコ方向のミガキを確認できる。頸部以下は調整不明。	やや粗（1～4㎜の石英、長石含む。雲母含む。）	良好	内外面暗灰褐色。	F－101
HSK01 壺	● 77	97		208 223 324 318 331	①11.6㎝ ②3.7㎝ ③2.5	外域してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、そのまま垂直する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面－強化度して調整不明。 内面－口縁部、強化のため調整不明。頸部以下、左方向ケズリ。	やや粗（1～3㎜の石英含む。）	良好	内外面淡茶褐色。	F－21
HSK01 壺	● 78	97	41	208 215	①11.6㎝ ②7.8㎝ ③12.7（横上半） ③2.2	口縁部は、外域して短くたちあがる複合口縁。口唇部は丸く口縁部下端は、純く外方へ突出する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。胴部なだらか、最大径は、頸部上半部にある。	外面－口縁部、平行沈線横ヨコナデ。頸部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のミガキ、ミガキの下に平行沈線が見られる。 内面－口縁部ナデ。強頸以下右方向の粗いケズリ。頸部はケズリ後にナデ。	密（1～2㎜の石英含む。雲母含む。）	良好/無樹	内外面褐橙色～黒褐色。	F－56
HSK01 壺	● 79	97	42	221	①16.8㎝ ②5.2㎝ ③3.8	外域してたちあがる複合口縁。口唇端は、丸くやや外方へ開ける。下端は、ななめ下方へ垂れる。内面は、ゆるやかな段をもつ。強頸内面は「く」の字状に屈曲する。	外面－口縁部、4条1単位の波状文後ヨコナデ。波状文に切られる平行沈線が確認できる。胴部ヨコナデ。 内面－口縁部～頸部までヨコ方向のミガキ後、上半部をヨコナデ。強部以下、右方向ケズリ。	密（1～3㎜の石英含む。）	良好	内外面淡茶褐色。	F－25
HSK01 壺	80	97	42	201	①16.0㎝ ②3.9㎝ ③3.4	外反口縁に外域してたちあがる複合口縁。口唇端は、おさえたような面をもち下端は、鋭く突出する。内面の段は明瞭。	内外面－ヨコナデ。	密（1㎜程度の石英含む。）	良好	内外面淡褐色。	V－2
HSK01 壺	● 81	98		334 329	①16.8㎝ ②17.2（横）		外面－頸部、ヨコハケ。頸部に赤褐するナデ方向のミガキが認められる。 内面－頸部以下左方向ケズリ	密（1～4㎜の長石、石英含む。）	良好	内外面淡褐色～茶褐色。	F－125
HSK01 壺	● 82	98		210 222	①7.3㎝ ②13.5（胴中）	大きく張る胴部	外面－頸部、8条の平行沈線後、その下位に波状文（左一右）。胴部下半に、ハケが認められる。 内面－頸部～胴部上半まで左方向ケズリ。以下左回するナデ方向のケズリ。	密（1～4㎜の石英含む。雲母含む。）	良好	内面淡黄褐色～黒褐色。内面淡黄褐色～淡褐色。	外面頸部にスス付着。 F－128
HSK01 器台	● 83	98	42	216 218	①8.8㎝ ②16.0㎝	外方に開脚形にひらく。複合口縁状の脚台部。脚内部上端は上方へひきだし、下端は丸い。筒部は細い。	外面－脚台部に沿条以上の平行沈線。脚内部上端～筒部までヨコ方向のミガキがかすかに認められる。筒部には条以上の平行沈線。 内面－脚台部右方向ケズリ。筒部ケズリ後横なナデ。	やや粗（1～4㎜の石英含む。）	良好	内外面淡褐色。	F－20
HSK01 器台	● 84	98	42	218	①12.7 ②11.1㎝	受部は、わかずに外反しながら大きくたちあがる複合口縁状を呈する。口唇端は丸く、わずかに外方へ曲がる。受部下端は下垂する。筒部は細い。	外面－受部に30条以上の平行沈線。受部下端～筒部までナデ方向のミガキがかすかに認められる。脚部には条以上の平行沈線。 内面－受部、ヨコ方向のミガキ。筒部右方向ケズリ。	粗（1～3㎜の長石、石英含む。雲母含む。）	良好	内外面淡茶褐色。	F－124
HSK01 器台	85	98	42	223	②3.9㎝ ③15.3㎝	外方へ開脚形にひらく複合口縁状の脚台部。脚内部上端は上へひきだし、下端は丸い。	外面－30条以上の平行沈線。 内面－左方向ケズリ。	密（1㎜程の石英含む。）	良好	内外面淡褐色。	F－55
HSK01 鉢	● 86	98	42	217	②7.7㎝ ③13.3㎝	「く」字状に緩く屈曲。つまみ部は欠損している。脚部端は平坦面をもつ。	外面－ヨコ方向のミガキ。つまみ部のみナデ。 内面－ケズリ後、ヨコナデ。筒部に横ケズリ痕あり。	密（1～3㎜の石英含む。）	良好	内外面褐色～黒褐色。	F－9
HSK01 皿	● 87	98	42	207	②2.5㎝ ③2.9㎝（つまみ部）	わずかに外反する柱状のつまみ。体部は内傾気味にひらんでる。	外面－ナデ方向のミガキ。 内面－ナデ。	密（0.5～3㎜程の石英含む。）	良好	内外面明茶褐色。	F－103
HSK01 （祖部）	88			219 229	①3.4㎝ ②3.9	平底の突出した底部。	外面－ナデ。 内面－左傾する下→上方向のケズリ。	密（1～2㎜の石英含む。雲母含む。）	良好	外面淡橙色。内面明茶褐色。	F－212
HSK01 （祖部）	● 89	98		326	①1.1㎝ ②3.0㎝	小さな平底の底部。	外面－ナデ。 内面－ケズリ。	密（1㎜程の石英、雲母含む。）	良好	外面淡茶褐色～淡黒褐色。内面淡黒褐色。	F－211
HSK01 （祖部）	90	98		324	①2.0㎝ ②2.4㎝	小さな平底。	外面－ナデ方向のハケの後、ナデ方向のミガキ。 内面－ケズリ。	密（1～3㎜の石英含む。雲母含む。）	良好	内外面暗黒褐色。	P＝82の底部か。 F－126
HSK02 壺	● 91	99	42	364 367 371 373	①14.9 ②5.2㎝ ③3.0	口唇部は、外域してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く口縁部下端は、下垂する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は、2段に屈曲する。	外面－口縁部、12条の平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面－口縁部～頸部にかけて風化が著しいが、口縁部にミガキがわずかに認められる。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜の石英含む。雲母含む。）	良好	内外面淡茶褐色。	F－131

挿表15　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑤

出土遺構	土器番号	図版	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	粘土	焼成保存	色調	備考
HSK02 袋	●92	99	42	373	①14.2㎝ ②4.5八 ③3.2	口縁部、10㎝の平行沈線。口巻部は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部、平行沈線ヨコナデ。 内面一口縁部一頸部まヨコ方向のミガキ。頸部以下右方向ケズリ。	密(1～3㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部外面に火ス付着。F－127
HSK02 袋	●93	99	42	363 367 371 375 376	①15.5 ②4.1八 ③3.4	外稜してたちあがる複合口縁。口巻端はんく。口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部、平行沈線ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面一底化しているが、口縁部一頸部にかけてはミガキの痕跡を認めることができる。頸部以下左方向ケズリ。	密(1～2㎜長石、石英含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部外面に火付着。F－12
HSK02 袋	●94	99		359 364 367 370 372 373	①17.7㎝ ②4.3八 ③5.6	口縁部は、外反気味に大きく外稜してたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は丸みをもって「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部、平行沈線ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部一頸部ヨコナデ。口縁部下端にかすかにミガキの痕跡が認められる。頸部以下、左方向ケズリ。	密(1～2㎜の長石、石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色。内面淡茶褐色一暗灰色。	口縁部一頸部外面に火付着。F－8
HSK02 袋	95	99	42	359	①14.8㎝ ②4.9八 ③2.2	口縁部は、外稜して短くたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端はそのまま垂直する。口縁部内面の段は明瞭である。頸部内面は2段に屈曲する。	外面一口縁部5条の擬沢線。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部ヨコナデ。頸部ヨコ方向ミガキ、以下左方向ケズリ。	疎密(1㎜程度の石英含む。)	良好	内面淡茶褐色。内面淡褐色。	口縁部外面に火付着。F－79
HSK02 袋	96	99	42	292	①16.7㎝ ②4.6八 ③24.0	口縁部は、外稜して短くたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は丸味をもって頸部へつながる。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	内外面とも風化が著しい。 外面一口縁部、平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部にヨコ方向のミガキが認められる。頸部以下不明。	密(1～2㎜の石英含む。)	やや不良	外面淡褐色。内面淡茶褐色。	口縁部内面赤色塗彩痕。F－23
HSK02 坐	97	99		293	①16.2㎝ ②2.0八	口巻端は、肥厚する。	内外面とも不明	疎密(0.5～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面明褐色。	F－88
HSK02 高杯	●98	99	42	292 333 359 360 363 366 368	①27.2 ②20.0 ③18.6 (脚径)	浅い皿状の坏部をもつ。口端部は外稜し、口巻端は丸い。中空で底縁部にひろがる脚部に接続して入き(ひろがる部分がつづく。裾部に同形進しを2箇づつ3ヶ所に穿つ。	外面一坏部、風化のため不明。脚部、タテ方向ミガキ。裾部、ヨコ方向ミガキ。脚端はヨコナデ。 内面一坏部、風化しているがこくわずかにミガキが認められる。脚部ケズリ後ナデ。裾部と坏部の接合部に前究痕。裾部、左方向ケズリ。	密(1～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F－4
HSK02 高杯	●99	99	42	375	①8.1八	高杯の坏部の一部と脚部。脚部は中実で太い。	外面一坏部一脚部までナテ方向のミガキ。脚部と脚部の接合部にミガキ消されたナテハケの一部が残る。 内面一坏部ミガキ。脚部下端に段でついたような跡あり。脚部左方向ケズリ後ナデ。	密(1～3㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F－91
HSK02 器台	100	99	42	359	①4.1八 ②17.4㎝	複合口縁部を欠する脚台部。脚内端は丸い。	外面一平行沈線後、ヨコナデ。 内面一右方向ケズリ後、脚内端付近をヨコナデ。	密(1～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F－90
HSK02 (遺物)	101	99		292	②2.5八 ③3.6㎝	平底の底部	外面一タテ方向のミガキ。底面ナデ。 内面一右横方タテ方向のケズリ。	密(1～3㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内面暗灰褐色。	F－76
HSK03 袋	102	100	43	350	①19.2㎝ ②6.9八 ③3.9	口縁部は、わずかに外稜してたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は下垂する。頸部は長く、内面は丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部に12㎝以上の平行沈線。頸部一頸部ヨコナデ。 内面一口縁部にヨコ方向のミガキ。頸部タテ後ヨコ方向のミガキ。頸部以下左方向ケズリ。	疎密(1～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好発掘	外面淡褐色。内面淡褐色一暗褐色。	口縁部一頸部内面に赤色塗彩痕。F－210
HSK03 袋	●103	100		379	①27.3㎝ ②5.8八 ③4.9	口縁部は、わずかに外稜してたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は、下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部は丸味をもって屈曲する。	外面一口縁部、平行沈線(右一左)後、一部にミガキがみられる。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部一頸部まで、ヨコ方向のていねいなミガキ。	密(0.5～3㎜程の石英含む。雲母含む。)	良好堅緻	内外面淡褐色。	F－87
HSK03 壺	104	100	43	360	①22.5㎝ ②5.1八 ③3.7	口縁部は、大きく外稜してたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は、下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は、丸味をもって屈曲する。	外面一口縁部10㎝以上の平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部一頸部までていねいなヨコ方向のミガキ後、口巻部付近ヨコナデ。	密(1～2㎜の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色。内面淡暗褐色。	F－28
HSK03 壺	105	100	43	350 369	①15.9㎝ ②5.0八 ③2.8	口縁部は、直立してたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は、わずかに下垂する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部、12㎝以上の平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部一頸部までヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密(1～4㎜の石英含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F－24
HSK03 壺	106	100	43	360	①14.7㎝ ②3.5八 ③2.2	口縁部は、外稜してたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は、わずかに下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	全体的に風化している。 外面一口縁部に平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部一頸部にミガキが認められる。頸部以下左方向ケズリ。	密(1～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色。内面淡褐色一暗灰色。	F－81
HSK03 壺	107	100	43	350	①15.8㎝ ②6.2八 ③2.1	口縁部は、外稜して短くたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁部下端は、そのまま垂直する。口縁部内面の段は明瞭。頸部は丸味をもって2段に屈曲し、なだらかな頸部へとつづく。	全体的に風化著しい。 外面一口縁部に2条の擬沢線を修復できる。頸部一頸部までヨコナデ。 内面一口縁部一頸部まで不明。頸部以下左方向ケズリ。	密(1～3㎜の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F－80
HSK03 壺	108	100	43	350	①15.5㎝ ②6.1八 ③2.1	口縁部は、外稜して短くたちあがる複合口縁。口巻端は丸く、口縁下端は、そのまま垂直する。口縁内面の段は明瞭。頸部内面は丸味をもって「く」の字状に屈曲し、なだらかな頸部へとつづく。	全体的に風化著しい。 外面一口縁部、平行沈線かかすかに残る。頸部、不明。胴究。 内面一口縁部一頸部までも明。頸部以下、左方向ケズリ。	やや粗(1～2㎜の石英含む。)	良好	外面淡暗褐色一暗灰褐色。内面淡褐色一淡茶褐色。	F－11

挿表16　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑥

出土遺構	土器番号	探査	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	了法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
HSK03 貌	109	100		350	①16.1※ ②4.1△ ③1.9	口縁部は、ほぼ直立して短くたちあがる複合口縁。口唇端は丸く口縁部下端は、そのまま続着する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	全体的に風化が著しい。 外面…平行沈線痕。 内面…口縁部にわずかにヨコ方向ミガキが認められた。頸部以下、左方向ケズリ。	密(1～2mm の石英含む)。	良好	外面灰褐色。 内面淡黄褐色。	F－19
HSK03 蓋	110	100	43	350	①16.2※ ②3.0△ ③2.9	外見してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、外方へ緩く突出する。口縁部内面の段は不明瞭。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部一段の上位辺りまでハケ状に丸底板すヨコナデ。以下は一方向のミガキ。	緻密(0.5～2mm 石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡紫褐色。 内面淡赤褐色。	外面にススが付着。 F－84
HSK03 (底部)	111	100	43	350 350	①5.8△ ④3.6	平底の底部。	全体的に風化している。 外面…タテハケが認められる。 内面…右斜する下～上方向のケズリ。	やや粗(1～2mm の石英含む。)	良好	外面淡橙褐色～淡茶褐色。 内面淡橙褐色～褐茶褐色。	F－7
HSK05 (底部)	112	100	43	360	①12.9△ ④7.0※	平底の底部。	外面…タテ方向のミガキ。 内面…右斜する下～上方向のケズリ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色～淡茶褐色。 内面暗褐色～淡茶褐色。	F－5
HSK03 (底部)	113	100	43	360	②3.6△ ③5.6※	しっかりとした平板。	外面…タテ方向のミガキ。 内面…下～上方向のケズリ。	密(1～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面明橙褐色～灰褐色。 内面灰褐色。	F－77
HSK04 壺	●114	101	44	363	①13.8※ ②4.6△ ③2.1	口縁部は、外反気味に外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は下垂する。頸部内面は、丸味をもって段に屈曲する。	外面…口縁部10条以上の平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコ方向のミガキ。頸部不明。以下左方向のケズリ。	密(1～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色～黒褐色。	口縁部外面にススが付着。 F－86
HSK04 壺	●115	100	44	380 384 387	①14.0※ ②4.5△ ③3.2	口縁部は外反しながらたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、ななめ下方に垂れる。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面…口縁部に10条以上の平行沈線痕。ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面…一部にミガキがわずかに認められる。	やや粗(1～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色～黒褐色。内面淡茶褐色～淡黒褐色。	口縁部外面にススが付着。 F－78
HSK04 壺	●116	101	44	380 382 383 (側)	①19.7 ②13.3△ ③24.5 ③3.7	口縁部は、わずかに外開してたちあがる複合口縁。口唇端は、丸みをもって垂下する。口縁部内面の段はゆるやかに屈曲する。頸部内面は、2段に屈曲してなだらかな円錐へつづく。	全体的に風化が著しいである。 外面…口縁部に波状文。その下位に波状文に切られる2条の沈線。 頸部～肩部ヨコナデ。肩部～胴部に、上位から波状文、平行沈線、ゆるやかな波状文。 内面…口縁部にヨコ方向のミガキが認められる。頸部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密(1～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡黄褐色～淡茶褐色。 内面淡茶褐色	F－130
HSK04 壺	117	101	44	381	①17.2※ ②4.5△ ③3.7	外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端はわずかになめ下方に垂れる。口縁部内面の段はゆるやか。	外面…12条の平行沈線。 内面…ヨコナデ。	密(1～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面紫褐色～黒褐色。内面淡褐色。	F－89
HSK04 壺	118	101	44	381	①18.4※ ②3.1△ ③3.2	外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、そのまま垂直する。口縁部内面の段は明瞭。	外面…口縁部に12条以上の平行沈線。 内面…ヨコ方向のミガキ。	緻密(1mm以下の石英含む。)	良好	外面茶褐色。 内面淡茶褐色～褐褐色。	F－85
HSK04 壺	●119	101	44	382	①16.5※ ②4.7△ ③3.0	口縁部は、外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、ごく純く外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面…口縁部～頸部ヨコナデ。 内面…口縁部は、口唇部付近ハケ状に丸底板すヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	やや粗(1～2mm の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色～黒褐色。内面淡褐色。	口縁部外面にススが付着。 F－22
HSK04 壺	●120	101	44	385	①14.6※ ②4.0△ ③3.0	口縁部は、外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く下端はやや外方へ緩く突出する。口縁部内面の段は、不明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面…口縁部、ハケ状工具痕を残す。 頸～ヨコナデ。 内面…口縁部～頸部まで、強いヨコナデの後、粗いミガキ。	緻密(1～2mm の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色～黒褐色。内面淡黄褐色。	口縁部外面にススが付着。 F－83
HSK04 壺	●121	101	44	382	①15.5※ ②3.3△ ③3.0	外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く口縁部下端は、ごく純く外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面…口縁部ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面…不明。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	外面褐色～淡褐色。 内面淡褐色。	F－82
HSK01 (底部)	●122	101		383	①2.9△ ④4.4※	平底の底部。	内面…右斜する下～上方向のケズリ。	密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面橙褐色。	F－14
HSB03 壺	123			352	①17.2※ ②2.7△	外反気味に大きくひらく口縁。口唇端は丸い。	内外面…ヨコナデ。	密(砂粒含む。雲母含む。)	良好	内外面淡橙色。	F－108
HSB03 小甕	124	101	44	126	①17.3※ ②4.3△	外反気味にたちあがる。	内外面…ヨコナデ。	緻密(砂粒含む。)	良好	外面暗褐色。 内面淡黄色。	F－214
HSB03 須恵器 坏身	125	101	44	125	①12.9※ ②2.5 ④7.2	口縁部は、やや外開しながら外縁し、端部に至る。端部は丸くおさめる。底部は平ら。	外面…口縁部、切離チナを思われる。底部には、回転糸切り痕残る。 内面…指圧チナと思われる。	やや粗(1～2mm 大の砂粒含む。)	やや不良	内外面とも淡黄灰色。	F－217
HSB01 高台付	126	101		390	②1.5△	外方へふんばる高台がつく。	内外面…風化のため不明。	密(砂粒含む。)	良好	内外面淡橙色。	F－245
HSB01 須恵器 (脚)	127	101		390	①14.5※	大きく開く脚端は、内側に肥厚する。	内外面…回転チナ。	密(砂粒含む。)	良好	内外面青灰色。	F－245
HSD01 壺	128	102		293	①15.4※ ②4.2△	「く」の字に折れ曲がる頸部からそのまま口縁部に至る。口唇端は肥厚しない。胴部はなだらか。	外面…口縁部ヨコナデ。頸部～方部まで タテハケ後ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頸部以下不明。	緻密(砂粒含む。雲母含む。)	良好	内外面淡橙褐色。	F－115
HSD01 壺	129	102		74	①13.3※ ②1.8△	肩直する頸部からそのまま口縁端に至る。口縁端は丸い。	内外面…ヨコナデ。	緻密(砂粒含む。雲母含む。)	良好	内外面淡橙色。	F 113
HSD01 壺	●130	102	45	264	①14.9※ ②6.3△ ③2.4	口縁部は、ほぼ直立して短くたちあがる複合口縁。口唇端は丸く口縁部下端は、そのまま屈曲する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲し、なだらかな肩部へと続く。	外面…口縁部～頸部ヨコ方向のミガキ。頸部～肩部、タテハケ後、ヨコ方向ミガキ。 内面…口縁部～頸部ヨコ方向のミガキ。頸部～肩部、左方向、斜めミガキ。	緻密(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡橙褐色。	頸部外面に赤色塗彩痕。 F－31

挿表17　南谷ヒジリ遺跡出土時観察表⑦

出土遺構	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	下法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
HSD01 裏	131	102		293	①13.6㎝ ②3.5㎝ ⑥1.6	口縁部は、わずかに外開して展くたちあがる接合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は、そのまま肩面である。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は「くの字」状に屈曲する。	外面…口縁部～頸部までヨコナデ。 内面…口縁部～頸部までヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密(1～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面黒褐色。	口縁部～頸部内外面にスス付着。F－112
HSD01 裏	132	102		74	①12.8㎝ ②3.1㎝ ⑤2.9	外反気味に外開してたちあがる複合口縁。口唇端は外方へ折り曲げ、おさえたような面を有し、外方へ肥厚。口縁部下端は、外方へ展く突出する。	内外面…ヨコナデ。	緻密(砂粒含む。)	良好	内外面淡褐色。	F－111
HSD01 裏	133	102	45	378	①11.1 ②9.4㎝ ③12.2 (胴中)	口縁部は内側なかから外方へ開いてたちあがりそのまま口唇端に至る。口唇端は丸い。頸部内面は丸味をもって2段に屈曲し、なだらなか頸部を経て、よく張る胴部に至る。	外面…口縁部～頸部までヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。頸部ケズ。頸部以下右方向ケズリ。	粗(1～2㎜程度の石英を含む。砂粒を含む。)	良好	外面褐色～黒褐色。内面淡茶褐色。	F－27
HSD01 焼成後穿孔	134	102		54 127	①14.8㎝ ②3.5㎝	口縁部は、ゆるやかに外開しながら外開し、端部に至る。端部はしゃくれかける。	外面…天井部へラケズリ後、周縁ナデ。 内面…頸部ナデ。	密(砂粒含む。)	やや不良	内外面とも淡褐色。	F－218
HSD01 裏	135	102	45	33	①13.9㎝ ②2.8㎝	「く」の字状に折れ曲がる肩部がそのまま口唇端につづく。口唇端は、わずかに肥厚する。	口縁部は、内外面ともヨコナデ。口縁下ナデ。	粗 密(0.5～1㎜の石英含む。)	良好	内外面淡赤褐色。	F－54
HSD01 裏	136	102		446	①21.0㎝ ②3.1㎝	外反しながら大きく(ひろがる)張の口縁。口唇端は面をなし、中央が凹線状にくぼむ。	内外面…ヨコナデ。	粗 密(0.5～1㎜の石英含む。雲母含む。)	良好堅緻	内外面淡褐色。	F－114
H遺構外 裏	137	102	45	26	①14.2㎝ ②4.7㎝ ③2.7	外反しながら外開してたちあがる複合口縁。口唇部は丸いが上端をわずかにおさえる。口縁部下端は、展く外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	内外面…ヨコナデ。	密(1～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F－209
H遺構外 高坏	138	102	45	23	②3.3㎝	坏部片。	不明	密(1～2㎜の石英含む。)	やや不良	内外面淡褐色。	F－216
H遺構外 壺胴片	139	102		18	①13.9㎝ ②1.5㎝	口縁部の下に鎖連弁が見られる。		緻密(砂粒含む。)	良好	内外面青灰色。	F－229
H遺構外 頸部壺	140	102	45	18		壺体部の破片と思われる。	外面…平行叩きの後、カキ目調整。 内面…細かい同心円文叩き。	緻密(微砂粒含む。)	良好	外面淡灰色。内面青灰色。	F－219
H遺構外 頸部壺	141	102	45	21		頸胴部の破片。	外面…平行叩き文。 内面…同心円文叩き。	密(1～3㎜大の石英含む。)	良好	内外面とも淡灰色。	F－220
HSD03 頸部壺	142	102	45			頸胴部の破片と思われる。	外面…平行叩き文。 内面…同心円文叩き。	密(砂粒含む。)	良好	外面濃青灰色。内面淡灰黒色。	F－119
HSK02 縄文深鉢	143			333		深鉢の口縁部の破片である。	外面…口縁部外面、平行沈線と刺突文が施される。その下に縄文の施りが、LRの縄文地が上塗される。 内面…ナデ調整している。	1～3㎜の石英を含む。雲母含む。	良好	内外面淡褐色。	F－58
HSK04 縄文	144			383		鉢部の破片である。	外面…地文は撚糸紋である。原体の撚りあはL{L/R}である。 内面…ナデ調整している。	0.5～1㎜の石英を含む。	良好	内外面黄褐色。	F－61
HSD01 縄文	145			127		胴部の破片である。	外面…地文は、撚糸紋である。原体の撚りあはR{L/R}である。 内面…ナデ調整している。	0.5～1㎜の石英を含む。	良好	内外面淡褐色。	基本 II F－117
HSI02 縄文	146			43		胴部の破片である。	外面…地文は、撚糸紋である。原体の撚りあはL{L/R}である。 内面…ナデ調整している。	1～2㎜の石英含む。	良好	内外面淡黄褐色。	基本 II F－118
A2G 縄文深鉢	147			34		胴部の破片である。	外面…地文は、撚糸紋である。原体の撚りあはL{L/R}である。 内面…ナデ調整している。	1～3㎜の石英含む。	良好	外面黄褐色。内面明褐色。	F－221
HSK02 縄文	148			333		胴部の破片である。	外面…地文は縄文である。原体の縄文の撚りは、LRである。 内面…ナデ調整している。	0.5～1㎜の石英含む。雲母含む。	良好	内外面褐色。	F－59
HSK02 縄文	149			333		胴部の破片である。	外面…地文は縄文である。原体の縄文の撚りは、LRである。 内面…ナデ調整している。	1～2㎜の石英含む。	良好	内外面淡褐色。	基本 II F－60

挿表18　南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表①

出土遺構	土器番号	種類	器版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	現成保存	色調	備考
MS I 01 壺	●150	103	46	200 245	①15.3 ②7.2cm ③3.6	頸は直立してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端はわずかに下垂する。頸部内面は丸をもって「く」の字状に屈曲する。胴部はなだらか。	外面一口縁部了金以上の平行沈線、頸部ヨコナデ、肩部平行沈線。内面一口縁部に上ケヤが認められる。頸部タテ目下反方向ケズリ。	密(1～3mm の長石、石英を含む。雲母含む。)	良好	外面茶褐色 内面淡灰褐色。	F－172
MS I 01 壺	●151	103		239	①17.3cm ②6.0cm ③3.4	口縁部は外反気味に外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸いがわずかに上端をおさえる。口縁部下端は、外方へ突出する。胴部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部平行沈線後ヨコ方向ミガキ。以下、ヨコ方向ケズリ。 内面一口縁部～頸部ヨコ方向ミガキ。頸部以下、右方向ケズリ。	やや粗(0.5～2mm)角の石英含む。	良好雲紋	外面黒褐色 内面淡茶褐色 ～黒褐色。	口縁部外面に天文付着 F－167
MS I 01 壺	●152	103	46	239	①17.2cm ②5.3cm ③3.2	口縁部は外開してたちあがる複合口縁。口唇部は上端に おさえたような感をもつ。口縁部下端は、わずかに下垂する。口縁部内面の段は緩やか。頸部内面は丸味をもって屈曲する。	外面一口縁部平行沈線後ヨコ方向ミガキ。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部ヨコ方向ミガキ。頸部ヨコナデ。タテ目右方向ケズリ。	密(0.5～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色 ～黒色。	口縁部内面に黒斑あり。 F－165 F－166
MS I 01 壺	●153	103	46	252	①18.4cm ②5.4cm ③3.0	口縁部は、外開してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く口縁部下端は、わずかに下垂する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	全体的に乱化している。 外面一口縁部ヨ金以上の平行沈線。頸部不明。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	密(1～3mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F－171
MS I 01 壺	154	103	46	252 260	①17.2cm ②5.6cm ③4.0	わずかに外反気味に外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸い。口縁部下端は外方へ突出する。口縁部内面の段はゆるやか。	外面一口縁部は各以上の平行沈線。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部内面のミガキ。頸部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	密(1～3mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F－169
MS I 01 壺	155		46	260	①14.2 ②5.6cm ③2.4	口縁部は口頸変えてたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は段に屈曲する。	外面一口縁部平行沈線、頸部ヨコナデ。 内面一口縁部ヨコ方向のミガキ。頸部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	やや粗(0.5～4mm程度の石英多く含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F－164
MS I 01 壺	156	103	46	251	①19.3cm ②4.4cm ③2.8	外反気味に外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸い。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部上位ヨコナデ。下位～頸部ヨコ方向ミガキ。以下左方向ケズリ。	密(0.5～3mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F－166
MS I 01 壺	157	103		253 253	①17.1cm ②4.8cm ③3.0	外開してたちあがる複合口縁。口唇端は丸い。口縁部下端は無化している。口縁部内面の段は不明瞭。	黒化が著しいが、口縁部外面に平行沈線がわずかに残る。 外面一口縁部ヨ金以上の平行沈線。以下ヨコナデ。 内面一口縁部上位ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	やや粗(1～2mm の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F－161
MS I 01 壺	158	103		242	①17.4cm ②5.5cm ③3.0	わずかに外開してたちあがる複合口縁。口唇部は上端におさえたような感をもつ。口縁部下端はそのまま屈曲する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部ヨ金以上の平行沈線。以下ヨコナデ。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	やや粗(1～2mm の石英含む。)	良好	外面暗茶色～淡褐色。 内面淡茶褐色。	F－183
MS I 01 壺	159	103	46	174	①14.3cm ②4.25cm ③2.8	直立してたちあがる複合口縁。口唇端は丸い。口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。	黒化が著しい。 外面一口縁部に平行沈線が認められる。以下ヨコナデ。 内面一ヨコナデ。	密(1～2mm 前後の雲母を含む。)	良好	内外面褐色。	1－6
MS I 01 壺	●160	103	46	198	①5.9 ②13.7cm ③ツまみ径6.7	つまみは大きくひらく。体部は内閉してのびる。	外面一つまみ部ヨコナデ。体部下端部付近ヨコナデ。強ヨナデ。 内面一六弁形ヤ。以下左方向ケズリ。	密(1～4mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面黒色～淡茶褐色。内面淡茶褐色。	つまみ部外面に黒斑あり。 F－174
MS I 01 手づくねテ器	●161	103		199	①8.3cm ②4.2cm	浅い椀状を呈する。	内外面一ナデ。	密(0.5～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色 ～茶褐色。 内面褐褐色。	F－157
MS I 02 壺	162	103	46	265 252	①17.2cm ②4.9cm ③3.2	外開してたちあがる複合口縁は、口唇部近くでわずかに外反する。口縁部は丸く、口縁部下端は斜め下方に開く突出する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面一ヨコナデ。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	密(径0.1mm程度の石英含む。雲母含む。)	良好	外面暗褐色～茶色。 内面淡茶褐色。	口縁部～頸部外面に天付着。 F－159
MS K04 壺	●163	104	47	263	①18.3 ②8.5cm ③3.3	口縁部は外反気味に外開してたちあがる複合口縁。口唇部は上端におさえたような感をもつ。口縁部下端は斜め下方へ開ける。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は丸く「く」の字状に屈曲する。胴部はなだらか。	外面一口縁部上于波状文、下半平行沈線後、口縁部全体をヨコナデ。頸部ヨコナデ。 頸部～胴部に共刺櫛様を用いた押引沈線。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	密(1～4mm 長石、石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡橙褐色 ～暗褐色。 内面淡橙褐色～褐色。	F－182
MS K04 壺	●164	104	47	263	①17.4cm ②5.2cm ③3.1	外開してたちあがる複合口縁。口唇部は上端におさえたような感をもつ。口縁部下端はゆるやか。頸部内面は、丸く「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部平行沈線後ヨコナデ。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	やや粗(1～2mm の長石、石英を含む。)	良好	内外面淡褐色。	F－158
MS K04 壺	●165	104	47	264	①16.8cm ②5.3cm ③3.1	口縁部は大きく外開してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端はわずかに外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。胴部はなだらか。	外面一ヨコナデ。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。以下、左方向ケズリ。	密(1～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部外面に天付着。 F－170
MS K04 壺	●166	104	47	262	①12.8 ②13.6cm ③12.9 (胴) ③1.9	小さい壺。口縁部は、外開して丸くたちあがる複合口縁。口唇端は丸く、口縁部下端はわずかに外方へ突出する。口縁部内面の段はゆるやか。肩部は小り気味。胴部はよく張り、最大径は上半に位置する。底部は欠損。	外面一口縁部に平行沈線がみられるが無化している。頸部ヨコナデ。 肩部～胴部上位に、8条以上の平行沈線及び波状文、胴部中位にナデハケが認められるが、風化のため以下不明。 内面一口縁部ヨコナデ。頸部不明。肩部～胴部下位左方向ケズリ。以下左方向ヨコナデ。	やや粗(1～3mm の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色 ～黒褐色。 内面淡茶褐色 ～淡褐色。	口縁部～肩部外面に天付着。 F－181
MS K04 (遺部)	●167	104	47	263	①3.7cm ②3.6	平底。	外面一側面タテ方向のミガキ。底面ナデ。 内面一右傾する下～上方向のケズリ。	密(1～2mm の石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色 ～暗灰褐色。 内面褐色。	F－156

挿表18　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表①

出土遺構	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成程度	色調	備考
MSK04(低湿)	●166	104	47	263	①2.8点 ④3.0	小さな平面。	外面→ナデ。 内面→左方向ケズリが認められる。断面に粗雑圧痕。	密(0.5~3mmの石英含む。雲母含む。植物繊維。)	良好	外面赤褐色~黒褐色。内面淡茶褐色。	F-135
MSK05 壁	169	104	47	165	①16.0 ④4.9点 ⑤2.9	口縁部は外稜してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く口縁部下端は、斜め上方へわずかに傾れる。口縁部内面の段は不明瞭。強指内面は「く」の字状に屈曲する。	外面→口縁部依位文。強指ヨコナデ。胴部~肩部以後横縦を用いた押引圧痕。 内面→口縁部~胴部ヨコナデ。以下左方向ケズリ。	密1mm程度の石英を含む。	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部外面に入天竹痕。F-18
MSK05 壁	170	104		249	①15.2㎝ ④4.7点 ⑤3.2	口縁部は外稜してたちあがる複合口縁。口唇端は丸く口縁部下端は、そのまま垂直する。口縁部内面の段はゆるやか。強指内面は「く」の字状に屈曲する。	外面→口縁部1条の平行沈線。強指ヨコナデ。 内面→口縁部~胴部ヨコナデ。以下ケズリ。	密(0.5~3mmの石英含む。雲母含む。)	良好	外面淡茶褐色~黒色。 内面淡茶褐色。	口縁部外面に黒斑。F-168
MSK05 壁	171	104		249	①16.7㎝ ④6.2点 ⑤3.4	口縁部は、わずかに外稜してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く口縁部下端は、そのまま垂直する。口縁部内面の段はゆるやかな。強指は長めで、内面はあくび状に屈曲する。	口縁部~ヨコナデ。 内面→口縁部~胴部ヨコナデ。口縁部にハケ状工具によるヨコナデの痕跡あり。胴部以下ケズリ。	やや粗(0.5~3mmの石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F-163
MSK05 壁	172	104		255	①2.4点 ③つまみ径5.4	外反気味にひらくつまみ。	外面→つまみ部ヨコナデ。体部ヨコ方向ミガキ。 内面→上~下方向のケズリ後ナデ。	密(0.5~2mmの石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F-173
Mピット群	173	104		280	①15.3㎝ ④4.8点 ⑤3.9	口縁部は外稜してたちあがる複合口縁。口唇端はあく。口縁部下端はそのまま垂直する。口縁部内面の段はゆるやか。	内外面→ヨコナデ。	密(0.5~2mmの石英含む。雲母含む。)	良好	内外面褐黒色。	F-160
M19号埴輸基壁	174	105	48	10, 19 21, 28 28, 34 35, 41 42, 63 161 182 186	①32.9㎝ ④64.9	口縁部はりあげまみに肥厚、断面に間隔が入り、その間に横状文がある。整形は短い。体部は倒形をなし、上半部で肩が張る。	外面→縦刷毛ナデ。体形平行叩き。 内面→横刷毛ナデ。体部同心円文叩き。	密。植物繊維を含む。	良好	内外面青灰色。	Y-26
M19号埴輸基壁	175	106		10	①11.2㎝ ②1.9点 ③12.1 ④0.5	立ちあがりは内側し短い。端部は薄く引き出している。受部は水平に延びる。	内外面→回転ナデ調整。	微砂含む。	良好	内外面淡灰色。	F-150
M19号埴輸基壁	176	106	47	62	①10.6㎝ ②3.5点 ③12.0 ④0.9	立ちあがりは、やや外反しながら内側し端部に至る。端部は丸い。受部はやや上方に引き延びている。	体部上半は回転ナデ。底部との境に凹線が入る。底部はヘラケズリ後ナデ。	2~3mm大の白砂を含む。	良好	内外面淡赤灰色。	外面底部にヘラ記号かF-148
M19号埴輸基壁	177	106	47	53 57	①12.4 ②7.3.4 ③13.0 ④0.4	立ちあがりは内側し、細い。端部は丸い。受部は上方へ延びる。底面は平ら。	外面→縦刷毛ナデ。白粉粒がかかる。 内面→縦刷毛ナデ。	密。植物繊維を含む。	良好	内外面暗青灰色。	Y-6
M19号住居跡	178	106	47	57	①13.1㎝ ②3.5 ③14.3 ④0.8	立ちあがりは外反しながら内側する。端部は丸い。受部はやや上方に延びる。底部は焼成時に変形している。	外面→底部ヘラケズリ後ナデ。底体部ヘラケズリ。強は回転ナデ。 内面→底部刷毛ナデ後平滑方向ナデ。強は回転ナデ。	砂粒、長石、砂粒を含む。	やや良	外面暗青灰色。 内面淡灰色。	I-5
M19号埴輸基壁	179	106	47	94	①12.9㎝ ②3.9 ③12.8 ④1.7	立ちあがりは短く立ち上がり、端部の形状は敷紙が厚いために不明。受部は断面三角形で短い。底部は平ら。器肉は厚手。	内外面とも底化が著しいが、底体部1/2程度ヘラケズリが施されている。	大粒の砂礫を含む。	不良	内外面淡灰色。	Y-7
M19号埴輸基壁	180	10	47	34 38	①14.4㎝ ②4.5	口縁部はやや内側しながら下り、端部で外方へ開き、端部は丸い。口縁部と天井部の境は不明瞭。天井部は平ら。	外面→底化が著しいが、回転ナデ。 内面→回転ナデ。	砂粒、長石、雲母含む。	やや不良	内外面淡茶灰色。	F-19
M19号埴輸基壁	181	106		63	①8.8㎝ ②1.8点	口縁部はやや外反しながら伸び端部に至る。端部は平坦になる。	内外面→ナデ調整。	砂粒、長石を含む。	やや不良	内外面暗青灰色。	Fp182(第層)と同じものか。F-145
M19号埴輸基壁	182	106	48	291	①7.1㎝ ②3.3	胴部張に上方の沿線、沿線間に只横横線による斜線文。胴部に円孔を穿孔。底面は平ら。	胴部下半約2/3をヘラケズリ。底部ヘラ切り。	石英、長石粒含む。	良好	外面淡青灰色。	F-135
M19号住	183	106	48	49 51	①12.9㎝ ②24.0 ③20.2㎝	口縁部はわずかに外稜して短くたちあがる。口唇端は丸い。口縁部下端に鋭い稜をもつ。胴部は長めで、肩部は張らずなだらかである。	外面→口縁部ヨコナデ。以下不明。 内面→口縁部ヨコナデ。胴部~肩部上ナナデ。肩部下半ナナ方向ナデ。胴部右上方の右方向ケズリ。	密1mm程度の石英含む。	良好	外面茶褐色。 内面暗褐色。	口縁部~胴部内面に赤彩跡。Y-12
M19号埴輸基壁	184	106	48	55 56	①12.4 ②7.8	深い横状の沿線と短い胴部をもつ。対口唇部には外稜する面をもつ。胴部は中空である。	外面→底部ヨコナデ。胴部との接合部はナデ。 内面→底部ヨコナデ。以下ナナ。胴部ナナ。	密(1mm程度の石英含む。)	良好	外面淡褐色。 内面暗褐色。	Y8, Y9
M19号埴輸基壁	185	106	48	54	①8.9 ②14.9 ③16.9	口縁部は直立して短くたちあがる複合口縁状を呈する。口唇端は丸く、口唇部下端はこくわずかに外方へ突出する。胴部は高張してのびる。肩部は張り気味で、最大径を体部上半にもち、よく張る胴部につづく。底面は丸底。	外面→口唇部~胴部ヨコナデ。胴部~胴部下半ナナハケ後歩ゃ~のココハケを施してナナ。以下ナナ。 内面→口唇部~胴部ヨコナデ。以下胴部下半まで右方向ケズリ。以下上方向のケズリ。	密(0.5~2mmの石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部~頸部内外面、胴部~胴部外面に赤彩跡。F-134
M19号埴輸基壁	186	106	48	48		基底部。	内外面ナナハケ。底部調整なし。	密(砂粒含む。雲母含む。)	良好	外面砂粒褐色。 内面褐色。	F-140
M19号埴輸基壁	187	106		36	①15.8㎝ ②4.9点 ③3.9	わずかに外反して外稜しながらたちあがる複合口縁。口唇部はあく。口縁部下端はそのまま垂直する。口縁部内面の段はゆるやか。	外面→口縁部平行沈線後ヨコナデ。胴部ヨコナデ。 内面→口縁部~胴部ヨコナデ。	密(1~2mm前後の細砂を含む。)	良好	内外面淡褐色。	I-7
M19号埴輸基壁	188	107		46	①5.2㎝ ②2.0点	口縁部は薄く丸い。	内外面~回転ナデ調整。	微砂含む。	良好	内外面淡灰色。	F-141
M19号埴輸基壁	189	107		45	①12.4㎝ ②2.4点	口縁部はやや内湾しながら端部に至る。端部はわずかに二段目を成す。口縁部と天井部の境にわずかな凹線がみる。	外面~白粉粒がかかる。 内外面とも回転ナデ。	大粒の砂礫を含む。	良好	外面淡茶灰色。 内面青灰色。	F-142

挿表20　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土時観察表②

出土遺構	土器番号	種類	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
MSX01 須恵器 坏身	190	107	49	205	①11.3 ②4.9 ③12.2 ④1.8	立ちあがりはほぼ直線的に内傾するが、端部付近で屈曲する。端部は鋭い二段。受部は中央部から引き伸ばされる。底体部はやや平。	外面一底体部の1/3回転ヘラケズリ。内面一回転ナデ。	やや粗(1~3mm大の石砂含む。)	良好	内外面淡黄灰色。	Po195とセットで出土。K-7
MSX01 須恵器 坏身	191	107	49	209	①11.2 ②4.9 ③12.1 ④1.8	立ちあがりは内傾し、口縁部付近で屈曲する。端部は鋭い二段。受部はやや上方へ引き出される。底部はやや平。	外面一底体部下半約1/3回転ヘラケズリ。底部ヘラ起こし後ヘラケズリ。 内面一底面は摩耗によるコマナデ。	密(1mm大の白砂を含む。)	良好	内外面黄灰色。	K-9
MSX01 須恵器 坏身	192	107	49	204	①10.7 ②4.5 ③12.0 ④1.6	立ちあがりはやや外反しながら内傾し、端部に平る。端部は鋭い2段。受部はやや上方へ引き延ばされる。底面はほぼ平。	外面一底体部の1/3を回転ヘラケズリ。内面一底部は摩耗によるコマナデが施される。	やや粗(1~5mm大の白砂を含む。)	良好	内外面黄灰色。	ケズリ方向(左)K-5
MSX01 須恵器 坏身	193	107	49	202 210 216 217	①12.0 ②4.4 ③13.0 ④1.6	立ちあがりはほぼ直線的に内傾し端部は鋭い2段をなす。受部はほぼ水平に引き出す。底部は平ら。	外面一底体部のヘラケズリの範囲は狭い。底部ヘラ起こし後ヘラケズリ。 内面一底部には小型方向のナデ、他は回転ナデ。	やや粗(1~2mm大の白砂含む。)	良好	内外面淡黄黄灰色。	K-11
MSX01 須恵器 坏身	194	107	49	219	①10.6 ②1.7 ③12.4 ④1.8	立ちあがりはやや外反しながら内傾し、端部は鋭い2段をなす。受部はやや上方へ引き出す。底部はやや平。	外面一底体部下半約1/2を回転ヘラケズリ。底部ヘラ起こし後ヘラケズリ。 内面一底部部によるコマナデ。他は回転ナデ。	やや粗(1~8mm大の白砂を含む。)	良好	内外面黄灰色。	K-10
MSX01 須恵器 坏蓋	195	107	49	205	①13.6 ②4.3 ③12.8 ④2.4	口縁部はゆるやかに内湾しながら下方へ下り、端部は鋭い2段をなす。天井部との境には鋭い稜がつく。天井部はほぼ平。	外面一天井部段1/2を回転ヘラケズリ。天井部内部はヘラ起こし後ケズリ。 内面一天井部内部によるコマナデ。他は回転ナデ。	やや密(1~3mm大の白砂を含む。)	良好	内外面淡黄黄灰色。	外面に天井部に赤色塗彩有。Po196とセットで出土。Po190が上。K-6
MSX01 須恵器 坏蓋	196	107	49	208	①13.4 ②4.2 ③12.1 ④2.6	口縁部は外反しながら下方へ下り、端部は鋭い2段をなす。天井部との境に鋭い稜がつく。天井部は変形している。	外面一天井部のほとんどを回転ヘラケズリ。口縁部は回転ナデ。 内面一天井部内部によるコマナデ。他は回転ナデ。	粗(1~3mm大の白砂を多量に含む。)	良好	内外面青灰色。	K-8
MSX01 須恵器 坏蓋	197	107	49	263	①12.7 ②4.2 ③12.2 ④2.8	口縁部はゆるやかに内湾しながら下方へ下り、端部は鋭い2段を呈す。稜は鋭い。天井部は平ら。	外面一天井部の1/2を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面一天井部に小型方向のナデを施す。	やや粗(1mm大の白砂を含む。)	良好	内外面青灰色。	ケズリ方向左。K 4
MSX01 須恵器 坏蓋	198	107	49	202 211 233 235 239 223	①13.8 ②4.4 ③13.2 ④2.4	口縁部はほぼ直線的に下方へ下り、端部は鋭い2段をなす。天井部との境には鋭い稜がつく。天井部は平ら。	外面一天井部約1/2回転ヘラケズリ。頂部はヘラ起こし後ヘラケズリ。指ナデら認められる。 内面一天井部指によるコマナデ。他は回転ナデ。	粗(1~3mm大の白砂を多量に含む。)	やや良	内外面淡黄黄灰色。	K-13
MSX01 須恵器 坏蓋	199	107	49	232 214 229 223	①13.1 ②4.2 ③13.5 ④2.7	口縁部はやや外反しながら下方へ下り、端部は鋭い2段をなす。天井部との境には鋭い稜がつく。天井は平ら。	外面一天井部1/2を回転ヘラケズリ。頂部ヘラ起こし後ヘラケズリ。 内面一天井部内部によるコマナデ。他は回転ナデ。	やや粗(1~3mm大の白砂を含む。)	良好	内外面淡黄黄灰色。外面一部黄灰色。	K-12
MSX01 須恵器 鉢	200	107	48	207	①12.9 ②12.8 ③11.5 ④内底径1.6	器部は大く開くラッパ状に開き、口縁部で屈曲し、鋭い稜を帯う。口縁部はわずかに2段状をなす。器部には2種類の成状文が施される。施文後一部ナデ消し。体部は中央部を2条の回線で画し、間に貝殻腹縁による刺突文が施される。円孔を穿孔。底部は丸底。	外面一体部下半分以下回転ヘラケズリ。底部は手持ちによるヘラケズリ。 内面一無調整回転ナデ。	密(石英、長石、雲母粒を含む。)	良好	外面淡黄灰色。内面一面黄色。	K-2
MSX01 須恵器 脚付鉢	201	107	49	218 223	①8.2 ②9.9 ③8.7 ④6.8	脚部は開かず段に付き、口縁部はやや外反しながらほぼ直立する。端部は丸い。脚部下半には横状工具による刺状文が施される。脚部には3方向に長方形の透しを穿つ。底部には粘土板で覆い、脚内に2個の小石を入れている。小石はほぼ1gのいわゆる、M.I.類にはヘラ記号有。	外面一脚部以外は、脚部から日調整。 内面一脚部ナデ調整。内外面とも自然釉がかかる。	密(微砂をわずかに含む。)	良好	内外面淡黄灰色。	K-3
MSX01 須恵器 壺	202	107	48	206 221 223	①18.2 ②20.4 ③27.6	口縁部は肥厚する。強調な張く、外反しながら口縁部に至る。頸部はやや厚み張る。	外面一胴部下半は平行叩き、頸部上半は平行叩きの後ヨコ方向撫。 頸部はヨコ目調整。 内面一頸部は同心円文状叩き、頸部縦位ナデ。	密(砂粒を極くわずか含む。)	良好	外面淡灰色一部黄灰色。内面淡灰色。	K-1
M21号墳 須恵器 坏身	203	108	50	96	①13.9 ②4.7 ③15.0 ④0.9	立ち上がりは、やや外反しながら内傾し、端部に至る。端部は丸い。受部はほぼ水平に引き出される。底体部はやや丸い。	外面一底体部下半約1/3回転ヘラケズリ。 内面一底部指によるコマナデ。他は回転ナデ。	密(1~2mm大の細砂含む。)	普通	外面青灰色。内面濃淡色。	外面天井部にヘラ記号。Po206とセットか。I-1
M21号墳 須恵器 坏身	204	108	50	165	①13.7 ②3.5△ ③15.0 ④1.0	立ちあがりはやや外反しながら内傾し、端部に至る。端部は丸い。受部はやや上方へ引き出される。底部は平ら。	外面一底体部の1/2回転ヘラケズリ。 内面一底部指によるコマナデ。他は回転ナデ。	密(1~5mm大の砂礫を含む。)	やや不良	内外面暗黄黄灰色。	I-4
M21号墳 須恵器 坏身	205	108		124	①12.4m ②2.9△ ③13.6 ④1.0	立ち上がりはやや外反しながら内傾し端部に至る。端部は丸い。受部はやや上方へ引き出される。	内外面とも回転ナデが施される。	密(微砂を含む。)	良好	内外面淡黄灰色。	F-131
M21号墳 須恵器 坏蓋	206	108	50	45 124 127 209 142	①13.7 ②4.2	口縁部はゆるやかに外反しながら下方へ下り端部に至る。端部は不明瞭であるが、段を意識している。天井部との境には2条の凹線で画す。	外面一天井部の1/2を回転ヘラケズリ。 内面一天井部指による不整方向のナデ。他は回転ナデ。	密(1~2mm大の微砂含む。)	普通	外面淡灰色。内面青灰色。	外面天井部にヘラ記号。Po203とセットか。I-2
M21号墳 須恵器 坏蓋	207	108	50	127	①15.0m ②3.5	口縁部はやや内湾しながら下方へ下り、端部に至る。端部は丸い。口縁部と天井部の境には凹線がある。	外面一天井部回転ヘラケズリ。 内面一無仕。回転のため明瞭ではない。	密(1~5mm大の砂礫を多量に含む。)	不良	外面明淡黄灰色。内面淡黄色。	Y-20
M21号墳 須恵器 壺	208	108	50	125	①8.9 ②3.9 ③8.7 ④1.7	口縁部は外反しながら下方へ下り、端部に至る。端部は2段をなす。天井部との境には明瞭な段はないが、わずかなアクセントがつく。	外面一天井部回転ヘラケズリの後ナデを施す。頂部ヘラ起こし後不整方向のナデ。ヘラ起こし痕残る。 内面一回転ナデ。	密(1~5mm大の砂礫を含む。)	普通	内外面淡灰色。	Y-5

挿表21　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土時観察表③

出土遺構	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量(cm)	胴部上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
M21号墳 西石棺部	209	108		124	②1.8cm ③10.2㎝	端部迄で内傾して厚みある。端部は丸い。	内外面とも調整ナデ。	密(微砂含む。)	良好	内外面淡黄色。	
M21号墳 埋葬石棚	210	108		147 148 149	①15.8 ②23.8 ③21.6	口縁部は肥厚し、1条の沉線が入る。頸部はラッパ状に外反する。体部は球形。	外面一頸部は回転ナデ。体部は横位が強いが斜平行目を加える。体部上半は平行目を施かを目調整。 内面一同心円文押圧。	密(1～3mm大の白砂を含む。)	不良	外面淡黄灰色。 内面淡黄色。	Y－22
M21号墳	211	108	50	134	①12.2㎝ ②9.5㎝	口縁部は内湾気味にひらく。口唇端はわずかに内側に肥厚する。頸部は「く」の字状に短く張出する。胴部はよく張る。	外面一口縁部～頸部ヨコナデ。胴部以下ナデ。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。端部以下左方向ケズリ。	密(1～4mm の石英を含む。)	良好	外面橙褐色。 内面明橙褐色。	Y－13
M22号墳 原型部 結晶面	212	109	51	97 122 123 125	①11.9 ②22.4 ③24.9	頸部は短く肥厚し端部は丸い。肩部は丸くなだらかに下方へ下る。体部最大径は口中央に位置する。胴部に3方受手がつく。底下は扁平になっているが張状をなすものと思われる。	外面一体部平行目の後ナキ目調整かを、その後ナデ調される。 内面一体部円弧平ナ。	密(1～3mm 大の砂礫を含む。)	良好	外部背灰色～暗灰色。 内面青灰色。	Y－4
M22号墳	213	109	51	117	①30.6㎝ ②6.9㎝	「く」の字状の口縁。口縁部は外反して大きくひらく口唇端は丸い。	外面一口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ナデ。 内面一口縁部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	中や粗(1～2mm の石英を含む。)	良好	内外面淡茶褐色～暗灰色。	Y－17
M22号墳	214	109	51	117	①23.0㎝ ②4.2㎝	「く」の字状の口縁。口縁部は外反して大きくひらく口唇端は丸い。	外面一ヨコナデ。 内面一口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密(1mm程度の石英を含む。)	良好	内外面淡黄褐色。	Y－11
M23号墳 須恵器 埋葬	215	109		88	①12.3㎝ ②4.8 ③15.6 ④1.4	立ち上がりはやや外湾しながら内傾し、端部に至る。端部は丸く、内面に沉線が入る。受部は水平に引き出される。底部は平ら。	外面一底体部下半約1/6を回転ヘラケズリ。底部ヘラ目こう後ヘラケズリ。 内面一底部平ナ後内傾。他は回転ナデ。	密(微砂含む。)	良好	外面青灰色。 内面淡黄色。	I－3
M23号墳 須恵器 埋葬	216	109		100	①10.2㎝ ②3.0㎝ ③11.4 ④0.9	立ち上がりはゆるやかに外湾しながら内傾し端部に至る。端部は丸くおさめる。受部は上方へ引き出される。	内外面とも回転ナデ。	密(微砂含む。)	良好	内外面灰色。	Y－25
M23号墳 須恵器 埋葬	217	109		89	①13.3㎝ ②2.7㎝	口縁部はやや外湾しながら下方へ下る。端部は丸い。天井部との境に沉線がある。	内外面とも回転ナデ。	密(微砂含む。)	良好	内外面黄黄灰色。	F－144
M23号墳 須恵器 有蓋高杯	218	109		126	①13.2㎝ ②4.9㎝ ③14.6 ④0.3	立ち上がりは長く短く、内側して端部に至る。端部は丸くおさめる。受部は中上方へ引き出す。	外面一体部下半部回転ヘラケズリの後ナデ。 内面一内底部指による コナデ。内外面とも風化している。	密(1～3mm 大の白砂含む。)	不良	内外面淡口色。	Y－21
M23号墳 須恵器 杯部	219	109		89 113 115 140		厚みがあまりないものか。	外面一体部回転ヘラケズリの後ナキ目調整。体部中央の孔を円盤状粘土をつめる。 内面一回転ナデ。	密(微砂含む。)	良好	外面淡青灰色。 内面淡灰色。	F－152
M23号墳 須恵器 壺口縁	220	109	51	141	①30.6㎝ ②7.3㎝	頸部はゆるやかに外湾しながらラッパ状に開く。端部はくり上げて肥厚させる。頸部は回線で胴し、その間に横状1段による波状文がある。	外面一回転ナデ。 内面一底たが並いたための不明。内部施かがかかる。	密(1～2mm 大の砂礫含む。)	良好	外面淡灰色。 内面淡色。	クシ単位15条。 I－11
M遺構外 19号墳出土埴輪	221	110	51	261		頸部付部破片である。	外面一口縁を外反し内巻を作る。凸線の上面に刻目を施こした刻目凸帯文である。 内面一ナデ調整している。	1～3mmの石英含む。	良好	内外色。	黒土部II F－175
M遺構外 19号墳出土埴輪	222	110		150	①15.6㎝ ②5.2㎝ ③2.9	口縁部は外反してたちあがる直角口縁。口唇端は丸い。口縁部下端はそのまま張出する。口縁部内面の段は4～5段。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	全体的に風化している。 外面一口縁部に平行沈線が認められる。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。口唇部方向ケズリ。	粗(1～2mm 程度の石英を含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	Y－10
M遺構外 19号墳出土埴輪	223	110		261	①15.1㎝ ②2.9㎝ ③1.7	外稜して短くたちあがる直角口縁。口縁端は丸い。口縁部下端は、丸味をもって屈曲する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部不明。頸部ヨコナデ。 内面一口縁部～頸部ヨコナデ。口唇ケズリ。	密(0.5～2mmの石英含む。密砂含む。)	良好	内外面淡灰褐色。	F－162
M遺構外 19号墳	224	110		13	①22.2㎝ ②3.0㎝	上端に面をもつ口縁部。	内外面とも回転ナデ。	密(1mm前後の微砂を含む。)	良好	内外面茶褐色。	I－9
M遺構外 19号墳出土中	225	110		188	①19.3㎝ ②2.5㎝	口縁部は左右に肥厚し、上端に面をもつ。	内外面とも回転ナデ。	粗密(砂状を含まない。)	良好	外面淡色。 内面茶色～黒色。	F－147
M遺構外 須恵器 埴輪	226	110		4 90 104	①15.0㎝ ②3.7㎝	口縁部はゆるやかに内湾して下方に下る。端部は丸を段付き。全体的に薄手。	内外面とも回転ナデ。	密(1～3mm 大の石英、長石を含む。)	良好	内外面淡黄灰色。	Y－24
MC5 グリッド 須恵器 埴輪	227	110		107	①13.4㎝ ②2.4㎝	口縁部は直線的に開く。やや外湾しながら端部に至る。端部は丸くおさめる。内面端部付近に沉線が入る。	外面一頸部以下半は回転ヘラケズリ後ナデ調整。 内面一回転ナデ。	密(微砂含む。)	良好	内外面淡黄灰色。	F－143
M遺構外 須恵器 埴輪	228	110		69	①12.0㎝ ②2.4㎝ ③2.8 ④1.1	さち上がりは直線的に中や内湾しながら端部に至る。端部は丸くおさめる。受部はやや上方に引き出す。	内外面とも回転ナデ。	密(1～2mm 大の石英、長石含む。)	良好	内外面暗紫灰色。	F－149
M遺構外 須恵器 壺	229	110	51	2 69 81 108 113 135	①17.2㎝ ②20.5 ③13.8㎝	最大径部は体部下半約 1/3にある。底面は平ら。	外面一体部上半はカキ目調整。下半は斜方向のカキ目の後ナデ調。底面は回転ヘラケズリ。 内面一不整方向のナデ。	密(1～2mm 大の白砂5mm大の礫含む。)	良好	外面黒灰色。 内面淡青灰色。	I－10

挿図22　南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表 ④

出土遺構	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
US I 01 裏	●230	111		24	①14.8㎝ ②4.2㎝ ③3.4	外稜してたちあがる複合口縁。口唇端はおさえたような面をも外方へ肥厚する。口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。	内外面ともヨコナデ。	密(砂粒含む。0.3㎜の石英含む。)	良好	外面淡茶褐色～黒色。内面淡茶褐色。	口縁部外面に黒斑あり。F-187
US I 01 裏	231	111	51	38	①14.2㎝ ②3.2㎝ ③2.9	外反気味に外稜してたちあがる複合口縁。口唇端は引き出したように丸縁る。口縁部下端は肌化しているが、外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。	外面…風化のため不明。内面…ヨコナデ。	密(1～3㎜の石英含む。)	良好	内外面明淡褐色。	F-189
US I 01 高坏	232	111	52	63	①15.0㎝ ②4.6㎝	浅い椀状の坏部。口唇部は外反する。	風化が進んでいる。外面…タテハケが認められる。内面…ナデか。	密(砂粒、雲母含む。)	良好	内外面明褐褐色。	F-192
US I 01 裏	233	111	51	34	①32.1㎝ ②3.1㎝	口縁部は外稜してたちあがり、そのまま口唇端に至る。口唇端は丸縁る。頸部は、丸味をもって肩部である。	外面…口縁部ヨコナデ。胴部～肩部ナデを施すナデか。内面…口縁部ヨコハケ後ヨコナデ。頸部以下、左方向ケズリ。	密(1㎜程の石英含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-184
US I 01 裏	●234	111	51	28	①14.1㎝ ②2.5㎝	口唇部は外反してひらき、そのまま口唇端に平縁る。口唇端はひき出したように丸縁る。頸部内面は「ノ」の字状に屈曲する。	外面…ヨコナデ。内面…口縁部ヨコハケ後ヨコナデ。頸部以下ヘラ。	密(0.5～1㎜程の石英含む。雲母含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-185
US I 01 (口縁部)	235	111		61	①10.8㎝ ②2.7㎝	内面沿縁に外稜してたちあがる。	内外面…ヨコナデ。	密(砂粒含む。)	良好	内外面淡赤褐色。	F-191
U 4 号墳周溝墓 底口壺	236	111	52	49 50 51 52 53 54 56	①10.5㎝ ②12.7㎝ ③13.5	頸部には2条の稜線が入りその間にクシ状工具による波状文が施される。頸部はゆるやかに内湾しながらラッパ状に開き底部に至る。端部は段を有する。体部は扁都かよく張る。	外面…体部上半部はのち刷毛整。下半部は縦位ヘラケズリの後丁寧なナデ調整。内面…底部指頭圧痕残る。他は横位ナデ。外面頸部に赤色顔料かかる。	密(雲母含む。)	雲母	外面明褐褐灰色。他淡黒色。内面灰色。底部淡黒色。	クシ原例5参 F-203
U 7 号墳 高坏	237	111		20	①21.7㎝ ②7.5㎝	屈曲した強大さ(ひらいて底脚にたちあがる坏部。口唇部は外方へ曲げる。	内外面…ハケ後、ヨコナデ。	密(0.5㎜程の石英含む。)	良好	内外面赤褐色～赤褐色。	内外面に赤色塗彩痕。F-194
U7号墳 鉢類	238	111	52	21 41	①25.4㎝	鉢類の口縁。体部片。	非常に脆弱している。体部外面にタタハケ及び突起を貼り付けるための沈線が見られる。	密(砂粒含む。)	やや不良	内外面淡褐色。	F-197
U 8 号墳 周溝墓 壺	239	111		43		頸部屈曲部、胴部の破片。	外面…体部平行叩き文。頸部横位ナデ。内面…体部斜心円文叩き。頸部横位ナデ。	密(微砂粒含む。)	良好	外面体部灰白色。内面黄灰色。	F-199
U土器 盛土中 壺	240	111		48	①14.3㎝ ②4.6㎝ ③3.2	外反気味に外稜してたちあがる複合口縁。口唇端は引き出したように丸縁る。口縁部下端は肌化しているが、外方へ突出する。口縁部内面の段は明瞭。頸部内面は丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	内外面…風化著しく不明。	密(砂粒含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-188
U土器 盛土中 坏	241	111		22	①2.7㎝ ②6.9	平底。	外面…体部回転ナデ。底部不明。内面…回転ナデ。	密(0.5～3㎜の石英含む。雲母含む。)	やや不良	内外面赤褐色。	F-190
U土器 盛土中 (底部)	242	111		40	②4.6㎝ ③7.8	大きな平底。	内面底面に強圧痕が2つ認められる。他は風化のため不明。	やや粗(1～3㎜の石英含む。)	良好	内外面明茶褐色。	F-195
U遺構外 壺	243	111	52	186	①15.3㎝ ②4.3㎝ ③2.7	口縁部は、内湾気味に外稜してたちあがる複合した様子は、口唇端は外方へ肥厚する面をもつ。口縁部下端は強いヨコナデによる肌化で、外方へ高く突出させる。口縁部内面の段はゆるやか。	内外面…ヨコナデ。	密(1～2㎜の石英含む。雲母含む。)	良好	外面明褐色。内面褐色。	F-186
U遺構外 (口縁)	244	111		57	①23.4㎝ ②1.2㎝	端部が丸く肥厚する口縁。	内外面…ヨコナデ。	密(砂粒含む。)	良好	内外面黒褐色。	F-196

挿表23　乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群出土土器観察表

出土遺構	土器番号	種類	図版	取上番号	法量 (cm)	重さ (g)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成 保存	色調	備考
HSI02 上面	245	112	52	52	径 2.6 ～3.0 穴径 0.6 ～0.7	20.6					淡茶褐色～暗灰褐色。	F－67
HSI05 上面	246	112	52	209	径 2.9 穴径 0.5 ～0.7	24.2					淡褐色～明褐褐色。	F－68
HSK01 上面	247	112	52	327	径 2.4 ～2.6 穴径 0.6	12.0					淡赤褐色。	F－69
HSK03 上面	248	112	52	350	径 3.2 ～3.4 穴径 1.0	35.9					淡赤褐色～暗灰褐色。	F－64
HSK03 上面	249	112	52	350	径 3.0 ～3.5 穴径 0.8 ～0.9	33.9					淡茶褐色。	F－65
HSK03 土坑	250	112	52	336	径 3.1 ～3.6 穴径 0.8 ～1.0	37.0					淡茶褐色。	F－66
HSK03 上面	251	112	52	350	径 3.0 ～3.5 穴径 0.7	35.4					淡茶褐色。	F－62
HSK03 上面	252	112	52	360	径 2.8 ～3.2 穴径 0.8 ～0.9	26.1	やや いびつな球形。ほぼ中心に穿孔してある。	手捏ね成形後ナデ。	やや粗	良好	淡茶褐色。	F－63
H遺構外 土坑	253	112	52	310	径 2.8 ～2.9 穴径 1.0 ～1.3	18.7			密		茶褐色。	F－223
H遺構外 土坑	254	112	52	310	径 2.9 ～3.0 穴径 0.7 ～0.8	23.4			やや粗		淡茶褐色～黒色。	黒斑アリ。F－232
MSI01 土坑	●255	112		285	径 2.9 穴径 0.5 ～0.4	10.8			密		黒褐色～暗褐色。	半分欠損。F－178
MSI01 土坑	256	112	52	246	径 2.5 ～2.6 穴径 0.4	12.4			密		淡茶褐色。	F－206
MSI01 土坑	257	112		235	径 3.8 ～3.9 穴径 0.9	19.1			密		淡茶褐色～暗褐色。	一部欠損。F－177
M19号墳 前方部 土坑	258	112		262	径 3.4 ～3.6 穴径 0.6 ～0.8	14.8			密		淡茶褐色。	F－176
MSI05 土坑	259	112		106	長 5.6 最大巾 2.1 穴径 0.3	20.7	棒状の土錘。		密		灰褐色。	F－70
H遺構外 赤つちぎの遺民	260	112	52	18	径 2.0 厚 0.6		破片。		極めて緻密。	極良好	白色。	F－230

挿表24　土製品観察表

出土遺構	遺物番号	挿図	図版	取上番号	種類	石材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	形態の特徴	備考
HS103	F1	113	53	257	鉄鏃		3.4	0.8	0.3	鏃身部断面扁平な長方形をする。	F−232
HS105	F2	113	53	241	鏃		4.7	0.9	0.3	先端部が丸い両刃、刀部長1.3cm、断面菱状をなす。	F−241
HS105	F3	113	53	192	鉄鏃		3.2 3.6	0.5	0.5 0.3	鉄鏃茎部か、強化のため不明、断面方形。	F−243
HE2G	F4	113	53	22	刀子?		3.9	1.1	0.3	刀子基部か、断面長方形を呈す。	F−242
MS101	F5	113	53	243	鉄鏃		5.0	0.9	0.6	鉄鏃茎部か、断面長方形を呈す。	F−250
MS101	F6	113	53	242	刀子?		3.6	1.6	0.3	刀下基部か、断面は扁平な長方形を呈す。	F−246
MS101	F7	113	53	177	刀子?		4.0	2.2	0.4	刀子関部、強化のため刀部不明、関は片関か。	F−249
MS101	F8	113	53	175	不明		5.3	1.4	0.2	先端はなだ曲がっている。断面は扁平な長方形。茎端部近くに径4mmの孔が穿たれている。茎端は丸くおさめられる。	F−251
M19号墳 墳上下埋葬施設	F9	113	53	190	鉄製鎌(鋸)先		11.6	13.5	0.4	刀部り字形、断面T字形の水内挿入部を持つ。水内挿入部端部を欠く。	F−240
M19号墳 墳上下埋葬施設	F10	113	53	222	刀子		9.1	1.4	0.5	刀部6.0cm以上。先端を欠く。刀身は背部がやや内湾する。関は均等両関、茎断部はあ。	F−239

挿表25　鉄製品観察表

出土遺構	番号	挿図	図版	取上番号	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	形態	備考
M表採	S 1	117	53	70	管玉	碧玉	2.45	径 0.83	穴径 0.3 ～ 0.1	3.1	片側穿孔。 淡緑色。	F−136
M23号墳	S 2	117	53	116	管玉		2.00	径 0.75	穴径 0.3 ～ 0.1	2.3	片側穿孔。 濃緑色。	F−137
M23号墳	S 3	117	53	86	管玉		2.65	径 0.7	穴径 0.3 ～ 0.1	2.5	片側穿孔。 濃緑色。	F−138
M遺構外 19号墳裏 色土層内	S 4	114	54	261	スクレイパー	ガラス質安山岩	7.0	5.6	1.5	53.5	二角形を呈す。刃部は長い剥離でギザギザになっている。 表面はかなり風化している。	F−228
M遺構外 19号墳裏 色土層内	S 5	114	54	261	スクレイパー	ガラス質安山岩	8.8	5.5	1.8	85.0	刃部は大きな剥離によって作る。表面かなり風化。	F−227
M遺構外 19号墳裏 色土層内	S 6	114	54	151	剥片	安山岩	8.1	6.2	1.4	90.0		F−208
M遺構外 19号墳裏 色土層内	S 7	114		261	不明	安山岩	6.6	3.6	1.1	48.8	片面をよく研磨している。裏面も一部みがく。	F−247
M19号墳 墳土中	S 8	114	54	152	磨製石斧	変白質変化輝石 (アプライト)	14.8	3.3	3.0	310.0	断面不定形な楕円を呈す。刃部は両刃、中央部に敲打痕あり。 各部分に剥離が目せつ。	I −8
M遺構外 19号墳裏 色土層内	S 9	114	54	151	磨製石斧	変白質変化輝石 (アプライト)	6.6	5.0	1.5	40.0	磨製石斧の刃部、裏面・基部を欠く。刃部一部欠損。	Y−14
HS102	S10	115	54	86	敲石	閃緑石	15.6	8.8	5.9	1044.0	断面三角形を呈す。両端部に敲打痕あり。	F−226
HS102	S11	115	54	82	敲石	黒雲母角閃石安山岩	9.0	5.6	3.4	248.0	変形した長楕円形を呈す。両端、両側面に敲打痕あり。	F−221
HS102	S12	115	54	84	石錘	角閃石安山岩	6.7	5.8	1.6	78.0	扁平な楕円形。両端に、両面からの打ち欠き。	F−72
HS102	S13	115	54	86	石錘	角閃石安山岩	7.1	6.2	1.4	81.5	楕円形を呈す。両端に、両面からの打ち欠き。	F−73
HS102	S14	115	55	53	石錘	角閃石安山岩	6.4	4.6	2.1	92.0	長楕円形を呈す。両端を両面から打ち欠く。	F−74
HS105	S15	115	55	287	石錘	角閃石安山岩 端面が大きい				184.0	楕円形を呈す。両端には両面からの打ち欠き。	F−75
HS105	S16	115	55	242	石錘	角閃石閃緑岩	5.9	5.5	1.6	64.0	全面がかなり風化している。片面剥離、両端部を両面から打ち欠く。	F−225
HS104	●S17	116	55	251	砥石	石英片岩	9.1	5.8	1.9	147.0	断面方形を呈す。片面だけを使用したものか。	F−248
HS101	S18	116	55	163	砥石	石英安山岩	△ 4.5	△ 4.3	0.7	26.0	両端及び側面を丁寧に使い込んでいる。端部一部のみ残り、他は欠損。	F−139
MS101	S19	116	55	257	砥石	緑色の流紋岩質凝灰岩	△ 4.6	3.3	△ 1.1		断面三角形を呈す。先端部分を欠く。砥面は二面あり、よく使い込んでいる。	F−207
MS101	S20	116		201	砥石	凝灰岩	7.35	3.2	1.6	50.2	全体が磨耗している。砥石の可能性がある。	F−202
MS101	S21	116	55	201	砥石	流紋岩質凝灰岩	11.4	4.4	4.3	220.0	十七砥面は2つあり、片面はよく使い込まれ内湾し、もう片面は同点でいる。他の面も使った跡が認められる。両端及び底面を欠損しているが、欠損後も使った跡がある。つや出しに使用したものと思われる。	F−201
MS101	S22	116	55	201	砥石、石鹸	微性板状安山岩	15.1	9.2	2.5	512.0	側面を欠いている。砥面は3面あり、裏面は一部よく使い込まれて固んでいる。	F−205
MS101	S23	117	55	281	石皿	安山岩	32	28.8	10.2	14.5 kg	楕円形で厚い。両面に敲打痕あり。	

挿表26　管玉・石器観察表